
勇者って一人じゃないんですか？

Kelten

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者つて一人じゃないんですか？

【Nコード】

N1157Y

【作者名】

Kelten

【あらすじ】

ドラゴンクエストの世界に勇者は一人しかいないのか？

ラダトーム城の兵士（転生者）は勇者の物語に深く関わっていく。

プロローグ

「勇者って一人じゃないんですか？」

ラダトーム城の謁見室に俺の素朴な質問が響いた。

人間は理解しあえるんだ。うん、今理解できた。だってみんな目が言ってる。

（お前はだまれ！）

そして俺は勇者5人の謁見が終わるまで黙って立っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

俺の名前はケルテン ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士である。まだ新任の為任務が何なのか知らないが権限だけはすごい。王様と国務大臣以外の命令を拒否できるうえ、城の中に立ち入れない場所はほとんどない。

俺がこの世界がアレフガルドと認識したのは10年前、何の脈絡もなくこの世界がドラゴンクエストの世界だと認識した。平和な時代で400年ほど前に大魔王が現れロトの勇者が退治したという伝説がある。つまり近い未来に竜王が現れる。そう理解した俺はそれに備え自らを鍛えた。そう自分を育ててくれた湖上都市リムルダー

ルを守れるぐらいに。で何の因果かラダトーム城で兵士をやっている。しかも勇者の謁見とはこの物語の最高の見せ場だと張り切っていた。

ちなみに俺の位置は下の通り特等席である。

- - - - -
近衛隊長 近衛 近衛 近衛

王様 勇者

- - - - -
国務大臣 俺 近衛 近衛

プロロ・グ(後書き)

見切り発車

準備

時は5時間ほど前に遡る。

ラダトーム城兵士宿舎 食堂

俺はいつも朝のトレーニングの後食事をする。

食事の後は王室図書館にて史書を漁り、知識を貯める。

昼からは新任の挨拶周りをするのがここのヶ月の日課だ。

でも今日は違った。食事の最中、近衛のサイモンがやってきた。

「おついたいた。お前昼からの謁見に立てって命令だ。大臣からの伝言な。」

こいつは不良近衛騎士のサイモン。見た目は金髪碧眼で美形、さらに貴族の三男坊のくせに少し残念なやつだ。一度俺と衝突してから俺お前の仲だ。

「おい、なんか失礼なこと考えていないか？」

「あれっ顔にでてたか。で、王様への謁見は近衛騎士が立つのが決まりじゃないのか？」

「お前なあ。まあいい、今日は勇者の謁見だからな。大臣の隣につけよ。」

「とうとう勇者のお出ましか。いや光栄なことだな。」

「そうか？まっ人それぞれだからな。昼の謁見15分前に控え室に集合な、典礼用の装備で。」

「まじか！典礼用装備。あれ嫌いなんだけど。」

典礼用装備。鉄の鎧、鉄の槍、鉄の盾、腰に鉄の剣のフル装備で総重量20kg以上、しかも無駄に豪華な作りをしている。

「俺は好きだけどな。いかにも騎士って感じだろ。」

「お前はムキムキだからな。俺みたいな軽装備にはきつい。」

「どうせ立っているだけだ。じゃまた後でな。」

他人事だと思って勝手なこと言う。俺の戦闘スタイルは革鎧に両片手刀、さらに魔法の併用だ。しょうがないから今日はいいとして、次の為に典礼用の革鎧を用意しよう大臣に頼もうかな。

おお勇者ロトの志を継ぎし者よ

「勇者ガルドどの、ご入場」

謁見室に勇者の入場を告げる声が響き、黒髪短髪、身長2m弱、こつ体の男が入ってくる。しずしずと歩み寄り王座の手前で片膝をつく。

「勇者ガルド、まかりこしました。」

ブラボー!!!なんて感動的なシーンだ。俺はこの場にあることを精霊ルビスに感謝する。

「おお勇者ロトの志を継ぎし者よ、よくぞ来てくれた。」

あれ?なんかセリフがおかしいぞ。志? 血じゃないの?

「今アレフガルドは、竜王によって光を奪われ絶望の下にある。そなたがまことの勇者なら竜王を倒し光の玉を取り戻してくれ。なお勇者への支援に関しては大臣より仔細説明をうけよ」

俺の横で大臣が一步前にでて説明を始めた。

「今ラダトーム王家ラルス16世の名において勇者ガルドとの契約が成された。」

一つ、ラダトーム王家は準備金として100ゴールドを勇者に与える。

一つ、ラダト・ム王家は勇者の生命に対してできる限りの支援を行なう。なお血の契約において生命失 われしときでも蘇生が可能である。

一つ、勇者はラダト・ム王家御用達の宿屋、武器屋、道具屋において割引サービスを受けることがで きる。

一つ、勇者は王家準騎士として扱う。なお装備品として同等のものを所持する権利も与えられる。

一つ、勇者が獲得したモンスター素材は王家が専属で買い上げる。

一つ、………

（なんだこれ？いやに生々しい契約だな。血の契約ってなんだ？割引サービス？買取？俺は混乱しているようだ。まだ大臣が何か言っているようだが何も聞こえない。というか聞きたくない。あゝ あゝ 何も聞ここえなくない）

ふと我にかえると勇者が大臣の差し出した紙に血判を押している。

「最後に王は公人ゆえに口にできぬが、さらわれし王女ロ・ラの命を案じておられる。もしそなたが姫を助けてきたならば、臣下にして最高の恩賞が与えられるであろう。では行くがよい勇者ガルドよ」

そして勇者が退出していく。なんと言うか想像していたのとは違うが儀式は終わった。と思った。

「では次の勇者を入れよ」

「勇者ドゥーマンどの、ご入場」

で冒頭の一言「勇者って一人じゃないんですか？」

勇者支援官 兼 査察官って何？

今俺の前で大臣が怒って怒鳴っている。

「もう少しで台無しになるところだったのだぞ、次の勇者の耳に入らなかったからよかったものを。」

「まあまあ大臣殿、ケルテンも知らずに口にしたまでのこと、大事には至らなかったのですからよろしいではないですか。」

「私が怒っているのは知らなかったことではないですよ、近衛隊長殿。そなたの部下が十分な説明をしなかったことに腹をたてているのです。部下の教育は正しく行なっていただきたいものですな。」

（うへっ！怒りの矛先がかわった。近衛隊長もサイモンも小さくなってる。）

「いえね、大臣。俺は知らなかったのですよ、ケルテンが知らないことをね。てつきりすでに大臣が説明しているものだ……。」

大臣は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「もうよい！では改めて説明しよう。ケルテン何か質問はあるかね。」

「はい、では質問させて頂きます。勇者は唯一人、しかもロトの血を引くものではないのですか。そう理解しているつもりでしたが？」

「なるほどよく勉強しているな。勇者ロトの伝説とロトの預言書か。」

勇者ロトの伝説：およそ400年前、アレフガルドを絶望に落とし、大魔王がいた。この災難に対してラダトーム王家は異世界から勇者を召喚し、これを討伐させた。

ロトの預言書：大魔王は死に際して言い残した。我死すともいわず、第二の魔王が現れるであろう。

国民の噂：ロトの勇者の血を引きし新たな勇者が現れ、この国を助けてくれるだろう。

ここ一月の間、王立図書館で調べた中の公文書にあったのがロトの伝説とロトの預言書だ。俺の知っている事実といくらか異なるが大筋であってる。さらに国内にある無責任な噂（結果的には正しいのだが）を利用して半年前にラダトーム王家が国中に布告をだした。

『この国難に王家は勇者を公募する。我と思わん者はラダトーム城まで出でよ。』

（俺が知っている答えと現実の情報は大臣のそれと一致する。では何が違うのか？）

「そう怪訝な顔をするな。概ね正しいが問題がある。まず第一にも、ロトの血に連なる者が現れても証明するすべがない。そしてその者が必ずしも魔王を討伐できるとは限らない。」

「では偽者かもしれない者を勇者として招き入れているということですか？」

「そうだ。だが一人一人にはお前こそ口トの勇者として招き入れているのだ。だが何人の勇者が現れようと一向に構わぬ、そのうちの一人が目的を達成すればよい！」

いや、そこでキリッってどや顔されても困るんですが……。

「しかしそれでは泥棒に金をやるようなものではないですか？」

「だからお前がいるのだ。」

えっ！俺となんの関係があるんだよ。

「そこでだ。改めてお前に任務を与える。ラダトーム王家國務大臣
付き特務隊士 勇者支援官 兼 査察官だ。」

勇者システムの実情

「ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士 勇者支援官 兼 査察官
?」

「そつだ。お前には今日謁見した勇者5人を担当してもらつう。まず支援だが、勇者への助言、救助、レベル管理を主にする。」

「レベル?」

実のところ、この世界では敵を倒してもレベルが上がって強くなったりしない。地道な訓練と経験、素質でしか強くなれない。だからレベルなんてないのだが?

「うむ。各々の勇者の持ち込む素材によってレベルを決める。簡単に言えば倒したモンスターの証明だ。このレベルに応じてどの程度のことが可能か助言するがよい。詳しいレベル管理については素材買取所の者に聞くがよい。」

なるほど。スライムの素材をいくつか持ってきたら、次にスライムベス、ドラキー・・・と強いモンスターと戦わせればいいのか。これが経験値で、買取でゴールドを与える。つじつまはあうな。

「そして一番大変と思われるのが救助だ。もしなんらかの理由で勇者が行動不能もしくは死亡した場合、速やかに現地に行つて救助するのだ。尚、死亡していた場合でも死体が残つておれば王家に伝わる秘術によつて蘇生が可能だ。この任務ゆえにお前が特務隊士に抜擢されたと言つても過言ではない。」

「どういうことだ。それだけなら近衛の連中でもできるような気もするが……？」

「お前の疑問はわかる。この任務に大事なものは強さはもちろんのこと、魔法が不可欠だ。その中でもルーラ、ベホイミが最も重要になる。救助に行ったはいいが戻ってこれないのでは意味がないからな。現状ではそこまでの魔法が使える者で腕の立つものは少ない。残念ながら近衛でも隊長と副隊長ぐらいしかいないのだ。ケルテン、お前は全ての魔法を会得していたな。」

「ええ使えますよ、全てをね。」

「ならば勇者を救助後、ベホイミによる回復やルーラでの帰還を行なうのだ。」

「しかし勇者の行動不能、死亡、現在位置などは張り付いていなければわからないのでは？」

「その点は問題ない。私の執務室の壁にある世界地図があるな。あれで仔細がわかるようになっておる。それを含めての血の契約だ。」

「なるほど、そのような魔法があるとは知りませんでした。」

「これも王家の秘術よ。知らぬのも無理はない。それはともかくもう一つの任務だが、勇者として力量が足りぬ者、器量が足りぬ者がいたならば、査察官として解任する権限を与える。なお口頭による宣言だけでなく説得も必要だ。ちなみに先月までに旅立った勇者は20名だが現在残っているものは5名しかおらぬ。」

「ちなみに力量や器量の基準はどういったもので？」

「それはお前に一任する。解任される者が納得いかぬ場合もあることが説得の方法も一任する。」

「え〜とつ、それは私の気分でやめさせることができ、さらに気に入らないやつはぶん殴つてもやめさせろってことですよね！」

「そうだ。察しがいいではないか。ちなみに先月までに旅立った勇者は20名だが現在残っているものは5名しかおらぬ。お前以外に2名の特務隊士が同じく任務についておるが大体実力行使が必要だったらしいぞ。まあお前は近衛隊長と互角に戦えると聞く。せいぜいがんばるがよい。」

ちよ、だれがそんなこと言った。大臣の隣で近衛隊長とサイモンがニヤニヤしている。お前らか。

「いえ、近衛隊長には一方的に負けています。」

「あの勝負は私の方が一方的に有利なルールの元行なわれたもので謙遜することはない。お前を推挙した私の顔もたててくれ。がっはっはっ！」

近衛隊長が腕を組んで笑っている。隣のサイモンがサムズアップしている。何がグツ！だ。あとで締める。

「それにこれはもう決定事項だ。快く拝命せよ。」

「はあ、わかりました。特務隊士ケルテン 勇者支援官兼査察官 拝命いたします。」

腹が立つので嫌味たらしく片膝を付き、右手を心臓の前に沿える最敬礼で答えてやる。

「よい。任務に励め。」

くそつまるで嫌味が効かない。さすが国王の実弟で王位継承権2位だけはある。これだから高貴な生まれな方は困る。

「最後にもう一つある。もし今夜にでも城下で女を侍らせて酒宴に興じておる不届き者がいたら、即解任、さらに500Gの罰金をさせよ。罪状は国王様への詐欺罪だ。これで国庫への負担はほぼ無くなる。」

うわっなんて悪辣な。5人のうち一人くらいそんなやつはいるだろう。準備金100Gは高くないってわけだ。しかし素直に聞くはずもないから、全ての厄介事を俺に押し付ける腹だ。

「そう嫌な顔をするな。今までおよそ半数がそれで脱落しておる。無条件でお金や名誉がもらえらると思っておる輩は少くないぞ。」

「わかりました。もういいです。せいぜいがんばりますよ。」

おれは重装備を引きずるように退室した。

考察：魔法とステータス

部屋に戻った俺は重い装備を所定の木人形にかけていく。典礼用の装備は細部は結構華奢にできているので装備しないときは部屋の隅の木人形にて片付けておかないといけない。そこににやにやしたサイモンが入ってくる。

「よっおつかれ！さっきは悪かったな。」

「そう思うなら手伝え。片付けるのも手間だ。自分に着せるより面倒くさい。」

「了解。しかしそんなに重いのが嫌なら魔法使い用の正装でよかったですじゃね？」

「ああ、それも考えてはみたんだがある理由があって止めた。」

サイモンが手を止めて聞き返す。

「ある理由とは？」

「さぼるなよ。まあ大した理由じゃないが、まず魔法使いの地位が低い。」

「そうか？おれはすごいと思うけどな。ベギラマとかベホイミとか俺には使えないからな。」

この時代の魔法は過去のロト一行が使用していた魔法に較べてかなり劣る。物語のはじめの作品とかそういう問題だけでは解決でき

ない理由が実際にはあるはずだ。そう思って過去の文献等調べたのはもう5年ほど前からか、今ではそれでとんでもない量の報告書が書ける。ただ報告する義務もないし、唯一の俺のアドバンテージを知られるのも困る。そう俺は全ての魔法が使える。ベギラマではなくベギラゴン、ベホイミでなくベホマ、それ以外の全ての魔法すらアレフガルド中を旅して発掘、解読、会得している。そういった理由を踏まえてこの時代の魔法使いは地位が低いと理解している。

「そういうがベギラマの一撃と君らの剣の一撃、与えるダメージは大差ない。ならばMPを消費しない剣の方が強い。またベホイミで回復できる量もそれと大差ない。かつてのロトの時代の大地を焼き払い、天より雷を落とし、死人すら蘇らせる魔法が使えるわけではないからな。」

俺は嘘をつく。使える魔法を使えないふりをする。この強大な魔法を公表したくない。これは多分ロトの勇者の決定と違わないと思う。戦乱の時代には究極の武器になるかもしれないが平和の時代には強力な暴力となる。またもし竜王側が使えるようになると互いの使用する魔法は被害を拡大するであろうことは想像に難くない。

「ふ〜ん、そんなものか？お前は学者みたいなことを言うんだな。でもよお、そんな強力な魔法が使えたら竜王軍もいちころじゃね？」

気軽に言ってくれる。物を簡単に考えすぎる。こいつは剣の力量は近衛でも上の方、魔法も簡単なホイミ、ギラ程度なら使用できるが双方を別物として考えることしかできない。もっとも片手剣と盾を使用する戦闘スタイルでは魔法は使いづらい。どちらかの手を空けないと魔法を発動できないから戦闘開始にギラ、ベギラマを放ち、戦闘終了後に回復を行なうのが一般的である。

「もしの話はいい。しかし懐かしい称号だ。ここの兵士になるまで戦う学者って言われてた。」

「一日の半分は図書館にいるお前らしいいい称号だ。よしできた。」

サイモンが最後のパーツを木人形に取り付け終わった。

「サンキユ。でさっきの話だが魔法使いのローブ姿は動きづらいから嫌だ。第一格好よくない。」

「プツ。クツクツク！やっぱりお前は面白いな。好きにするがいいさ、俺じゃねえし。」

「あきれたやつだな。よく近衛騎士になれたなお前？」

俺は肩をすくめて言う。近衛にあるまじき軽さだ。

「俺もそう思うよ。先の戦いで兄貴が死ななかつたら間違いなく貴族の次男坊って気軽な身分でいれただろうよ。だれにとつてかは知らんが迷惑な話だ。」

「お前が言うな！」

文句を言いながら革の服を着る。自作の特別製で動きやすく軽い。必要な場所だけ金属板で補強してある。籠手も脛当ても同様だ。最後にこれもマイラの鍛冶に作らせた特別製の刀を佩く。刀を作る技術は廃れていたが代々伝わっている秘伝書を解読して作ってもらった。それから更なる改良を重ねて今ではお気に入りの一刀だ。力の強くない俺には使いやすい装備である。

ここからは俺なりのステータスの考察である。
 ちなみにステータスは確認できない。もちろんステータス確認画面なんか出てこない。他人と手合わせしたりして相対的に理解できるぐらいであるが俺、サイモン、近衛隊長の身体能力は次の通りである。

	俺	サイモン	近衛隊長
力	C	B+	A
すばやさ	B	C+	B
賢さ	A	D	C
HP	C+	A-	A
MP	B-	D	C

記号は俺評価で、Aは数値にすると201〜250 B151〜200 C101〜150 D51〜100 E1〜50で、数値の+はふり幅の上、-が下と考えている。例外の数字としてSの250〜255、Fの0（無）としている。Sはお目にかかったことはないがFは純粋な戦士のMPに該当する。

俺に較べて隊長の化け物具合がわかると思うが、サイモンも十分強い。しかもまだ伸びしろがある辺りに空恐ろしさを感じる。力のCというのは鉄の装備ができるぎりぎりの域である。ただし装備するとすばやさ犠牲になる。ゆえに俺は標準戦闘スタイルは捨てた。それでも普通に戦えば隊長には勝てない。多分サイモン相手でも5割勝てればいい方である。

次に賢さだが俺のAは転生ゆえの知識が上乘せされている。総合すると魔法使いか盗賊推奨のステータスだ。賢さはDあれば下級の魔法が使用できる。Cもあれば中級魔法、つまりこの時代の全ての魔法が使用できる。だからこの時代に賢さB以上は棄ててステータス

になる。魔法はワンワードスペルではなく詠唱（発音必須ではない）方式で、理解できない詠唱を丸覚えで使用している。簡単に言うとギラといえば火の玉がでるわけではなく、口頭か頭の中で詠唱してラストワードとしてギラと唱える必要がある。実際はもっと難しくMPの消費、マナとの融合などの基本があるのだがここは割愛する。

総合して俺は隊長に勝てるかというと普通は無理だ。だが俺にしかできない魔法を使用すると可能になる。答えは能力上昇系魔法の使用、具体的にはピオリム（すばやさB：約170はすばやさS：255にする）を2回かける。すばやさB：約170はすばやさS：255に化ける。他にはバイキルトやスカラの使用も有効である。騎士同士の試合は双方構えてからの戦いなので魔法を使用する時間はいくらでもある。かくして俺はそれなりの強さを認められている。

大臣室の地図

「よし準備完了。愉快的な任務じゃないが行って来る。」

「おう、がんばれよ。応援しているぞ。」

「なんかお前に応援されると、馬鹿にされてる気がする。」

とりあえず今日の勇者5人の詳細と居場所を確認する為に大臣の執務室に向かうことにする。執務室へ行くには城の一階奥の二回への階段を上る。ここには常時二名の兵士が詰めている。もちろん俺は顔パスだ。他には大臣、近衛騎士なども顔パスだ。二階に上ると近衛の詰め所がある。反対側が大臣ら文官の執務室にである。ちなみに中央に謁見室があり、その裏側が王様らのパーソナルスペースになっていて、立ち入りは大臣と近衛隊長以外は許されていない。

玉座

国務大

臣地

扉

執務

室 図

- - 扉 - -

- - -
近衛騎士

扉

扉

扉

詰所

-----扉扉-----

扉

扉

扉

扉

扉

階段1F

二階は礼式がとても面倒くさい。ほとんどの扉の前に近衛騎士が立っていて入室の理由を説明しなくてはいけない。それらの障害を乗り越えて大臣の部屋に入る。部屋の中には何人かの文官がいたが大臣によって退室させられていく。俺を睨んで退室していくのは簡便して頂きたい。

「お邪魔でしたか？ずいぶん仕事が立て込んでいるようですが？」

「かまわん。今この城で最優先の仕事は竜王と勇者に他ならん。」

「そうですか。ではその勇者ですが・・・。」

俺は地図を眺めながら声をかける。地図にはアレフガルドの簡単な地形といくつかの光点が見える。手前の台には水晶球が紫色の座布団の上に鎮座している。大臣は抽斗から書類を取りだすと、一枚

の書類の上に右手を水晶球に左手をかざす。すると一つの光点が強く光り水晶球に見知らぬ男達の姿が映った。

「見よ。これが血の契約の効果の一つだ。この契約書の人間をこちらの遠見の球に移すことができる。少量のMPを消費するが便利なものだ。」

「これはだれですか？」

「これは勇者12とその一行だ。固有名詞は書類にある通りだ。」

書類にはエイブラムとある。固有名詞で呼べばいいのに。勇者12つてひどくね？

「先も述べたが勇者が何人いようとかわわぬ。同じくそれが誰でも一向に構わぬ。現在いる勇者は12、25、41、42、43そして今月の51、52、53、54、55の十名だ。」

なるほど数字の前が謁見した月、後ろが謁見順か。

「なるほど一月、二月が一名ずつ三月は全滅で四月は豊作ってことですか。」

「ふん。だれがどうでもかまわん。お前は自分の担当勇者のみ気にすればよい。」

うわっ！一気に機嫌が悪くなった。やっぱり王族だ、下々のことなど気にも留めぬか。

「わかりました。では調べさせていただきます。今月の勇者はこの

5枚ですね。」

勇者51 マイラ出身ガルド 大斧の使い手 嗚呼あのごついやつか。現在位置はと……水晶球に手を当て魔力を送り込む。もう城外にいるようだな……とりあえず問題なし。

勇者52 ラダトーム出身ドォーマン うっ記憶にない。居場所は……城下で同行者2名か。

勇者53 ラダトーム出身クロウ またしても全く記憶にない。こいつも城下で同行者2名つと。

勇者54 ラダトーム出身ゲオルグ やっぱり記憶にない。完全に意識が無かったようだ。反省せねば……こいつも同行者2名？ちよつと映像を拡大……なるほど、こいつら三名はいつしょか。もしかするとあかんかも？

勇者55 出身地不明アレフ 15歳 若いな。まつ18の俺が偉そうに言うことでもないか。ふむ居場所は城下町。ただし一人……。

最悪今日一日で4人解任しなくてはならないか。うっん、我がことながら大変だな。

「大体わかりました。でも本当にいいんですか？500Gとっても。」

「かまわん。我々王族に対して詐欺を行なったのだ。死刑でもかまわないぐらいだ。」

やべっ 触れてはならないところに触れたようだ。とぼっちちりが来
ないうちに退避するんだよ。じゅ。

城下町の宿屋

城下町にやってまいりました。当たり前といえば当たり前だが、？の離れた所にある町ではなく同じ城壁内にある？、？のタイプである。この城下町はとも大きく公称の人口で10万人、竜王出現後は集落を失った民が流れ込んでいて20万人とも言われている。10万人といえば多く感じられるかもしれないが、通常兵士一人を維持するには千人の民が必要といわれている。このぐらいの人口がなければ騎士団は維持できない。ちなみに各地の人口はマイラの村5000人、地下の町ガライ8000人、湖上都市リムルダール20000人、砂漠都市ドムドーラ30000人（現在不明）、城塞都市メルキド50000人とされており、またそれ以外にも小集落が多数あった。過去形なのが残念である。リムルダール、ドムドーラ、メルキドはラダトームに多額の税金を払うことで一応の自治を許されている。

さてさっきの勇者達の光点の位置はたしか王家御用達の宿屋の辺りだが・・・なんだ俺が使っていた定宿じゃないか。この宿は俺も結構世話になってたし挨拶ぐらいしておくか。しかしこの宿代は50Gほどだったと覚えているが、もしかして勇者割引で8Gとかになるとか言わないよな。としようもないことを考えながら宿屋に入る。人の良さそうな親父がこちらを確認する。

「久しぶりです。親父さん。」

「おお学者か？城への任官はどうなった。一月も音沙汰無しで心配したぞ。」

「すみません。かなり忙しかったもので。」

心底うれしそうな親父さんがボトルを取り出しながら言う。

「ということは無事任官できたんだな。それはめでたい。今日は奢らせてもらうよ。」

「いやゴメン。まだ任務中なんでそれはまた今度で。」

「ふくん。まだ仕事ってどこに配属された？お前の腕なら一般兵ってことはなかるう。」

「うん。知らないかも知れないけど国務大臣付き特務隊士。」

その名を聞いて親父さんの顔が曇る。その表情からは心配そうな感情と嫌悪が感じられる。あまりいいイメージがないようだ。俺の顔色を見て親父さんの顔が元に戻った。

「嗚呼その任務自体は問題ない。まあできれば補助金の金額をもう少し上げてもらえると助かるが……。いや今のは忘れてくれ。」

「????。なんか都合の悪いこともあるのか？」

「特務隊士なら勇者の視察だな。五月の勇者が四人ほどチエツクインしてる。内三人の態度が以上に悪い。女の従業員に手出すは、部屋にけち付けるはで散々だ。全くあんな安い金でVIP扱いしろって冗談じゃない。ああ城批判じゃないからな。念のためな。」

「はあ。補助金も大した額ではないようだ。気の毒でしょうがない。しかしまあやっぱあの三人は駄目なようだ。気が滅入るな。」

「そうですね。で、そいつらはどこですか？」

「さっき出て行った。ただで飲ませてやる酒はないって言ったら椅子蹴飛ばして出て行ったよ。」

「じゃあ。待たせてもらうよ。水もらえる？」

俺はカウンターに腰をかけた。親父がグラスに水をいれてよこす。

「水だけでなく何か食べていってくれよ。結構もらってるんだろ？」

「残念ながら初任給は四日後だ。しばらく我慢だ。それとこれから荒事になりそうなんだ。あまり腹を膨らませるわけにはいかない。」

「そうか？契約金とかあるはずじゃないか？」

「嫌なこと思い出させるね。契約金は推薦者のリムルダールの義父のものだよ。」

「お前の義父って、確かあの町長だよな。」

「そつ、全部税金だよ。去年は竜王のせいで十分な税金が集まらなかったらしい。なにが城で見識を深めて来いだよ。俺は売られたんだよ。」

「しょうがないさ。城の取立ては結構きびしいらしいぜ。お前さんの義父も苦労してるのさ。」

「わかってるよ。別に恨んだりしてないさ。ただ文句の一つくらい

言ってもいいだろ！」

自治権との引き換えの税金が各都市にある。これはその年の取れ高を考慮したりしない。だからお金や物で納められない場合は人で払う場合がある。その場合町で優秀な人材を城に推挙し契約金という形で納めたことにするのである。前例では近衛騎士になった者は数えるほどしかないらしい。それでも一万Gだったらしいから、俺の10万Gは破格だ。リムルダール町長と近衛隊長の推薦を聞いた大臣の顔は見ものだったらしい。まあ栄転ということで喜んでくれる人が大多数だし、王立図書館の閲覧ができるようになった俺はその言葉どおり見識を深めることができご満悦である。

宿屋の入り口の扉が音をたてて誰か入ってくる。若いというより幼さの残る顔をしている。見覚えがある。たしか勇者55、ああ駄目だ駄目だ、番号で呼ぶのは頭の中といえ失礼だ。え〜とアレフだ。「只今戻りました。食事をお願いしたいのですがお金が少ないので一番安いので。」

「わかった。食事はどこへもっていけばよい。ここか？部屋か？」

「ここでお願いします。」

やけに低姿勢だな。まあ威張り腐っているよりは十倍はましだ。銅の剣、革の盾、皮の鎧。鎧が真新しいということは買い替えたのか。俺が勇者アレフを見定めていると俺の隣で直立した。

「先程謁見室でお会いしましたね。勇者アレフです。多分これからお世話になると思います。よろしくおねがいします。」

驚いた。俺は覚えていないのに俺を覚えている。(うそ。俺は呆けていただけ。)

「おっおう。俺は勇者支援官のケルテンという。こちらこそよろしく。」

「王様にお礼を伝えてください。鎧を買い換えることができました。」

「なんか雰囲気にも飲まれて敗北感でいっぱいである。謙虚さでも人は押されることあるんだな。」

「ええ、必ず伝えますよ。君も頑張ってください。」

「もう挨拶はいいだろう。さあ食事だ。食べて英気を養いな。」

宿屋の親父さんが食事をテーブルに並べる。結構な量だ。

「あの私が頼んだのは一番安い食事でしたが・・・？」

「いいんだ。若いんだ、たくさん食べて強くなってもらわないとな。勇者さまだろ。」

「そつだそつだ頂いておけ。城から補助金もでているしな。なっ親父！」

補助金の話でまた親父の顔が少し曇る。一瞬の間の後俺と親父は大爆笑する。アレフはあつけにとられている。不愉快なことだらけの今日一日だったがこいつに会えてよかった気がする。

衝突

ドーン！

宿屋のとびらが乱暴に開く。せつかくのいい気分が台無しだ。同じく親父もアレフも嫌な顔をしている。

「おらっ勇者様のお帰りだあ〜。」

女の肩を抱いた酔っ払い三人が入ってくる。反対の手には酒瓶。テーブル席のあたりを占拠すると酒盛りを始める。先程確認した装備と全く変わってない。同行している女は安っぽい香水の匂いにあるからさまな露出度の高い服、いかにもな娼婦だ。さてどうしたものかな？どの程度から詐欺罪って申告できたかな？

「ねえ、いっつもお金がないって言ったのに今日はどうしちゃったのお〜？」

「そうよ！いっつも冷やかしばっかだったのにい。」

「そりゃ言えねえな。お金はあるところからもらえばいいんだよ。げっひゃっひゃっひゃ〜！」

「何よそれ。教えなさいよ。教えてくれなきゃ帰る〜。」

「そうよ。あんた達だけず〜る〜い〜。」

完全にできあがってるな。もう少し泳がせたら全部しゃべってくれないかな。娼婦頑張れ！今お前達は優秀な検察官だ。

「誰にも言っなよ。秘密だぞ。秘密だからな。絶対言っなよ〜！」

「うん絶対言わない。私達の秘密ね。」

もう一息だな。まるでトリオのお笑い芸人のようだ。

「じゃあ言うぞ。実はな、城に行ってなにを隠そう私がロトの末裔です。ってやってやった。」

「え〜！三人とも〜。それってなんか変じゃない。」

「細けーことはいいんだよ。それでとりあえず100Gもらえたんだからよ。あとはスライムなりいじめてもっと金もらってくるからよ〜！」

おいおい。スライムは一匹で1Gにしかならんぞ。いや突っ込む所が違うな。はい言質とりました。さてお仕事お仕事ってあれ？アレフ君何するの？

「あなた方恥ずかしくないんですか！勇者ロトの末裔を偽証し、あまつさえそれで得たお金で遊興に走るとは恥を知りなさい。」

「なんだあお前。なにをガキみたいなのを言ってるんだ。って本当にガキじゃねえか！ガキは帰ってお寝んねの時間ですよ〜だ。」

「そうよ！もう少ししたらお姉さんがお相手してあげる。」ちゅっ！

「止めてください。私はこの人達と話をしているのです。」

「うるせえ！こっちはお前なんかとする話はねえな。」

あかん。そろそろ止めないと収拾が付かなくなる。俺は立ちあが

つてアレフの肩をポンと叩く。

「ああ君は正しいがそれだけでは世界は回らない。あとは任せてくれ。」

そして酔っ払い三人に向かって話しかける。

「では改めて、私は勇者査察官ケルテンと申します。勇者ドゥーマン、クロウ、ゲオルグ3名を解任します。尚血の契約において重大な偽証があるゆえ全員に500Gの罰金を申し渡します。意味はわかりますか？」

「なっ！てめえ何言っでやがる。」

「理解できませんでしたか？私は勇者の査察官をしています。つまり私の権限で勇者を解任することができます。ここまではよろしいですね。」

皆静まり返っている。その酔っ払いも娼婦達も宿屋の親父、勇者アレフも。

「勇者の解任には次のいずれかの理由が必要です。まず勇者の力量に足りない者、こちらとしても無理に命を失わせるのが目的ではありませんし、支援には限度がありますから弱い者は辞めていただくこととなります。次に勇者として器量の足りない者、これは素行の悪い者はモンスターとなんら変わりないと言うことです。勇者の名前の下、軋轢がうまれては意味がありません。そして最後に目的遂行の意思のない者、これにいたっては論外ですね。あなた方はこの三点すべてに当てはまります。」

「異議有り！」

一番弱そうなドウーマンが何か言い出した。異議有りときたか。ここに至って何を言い出すか面白そうだ。

「俺達はいま酔っ払っているがこれは明日からの活躍に向けて英気を養っているだけで目的遂行の意思がないわけではない。」

「なるほど。続けてください。」

「それに素行が悪いとおっしゃられるがこれは酒による一時の過ち。どうかご甘受願いたい。」

こいつ結構弁がたつな。ローブ姿だから魔法使いタイプか？

「そして力量が足りないとおっしゃられたが試しもせず判断はできないのではないのですか？」

なるほど詭弁とは言え、一応反論として成立している。

「わかりました。では力量を試させていただきますでしょうか。実践形式で結構です。」

「ちょっと待て、今俺達は酔っついていてまともに戦えな「かまいません。酔いを醒まさせる方法がないわけではないですから。親父さん、例の特別ジュースを三杯頼みます。」

こいつらの戯言にいつまでも付きあつてられるか！こんな嫌な顔を見るのは今日で最後にしたい。

さて目の前に緑色のドロドロした液体が運ばれてくる。これは昔

考案した対酔っ払い用の特別ジュースだ。製法は簡単、毒消し草をすり潰し適当な果汁とシェイクした物だ。アルコールは一種の毒なのである。キアリーを使えばもっと簡単なのだがこの時代には本来無いのでここでは使用しない。

「さあ、グググッと飲み干しちゃってください。私のおごりです。10分もすれば酒が抜けます。ああまずいのは我慢して下さいね。」

しぶしぶ飲み干す三人。とても不味そうだ。というか実際不味い。親父もカウンター内で苦そうな顔をしている。俺はカウンターに50G置く。

「お釣りはありません。必要経費ですから。」

「では酔いが醒めるまで試験の方法について話しましょうか。何か条件があったら聞きますのでどうぞ。」

「条件って何を？」

「ふう、何も考えていませんか。どんな戦いでも最低限の条件はあります。ルールと言ってもよろしいですね。例えば騎士同士の試合は双方同じ装備同じ人数で魔法無しで行います。一方冒険者ではほとんど決め事はありませんが宿屋の中ではやりません。大事な仕事の幹旋場所ですから暗黙のルールです。」

「じゃあ、俺達はいつも三人で行動している。だからこちらは三人でやる。」

「OK！それでいい。他には？」

「あんたのその武器はずいぶん立派だ。不公平だ。」

「おい！何勝手なことを言っている。あんたらは三人でさらに武器ま「アレフ君、私の為に怒ってくれなくてもよろしいですよ。その条件もOKです。じゃあこれはアレフ君に預けておきましょう。でこれだけでいいですか？」

「じゃあ場所はすぐ外の道路上でいいな。まさか城の兵隊さんは街中で火や雷の魔法をぶっ放したりしないよな。火事にでもなったら大変だ。」

「なるほどその通りです。忠告ありがとうございます。ではギラ、ベギラマは私は使用しません。」

よほど自分たちのとりつけたルールがうれしいのか奴等の顔色がよくなってきた。赤くなったり青くなったり戻ってみたり顔色だけで忙しいやつらだ。

「おい、本当に大丈夫か。必要なら城に行つて騎士を呼んでくるが。」

「心配ないよ、親父さん。まあ見てなつて。」

30分後、3対1 さらに不公平なルールの試合が始まる。

決闘

ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ……
いつの間にか宿屋のまわりは人であふれている。いったい何が
きた？窓からこっそり外を覗く。

「偽勇者二人相手に城の兵隊さんが喧嘩売ったってよ！」

「いや勇者は本物で兵隊が因縁つけたって俺は聞いている。」

「え、賭け金は1Gから、今の所オツズは勇者三人が1・5に兵隊
が3、おいだれか兵隊にかけるやついないのか！賭けにならないぞ
よし兵隊のオツズは5だ。だれかいらないか？」

いつのまにか祭りの会場になっている。屋台でもでてくれば完璧
だな。

「大事になってすまない。うちのおんなどもが外に触れ回ったら
しい。最近景気のいい話がなかったから皆話題に餓えていたらしい。
なんなら今からでも止めさせるが……」

「あゝ……えゝ……まあしょうがないかあ。いや今更止めれる状況
じゃなさそうだ。場所だけ確保してくれるかな、半径10mくらい
でいいから。」

「うちの前では狭いな。若い者に中央の広場を確保させる。しかし
お前さんにはつくづく悪いことした。すまない。」

「別に親父さんが悪いわけじゃない。もう謝らないでいいよ。こっ
ちが悪い気がしてくる。」

時と場所を移すこと ラダトーム城下中央広場 二時間後、完璧な祭りの会場が出来上がっている。急遽用意された屋台、ロープと簡易な木で作られた10m四方の闘技場。山のような人、人、人。もう10時は回っていて本来なら真つ暗なはず・・・誰だよわざわざレミィラで照明作ったのは。

「え、それではこれより自称勇者三名とラダトーム城兵士の決闘を行います。ルールは双方の申し出より決定しています。勇者側は三人パーティー武器魔法など制限無し、兵士は武器無しギラ、ベギラマ使用禁止となっています。」

宿屋の親父が立会い人兼司会者となってアナウンスする。

「おい！なんだそれ。勝負にならねえよ！！賭けるの止めるぞ！」
「え、条件が変わっても掛け金の返金はしません。このまま続行します。なおオツズは1・2対10に変更します。」

さてとそろそろ登場するとしますか。モシヤスとか使っちゃ駄目かな。あまり個人として目立ちたくないし、いや駄目だなもう手遅れだ、あきらめるか。

俺がとこと広場にでていく。そのあと自称勇者三人が出て行く。騒ぎが余計にはげしくなった。

そうだろうね、俺一見強そうに見えないから。身の丈170cm、筋肉は付いているが細身、顔も普通、しかも武器なし革の服のみ、これが俺の今のスペック。かたや対する三人はゲオルグ身長190弱、結構ごつい体をしている。銅の剣、革の盾、布の服で強そうに見えるな。クロウ身長は俺と変わらないが俺より肉付きはいいよう

だ。こん棒に布の服。多分三人の中で一番劣る。最後にドゥーマン身長170弱俺より細身ローブ姿で木の杖を持っている。どこから見ても魔法使いだ。大体の戦法は想像できるな。さてどうするか？とりあえず準備しよう。まずピオリムを二回かける。バイキルトはいらないか・・・スカラは念の為にかけておくか。魔法対策にマホカンタでも使いたいが却下だ。あれは派手に効果がありすぎる。ロストマジックは使用がばれたくない。こんなもんでいいだろう。

「最後にこの決闘において故意に命を奪わぬこと、後に遺恨を残さぬこと、双方精霊ルビスの名の下遵守されること。ここにいる全ての者が見届ける。それでは始め！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ゲオルグ（剣）

俺

ドゥー

マン（魔）

クロウ（こん棒）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

予想通りの布陣だ。ゲオルグとクロウが互いに目配せしている。そしてちらちらとドゥーマンの方を見ている。積極的に前に出てくるやつはいない。近接二人で俺を引き付け後ろからギラで一撃、基本だな。

「おいせつかく三人もいるんだ。そつちから仕掛けてきな。」

わざと挑発するように手を振る。動け！形が崩れないと攻め手がない。

安っぽい挑発だが効果があったようだ。クロウのこめかみがピクピクしている。

「この野郎！」

クロウが一步踏み込み、こん棒を振り上げた。

そこっ！すばやさ255は伊達じゃない。俺は一足跳びにクロウの懐に飛び込み、こん棒を振り下ろす右手と襟をつかんだ。

「ギラッ！」

あせったドゥーマンがギラを放つ。俺はそのままクロウをドゥーマン側に背負い投げる。あえて叩きつけずに放り投げる。火の球が空中で逆さまになったクロウの背中を焼く。

「ぎゃあああ〜！！！！ぐふっ！！」

地面に落ちてのた打ち回るクロウに近づき頭にサッカーボールキック。一つ！次二人目、ドゥーマン側に走る。先程と同じように踏み込む。

「ひいひい〜」

ドゥーマンが頭を抱え込んでしゃがみこんだ。おいおい俺がいじめてるみたいじゃないか。しょうがない。

「キヤ……！」

観客の悲鳴があがった。そして静まり返る観衆。最悪の終わりが想像される。そこには銅の剣を両手のひらで挟み受け止めている俺がいた。真剣白刃取り。よく取れたものだ。俺は我にかえり腕をひねり武器を奪い取る。呆然としているゲオルグの腹を蹴飛ばし倒す。

「終わりだな。」

銅の剣を突きつけ宣言する。

「そこまで！」

観衆の歓声は最高潮に達した。多分ここにいるとやばい状況になると思われるので退散するでしょう。手にしていた銅の剣を放り出す。あゝうるさい。耳をおさえながら歩く。

「アレフ君。私の刀を返してください。」

アレフの耳のそばで大声で叫ぶ。

「えっああ！はい、これどうぞ。」

唾然としていたアレフが我に返り刀を差し出した。

「ありがとう。また会いましょう！」

俺は群集にまぎれるように姿を消した。

決闘の反響

うっん、よく寝た。もう6時か、あれだけ身も心も疲れてたわりには起床時間は変わらないとは習慣とは恐ろしいな。うわっ手の平が痛い。昨日銅の剣を受け止めた所が青くなっている。やっぱり無茶だったようだ。銅の剣で助かったようだ、鉄の剣や鋼の剣だったら・・・もうあんなまね止めよう。手足が何本あっても足りん。とりあえず治療しておこう。

「ホイミ」

うんホイミは便利だ。多少の切り傷、打ち身、筋肉痛にも効く万能魔法だ。一人ぶつぶつ言っているとノックの音が聞こえる。

「ケルテン殿起きていらっしやいますか。来客ですが。」

誰だよ、朝っぱらから。扉を開けると騎士見習いの一人が立っている。

「はいはい。起きてますよ。で来客ってどちら様ですか？私しか駄目なんですか？」

「はい名指しです。しかも勇者殿です。」

昨日の連中がクレーマーにでもなったか？そうだったら嫌だな。他には心当たりないし・・・。

「ではすぐ行きますので、応接室に通しておいて下さい。」

「わかりました。そう手配します。」

ラダトーム城兵士宿舎 談話室

談話室は非常に重苦しい空気に包まれている。ここにいるのは俺と勇者アレフの二人だけだ。この空気を作った張本人は真剣な目で俺を見つめている。先程開口一番

「私を弟子にして下さい。」

ときたもんだ。それから5分ほどずっと沈黙が続いている。俺はさつきから考えているのだが考えがまとまらない。個人的に一人の勇者についていいものか？俺に何か教えることができるのか。俺自体何人かに師事したが基本独学で覚えたことの方が多い。そもそも昨日の決闘を見て、何か感じるものがあつたのか？

？さっぱりわからん。

「ゴメン。よくわからないのだが何を師事するつもり？」

「全部です。必要なら武器も変えます。魔法もできる限り覚えます。」

「ああそれ駄目ね。いくら私の真似しても強くはなれない。今持っている技術を昇華させるようなことをしないといけないよ。私と君は同じじゃないから。」

「それです。」

「えっ何が？」

「そういう考え方です。私にはそういう何かがありません。孤児だった私は生きる為に武器を振っていました。更に必要なので魔法もかじりました。一応ホイミ、ギラは使えます。でも何か足りないのです。昨日の決闘をみてこの人だと思いました。」

なるほどね。必死で生きてきたんだ。よく曲がらずにいたものだ。

「OK。わかった。でもさっきも言ったように一から十は教えない。君が持つてる三なり五なりを十に近づける。そういう方法を教える。それでもいいか？」

「はい！それでかまいません。師匠。」

「ああ、それも駄目。俺にはケルテンという名がちゃんとある。肩書きとかで呼ばれると俺が俺で無くなった気がする。だったら俺も君のことを勇者55で呼ぶよ。」

「勇者55？」

「知るわけないか。君は五月の五番目に申請してきた勇者と城では認識している。失礼な話だろう。」

「では昨日の三人も？」

「そう、かれらは勇者52、53、54だった。んっ？あれっ俺正式に解任してない。また探さないといけないか。まあいい、それは置いて俺のことはケルテンと呼んでくれ。」

「わかりました。では私のこともアレフと呼んでください。この大地の名を頂いた大事な名前です。ケルテン師匠。」

「わかった、アレフ。今からお前は俺の弟子だ。ではまず技量がみたいから訓練場に行ってくれるか。案内はさせる。」

そして騎士見習いを呼んで案内をさせる。俺は自室に戻り自分の刀を佩き、アレフに使わせる鉄の剣と鉄の盾を持つ。これは支給品だが使っていない物だ。実は鉄の剣は市販では売っていない。正規兵の武器である為一般には販売が禁止されている。

- - - - -

兵舎訓練所 ラダトーム城の兵士は特に訓練義務があるわけではないが、一般的にここを使用して自己鍛錬を行なう。俺は毎朝一時間半ほど刀を振っている。

さてアレフと騎士見習いの二人がいる。とりあえず重いので鉄の剣と盾は置いておく。

「あゝ君、名前は？」

「はっ！ ジョルジョといいます。」

「そんなに緊張しなくていいよ。じゃあジョルジョ、アレフと木剣と木盾で模擬戦をやってもらおう。双方手加減はいらさない。もちろん攻撃は当てること。とりあえず三本勝負でいいかな？」

今日の前で模擬戦をやっている。ジョルジョ君は流石騎士見習いらしく正当な剣術を使う。基本的に忠実でフェイントの使い方も教科

書通りうまいもんだ。だがまだ体ができていないからまだ剣筋が甘い。嗚呼そういえば不思議なのがサイモンだ。昔初めての模擬戦やった時、片手剣に盾を持つ正統スタイルでヤクザキックかましてきた。同じ剣術とは思えんな。いかん考えがよそに行った。さてアレフは型がない。ちからもすばやさも相手より上だから通用しているだけだがまだまだ可能性はありそうだ。三本勝負の結果は、アレフ二本、ジヨルジヨ一本だ。

「さて先に品評をしておこうか。

まずジヨルジヨ君。君はそのままでもいい。ただフェイントに固執しすぎじゃないかな。たまには気合の一撃を入れるといい。それでフェイントが生きる。

次アレフ、君は身体能力に頼りすぎ。多分格下には強いが格上には通用しない。とりあえず基本の剣筋を確立しようか。よし大体やるべきことはわかった。ジヨルジヨ君ありがとう。もう戻っていいよ。またあいてをやってくれ。」

先程放り出しておいた鉄の剣と盾をとってアレフに渡す。

「まず先に行っておくが、理解できないことがあつたら必ず質問すること。理解しないまま訓練しても身につかないから。また納得できないならいつ師事することを止めてもかまわない。ただしその場合は必ず口で言ってくれ。いいな。」

「わかりました。でも師事を止めるなんてありません。絶対に。」

「よし、練習だけだがその剣と盾を使ってくれ。やっぱり本物を使わないといけない。とりあえずそれを持って構えてくれ。」

アレフは右手の剣を少し掲げ、左手の盾を前に出す。左の軸足を

少し前に出し、かるく腰を落とした構えをとる。悪くない構えだ。

「それがいつもの構えか？」

「はい。何かおかしいですか？」

「いや別におかしなことはないよ。その状態をホームポジションと
言うことにする。」

「ホームポジション？」

「ああ気にしなくていい。ではその木偶を思いつきり斬りつけて
くれ。」

木偶とは直径10cmぐらいの木を十字に組んでそれに麦わらを
巻きつけた物。必要ならここに甲冑を着けて使う。アレフは剣を思
いつきり叩きつける。剣は振り下ろしたままだ。

「はいそれ駄目。攻撃の後は必ずホームポジションに戻す。」

「あつ！でもなんで？」

「まだ敵は倒れていないかもしれない。だから次に備えた姿勢に戻
す。じゃあ次は木偶の無い所で素振りをしてくれ。ただしさつきと
同じ威力のままです。」

アレフは思いつきり剣を振り下ろし、ホームポジションに戻す。
そしてこちらをむいて笑う。

「そうだ、それでいい。では次はその一連の動作を100回繰り返

す。」

これが結構大変だ。見ていると半分位から振り下ろしが甘く、ホームポジションへの戻りも不正確だ。一応終わった後、肩で息をしている。

「結構きついだらう。まずこれができるまで他のことはしなくていい。最終的にこれを1分の休憩を挟んで10セットできるようにしてもらおう。腕が動かなくなったらホイミを使うといい。」

「でもこんなので強くなれますか？」

「これはそれ以前の問題。さっきのジヨルジヨもこれに近いことをやってるはず。ちなみに」

俺は刀を中段に構え、一瞬の振り上げの後振り下ろす。そして中段に構えなおす。これを100回繰り返す。これだけやって息もきれないしおおよそ3分で終わる。

「俺のはこんな感じだ。10年毎日やっている。まあ一週間でこれぐらいはできてほしいかな。午前中はここを使っている。午後からはモンスターを狩ってくることに。弱いモンスターでもいいから基本を抑えながら戦うこと。ついでにお金も稼ぐこと。では俺も日課の続きをするからアレフも続けるように。」

俺はいつもどおり刀を振る。振っている間は他の事は何も考えない。目の前にいるイメージを斬る。ここ一ヶ月の仮想的は近衛隊長である。10セットが終わったら次の型に移る。自然体から居合い逆袈裟切り、振りかぶって両手持ちで幹竹割り、納刀の一連の流れを100本、10セット行なう。ふと我にかえると隣でアレフがあ

っけにとられている。

「おいおい、手が止まってるぞ。」

「すみません。なんかすぐくて。」

「毎朝ここにいるから、そのときだけ教えてやる。じゃあ俺は終わったからあとは自分で続けること。剣と盾は終わったらその辺の見習いに返しておいて。」

言うだけ言うと俺は練習場を立ち去った。今日はやることがいっぱいあるからあまり付き合ってやれない。昨日の連中を解任しなくてはならないし、賠償金の支払い手続きもいる。さらに勇者51はどこへ行ったのか気になる。今日も忙しくなりそうだ。

祭りの後と後の祭り

いつも通り食堂で朝食をとる。いきなりの運命の変転に気が滅入る。無意識にフォークで肉や野菜をつついてはいる。誰か来たようだな。

「ケルテン師匠、ここにおいででしたか？」

サイモンが冷やかすように言う。

「てめえ！なんでそれを。」

「くつくつく！ジョルジヨから聞いた。私もよい助言を頂きましたって喜んで皆に触れ回ってたぜ。」

頭を抱える。なんだよ、他に娯楽はないのかよ。俺で遊ばないでくれ。

「それともう一つ。」

そっさいいながらサイモンが袋をテーブルにドンツと置いた。何が入っているんだ？結構重そうだ。

「いや〜昨晚は儲かった、儲かった！なんせ10倍の鉄板レース。」

サイモンが袋をひっくりかえして中のゴールドをテーブルにぶちまける。食堂にいた連中が寄ってくる。

「あ・あ・あ〜お前・・・これ！」

俺は声にならない声を出して、ゴールドの山を指差す。1000
Gどころじゃない。その倍はあるか？

「昨日の夜な酒でも飲もうと城下に出たら祭りやってな。でな！
主催の決闘の賭けに有り金全部お前に賭けた。ああいつのつて普通
掛け金に限度額あるだろ！でもお前の無茶な条件にお前に賭けるや
つがほとんどいなくて、胴元がお前に限り限度無しでのつてきた。
いや〜お前格好よかったよ。」

もういい。もういいよ。お前、俺をおもちゃにして喜んでるな。

「よぉ〜し、今日は全部俺のおごりだ。皆ここでなら何食ってもい
いぜー！」

そして朝から酒宴が始まった。

「ケルテンに！」

「サイモンに！」

『かんぱ〜い』「乾杯」「乾杯」……………

俺はこの馬鹿騒ぎに巻き込まれないよう逃げ出した。逃げてばっ
かいるな、俺。

……………

あいつら呪ってやる。大臣と隊長にたっぷり叱られるがいい。俺
はぶつぶつ言いながら街中を歩く。見事なまでに人が俺を避けてい
く。きつと怖い顔しているのだらう。それはまあどうでもいいとし

て、目的地は昨日の宿屋である。あの連中がいればいいし、いなくても手がかりくらいはあるだろう。はたして……？

結論。連中は宿屋の一室に籠っていた。あの後ここに逃げ込んだ方がいいが、外の喧騒に一步も出ることができなくなったらしい。三人とも目の下に隈ができています。眠れなかったのだろう。

「なんだよ。負け犬を笑いに来たのか。強い強い兵隊さんよ！」

「強いつてのは気分がいいんだろうな。やる前から俺達のことを馬鹿にしていたのだろう？」

「500Gなんて払えねえぜ。ないもんないからな。」

なるほど。いじめられて拗ねてる状態だ。強くも出られず、かといって逃げるに逃げれないから開き直ったか？

「まあ馬鹿にしていなかったと言ったら嘘になるな。だが事が終わった後笑いに来る趣味は無い。だがやることはやらないと俺が大臣に怒られる。」

ここで言葉を止める。かなり心配そうな顔をしている。

「まず昨日の通り勇者は解任させてもらう。それと賠償金500Gだが今すぐ払うのは無理なのは分かっているから、モンスター素材の優先買取の権利だけは取り消さずこれを持って支払ってもらう。」

「嫌だといったら？」

「ああその場合はもつと簡単だ。王様に対する詐欺ということに死罪だ。逃げてでも無駄だぞ。あの血の契約でどこに逃げてても居場所が分かる。だから逃げるのあきらめろ。俺も追うのは面倒くさい。」

「わかった。死刑になるのは嫌だ。だろっ？」

残る二人に同意を求める。当然縦に首が振られる。

「よし、では詳しいことをつめようか。買取金額のうち半分は即賠償金としてもらう。残る半分は自由に使っていていい。その金で余分に賠償金を払おうが、生活費や装備などに使用するのも自由だ。最高で三人で3000G相当の素材を買い取ることができるな。」

「えらい段取りがいいな？もしかして最初から決定事項か？」

「そうかなり悪辣な罠だよ。大臣に聞いたときもそう思った。まあ高い授業料と思うんだな。」

三人がため息をついてうなだれる。

「あと一ヶ月に一度は報告に来てくれ。もし遠征で一週間以上連絡が取れなくなる予定がある場合も事前に相談してくれ。具体的に言うと徒歩ならガライは3日、マイラは5日、リムルダールなら2週間はかかる。例えばリムルダール近郊にいるゴールドマンなら1体で1000Gになるが・・・」

ここで三人の顔を見る。

「なあ、人の顔を値踏みするように見ないでくれ。」

「いや悪気があるわけじゃない。どの程度までならいけるか考えていた。」

「で、俺達にいけそうなのはどこまでだ？」

「そうだな。二、三日はラダトーム近郊で遠征費用を稼ぐ。その後ガライへの遠征で野営に慣れるべきだな。あとはガライから帰ってきてから相談だな。」

このとき三人は呆れたような顔で俺を見つめていた。

「何？顔に何かついてるのか？」

「あんた自分が何言ってるか分かってるのか？その見識と自信はどこからでてくる？むしろあんたが勇者だって名乗りでもいいぐらいいだ！いや今からでもそうするべきだ。」

あれっそう言われりゃそうだ。自分が異分子だと判断して大きく世界に関わらないようにしてきたし、自分は勇者じゃないと思ってたから……。

「まあ俺のことは置いて、君らの話を続けよう。さっきも言ったようにガライに行って帰ってこれるようになってくれ。いいな。」

「はあ。最初からあんたに会えてればよかったのに。そうすればこんなことにはならなかったのに。」

「なあ俺らはどうしていればよかったんだ？教えてくれよ。」

しばらく考える。こいつらはもともと銅の剣、こん棒、布の服を着、革の盾を持っていた。で前衛2、後衛1……ならば俺ならこうする。

「そうだな。まずもらった300Gで革の鎧を2着買う。ゲオルと

クロウの分だ。あとクロウに革の盾を一つ買う。これで残金は70Gだ。ここまでやって残りで遊興にいそしめばよかった。最低でも翌日からの意思が表明できた。あと革の鎧だったら俺には投げられていない。襟がつかめないからな。じゃあ俺は次の予定があるからまたな。」

部屋をでて俺は外に向かう。物分りのいい連中でよかった。もつとこねてくるかと思った。次は勇者51ことガルドだ。大臣の執務室で調べるかな。

美女と魔法談義

大臣の執務室だ。簡単に昨日の結末と後始末について大臣に説明する。さして興味もなさそうに大臣はいった。

「それについてはそれでよい。であとの二人は有望か？」

「分かりません。ただ内一名が私に師事してまいりましたので許可してしまいましたが、よろしかったですか？」

「かまわぬ些細なことだ。だが役に立たないと判断したなら速やかに放逐せよ。」

相変わらず大臣はある程度の身分以下の人間にたいして厳しい。選民意識の強い人だ。個人的には好きではないが国務大臣ともなると、いちいち下々のことなど気にもかけぬのも当たり前か。

「では残る勇者51について調べます。」

抽斗から勇者51ことガルドの書類をだす。書類に右手、水晶球に左手を置き魔力を送り込む。地図上の光点の一つがより強く光り、水晶球に歩く姿が映し出される。場所は・・・こことマイラの間ぐらいか。

徒歩にしては脚が速いな。問題は今の所無しか。

「では失礼します。」

退室する俺に大臣は一瞥すらしない。

厄介になると思われた今日の予定が半日ほどで終わった。残った時間は図書館で消費するとする。

ラダトーム城一階にある王立図書館。ここには美人の司書官がいる。彼女は宮廷魔術師を兼任していて、馬鹿は嫌いと言っているにも関わらず近衛騎士やら貴族のぼんぼんの来館に頭を悩ましている。

「マギー！今日は来れたよ。」

俺は軽口を叩いて入館する。ここ一ヶ月毎日通っていたが昨日は来ることができなかった。しばらくここに来る機会はぐつと減るだろう。では今日のうちに俺なりの研究結果を教えてやってもいいかな？

「ケルテーン！もう昨日はどうしたのよ。ずっと待ってたのよ。」

「おいおい！聞いていないのかよ。勇者査察官に任命されたんだ。大変だったんだぜ。」

マギーが抱きついてくる。この人は自分が美人な自覚がない。おまけに胸が大きいのも気にしていない。俺はどきどきを通り越してばくばくしている鼓動を抑えるのに必死である。照れくさいのを隠すように文句を言う。俺の鉄の剣が大きくなる前に放してくれてよかった。

「それね、馬鹿どもが言ってたのは。」

「俺がここに来なくなるなんて無いよ。まだ読んでいない本がいっぱいあるしね。」

俺がこの城に来た最大の理由がここにある。この図書館には門外不出の文献がいっぱいある。ロトの洞窟、雨の祠、虹の祠（雨と虹の祠は単独で存在しておらず小集落に祠があった。）などのロトの足跡を追い始めたのは5年ほど前、存在していたはずの技術を探し求めた。その集大成がここにあった。

「わたしは？」

マギーは怒ったように言う。

「いや君に会えるのもうれい。また魔法談義ができるし。」

そう俺が気に入られているのはその一点に尽きる。彼女は二言目には『かつて魔法使いは天を地を人を思うように操れたはず。』と言って今の魔法に満足していない。

「じゃあその魔法談義で許してあげる。」

「OK！じゃあ準備するからそこで待ってて。できれば飲み物を用意してほしいな。」

図書館を歩き回って幾つかの本を持ってテーブルに付く。マギーは不器用にお茶を入れている。大体いつもの通りだ。

「じゃあ始めようか。今日は俺の推察したことについてだ。」

まず第一にギラはギラじゃない。さらにベギラマはベギラマでは

ない。意味分かる？」

「わかんない。ギラはギラでしょ？」

「そうだろうね。俺も同じこと聞いたらそう答える。じゃあこれ見て。」

俺は本を取って挿絵のあるページを開く。挿絵にはギラを使う魔法使いと説明書きがある。また別の本を取って開く。こちらには魔法の説明がある。

「これが何？ギラの説明でしょ？」

「この絵をよく見て、ギラで大地を焼き払ってるだろ。」

「そつとも見えるね。」

「じゃあ、君のギラで同じ事できる？」

「無理ね。火球が出るだけ、こんな風に焼き払うことはできない。」

「次、ここにある記述”ベギラマはギラの上位魔法である。”これについて、さてベギラマはギラの上位魔法か？」

この質問にマギーは首をかしげる。斜め右上を見上げながら何か考えている顔はとても美しい。

「そうね。そういえばおかしいわね。ギラは火球の魔法、ベギラマは稲妻の魔法。全然違う。」

俺はさもこの文献で解かったかのように説明する。ただ事実を述べているにすぎないのだが、この時代のギラは実はメラである。同じようにベギラマはなんとライデインである。この事実に気づいたとき俺は失われた魔法を再現できる可能性にも気づいた。今それを始めて他人に洩らしている。

「次に魔法の詠唱内容について、これは今意味の解からない言葉を丸暗記して詠唱している。そうだよな？」

「そうよ。はるか昔口トの勇者一行から教えられた魔法は口伝のみね。」

「俺の考えでは当時アレフガルドは魔法技術が低かったと思っている。そこにそれらを自由に操る大魔王たちがこの地を征服した。そして同じく魔法を駆使できる勇者が光臨して大魔王を倒した。このとき少しの魔法が伝授された。」

「だめよ！その名前を口にしてはいけない。」

「なにが？大魔王のこと？本当の名前も知らないのに！」

「やめて！呪いが・・・何か悪いことがおこるかもしれないじゃない。」

「わかった。その名はもう口にしな。俺が悪かった。」

今現在、大魔王ゾーマの名は伝わっていない。大魔王と口にすることすら禁忌とされている。口にすることで蘇るかもしれないと無意識に恐れられている。

「話が逸れたね。考察を続けよう。魔法の詠唱文の一小節目についてギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスこの4つは同じ。ではこれらの共通点は？」

またマギーが首をかしげている。この顔が見たくて俺は毎日のように魔法談義をしているようなものだ。

「わかった。消費するMPだ。数値化はされていないが消耗が近い。」

「正解！まだ魔法を覚えての頃やらなかったか？自分はホイミを一日に何回使えるか？ギラなら？ラリホーではって。」

「やったわ。最初ホイミは2回しか使えなかった。でもギラは4回使えたわ。ホイミが3回使えるようになったらギラは6回使えるようになった。ホイミはギラの2倍疲れるって言ったら大人が驚いた。」

「またまた正解。ちなみに具体的に数値化すると俺数値だがホイミは4MP、ギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスは2MP、レミールは3MP、リレミトは6MP、ルーラは8MP、ベホイミは10MP、ベギラマが5MPだ。」

「ちょっと待って、記述が間に合わない。もう！ここに書いて。」

「了解。じゃあその共通する3MPという部分が詠唱する文節にあるか？」

俺はさっきの消費MPを紙に書きながら質問する。またマギーは俺が好きな顔で考えている。

「うん。あるわね。」

マギーの目が輝いている。ちょっと俺は意地悪をする。

「さて、じゃあ俺から質問。今俺が答えを持っているとする。君はその答えを知りたいか？」

「駄目！そんなカンニングみたいなことしたくない。」

「OK！じゃあヒントをあげよう。詠唱2小節目3小節目は全ての魔法で一致する。さてこれはいかに？」

「もういいわ。自分で解明してみる。時間はあるから。」

この勝気な感じもたまらないな。多分答えを教えたら二度と口を開いてくれないだろう。手元の紙に詠唱文をかきながらうんうんうなってる。俺も昔やったな。口述するのが日本語だとしたら、詠唱は英語みたいなものだ。意味が分からないから片仮名で詠唱する。口伝なので発音の仕方も習う。元々口トは外国人みたいなものだから言葉も苦労しただろうし、魔法に使われる特殊言語に至っては説明するのは不可能だったに違いない。数ある魔法の詠唱文の解読は大変だったな。数ある魔法・・・そういえば開かずの間・・・あつできるかもしれない。

「そうだ。例の開かずの間、試してみていいかな。」

「はあ？あんた何言ってるの！昔から該当する鍵も見つからないし、有名な鍵師でも開けられないゆえに開かずの間なのよ！」

ここには開かずの間がある。ロトの時代より一切開けられていない開かずの間。鍵も無く万能鍵である魔法の鍵でも開かないから放置されている。その前には古い箱などが詰まれている。無いものとされている。

「やってみたいことができた。もし開いたら報告する？」

「うん・・・しない。ここが騒がしくなるのは嫌！馬鹿が増える。」

「だよね。報告の義務はないし。じゃあ荷物をどけようか。」

小一時間埃まみれになって荷物をどけた。

「もう！埃まみれ。これで開かなかったら荷物は自分で戻してね。」

「分かった。でも開いたら戻すのは手伝ってくれるってことだよな？」

「うっ！そう来る？いいわ！それでいい。」

扉の前に立って鍵穴を確認する。魔法の鍵にあう大きさよりずっと小さい。しかもやたら複雑な形をしている。いけそくだ。鍵を探していたから開かないのだ。閉めたのはロトに違いない。ということとは閉めた鍵は最後の鍵、じゃあそれがなければなら、詠唱開錠魔法・

「アバカムツ！」

カチツ！シリンドーが400年ぶりに音をたてる。

「何？今の魔法。」

「ロストマジックの一つ開錠魔法アバカム。教えて欲しい？」

「意地悪ね。でもまだ駄目、私じゃあまだ早い。」

「君の意見を尊重するよ。じゃあ入ってみようか？」

開かずの間

400年の封印が今解けた。そこにあったものは・・・埃だった。そうだよ。400年も密閉しておけば埃ぐらい溜まるわ！後ろではマギーが布で口を押さえている。

「掃除をしないととても調査できないね。」

「そうね。でも誰がやるの？」

「そりゃあ俺達だ。他の人を入れるわけにいかないし。」

「じゃあ。新しいロープ買ってよね。汚れちゃうから。」

「いいよ、昔遺跡で見つけた絶対汚れないロープを進呈しよう。」

「やった！でもあんた一体何者なの？剣では近衛隊長に匹敵し、魔法を使えばまるで口トにつき従った賢者の様。」

「俺は戦う考古学者ケルテン。それ以上でもそれ以下でもないよ。」

「いいわ、それで。あなたらしいわ。」

それから埃を取るだけで2時間かかった。マギーのロープの袖は埃で真っ黒、二人とも頭が埃で真っ白だ。それで見つかったのは数冊の本と、小さな宝箱一つ。

「ねえ！なんか開かずの間にしてはしょぼくない？こんなに苦労したのよ！」

「それはこの宝箱の中身見てから決めようぜ。」

そう言つて10cm立方ほどの宝箱を空けた。中には紫色の布に包まれた鍵一つ。持ち手から伸びるただ一本の棒だけで一見してどんな鍵にもあつことはなさそうである。

「何これ？鍵にしては何の突起もないわね。使えるの？」

「そうだね。見た目は唯の棒みたいな感じだけどね・・・」

俺はそう言いながら先端を手で触つてみる。やはりそうだこの金属は不定形でいかなる形にでも変化する。

「うん。間違いないこれは最後の鍵。いかなる錠でも開けることのできるロトの秘宝。」

「え〜！でも開かずの間の中にあつたら意味ないじゃない？」

「そうだね。だけどそれ故にここに置いた勇者の意思が感じられるね。きつと勇者はこの鍵もこの世界には不必要なものと判断したんだ。」

「この鍵も？どついう意味。含みがあるわね。」

「鋭いね。一字一句に引つかかるとは。」

マギーはその豊かな胸をはって言う。

「馬鹿にしないで！これでもアレフガルドの賢者って言われたこ

「ともあるのよ。」

「まあ賢者つてのは誇大だね。」

「単なる比喩表現よ！それはそうと話を逸らさないで。」

「ごまかせないか。うんじゃあまた俺の推察なんだけどロトの勇者達は可能なのに魔法や技術を伝承しなかったと思っっている。」

「なんで？すばらしい技術は伝承するべきでなくて？」

「うんそうだね。君は善良で平和な人だからそう言うと思ったよ。」

「どついう意味よ！また馬鹿にしてるでしょ！！」

「いや褒めてるんだ。その考え方を忘れないで欲しいな。」

おれは肩をすくめて言う。

「ならいいけど、でも説明して！」

「例えば大人数を即死させるような魔法や一個大隊を一撃で爆死させるような魔法があるとして、それを君が嫌いな貴族のぼんぼんが覚えたとする。さらに今現在竜王がいないとして彼らはその魔法を何に使うだろうか？」

「そんなの敵がないのだから使い道ないわ。」

「残念。答えは言うことを聞かない相手に使う。」

「そんなひどいことするわけないじゃない。」

「そう？君も貴族の御令嬢だから判ってると思うけど、言うことを聞かない奴隷や家来に暴力を振るう貴族は少なくないよね。」

マギーはその口に両手を当て驚きの声を上げる

「あっ！」

「そう。力の大きさの違いだけでやることは変わらない。現在リムルダールとメルキドが自治区になっているけど、このことを苦々しく思う人間は少なくないと思うよ。城側の意向はできるなら直轄地に戻したいし、自治側は最終的に独立を考えているかもしれない。これらの解決策に力は必須なんだ。」

「判った。もういいわ。」

「そう。続けるね。多分ロトは今言ったことを理解していたんだ。残念ながら彼の旅路はモンスターとだけの戦いではなかったからね。だからこそこの地ではその力を封印した。彼らの死後それらの力が使用されないようにね。」

「なるほどね。でもあなたはそれを掘り出して使えるようにしているのはロトの意思に反しているのではなくて？」

「うっ！耳が痛いね。でも各地に古文書なり口伝による伝承者がいたのは、再びこの地に災厄が襲ってきたときの為だと思うんだ。彼は災厄の復活を予言していたから。」

「そういえばそうね。じゃああなたはいいことをしているんだ。」

「さてね。もしかして豹変してこの国を征服するかもよ！」

「フフフツ！じゃあそのときは私があるあなたを殺してあげる。」

「怖っ！心しておくよ。死にたくないのね。」

プツ！あっはっはツ……。その雰囲気になんか耐え切れず二人は笑う。

「はあ。こんなに笑ったのは久しぶりね。でもあなたはさっき言った魔法も使えるのね。多分。」

「怖い？」

「いえ。あなたは力の使い方を知っている人だと思うから怖くないわ。」

「ありがとう。」

あれっ！目から涙が……。悲しくなんか無いの？気が付くと俺の頭はマギーの胸に抱かれていた。しばらくそのまま時間が過ぎる。

・
・
・

「はあ！なんかゴメン。」

「いいの。あなたにも弱いところがあるのがわかってうれしいわ。」

「うわ〜なんだか恥ずかしい。俺が俺じゃないみたいだ。」

急に我に返つてのたうち回る。そんな俺の肩をポンとマギーが叩く。

「なんかあったら私に相談しなさい。お姉さんが相談に乗ってあげる。」

「うん、そうするよ。お・ね・え・さ・ん!」

「君にお姉さんと言われるとなんかむかつく。やっぱそれ無し。」

そして二人で今日二回目の大笑いをした。そうだね。俺18、マギーは22、それは言っちゃ駄目だよな。

「とりあえずここを出ようか。また日を改めて調べるから。」

「そうね。お風呂にでも入りたい気分。」

「じゃあマイラにでも行く? いい温泉知ってるよ?」

「きつと君のことだから行けるんだね。もう何を言われても驚かなくなっちゃった。」

「うん。行けるよ。これも知りたい?」

「止めとく。今日の宿題ができてからでいい。でも温泉には行きた
い。」

「OK!ではこの鍵は君に預けておく。俺には必要ないからね。」

「でもこんな大事なもの!」

「君に持っていて欲しいんだ。二人の秘密さ。」

「わかった。絶対身から放さない。」

二人は開かずの間改め、ロトの部屋を後にした。

マイラの温泉は行ったのかって?もちろん行ったさ。1泊して城に戻った。

何?昨夜はお楽しみでしたね?うるせーよ。

開かずの間（後書き）

魔法の詠唱、時代考証等作者の勝手な妄想です。ご了承ください。

勇者二人

あれから3日が過ぎた。勇者ガルドはマイラ近郊で狩りをしている。まさに狩りだ。両手持ちの斧を振ってほぼ一撃でことが済んでしまつとはすごい臂力だ。もしかするとちからSかもしれない。期待できるかもしれない。城に戻ってきたら面談することにしよう。

さて我が弟子アレフだ。朝一で俺の部屋にやってくると、ぜひ見て欲しいことがあるとうれしそうに言う。それで訓練所に来て、俺の目の前で素振り100本10セットを終わらせた。

「これは驚いた。まさか3日でできるようになるとはね。」

「その気になれば20セットでも30セットでもできますよ。多分。」

まじか。才能って怖いね。多分って言うけど嘘だね。やったんだ。無茶をする。この訓練の最大のからくりはホイミにある。無理な負担を筋肉にかけると筋繊維が断裂する。それをホイミで強引に直すとなんと超回復する。

「よしっ！ではその木偶を斬ってみ。」

アレフは木偶の前に立つと鉄の剣をすらりと抜く。そして構えから一気に振りぬくと即元に戻す。元に戻した後得意げにこちらを見る。俺は斬られた木偶に近づき確認する。麦わらを切り裂いて芯棒を抉っている。もし人の腕なら骨までいつてるな。

「合格だ。わざわざ言わなくても自分で判っているようだし、次の

ステップへ進むか。」

「はい！でも一ついいですか？」

「何？何かわからないことでもあるの？」

「違います。ケルテン師匠が斬るのを一度見てみたいのです。」

「えっ！木偶を？」

「はい！」

俺は頭をぼりぼりと掻きながら答える。

「あゝなんと云うか。後で怒られるんだ。備品を大事にしろ！ってね。」

「はあ？」

「だよ。そういう返事しか出てこないよね。判った。一度だけ見せる。」

刀を抜いて中段に構える。気合と共に斬りつける。そして残心。刀を納める頃、袈裟がけに斬られた上半分がすべり落ちた。アレフの顔が壊れた木偶と俺の顔を往復する。さらに斬り口を見ている。

「もつやらないよ。もつたないからね。」

「どうやったらこんな斬り口になるんですか？私にもできますか？」

「無理だね。武器が違う。君達の武器は叩き斬る武器、俺のは斬る武器。振り方も全く違う。だから同じことができる必要はない。」

「でもそれ使ってみたいです。」

「駄目。さつきも言ったように振り方が違う。君の振り方で使うと折れる可能性がある。これはちからの弱いのを力バーする為に特注した俺だけの武器。だから駄目。」

「そうですか……。」

「そう残念そうな顔をするな。純粋なちからならアレフ、君の方がずっと強い。俺の力はC評価、君はB評価、しかもまだ伸びしろがあるからもしかするとA評価もありえるかも？」

「A評価、B、C????なんですか？それ。」

「ああ俺独自の評価だ。ちから、すばやさを大体5段階でする評価だ。もちろんAが上でEが一番下だ。」

「はあ？」

「ちなみに君はB、B-ってところだ。伸びればA-、Bぐらいになれるかもしれない。」

「そのマイナスってのは？」

「ああ、同じBでも幅があるからね。Aに近いBはB+、Bに近いAはA-と表現しているだけ。まあ人はその日の体調や心理で多少上下するから参考までの評価だ。」

「面白い評価基準ですね。考えたこともなかったです。それでケルテン師匠は？」

「俺か？まあこてとこかな。結構鍛えたけどどちらからはこれ以上伸びなかった。素質の問題らしい。ちなみにちからは鉄のフル装備ができるぎりぎりぐらいだ。もっともそうすると重くてせつかくのすばやさが生かせない。本当は攻防バランスのとれないいい装備なんだけど、死にたくないからその装備はしない。」

「なるほどよくわかりました。この装備が私には適していると言うことですね。」

「そういうこと。では次のステップだ。まず武器を納めて両手を下げ自然体で立つ。」

アレフは言われたとおり立つ。鉄の剣は腰に納められ、左手の盾は逆さまになる（盾は左上腕部に固定されている為、使用時には左手で握り手をつかみ、腕を上曲げなくてはならない。）

「まずそこから抜剣しつつ斜め上に斬撃。」

アレフはシュパツと音を立てて抜き撃つ

「次、いつもの斬撃、即納剣。」

残撃はいいが納剣でもたつく。まあそんなところだろう。

「これを100本。シュパツ、シュ、シャキーンぐらいのタイミン
グでできれば完璧。ああ剣を納めたら必ず自然体に戻る。」

「むずかしいですね。手本を見せてもらっていいですか？」

「いいよ。」

おれは自然体から居合いで逆袈裟、振り上げた所で両手持ちで袈裟懸け、そして納刀。自然体に戻す。ん！いま一瞬殺気？を感じた。

「流れるようですね。武器を戻すことの意味は？」

「あちよつと待って。その影にいる方、見るならこちらでどうぞ。ここは訓練所です。見られて困ることはありません。」

建物の影から体格のいい大男が出てくる。

「わりいわりい。別に隠れてみるつもりは無かったんだが、なんか昔師匠に教えられたようなことやってるなって思わず脚が止まった。ってお前学者じゃないか？懐かしいな。」

「もしかして達人ですか。2年ぶりくらいですか？」

こいつはサバイバルの達人（俺がつけたあだ名だ。俺のあだ名をつけたのはこいつ）薬草学が得意な武闘家。アレフガルドを旅してまわったときよくつるんで冒険したのはいい思い出。互いに右腕を当てて挨拶をする。

「なんであなたがここに？」

「おまえこそ？」

「今月から大臣の下で勇者の支援をやっています。」

「奇遇だな。俺はその勇者をやっている。2月からだ。」

「あの〜すみません。」

いかんいかん。あまりに懐かしくて自分の弟子を忘れていた。

「紹介します。彼はガイラ・ガラ・ライガ、古い友人です。無手で闘う流派の末裔です。ガイラ、彼が私の弟子のアレフです。彼も勇者です。まあ見習いですが……。」

「なるほどねえ。お前さんが弟子をとったとは……。」

「いえ。ちょっとありましてね。推しかけ弟子といつかなんと言っていたいやら。断れなくてですね。」

そこにアレフが口を挟む。

「挨拶が遅れました。師匠ケルテンの弟子アレフです。よろしくお願ひします。」

「おう！俺はガイラ。武器も持てねえ、魔法も使えねえが拳一つで勇者やってる。しかしまあお前さん見る目あるよ。いい師匠もったな。」

「私もそう思います。ガイラさん。」

「アレフ俺のことはガイラでいい。さん付けされると背中がむず痒くなる。」

「わかりました。ガイラ」

「おう！それでいい。しかし学者よ。さつきよく俺がいたのに気づいたな。そっちからは見えない位置だったはずだが？」

「ええ！さつき刀を抜いた瞬間、殺気を感じました。」

「ああー瞬反射的に構えたな。お前さん実は強かったんだな。一手お手合わせ願いたいものだな。」

「嫌です。多分命を懸ける勝負になります。まだ命は惜しいですから。それにまだ授業の続きがありますし。武器を納める理由でしたね。アレフ君。」

強引に話を戻す。

「はい。戦闘が続いているならそのままでも良さそうですし、終わつたならそれこそ急ぐ理由は無いとおもいますが？」

「最もな意見です。でもアレフ君、武器を持ったままで魔法は使えますか？」

「無理ですね。私は右手を使わないと魔法は出せません。」

「だろうね。だから武器を納める練習をします。まさか魔法を使う度に武器を棄てるわけにはいきませんから。」

「そうですね。あまり戦闘中に魔法を使うことはありませんでしたから。」

「これは私独自の解釈です。あまり他にやっってる人はいないでしょうね。じゃあ練習あるのみ。」

アレフは練習を再開する。やはり納剣にもたつく。これだけは慣れないと難しいだろう。俺とガイラが暖かい目で見守る。数回繰り返し返してアレフが手を止める。こちらをふりむくと

「質問です。毎回自然体に戻す理由は？」

「ああ！それはな常在戦場ってやつだ。うちの流派でもよくやらされた。」

「ジヨウザイセンジヨウ？」

「常に戦場に在りつて意味ですよ。どんな時でも対応できる様鍛錬するんです。」

「そうだ。アレフ。氣い抜いてると死んじまうぞ。」

ガイラは素晴らしいながらアレフに向かってとことこ歩く。そして直前で流れるような正拳突き。もちろん顔面に寸止め。

「わっ！」

「もし今に対応できたら、私からは免許皆伝です。それとガイラ、私には止めてくださいね。反射的に刀で受けてしまいそうです。」

素晴らしいながら刀を半分抜いて目の前に鞘ごと構える。ガイラがむうと唸る。

「ではアレフ。後は自分で練習して下さい。とりあえず一週間はいつもの素振りを10セット、その後はこの練習を10セット行なって下さい。ではガイラ、積もる話もありますからあちらで話しましょう。お茶ぐらい出しますよ。」

そして二人で食堂に向かって歩く。ガイラが軽口を叩いた。

「しかしまあ、お前さん鬼だな！」

「なにが？」

「なにがってさっきの鍛錬だよ。ありゃきついぜ。根をあげても知らないぜ。」

「いつでも止めていいと伝えてありますよ。ただ今のまま放り出したら死にます。そうなる前に勇者を止めさせるか？自分で強くなるか？それだけです。」

「優しい鬼だな。」

「鬼ですか？私は桃太郎に退治されたくないですよ。」

「言うねえ。しかし桃太郎を知ってるとは博学だね。さすが学者だ。」

・
・
・

積もる話はしばらくやむことはなかった。

裏の事情

5 / 6 勇者支援官6日目

日課のトレーニング、日課の師匠の真似事、その後の食事。そこにサイモンがふらふら現れる。少し痩せたか？げっそりして目の下に隈ができています。

「よお！サイモン、久しぶり。4日ぶりか？何してた？」

サイモンが俺の前に座り、テーブルに突っ伏す。

「うゝ行軍訓練でガライまで行ってた。今帰ってきた。お前のせいだ。」

「何でだよ！理知的に説明して頂きたいな。」

「この間ここで大盤振る舞いしただろう。あの後隊長にばれて大目玉だ。お前のせいだろ。」

「あほか、全部自業自得だ。でもまあ徒歩3日でガライ、ルーラで戻ってお釣りが来る日程だろうが。」

「違う違うんだ、往復で4日。しかもフル装備、物資無しで一個中隊の行軍。しかも俺が中隊長で全員任せたって俺達だけで行かされた。死ぬかと思っただぞ。」

「なるほど、それはすごい。たるんだ馬鹿にはちょうどいい。」

ラダトームの軍組織は次の通りである。小隊長が3人の部下を率

いて一個小隊。それを4隊で一個中隊。一名が小隊長と中隊長を兼任する。同じく4部隊をまとめて大隊とする。この頂点に立つのが近衛騎士隊長である。つまり近衛騎士は64名しかいない。ただそれだけでは足りないので一般兵士がもいる。さらに必要に応じて民兵を雇うこともある。

先の戦いで近衛の約半数が失われ、かつ先の近衛隊長も無くなったらしい。その後就任した今の近衛隊長は当時生き残った最高位で、身分などうるさい近衛の中ではめずらしい叩き上げだ。普段は結構気さくでフランクな人だが怒ると相当怖いようだ。

行軍訓練。総員で隊列を組み目的地までひたすら歩く。ただフル装備、物資無しというのはまず鉄の剣、盾、鎧を着込み、更に野営用の荷物を背負う。総重量は約50kgぐらい、俺には絶対無理。さらに最低限の水しか持たず食料は現地調達、もし手に入らなければ無しの過酷な行軍だ。もちろんモンスターは出現する可能性はある。まあ殺気だった16人の兵士を襲ってくる魔物はガライまでにはないだろうけど。

「今日は一日休息が許された。部屋帰って寝る。」

サイモンがふらふら出て行った。

- - - - -

俺は近衛控え室に来ている。隊長に聞いてみたいことがある。隊長室をノックして入室する。

「聞きましたよ、アイゼンマウアー隊長。」

「何をだ？ケルテン特務隊士。」

近衛隊長も心なしかやつれている。やっぱりな。

「行軍訓練ですよ。大変でしたね。」

「ふん！たるんだ連中を引き締めただけだ。俺はなにもしていない。」

「そうですね。でも隠れてついでに行ったのは秘密ですか？」

「知らん、なんの話だ。雑談ならまた今度してくれ。書類仕事が溜まっている。」

この人なりの照れ隠しだ。しかし語るに落ちてるよこの人。

「まあそついうことにしましょうか。勇者について聞きたいことがあつてきました。」

「俺に答えられることなら答えよう。」

「ええ、先日落第勇者に言われまして、お前が勇者やれつてね。これは駄目ですか？」

「それは駄目だ。」

「即答ですね。不足しているのは力量ですか？それとも器量ですか？結構自信があつたのですが。」

「そのどちらでもない。正規の軍人は勇者にはなれない。」

「なぜ？と聞いてもよろしいですか？」

「ふむ、ここからの話は極秘になるがよいか？」

「結構口は堅い方です。」

「よろしい。少し話しが長くなる。あちらで話そうか。」

隊長はソファに腰掛ける。隊長が座るまで俺は立っている。

「まあかけてくれ。」

「はっ！では失礼します。」

「ではさっきの話だが、ローラ王女が誘拐された件と関わりある。」

「話の先がみえませんか？」

「そう結論を急ぐな。その後竜王側より秘密裏に交渉があった。」

「交渉ですか？身代金とか、降伏勧告ですか？」

「君は頭がよすぎるな、まあ聞け。そうではなかった。あちらの要求は一つ。双方の軍事活動の停止。」

「はあ？でもまだ対立は続いてますよ？モンスターは相変わらず襲ってきますし、こちらにも勇者を派遣してます。」

「そうだな。詭弁、茶番、俺の嫌いな政治的駆引きらしい。」

「政治的駆引きですか？ということとは交渉は大臣がなされたので？」

「そうだ。先の戦でこつちもかなりの犠牲があつたが、あちらも結構な損害があつたらしい。ドムドーラを落としたとは言え何か手に入つたわけでないからな。」

「なるほどラダトームは必死の攻防で追い返し、メルキドは城砦とゴーレムで、リムルダールは湖とちよつとした小細工で侵攻を止めた。」

「ほう、話には聞いていたがあれはお前の仕業か？」

「何の話です？まあ街が無事だったので。よかつたではないですか？」

「よい、そういうことにしておこう。で、これは想像の域をでないがあちら側はこちらの最大の利点を潰すのが目的と思われる。」

「最大の利点？」

「わからぬか？では聞こう。個々の強さでは我ら人間と魔物どつちが強い？」

「なるほど。個々の強さに自信のある魔物は人間の集団連携を恐れ、封印した。」

「そうだ。王女の命を盾に取られてはこの要求を吞まずにはおれなかつた。」

「では今現在暴れている魔物は軍事行動ではないのですか？」

「それが詭弁だ。あちらが言うには個々の魔物全てが言うことを聞くわけではない。竜王様の崇高な深慮が理解できぬおろか者がいないとも限らないと。」

「ひどい詭弁ですね。主は知らない、馬鹿が勝手にやっているだけだとはね。それでこちらと同じ様なことが起きているだけだと言っている。」

「そうだ。だからお前は勇者にはなれない。2ヶ月前ならなんら問題なかったのだがな。」

「じゃあ今止めて勇者になるのは？」

「それも駄目だ。忘れたか？お前は3年10万Gの契約金でここに来たのだぞ。」

思わず天を仰ぎ見た。そういえばそうだった。

「去年のリムルダールが大変だったのは承知しているが、残念ながら契約は契約だ。あきらめろ。」

「もしかして3年後がないかもしれないのに？」

「そうならないようお前はお前の仕事をしろ。有望な勇者を育成しているらしいじゃないか？」

「なんだ耳に入っていましたか？有望かどうかはこれから判ります。」

駄目なら放逐します。死なれると目覚めが悪くなります。」

「さて話は終わったようだな。飲み物を用意させる。誰かある！」

それから二人でしばらく武術談義に花を咲かせた。

- - - - -

「アイゼンマウアー隊長の長剣は支給品ではありませんね。ちょっと見せてもらってもよろしいですか？」

「そうだな・・・お前の刀とやらを見せてくれるなら？」

互いに腰から武器を外して交換する。俺のは刃渡り80cmの大
刀、隊長のは拵えが立派な長剣だ。

「すごいな、これはまるで剃刀のようだ。どこで手に入れた？」

「特注です。仔細は秘密です。この長剣もすごいですね。全てミス
リルできていて魔力も感じられる。由来を聞いてもよろしいです
か？」

「秘密だ。・・・ふっ！冗談だ。一族伝来としか聞いていない。俺
は貴族の生まれじゃないからな。代々雇われ戦士の家系にはすぎた
一品だが気に入っている。」

結構古い。拵えの様式からすると多分これは・・・確認してみ
るか。

「代々と言われますが、どの程度遡れますか？」

「家系図があるわけではないから詳しくはわからないが、400年
口下の時代までは遡れるらしい。」

間違いない！確信した。この剣の銘は？

魔法の武器

一息ついてからおれはしゃべりだす。

「判りました。この剣の銘は雷神の剣。ロトに付き従った戦士の
振りです。間違いはないかと。」

「なんとそのような謂れがあったとは……。」

「もう一つ確かめたいことがあります。少し時間をいただけますか
?」

「ああ、ここまで聞いたら全て知っておきたい。」

「ではここでは狭いので訓練所で。」

近衛隊長と俺は数名の兵士を引き連れて歩く。すれ違う者が何事
かと目をみはっている。俺達の緊張が伝わっているようだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

訓練所で俺は木偶を4つ横に並べた。10mほど離れて構える。
俺の後ろには近衛隊長を先頭に人の山ができている。

「業炎よ！わが敵を焼き滅ぼせ！」

そう言い放つと剣で弧を放つ。的になった4つの木偶が業炎に燃
え尽きた。炎はしばらく消えない。自然に火が消えるころ歓声が上

がった。

「なんだ今のは!」

「あんな魔法みたことないぞ。」

俺は振り返ると雷神の剣を隊長に渡す。

「お返ししますね。間違いありません。雷神の剣です。大事にして下さいね。」

「嗚呼。なんと言っていていいか分からないがありがとう。本当にありがとう。」

「その武器を持つに相応しい人がその武器を持つ。当たり前のことです。」

俺と隊長は感動している。

「おい!今のはなんだ。説明してくれ!!!」

外野うるさいな。せつかくの感動のシーンを邪魔するなよ。今二人はロトの時代を旅していたのだぞ。收拾がつかないようなので説明することにしてしよう。

「これは雷神の剣といえます。ロトにつき従った戦士の剣です。剣に宿る魔力を先程の様に放つことができます。炎の剣と同じようなものです。正確に言うと炎の剣はこの剣のレプリカですね。だから宿る魔力が小さい為、小さな火の効果しかありません。」

「なんでお前にそんなことわかるんだよ。見てきたわけでもないの

に！」

「文献を読み、正しく推理する。それで分かることもあります。隊長には後でパワーワードを記述してお渡しします。」

ここで俺は手をパンツ！と叩く。

「はい、余興はもう終わりです。皆さん、仕事にお戻り下さい。いつまでも遊んでいると地獄の行軍訓練が待ってますよ。ねっ！アイゼンマウア・近衛騎士団長どの。」

俺は片目を瞑って、隊長に話しかける。それで皆蜘蛛の子を散らすように散っていった。しかし、その中から女性の声が飛んだ。

「ちょっと！こっち来なさいよ。」

マギーが俺の腕をとって強引に引っ張る。周りの視線を全く気にしないで俺の手を引くように歩く。おいおい簡便してくれよ。

「何なに？もしかして怒ってる？」

「うん、怒ってる。私のいないところで知識を披露しないで！」

「何それ？どんな嫉妬の仕方だよ？」

「いいの！私だけ知らないなんて許せない。」

「わかった、わかったよ。じゃあ詳しく説明するから図書館へ行くか。先に行ってくれる？部屋に取りに行くものがあるんだ。」

「いいわ。でも何持ってくるの？」

「それは後のお楽しみ。じゃ10分後にまた。」

俺は自室に戻り荷物を漁る。確かどっかに片付けたはず。

王立図書館。ここはいつもマギーと俺しかいない。その他のマギーが目当ての男はマギーが追い返すから俺がいないときはだいたい一人で何か読んでいる。最近はペンを片手に紙と格闘している。

「何から知りたい？さっきの剣？約束のプレゼント？それともこの間の宿題？」

「当然もらえる物が先。ちようだい。」

「まったく現金だな。とっておきの品だ。驚け！」

手にしていた包みを開くと半透明な水色の布を取り出して手渡す。マギーが手に取り開いた。

「何これ？ローブ？スケスケじゃない。」

「いや透けないから大丈夫。それは水の羽衣。炎のダメージを減少する効果がある。昔、雨の祠の集落で見つけた。多分勇者一行の女僧侶が着ていたローブじゃないかな。」

「そんな大事な物いいの？」

「いいさ。どうせ俺は装備しない。かさばる装備は俺にはあわない。」

「ありがと。大事にするわ。でもさっきの武器もそうだけど今では売ってないよね。」

「そうだね。じゃあさっきの武器の話も含めて講義しようか。実はロトの時代の前には今より優れた武具が存在していた。例えばラダム王家の国宝、王者の剣、光の鎧、勇者の盾は順にオリハルコン、ブルーメタル、ミスリルで作られていて、これらの素材は通常では溶かすことができないとされている。ではどうやって加工したのか？」

「そんな武器や防具聞いたことないし、溶かせなければどうにもならないわ。もしかして魔物の技術とか、人知を超えた技術じゃない？」

「ああ、それもあるね。大体正解。答えは神々の技術、神々が自らの武具を作成させる為技術を貸した。もともと調子にのったある国はその後神々に滅ぼされるのだけど、まあそれは別の話。」

「でもなんでそんなこと分かるの？」

俺はある棚の前まで歩き古ぼけた一冊の本を取り出した。

「アイテム図鑑。はるか昔から伝わる幾つかの話が載っている。童話みたいな本だが結構面白い。暇があったら読んでみるといい。」

「ふん。こんな本あったのね。確かに挿絵とか童話っぽい。」

手にした本を開いて中をパラパラめくる。彼女が本を見る目はいつも輝いている。

「まあね。で、さっきの王家の秘宝の話、今は別の名の方が有名だ。ロトの剣、ロトの鎧、そしてロトの盾だ。ただし今現在は所在不明。とても残念だ。」

「そう。でも見つけることができたら竜王も倒せる?」

「さあ?それは分からない。強い武器を持つだけで強くなれるわけじゃないからね。」

「そんなの知らない。武器なんて握ったことないもの。」

「君はそれでもいいさ。でも武具によつては魔法と同じような効果を持つ物がある。さっきやった雷神の剣とかね。」

「でもあんな魔法見たことない。」

「いや君は一度見てるよ。本の挿絵でね。」

「えっ!ああ、この間のギラ・・・でも炎の大きさが違う。」

「うん。挿絵のはギラだったね。でもさっきのはベギラゴン。ギラ系の上位魔法だ。」

「でも、ベギラマはギラの上位魔法だって・・・。」

「言ったね。正確にはギラ、ベギラマ、ベギラゴンの順に効果が大

きくなる。」

「もう！いつになったらあなたの知識に追いつけるのかしらね。」

ちよつと拗ねた顔で俺を見つめる。

「まだまだだね。宿題はできたのかい？」

「また馬鹿にして。いいわ、研究の成果を見せてあげる。ちよつと待ってて資料取ってくるから。」

マギーはいつも座っている机に歩いていく。

魔法の武器（後書き）

長いので分けます。

美女と魔法談義 その？

準備される黒板、教卓、チョーク、支持棒、資料を教卓に積むマギー。

「ちょ！なにそれ。先生みただ。」

「もう馬鹿にして！これでも宮廷魔術師筆頭で弟子もいっぱいいるのよ。」

「あゝごめんごめん。そうだった。じゃあ先生質問です。3サイズは？彼氏いますか？」

「あのね〜そういう質問一番嫌いなんですけど・・・次言ったらぶつとばすよ。」

「冗談だよ。そういう質問多いんじゃないかって？」

「心配？」

「そりゃあ・・・まあ・・・心配じゃないって言ったら嘘になるかな？」

「もうはつきりなさいよ！いいわ！では講義を始めます。今日は魔法の詠唱についてです。」

チョークのカツカツ言う音が響く。結構手馴れている。書かれているのは4行のギラの詠唱文だ。次に比較し易いようにラリホー、マホトーン、トヘロスと並べて書く。少し離してホイミも書く。

「まず第一にほとんどの呪文は大体4小節でできています。その後
に呪文の名前を口にすることで発動させるのが基本です。」

ここで確認するかのように俺をみる。俺は無言で頷く。

「実は全ての魔法の詠唱において第2小節はまったく同じです。さ
らに第一小節は一部を除いて一致します。しかしこの4つの魔法は
その全てが一致します。」

ここで言葉を止めて俺を見る。心なしか心配そうだ。

「いいよ。続けて。」

「ここで一度魔法の使用法の基本をおさらいします。」

? 自分のうちにある精神力、通常MPを放出

? 自然に存在するマナとMPを合成

? 魔法によっておこる現象をイメージ

? 目標を決定し呪文を唱える。」

ここまでを先の4小節の横にわかりやすく書く。

「これらから、第一小節は消費MPの決定、放出を第二小節はマナ
との融合を司るものと考えられます。先に提出された資料から、こ
の部分は2という数字を意味する単語である可能性が高いでしょう。
またホイミのここは4の単語と思われる。また他の魔法から3、
5、6、8、10の単語が導き出されます。」

パチパチパチッ！俺の拍手の音が鳴り響く。

「だいたい正解。大筋で翻訳するところだ。」

？私はMPをX放出する

？MPとMPナは融合し万能なる力となれ

？おお万能なる力よ、Aとなり

？Bを、Cせよ。呪文名。

という感じだね。Xは数値、君の言うとおりだ。Aは効果イメージ、たとえば火球、稲妻、癒し。Bは目標、ここには触れていなかったけど我、かの者、かの空間など目標の設定、CはAに類似したイメージした放出方法、焼け、撃て、癒せなどの命令系の言葉になる。」

「ちよつとそこまでは分からなかったわ。参考資料が足りない。」

「じゃあご褒美をあげよう。」

俺は本棚から真新しい本を一冊取り出し、手渡す。

「何これ？こんな本この間までここにはなかったわよ？」

「この間の宿題出した後に置いといた。俺が書いた世界に一冊しかない魔法の本だ。」

「意地悪ね。」

「法則性、違和感とかに気づかないと学者として失格だね。精進あるのみだ。」

俺の軽口を無視したふりでマギーは本を開く。目を丸くしている。そりゃそうだ。その本には全ての魔法が原文で書いてある。

「まったく読めない。でもさっき魔法の本って言ったわね。」

「言ったよ。1ページに一つずつ魔法詠唱文が大きな字で書いてある。」

「意地悪なのか？親切なのか？判断に悩むわね。」

「そつ？君もやらない？有望な生徒を答えに誘導したりしてしない？」

「やる。でもやられるとむかつく。」

マギーが目の前でムキー！ってなってる。うわっ！めっちゃくちゃかわいい。

「よし、では教師と生徒交代だ。テキストはそれね。7ページを開いて。」

「当然読めないはね。でもちょっと他のページと違う。下にいくつかの単語が並んでいる。」

「その通り。よく気づいたね。」

「さっき言われたばかりだからね。法則性と違和感だったかしら？」

「脱帽です！お嬢様。」

そつ言いながらかぶってもいない帽子を脱ぎ、一礼する。

「続けようか。実はそのページはルーラだ。」

「ルーラ？こんなにいろいろ書く必要あって？」

「うん。今のルーラは城に戻る魔法とされているけど、本来は指定した場所に行く魔法だ。」

「この間マイラに行ったのがこれね。ねえ、じゃあなんで普通のルーラはラダトームにしか戻れないの？」

「それはラダトームを指定しているから。下に指定場所の登録名が書いてある。一番上がラダトーム。別の言語で地下の城という意味。」

「地下？意味深ね。」

「文字通り、勇者はこの世界に落ちてきたからそう名づけた。」

「名づけた？もしかしてルーラの指定場所は勇者が登録したの？」

「その通り！勇者が訪れた場所にある魔法儀式を行い、登録名を決めた。そこにあるのがラダトーム、マイラ、ドムドローラ、メルキド、リムルダールだ。ああドムドローラに取り消し線引いといて。」

「取り消し線？」

「もう使えない。多分座標指定石が破壊された。該当する魔術儀式はまだ解明できていないから仮名ね。でもその基準はなくなったら困るでしょ？だから人の力では動かせないくらい大きい石に魔術儀式で登録名を掘り込んでいる。」

「へえ、すごいね。でもなんで普通に名前じゃないの。ラダトームって書いておけばいいのに！」

「便利すぎるから駄目。その気になれば何人の兵隊でも送れてしまう。多分勇者はそう考えて自分達の専用魔法としたと俺は思っている。」

「ふうん。徹底した平和主義者ね。自分が死んだ後まで心配しすぎじゃない？」

「ははっ！まあ尊敬する勇者様のことは置いといて、まずそのページから学習してごらん。他の魔法の解説に参考になるよ。」

「そうね。他のページはどれがどの魔法だかさっぱりわからない。あれ？ちよつと待ってその勇者専用の登録名はどうやってわかったの？またどこかの遺跡でも見つけたの？」

「外れ！その基準石に書いてある。普通は見えないけどレミーラで照らすとうつすら見えてくる。魔法による隠し文字だ。実は王家の秘術：血の契約書にも同じからくりがある。結構えぐいことが隠して書いてある。これは絶対秘密ね。ばれたら消される可能性が高い。」

「じゃあそんなこと教えないでよ。」

怒ったような顔でおれを見る。怒った顔も美しい。もうちよつとこの顔が見てみたい。

「あともう一つ。そこには書かなかったが実は竜王の城にも基準石がある。」

「え！じゃあ行けるの？」

「行けるよ。でもこれは勇者が置いたものではない。じゃあ誰が置いたのでしょうか？」

「それは簡単ね。魔物が帰るために置いた。」

「その通り。だから以外な名前が登録されていた。知りたい？」

「まあ教えてくれるなら。」

「じゃあ言うよ。怒らないでね。勇者達とは違う言語で『大魔王ゾーマ様の城』って書いてあった。」

あつと驚く。そりゃね禁忌中の禁忌とされ、しかも伝わっていない名前が耳に入ってしまったから。

「ああ、もう最悪。それは言わないでって言ったじゃない！」

「教えてっていったじゃない。それに今更恐れることなんかないさ。」

「どづい意味よ！」

「もう第二の魔王が現れているんだ。これ以上悪いことは起きないさ。第三の魔王が現れるにはまた200年ぐらいかかるのさ。」

「何それ。今度は預言者のつもり？過去から未来まで全てあなたのものなのかしら？」

俺は預言者じゃない。ただ知っているだけ。でもこれだけは教えない。

しばらく沈黙が続く。

「まあまだ来ない未来の問題は未来の住人に任せよう。今はその問題を解くのが先、レポートにして提出してね。期限は特に決めない。随時質問には答える。途中経過を披露してくれてもいい。」

「わかったわ。絶対負けない。あなたの知識は全部私のものにしてあげる。」

俺は退室することにした。彼女が本に集中しだしたらもう誰の声も聞こえなくなるから……。

いつも通り朝食をとっている。起床6時、2時間のトレーニング、それから食事。もう10年近く続けている。なるべく生活リズムは崩さない。

「ケルテン殿よろしいですか？来客です。」

騎士見習いの一人が控えめに話しかけてくる。俺そんなに怖いかな。対外的には紳士なつもりなんだが。

「ああいいよ。ところで誰かな？」

「ゲオルグ、クロウ、ドゥーマンを名乗る三名です。」

「ああ彼らか。いいよ通して。」

「ここにですか？」

「かまわんよ。待たせるのも悪いしね。」

「判りました。では案内してきます。」

どうしたのかな？ガライに行く許可でも得にきたのかな？ならいいのだが……。そんなことを考えていると見習いに連れられて三人が入ってきた。ほう、装備が変わっている。先日教えた通り二人が革の鎧、革の盾になっている。武器は変わっていない。

「お久しぶりです。ご指摘どおり装備を整えました。近くで野営などの練習もしました。ガライへ行く許可を得たいのですが？」

言葉遣いも変わっている。最初からこうだったらよかったのに、つくづく惜しいな。

「いいよ。行っておいで。今いくらぐらい持ってる？」

その言葉に三人の顔が曇る。

「ああ別に返せって言ってるんじゃない。どうせガライに行くなら鉄の斧を買った方がいいと思ってね。たしか560Gだったかな。」

「今500G弱です。だいぶ足りませんね。」

「そうだね。ガライで数泊するのと帰りの食料を考えると・・・OK！俺が200G貸してやる。」

「いいのですか？持ち逃げするとは思わないのですか？」

「そうだね。かまわない、地の果てまで追いかけて殺すから。何なら今すぐにも・・・。」

俺は頭でザラキの詠唱を始める。第3小節まで唱え止める。なんとなく秀囲気で判ったのか三人は真っ青になって震えている。

「よく判りました。あなたに殺されるのは嫌です。のたれ死ぬ方がましな気がします。」

「判ってもらえてうれしいよ。ああ、それと俺に敬語はいらない。じゃあ、これ使って。」

俺は懐から200G出して渡す。

「お借りし・・・いや借りとく。必ず返す。」

「それでいい。がんばれよ！」

三人は食堂から出て行った。案内してきた見習いが突っ立ったまま
までいる。

「どうした？もう終わったよ。」

「先ほどの・・・いえ何でもありません。失礼します！」

なんだよ。別に逃げなくてもいいじゃないか。

その後騎士見習いの中に根も葉もないうわさが流れたのを俺はし
らない。

視線だけで人を殺せる。

機嫌を損ねると死ぬまで追い詰められる。

そつだ。勇者ガルドはどうしただろう？後で調べることにしてよう。

.....

国務大臣執務室

おっ！ガルドの光点が移動している。あいつの移動速度だと明日
の昼には戻ってくるかな？ちょっと気になるから担当外の連中も見
てみよう。

このリムルダールに向かっていている一つだけの光る点はガイラかな。あとは雨の祠付近に四つ固まった光点がある。

「この4人の勇者はもしかして同郷ですか？」

「調べるがよい。」

はいはい、聞いた俺が馬鹿でした。書類を取り出し並べる。勇者12：エイブラムはラダトーム。勇者41：ローランド、勇者42：メルカバ、勇者43：レオパルド、三人ともガイライ出身・・・エイブラムがガイライで三人をスカウトしたと考えるのが妥当か。

「そんなに担当外の勇者が気になるか？」

「ええ、まあ気にならないことはないですが。」

「そうか。ならば勇者25もそなたが受け持て。」

ありや藪蛇だったか？勇者25ってガイラだな。あいつなら放つておいても大丈夫だ。

「はあ？かまいませんが理由を聞いてもよろしいですか？」

「ふむ。そなたの前任者は知っているか？」

「いえ、存じません。」

「2名いた。内1名は先月3月の勇者と共に死んだ。それで残るシユミットがああ4名の勇者を支援してある。勇者25は現在支援する者がおらぬ。」

「判りました。拜命します。」

よしリムルダールについた頃に会いに行こう。

模擬戦

5 / 8 勇者支援生活 8 日目。

いつも通りの訓練所である。昨日と違うのはアレフが少し興奮している。

「祝福爺さんのところ行きました。驚きました。MPが全快です。あれ何なんですか？」

「判らん。まったく判らん。調べても欠片もわからん。」

「ケルテン師匠でも判らないことあるんですね。」

「俺は全知全能じゃないよ。ただ判らないことは調べないと気がすまないだけだ。」

「もう一つ質問。この間魔法の価値が低いつて言いましたよね。例えば距離とつて逃げながら撃つとか、人数集めていきなり打ち込むとかすれば強くないですか？」

「もつともな意見だ。でも魔法は必中じゃない。あまり距離を置くとベギラマならともかくギラは当たらない。弾速が遅いからね。ベギラマでも身を隠せば当たらない。あと俺の本気の速さ、逃げられると思うか？」

「あゝそれは無理ですね。じゃあいきなり打ち込むのは？」

「まあそれは特殊な例だね。不意打ちで斬りかかるのと変わらないから。どちらにしる武器にしる魔法にしる使い方次第さ。ただ手段

は多い方が勝ちやすい。よしじゃあ手合わせしようか。ルールは殺す以外は何でもあり。」

「本当ですか？本気でいきますよ。」

「もちろんだ。武器も好きなのを使うといい。手加減なんざ許さない。」

俺はまわりで訓練している連中に声をかけて場所を空けてもらった。自然と人集りができる。

「よし。とりあえず互いの距離は10m。はじめの合図はその君にお任せします。」

アレフは鉄の剣、鉄の盾に革の鎧。武器を抜いて盾を前に出した左半身の構え、俺は腰を落とし居合いの構え。はじめの合図は鉄の剣で鉄の盾を叩く。ゴンと鈍い音がする。

アレフは俺の居合いの速さも間合いの広さも知っている。警戒しながらにじりよってくる。予定通りだ。

「ベギラマッ！」

居合いの構えからいきなり右手を突き出し稲妻を放つ。狙いは鉄の盾。痺れて棒立ちになったアレフの元まで距離を詰め、居合いで右籠手を打つ。もちろん峰打ちだ。鉄の剣が落ちる。

「ひでえ……。」

「卑怯な！」

外野から非難の声が聞こえた。

「今、卑怯だと言ったやつ前に入る！」

人集りのほとんどが顔を伏せ目を合わせない。前に入るやつはいない。

「まあいいでしょう。今私は殺す以外はルール無しとした。もちろん魔物にはルールはありません。今卑怯だと思った者全員死んだと思え。アレフ！お前は卑怯だと思ったか！」

「いいえ。私は師匠の間合いや剣速に気を取られて、魔法の存在を忘れていました。さっきまでその話題をしていたのに。」

アレフは悔しそうに話す。左手で打たれた右手をさすっている。

「よろしい。なぜ負けたか理解できればそれでいい。ここなら次があるからな。手をだせ。・・・ベホイミッ！」

赤く腫れていた右手が元通りになる。

「一本で終わりか。終わりならいつもの練習だ。」

「まだやります。」

「そうか。では次は木剣と木盾を使おう。俺も木剣を使う。ちなみに木の盾ならベギラマは通らん。」

「判りました。同じミスはしません。」

「よし。では合図！」

互いにさつきと同じ様に構える。始まりの合図と共にアレフが飛び込んでくる。俺は合図がなる頃にはすでに抜剣して上段に構えている。盾を前に間合いに入ってきたアレフに木剣を叩きつける。受け止めた盾が真つ二つに割れた。以外な結果に止まったアレフの右籠手に軽く剣をあてる。

「おい！あれか？噂の盾割り。」

「聞いたことがある。近衛のサイモンさんが盾を割られたって。」

ちよつと外野うるさい。問題はそこじゃないんだ。

「さてアレフ。今回の敗因は？」

「木剣で盾が割れるとは思いませんでした。」

「残念、そこじゃない。一番の問題は俺にはお前の行動があらかじめ解かっていた。正直に言つとそう誘導した。ベギラマが使えることを意識するとまず間合いを詰めてくる。しかも事前に木の盾にはベギラマは効かないと教えてある。そうでなければ上段からの渾身の一撃はできない。」

「なるほど、私の動きはケルテン師匠の手の内にあつた。」

「さつきも言つただろう？武器も魔法も使い方だつて。あとわざわざ木の盾を持たせたのはもう一つ理由がある。」

「鉄の盾なら斬れないからですか？」

「いや刀なら斬れるんだ。ただそうすると高くつく。800Gも弁償したくない。」

「本当ですか？はあ、かなわないな。」

「まだいろんな戦法がある。さらに魔物なら人間にできない戦法ができる。」

例えば飛ぶ魔物、メイジドラキーはギラを放ってくる。キメラは火を噴いてくる。がいこつとか鎧の騎士は痛覚も感情もないから多少斬られても平気で懐に入ってくる。近くが毒の沼地でもお構いなし、多分崖なら一緒に落ちるだろうね。あとドラゴンとかゴールドマンとか体の大きさが違いすぎるモンスターには常識は通用しない。」

「まだまだですね。ありがとございました。いつもの練習に戻ります。」

「よし皆解散。時間のある者どうして模擬戦でもやってみる。多分さっきまでと違う戦いができるぞ。」

俺とアレフは隅によるといつものメニューを始めた。あちらこちらで模擬戦が始まる。今日の訓練場はいつもより活気があるようだ。

模擬戦（後書き）

アレフが皆さんの替わりに質問をします。

勇者ガルドと買取センター

さて今日は勇者ガルドが買い取りセンター（俺命名）に来そうな日である。そういえば支援官になってから行った記憶がない。顔をだしておくか。城の一階にあつたな。

……怒られました。

「勇者のレベル評価が貯まっています。一週間も何やってたんですか！？」

「いや連絡はしたよ。勇者52、53、54の勇者資格停止、買取継続と半額の徴収については。」

「それだけでは駄目です。勇者55の買取品の書類が貯まっています。この書類に目を通して現在レベルを決定してください。」

「大丈夫。レベルでの評価なんていらない、俺の弟子だし。」

俺は一応買取リストを眺めている。ふうん見事にスライムとスライムベスとドラキーだけだ。当たり前か。城から半日で移動できる範囲しか行かせてないからね。しっかしまあよくこんな集めたな。結構は多いぞ。それにしても効率の悪い書類だな。素材一つにつき一つチェックを入れるんだ。別途数数えてスライムの核何個って書いておけば見やすいのに。

「それでもレベルを決めて下さい！」

「じゃあレベル3。」

「適当に決めないで下さい。こんなに書類があるんです。そんな低いわけではないでしょう。」

「ふん。書類なんかで何がわかる。それにあいつはできるだけレベル上げてから次に行くタイプだ。おれがそう決めた。」

「言っている意味がわかりません。」

「細けーことはいーんだよ！Lv3、これは決定事項です。異論は認めません。」

「もうそれでいいです。」

「そうだ。今日は多分勇者51ことガルド来るよ。」

「へえ〜ちゃんと把握してるんですね。」

「何、その不信そうな目は？」

「文官の間では噂になってますよ。女子供と遊んでばかりいる人だって。」

まじか。そんなことはないはずだ。勇者3人を落第させたたる。次にアレフを弟子にして、マギーと魔法談義して……。なるほどアレフが子供でマギーが女か。否定できねえ。いやいや、これは竜王討伐を含む壮大な人類補完計画の一部だ。誰かにけちをつけられる覚えはない。大体女と遊んでいるって本人が聞いたら激怒するぞ。

そんなこんなやっているとならばありそうな筋肉隆々な男が現れた。ガルドだ

「これを引き取ってくれ。」

ドサツ！と布袋を床に置く。

「いらつしゃいませ！当店は初めてご利用ですか？当店のシステムは説明した方がよろしいですか？」

俺は一気にまくし立てる。隣の文官は呆れたような顔で俺を見ている。

「おつおつ！そうしてくれ。」

多分調子が狂うのだろう。なんとなく返事をしてしまっている。

「はい！では説明致します。まず持ってきた素材によってEXPポイントとGポイントが付きまします。例えばスライムならEXPポイント1、Gポイント2です。詳細はこちらの紙で確認して下さい。一定以上EXPが貯まると勇者レベルが上がります。7ポイントでレベル2、同じく23、47、110でレベルが上がります。これについてもその紙にありますので確認して下さい。このレベルでどの程度の地域に行けるかの判断材料になります。必要に応じてご相談下さい。相談は無料です。担当は私ケルテンになります。

次にGポイントですが、これはそのままゴールドを受け取れます。また必要分だけ受け取り、残りを貯金しておくことも可能です。

以上理解できましたか？」

「べらべらとつるせえやつだな。別に俺はお前の助言なんぞいらねえ。ゴールドは全部よこせばそれでいい。」

ガルドはこめかみに青筋を立てている。気の短いやつだな。

「では鑑定を行ないます。時間がかかりますのでお待ちいただけますか？または宿に届けることも可能ですが？」

「いや待つ。」

「ではそちらのソファにお掛けになってお待ちくださいませ。」

俺と文官で手分けしてテーブル上に並べる。メイジドラキーの翼膜、おおさそりの毒尾、がいこつの大腿骨、魔法使いの杖。ひどいな。折れたり割れたり素材として半分は使えない。二人で小声で話す。

（なあ。ちょっとひどすぎない？）

（ええ。これなんかわざと折ってあるみたいですよ。数が増えるところってるんですかね。）

（微妙だね。故意かどうか判断しづらいね。）

（これとこれは同じですね。ほら断面が一致する。こんなパズル嫌ですよ。）

（俺だって嫌だよ。何が悲しくて骨でパズルせにやなんのよ。）

「いつまで時間かかっているんだよ！」

（ちょっと注意してくるわ。正確に続けて。）

俺は申し訳なさそうに話す。

「申し訳ございません。数が多いのと状態が悪いので正確な数をだすのに時間がかかります。また買い取った素材は加工、売却することにより支払うゴールドを得ていますので、次からはなるべく完全な形での納品をおねがいたします。」

怒ってる。怒ってる。手出してくるかな？予想通り俺の襟を掴みに来る。見切つてかわす。やつの体勢が少し崩れた。

「うるせえんだよ！てめえ！……つてなめてんのか！」

「いえ、そんなことはありません。ああちょうど計算が終わったところみたいです。」

俺は文官の所まで歩き用紙を受け取る。もどりながら話す。

「今回はメイジドラキー30匹、大さそり25匹、がいこつ13匹、魔法使い32匹でEXP1966、2383Gとなります。おめでとうございます。レベルが1から9に上がりました。なお次のレベルになるのにあと34ポイント必要になります。」

ガルドはゴールドの入った袋を引っつかむと無言で出ていった。

「いや〜怖かったねえ。短気な人でしたね。」

「なんで笑いながらそんなこと言えるのですか？どうかしてますよ。」

「失礼だな。正常ですよ。」

「もういいです。武官の方の神経はわかりません。最初からわざと挑発したでしょう?」

「わかる?人柄を確認したくてね。ありや駄目かな。次来る時もあるべく立ち会つよ。もし俺がない時来たら近衛に声かけて立ち会つてもらう様に。いいね。」

「頼まれなくてもそうします。ああいう人は嫌いです。」

「君の評価も参考にさせていただきます。そういえば名前を聞いていませんでしたね。」

「メイヤーです。一応男爵号を持っています。あなたのことは存じてます。ある意味有名ですから。」

「あっそう。これからもよろしく。メイヤー男爵。ではまた来ます。」

「毎日一回は来てください。」

「はいはい。」

俺は背中を向けて軽く手を振ってここを去った。

弑逆未遂事件

さて不愉快なことばかりおきたので気晴らしにマギーのところにも行くろう。

「よお！マギー。はかどってる。」

「駄目っ！邪魔しないで。今いいところなの。」

マギーが顔も上げずにそう言い放つ。

「あっはい。すみません。失礼しました。」

それだけ言うと俺はそつと扉を閉めた。ああなると駄目だ。きつと誰が来たかすら判ってないな。なんか俺寂しい。兎は寂しいと死んじゃうんだよ。嘘だけど。ぼやきながら歩いていると何やら騒がしい。

「なりません。殿下と言えどその命令には従えません。」

「黙れ！衛兵ふせいが殿下に命令するな！」

城の2階への階段前で衛兵2名と貴族風の男7名が問答している。貴族側でしゃべっているのは後ろに立つ3人の内の一人だ。二人の衛兵が鉄の槍を交差させ、通行を妨害している。その前には貴族の護衛と思われる二名、二歩下がって高価な貴族服の男、さらに三歩下がって貴族服三名。

「騒がしいですね。どうしました？ここは場内ですよ。」

俺は間に割り込み衛兵に声をかける。衛兵が少しほっとした顔をする。

「こちらのフレイゲル殿下がここを通せと仰せです。」

フレイゲル殿下？誰だっけ？殿下ってことは王家の誰かだよな。

「いいんじゃない？特に断る理由があるわけでもあるまいし。」

「いえ、護衛の方の武器が……。」

そう指さす。なるほど帯剣してるね。俺は振り返り

「お連れの方の武器を預からさせて頂きます。それでお通しできますが？」

「無礼な！国王様の甥にして王位継承権第3位のフレイゲル殿下に命令するな！」

「そつだそつだ。直答するも恐れ多いぞ！」

ああ、後ろのガヤが五月蠅い。当の本人は見下したような目で俺を見ている。そうか王位継承権第3位ってことはたしか國務大臣の息子で……他にはなんの取り得もない男だったような。

「後ろの方々、少し黙って下さい。今あなた方とはお話していません。それで殿下、先も申した通り武器をお預かりしたいのですが？」

「このフレイゲルの武器を取り上げると言っか。」

「いえ、殿下の武器はかまいません。ですが護衛の方の武器をお預かりすると申し上げております。」

「私の部下の武器は私の武器そのものだ。それでも預かると言うか。」

「ええ、なりません。殿下と言えど遵守して頂きます。」

「貴様、大臣殿の覚えがいいからと増長するな！」

「ふん。貴様など図書館でも大人しくしているがいいわ。」

「おのれ、筆頭魔術師殿もこんな男のどこがよくて。くっ！」

また外野が騒ぐ。なんか個人攻撃に変わったぞ。しかも筆頭魔術師って、ああマギーの言ってた馬鹿ってこいつらのことか？フレールが片手を挙げると外野が黙った。よく調教されているな。

「ではどうしても通さぬというのだな。」

「ええ、どうしても通さぬと申してます。」

「ふん！この馬鹿者をやってしまえ！」

そう言い放つとフレールは3歩下がる。護衛の二人が剣を抜いた。馬鹿か、ここで剣を抜くか！剣を構えた二人が威嚇するように剣を構える。

「引いてもらえませんか？事を構えたくありません。」

「ならば貴様が手を引け。」

これは時間稼ぎだ。この間に思考詠唱でピオリムを二回、さらにバイキルトを自身にかける。

「危ないですよ。そのままだと後ろの人に当たりますよ。」

そう声をかけると思わず二人が後ろを確認する。今だ！抜く手も見せぬ居合い、狙いは鉄の剣。向かって左の男の剣の刃を斬り裂く。さらにかえす刀でもう一人の鉄の剣も斬り落とす。鏗鳴りの音が響いた時、俺がとぼけた声で話しかける。

「面白い剣ですね。刃がありませんよ？」

「なっ！貴様……」

真っ赤になつたフレーゲルが口述詠唱を始めた。消費MP5の魔法、ベギラマか。間に合え！

「私はMPを5放出する

MPとマナは融合し万能なる力となれる。MPとマナは融合し万能たる力

おお万能なる力よ、雷となる力よ、不可視の力となり

我が敵を、撃て」

よ。）

「ベギラマホトーン！」

何も起こらない。俺が上からかぶせた魔法が効果を発揮した様だ。フレーゲルが手を突き出し口をパクパクしている。

（俺はMPを2放出す

となれ。おお万能た

かの者の魔法を封じ

「衛兵！この者たちを拘束して下さい。」

「しかし・・・」

「私が全責任を負います。拘束して牢屋に入れて下さい。」

騒ぎを聞きつけた近衛騎士達も階段を下りてくる。

「国王、及びに國務大臣に対する弑逆未遂、ならびに城内騒乱罪になります。近衛の方々も手伝って下さい。」

次々に取り押さえられる6人。往生際が悪く暴れているが容赦なく取り押さえさせる。

「父上に会わせる！」

「下郎が！私の体に触れるな。」

騒がしい声が遠ざかっていく。衛兵が引きずる様に連れて行く。

.....

俺の前に不機嫌な國務大臣と近衛隊長がいる。

「これはどういうことだ。説明せよ。」

「はっ！かの者達が帯剣したまま2階への通行許可を求めました。拒否したところ抜剣、さらに魔法の行使を行いましたので身柄を拘束しました。なにか不都合がありますか？」

「何が不都合だ。あれは私の息子だ。それでもか？」

「大臣、いけません。この者の言が正しい。我が国にはこの者を罰するいかなる法もありません。」

「しかし・・・」

ここで俺が口を挟む。

「よく考えて下さい。さきの者は自称王位継承権第3位です。その者が国王様と継承権第2位の大臣、あなたがいるここに武器を携えてくる、ということは反逆の恐れがあります。ローラ王女が行方不明の今あなた方がいなくなれば、かの者が国王になれるのです。」

「なっ！私の息子であるフレージャーが私を殺しに来るわけがなからう。」

「残念ながら私はあなたの息子の顔を存じ上げません。自称の称号や名前を信じて法を犯させるわけにはいきません。さらにそういった前例は枚挙に暇がありません。弑逆という言葉があるぐらいですから。それに今は平時ではありませんから、最悪を想定して行動すべきです。王女が誘拐された前例があります。」

隣で近衛隊長が声にならない声を上げる。

「この件は國務大臣にお預けします。そのかわり絶対につやむやにはしないで下さい？」

「ではどうせよというのだ。」

「そうですね。まずは不見識な行為に対する叱責、さらに一ヶ月の

登城自粛といったところですか？またこの件は公にはするが公文書には載せない。これで大臣の面目も立つでしょう。」

大臣が苦虫を噛み潰したような顔をしている。これでも妥協した方だぞ。汚名返上、名誉挽回のうまい手だと思っただが。

「判った。そなたの言つとおりによつ。」

がつくり肩を落とす大臣。俺と近衛隊長が退室する。かける言葉はない。

――

「しかしお前。何をした？見ていたはずの衛兵もはつきりせん？」

歩きながら近衛隊長が質問する。そうか、見えなかったか。狙い通りだ。

「ただ剣を斬り飛ばして、ベギラマをマホトーンで封じただけですよ。」

「軽く言ってくれる。お前以外の誰にもできぬだろう。まあいい。一部の増長した者共もしばらくは自重するだろう。」

「だといいですけどね。」

「しかしまあお前、損な役回りをする。本当は俺の役割だ、すまんな。」

俺に頭を下げる。

「理解してくれる者がいるなら、それほどでもありませんよ。」

この人は敵にまわしたくない。数少ないそう思える人だ。

弑逆未遂事件（後書き）

なんの捻りもありません。あの人です。

一部修正しました。指摘ありがとうございます。

最悪な一日の終わり

自室に戻り革の服と刀を放り出し、ベッドに大の字になる。目を瞑る。疲れた。今日は不愉快なことだらけだった。正々堂々を旨とした騎士、増長した貴族、降って沸いたうまい話に浮かれる平民か。無理もないか。400年の平和だ。きつと竜王さえ倒せばまた平和が訪れると思ってるのだろうか。上から下まで平和は他人任せ・・・。竜王亡き後の時代は開拓の時代。無能な者は置いていかれる。ラダトーム王家も例外じゃない。いずれ辺境の一王家にすぎなくなる。いつそのことそう言ってるやりたい。誰も信じてはくれないか・・・。だめだ。ネガティブになっている。夕飯ぐらい豪勢にするかな。

コンコン。控えめなノックの音が部屋に響く。

「いる？私よ。」

ああマギーの声だ。ほっとする。

「ちょっといるんでしょ！返事ぐらいしなさい。入るわよ。」

かつてに扉を開けて入ってくる。前言撤回。ほっとはしない。

「じゃあ立って、出かけるわよ！」

俺の手を取って強引に引っ張る。あわてて刀だけ掴んで引きずられていく。

「ちょっと出かけるってどこに？もう8時だぜ。」

「いいからいいから。とりあえず屋外に出ればいいから。」

・・・屋外？兵舎から外にでる。何人かに見られていたような気がする。

「さうて、よく見てなさいよ。」

マギーの周りのマナが変化する。おい魔法を使つつもりか？マホトーン・・・いや間に合わない。やばい。一瞬景色が失せ、気づくと湯気の見える村の外に立っていた。

「マイラ・・・か？」やったあゝ！できたできた。やっぱりマイラのことだった。「」

マギーが両手を広げてくるくる回っている。俺はあっけにとられている。

「何？俺を実験に付き合わせたん？」

「そうよ。なにかあったら困るでしょ。そうだっ！」

返事をほつたらかして走るマギー。村の入り口の大きな岩。花が捧げられている。

「基準石ってこれね。レミ・ラ。うん確かに書いてあるわね。温泉の村ってセンスないね。」

そこまで言うと俺の方に振り返って胸を張る。

「どう？ルーラは解読したわよ。」

「はあ。そうみたいだね。」

俺はため息をつく。

「なにそれ。もっと驚くとか喜ぶとかしなさいよ。」

「いや十分驚いた。大したもんだ。」

「もっともつと褒めなさいよ。じゃあ行くわよ。」

「えっどこに？もしかしてリムルダール？メルキド？」

「なによそれ、ここはマイラ。温泉以外にどこ行くっていうの？」

再び俺の手を引っ張るマギー、いま多分俺はにやけているだろう。
不愉快な一日の終わりは最高だった。

.....

翌朝、俺は隣のマギーを起こさない様にそつとベッドから出る。

こんな時でも同じ時間に起きてしまう。刀を手にとって外へ・・・

「ねえ！どこへ行くの？」

「ゴメン。起こした？いつものトレーニングさ。やらないと調子が悪くなるから。」

「そう・・・じゃあ。私は見てる。ちょっと待ってて。」

マイラの町の北側、木がまばらに茂る場所で俺が刀を振る。切り株に座ってじっと見つめるマギー。気になってしょうがない。いかん、平常心だ。無心で刀を振る。もう視線は感じない。

「よし、これで終わりだ。ごめん、退屈させた？」

「いいえ、楽しませてもらったわ。やっぱりすごいよね。それで鉄の剣を斬ったって本当？」

「なんだ、君の耳にも入ってたんだ。本当だよ。」

そうか。昨日の一件で俺が落ち込んでいると思って、ここへ連れてきたんだ。ルーラの披露も踏まえて・・・。

「これも伝説の名剣？一体何でできてるの？」

「違うよ。ここで作ってもらった。材質は鉄と鋼の二層構造だった。今はさらにミスリルを含む三層構造。」

マギーが首を傾げる。気づいたかな。

「入手も加工もできないはずのミスリルが使われてるの？」

「まあ説明が長くなるからまた今度ね。まだ魔法の解読終わってないでしょ？」

「まあいいわ。魔法が一段落したらまた聞くことにする。」

少し脹れている。

「じゃあチェックアウトして城に帰ろうか？」

「ルーラは私が使っわ。リムルダール、メルキド経由で。」

「まだ実験する気？」

「駄目？」

「そんなことないけど。」

「……………俺達にとってはたわいのない話をしながら宿屋に帰る。」

……………

私の横でケルテンが安らかな顔で眠っている。

さつき部屋で見た時ひどい顔をしていた。この人かなり無理している。私はわがままを利用して慰める。今は道化でもいい。

最初は何でも知っているような顔にむかついた。武官のくせに！でも本当に私の知らないことまで知っていて、しかもそれを惜しげもなく教えてくれる。まるで子供を教え導くように……………

いつからだろう？一番大事な人と気づいたのは。多分あの開かずの間が開いた日。そうあの開かずの扉は私の閉ざされた心の扉。格式や身分しか重要視しない貴族の子弟、正々堂々にこだわる騎士、全て馬鹿にしていた私の心を真正面から開放した。

強大な力を持っている。だけどそんなことなんでもないことの様

に言つてのける。誰にでもできることだつて。私は武器は持てない。じゃあ私はこの人の知識だけでも追いついてみせる。でも力の使い方間違わない。それができるようになったら本当の意味で横に立てる気がする。今はその背中を追いかけるだけでいい。

おやすみ、ケルテン。あなたに安らぎがありますように。

勇者アレフの成長

5 / 10 勇者支援生活 10日目

毎朝の教練である。昨日はここには来れなかったものでちょっと気恥ずかしい。一昨日はここで説教したせいかもしれない兵士や見習いが俺を見てこそこそ何か話している。人の噂をするなら聞こえない所でしてくれないかな。

アレフがいつもと違っていきなり抜き打ち、縦切り、納剣の練習を始める。シュツ、シュパツ、シャキン！10回くらい繰り返し返す。いい音をしている。なるほどね。

「ああ判った、判った。できるようになったって言いたいんだな。」

「できてますか？じゃあ・・・」

何か期待するような目で俺を見ている。

「次の準備するから少し待ちなさい。」

俺は自室に戻り、支給品の鉄の鎧を持ち出した。

「これを着なさい。」

「頂けるのですか。」

「違うよ。やっぱり貸すだけだ。いつものメニューをそれ着たままやるんだ。それが問題なくできるようになったら剣に関しては教え

ることはもつない。」

アレフは目を輝かせながら鉄の剣を振り始めた。流石に流れる汗の量が半端じゃない。今日は自分のメニューが終わっても帰らない。最後まで見ていることにした。体を冷やさないように汗を拭き待つ。

「はあ。はあ。はあ。終わった。」

アレフがしゃがみこんで休む。

「いずれその装備で外へ出るんだぞ。ばててるようじゃまだまだだ。でも俺は優しいからな。直してやる。ベホイミ！」

「ありがとうございます。ずっと楽になりました。でもすごいですね。」

「なにが？ベホイミ？」

「違います。よく無詠唱で魔法が使えますね。」

「ああ、それね。悪いが誰かが魔法を使用するために口述で詠唱したら、第一小節の時点で何使うかわかるぞ。」

「ええっ！本当ですか？」

まあ驚くか。まだアレフはホイミとギラしか使えないからパターンに気づいてないだろう。

「本当だ。だから口述詠唱でなく思考詠唱を推奨する。だから魔法の名前だけで呪文が完成したように見える。これはロト一行が当た

り前にやってたことだ。」

「まだまだですね。」

「では飯食ったら、魔法の学習だ。ベギラマが使用できるまでは午前中は魔法の練習をしよう。」

「はい楽しみです。もう一つ質問いいですか？」

「何？」

「一昨日の夜は筆頭魔術師殿といっしょだったんですか？」

思わず口に使っていた水を噴き出した。周りでこそこそしていたやつらが手を止めてこちらを注目している。

「プツ、プライベートな質問には答えられない。」

「まずい、ごまかしきれしていない。」

『ウワン！本当だったんだあー！俺あこがれてたのにー！』

誰かが泣きながら走りさっていった。その辺、ざわざわするな。

.....

「お前なあ。あそこであの質問はないんじゃないか？」

「食事中、肉をつつきながら文句を言う。」

「どうしても聞いてほしいと昨日言われまして、断れずに……すみません。」

「もう済んだことだ。もうやるなよ。ちなみに魔法の先生はその筆頭魔術師殿だ。」

「いいんですか？」

「なにが！別に魔法を教えることぐらい俺がとやかく言うことじゃない。」

「わざわざ筆頭魔術師殿に教えてもらえるってことですよ。」

「あつ！やられた。お前策士になれるよ。」

「やった。初めてケルテン師匠から一本取りましたよ。」

俺は頭を抱えた。

図書館である。初めて二人を会わせる。なんで俺がこんなに緊張しなきゃならんのだ。

「あゝマギー。こちらが勇者アレフ。しばらく魔法の先生をお願いしたい。」

そしてアレフ、お前は知ってるな。筆頭魔術師のマギーだ。」

「ケルテン師匠の弟子アレフです。筆頭魔術師どのに魔法の指導をして頂けるとは光栄です。」

「王立図書館司書のマギーよ。．．．ちよつとケルテンこつちへ．．．」

（なに？聞いてないわよ。どうということ、説明しなさいよ。）

マギーが俺の手を引き隅に行く。しゃがみ込んで小声で話す。

（さつき決めた。俺が教えるより君が教えた方がいい。）

（どういう意味。あなたの方が教えるの上手でなくて？）

（そうでもないと思うけど．．．それより人に教えることで初めて気づくことがあったりするんだ。多分だけど今例の魔法書、行き詰っているでしょ？）

（何でわかるの？）

（わかるさ。マギー君の事ならね。まあ騙されたと思ってお願い。）

（しょうがないわね。いいわ。やってあげる。）

（とりあえず魔法の思考詠唱から、最終的にベギラマまで使えるようにしてくれ。例の詠唱文の意味も説明もしていいから。魔法の授業は朝9時から昼12時までの3時間。じゃあ頼んだよ。」

何も無かったようにマギーがアレフの前にもどる。

「はあ、いい、私はマギー。筆頭魔術師なんて他人行儀な呼び方止めてね。」

「はい。ではマギー先生。よろしくお願いします。」

「なんか素直でいいわあ。こんな生徒今までいなかったわ。でも私の指導は厳しいわよ。」

「望む所です。」

- - - - -

例の黒板を出してマギーが板書を始める。10種の魔法を並べて書く。順番に魔法を指し詠唱文の共通点などを説明する。アレフがしきりと感心している。途中マギーがアツと叫ぶといきなり魔法書を10ページほどパラパラめくる。

「ごめんなさい。続けるわね。」

続きが再開される。任せておいても大丈夫だろう。俺は確信した。

どうやら気づいたようだね。あの魔法書にはからくりがある。最初の10ページは今の魔法が順番に書いてある。それだけわかれば・・・まあ頑張れよ。

俺は背中を向け、右手を上げひらひらさせながら出て行った。

湖上都市リムルダール

5 / 14

ここ4日ほど落ちついた日を送っている。朝の調練、魔法学校、買取センター、国務大臣室。単純な作業を繰り返すだけになってきた。実に詰まらない。アレフはまだまだ。ガルドはあいもかわらずマイラあたりで狩りをしている。落第勇者達はガライを出発した頃か。そろそろガイラがリムルダールにつく頃だ。

普通リムルダールへは二週間ほどかかる。距離的には馬さえ使えば10日もあれば余裕でつくのだが、竜王があらわれた頃地下道の両端が毒の沼地になってしまった。馬での通行は不可能に近い。トラマナを使用できれば問題ないがこの時代がない。ゆえにラダトームから全て徒歩で行くか、マイラ村まで馬で行き残りを徒歩で行くしかない。

ガイラがラダトームを出発したのが5月7日、一週間で到着するとはどういうことだろう？担当変更の挨拶をしにリムルダールに跳ぶか。久しぶりに家に帰るのも楽しみだ。

俺の一番古い記憶は馬車から投げ出された自分、ひっくり返った馬車、襲い掛かるキメラの3つだ。養父が言うには馬車でリムルダールに引越してくる際、運悪く野生のキメラに襲われ、馬車の操作を誤ったらしい。このとき実の両親を失ったそうだが記憶にないの涙すらでない。リムルダールに墓だけある。俺は町長に引き取られて、今現在18歳である。

じゃあルーラで跳びますか。誰かにばれるとまずいので隠れて思

考詠唱する。

(俺はMPを8放出する。)

MPはマナと混ざりて、万能たる力となれ。

おお万能なる力よ、風となりて

我を、湖上都市へと運ばん。ルーラ！)

さて久しぶりの故郷です。昔は陸と中州が完全に繋がっていたが、砂地ゆえ不安定かつ防衛上の問題で吊り上げ橋で渡るように提言した。いまでは橋での通行が当たり前になってます。半年前の魔物の侵攻はこれでほとんどが入って来れなかった。竜王の率いる魔物の中で強力なモンスターはほとんど空を飛べない為、陸路さえなくせば防衛は比較的簡単だった。もちろん飛行してくる魔物や無理に泳いでくる魔物に備えてバリスタや投石器を準備し、さらに上陸されにくいよう湖岸線に木の囲いをした。もっとも囲いといっても牧場レベルの簡単な物だ。

では宿屋から確認しよう。うおっ！でけえ馬。黒王号か？松風かと思わんばかりの馬が宿屋の厩舎にいる。多分これだ。俺は宿屋に入ると気安く声をかける。

「やあ親父さん。元気？」

「おお！町長さんちのケルテンか。お前城に行ったんじゃなかったか？なんだもう戻ってきたか。」

「に・ん・む・だ。勇者来てない？」

カチンときたのでちょっと変な区切り方をして答える。

「ああ昼過ぎにきたよ。城から指定宿扱いされてから初めてだ。っ

てなんでお前がそんなこと知っているのだ。」

「だからそれが任務。勇者が十分な活躍できる様支援するのが俺の任務。」

「ふうん。お前は腕も立つし何より賢い。まあらしい任務だな。それはそうと勇者を半額で止める様お達しだがどういうことだ？割が合わんぞ。」

「ああ、それね。とりあえず半額で泊めてやってよ。記録しておけばその分税金から控除されるから。」

「じゃあ、それまで損じゃないか。やってられないな。」

「すまないな。俺に言ってもどうにもならんよ。しかしどうせ片手間の仕事だろ？」

「違いねえ。このご時世のんびり旅するやつもいねえ、開店休業中だ。」

「そうだろうね。で、ガイラはどこへ行った？」

「ああ、しばらくここを拠点にするからって町長に挨拶に行っただぜ。」

「以外に律儀だな。わかった。俺も行ってみる。じゃあまたな。」

「おう。元気だな。」

それから俺は懐かしい面々に挨拶しながら家路についた。しかしま

あなんで会う人会う人、俺が落第したかの様に言うのか？甚だ疑問だ。3年10万ゴールドの契約金で雇われたって言うてやるうか？まあ養父のことだ余計な気苦労をさせない為、町民には何も言っていないのだから。

さて俺の家である。町長宅であるとは思えないくらい普通の家だ。自治権と引き換えの税金は高く、町長といえど贅沢はできない。むしろ蓄えを削って捻出しているくらいだ。俺が一番良く知っている。

「爺さん、帰ったぞー。」

大きな声で帰ったことをアピールする。ちなみに俺がもらった時すでに爺さんだった。ゆえに呼称は爺さんのままだ。なんかお父さんとか言いづらい。

「おうおう、ケルテンか。よう帰った。元気が。」

「そりゃあもう元気ですよ。10万ゴールド分働かないといけませんからね。」

「そう言うな、おかげで町も助かっておる。ほれ客人の前じゃ、ちやんとせい！勇者ガイラ殿、我が息子のケルテンじゃ。ケルテン、挨拶なさい。」

「よう、ガイラ！結構速かったな。」

「これ！ケルテン。なんじゃその挨拶は！」

「いえ、いいですよ。町長さん。こいつは昔からこつこつやつです。何も気にしてません。」

「そうそう。俺、お前の仲だ。しかも今じゃ一蓮托生だ。聞いてますよね。俺の任務。」

「そうじゃったな。よく奉公するんじゃないぞ。ガイラ殿もよろしく頼みます。」

話が長くなりそうだったのでガイラを連れて外にでる。宿屋に向かって歩く。

「お前さん。いいところの坊ちゃんだったんだな。」

「そうでもないよ。町長だって言っても贅沢一つできねえ。まあ食い物には困らないから悪くはないな。」

「ふん！あの町長も只者じゃないな。一見人格者だがなかなか中身は大したものだ。」

「そうでないと自治区の町長はできないよ。そうだろ？」

「だな。で、本当は何の用だ。しかもなんでここにいる。」

ちよつと不信の目で俺を見る。そりゃそうだ。普通に考えて追いつくはずがない。

「実はお前の担当が俺になった。前任者がなくなったらしい。」

「そうか。しばらく見てないと思ったらそういつことか。しかしまだ半分しか答えてないぞ。」

「まだ聞くか。前いつしよに旅したとき見つけた古文書があつただろう？あれにあつた秘術だ。これ以上は教えない。それより毒の沼地をどうやって通つた。一人ならまだしも馬だろう？」

「飲み薬と塗り薬、あと薬を染み込ませたマスクを使う。これ以上は教えない。」

ガイラが俺の口ぶりをまねて返す。二人して笑う。実に面白い。

武闘家

リムルダールの町外れの牧場、俺の目の前で巨馬が草を食んでいる。ガイラの馬だ。しかしまあでかい馬だな、まあガイラもでかい（195位かな？）からな。

武闘家、ここアレフガルドではマイナーな職業（・・・違うな。戦闘スタイルと言うべきか？）である。こいつ以外に見たことがない。ガイラ・ガラ・ライガ。ガイラが本人の名前、ガラが師匠の名前、ライガが始祖の名前で流派の名前らしい。

ゾーマには次元を切り開く力があつたと思われる。勇者ロトの地球とアレフガルドの間を繋ぎ、バラモス、ヤマタノオロチ、ボストロールを送り込んだ。そのときの次元の狭間から、幾人かの人間がアレフガルドに落ちてきた。さらにギアガの大穴からきた者たちがこの世界に残った。マイラの鍛冶屋、盗賊カンダタ、ロト一行、その他この世界から戻れなくなった者達。その中に武闘家があつたとしてもおかしくはない。

「なあガイラ、一つ頼みたいことがあるんだが？」

「なんだよ他人行儀な。いいぜ。」

即答！せめて内容ぐらい聞け。

「そうか。今はまだいいが、いずれアレフと組んでほしい。」

「まあ俺はかまわないが、あいつには言ったのか？」

「それは問題ない。俺が言えばまず断らない。」

ガイラがニツツと笑う。なにか良からぬ事を企んでいる顔だ。

「一つ条件がある。」

「どうぞ。」

続きを促す。

「試していいか。」

「当然の答えだ。好きに試せ。殺すつもりでやってもいい。」

「よお、し、楽しみになってきた。いつごろになる？俺はいつでもいいぜ。」

ガイラが急に型を始めながら言う。バトルジャンキーめ！

「そうだな、今魔法の修行をさせ始めたから・・・速くて2週間、遅くても一月。もしそれを超えることがあったら、この話はなかったことにしてくれ。」

「OK！OK！お前のことだ、話がなくなることはないだろ。」

「まあね。しかしお前、試合ができることが楽しみなだけだろ？」

「判るか。いやー実に楽しみだ。」

食み終わったのか馬がこちらに歩いてくる。

「おう、ライ！もういいのか。じゃあ行くつか。」

ガイラが馬のたてがみをなで話しかける。その馬はライというのか。きつとその馬も友達なんだな。お前らしいよ。

俺達は宿屋に戻ることにした。

.....

俺達は今一緒に食事を取っている。ふと思ったのだが、こいつとコンビを組ませるのはいいが、まさか銅の剣、革の鎧、革の盾のままではまずいよな。せめてフルで鉄の装備ぐらいは・・・いやそれじゃ不足だな。せめて鋼の剣は用意したいな。2000Gか、補助金がでて1500Gになるか。アレフが持っているか聞いてみよう。

「何考えている？心配事でもあるのか？」

「ああ、アレフの装備だ。まだラダトーム周りでしか戦わせていないから大した武器を持ってない。」

「かまわんさ。武器が強いんじゃない、本人が強ければいい。」

「そうだな。お前は素手だしな。だがこれから困ることになるぞ。この辺だとゴールドマン、いずれドラゴンなど超重量の敵とどう闘う。」

「やってみなきゃわからんさ。」

ゴルドマンは身の丈5m、体重は1tを超える。ドラゴンも個体差があるが体長5m以上、体重も1t以上。普通に攻撃してもまず通用しない。

「殺られてからじゃ遅いぜ。まあやばいと思ったら逃げろよ。」

「そんなものか？まあ忠告はありがたく受け取っておくよ。」

「じゃあ、忠告ついでだ。お前使える武器はないのか？」

「そうだな・・・棍なら使える。あと鉄の爪という武器が流派にはあることはある。ただ金属製品は駄目だ。」

「ああ金属アレルギーだったな。」

なぜかこいつは金属アレルギーだ。武闘家は武器も鎧も装備しないし、今までそこまでの相手には相対していないから問題なかった。

「例えば革越しとかメッキでは駄目か？」

「短時間なら問題ない。だが汗が染み込むと駄目だ。あとメッキも駄目だ。」

駄目か、何とかしてやりたいのだが・・・そうだ！

「なあ、これ触ってくれ！」

俺は刀を抜き、刃を差し出す。

「どういうことだ？これも金属には違いないだろ？」

「いいから！先端の三角のところだけ触ってみる。」

ガイラが訝しげに刃に触れる。そのまま待つ。約10分。異常はない。

「いけるな。それはミスリルだ。」

「ミスリルってあの伝説のか？どうやって手に入れる？」

「このアレフガルドでは採れない。だが手には入る。」

「はあ？意味わかんねーよ！」

「お前メタルスライムは知っているか？」

「ああ、あの金属のスライムな。昔何度か倒したことある。」

軽く言ってくる。まあ相性はいいか。表面の金属面に斬撃はほぼ通らないが、こいつの打撃は中の核にダメージを与えることができる。

「じゃあ、今度倒したらその表面の金属を回収してくれ。それがミスリルだ。」

「さすが学者だ、よく知ってるな。それでどうするのだ？」

「あとは持ってきてからだ。ここに無い物ではなんともならん。お前は使える武器がないか再考してくれ。手に入れた量で作れる武器が変わる。さらに加工の難しい形も無理だ。よく考えておいてくれ。」

「

「わかった。期待していいんだな。なんなら今すぐにも……。」「
ガイラは立ち上がり飛び出さんばかりだ。」

「そこまで急ぐ必要ない。大体ドムドーラ南はここらよりずっと危険だ。半年前までとは違う。」

「そういえばそうだった。思わず興奮した。」

「なんだ。お前も武器を使ったかったんだな。」

「まあね。やっぱり剣に盾、鎧姿の騎士には一度はあこがれるだろう?。」

「そうだな。俺も一度はあこがれた。無理だったけど。まあいいや、用件は済んだ、じゃあ死ぬなよ。さっきも言ったがやばいと思っただら絶対逃げるよ。」

「わかった。心に刻んでおく。」

よし、今後の予定も決まった。ラダトームに帰ろう。

正と邪

5 / 15 勇者支援生活15日目

いつも通りの朝練である。アレフは鎧にも慣れてきたようでもたつくことなく、剣を振っている。魔法はどこまで使えるようになっただろうか？

「アレフ、魔法はどうだ？」

「まだまだです。覚えていたギラ、ホイミは思考詠唱できるようになりました。ただ新しい呪文がまだ詠唱文が記憶できてません。なんていうか、口には出さないのですが噛むんです。あと消費MPが大きい魔法が増えて祝福爺さんと、図書館を往復してます。」

「はははっ！そりや大変だな。まあがんばれ、全部できるようになったらとりあえず卒業だ。」

「えっ本当ですか？頑張ります。」

嬉しそうに返事をする。

「それはそうと、お前いくら持つてる？」

「ゴールドですか？貯金含めると1000Gくらいですかね。」

それはすごい。ラダチーム周りだけで1000G貯めたか。約300匹の敵を・・・レベル7ぐらいかな。登録レベルを変更しておこう。

「あと500貯める。」

「何に使うのですか？」

「貯まっってから教える。無駄遣いじゃないから心配するな。」

「はあ？そうですか。」

何か期待していたのか、がっかりしている。ある意味チートみたいなものだからな。秘密だ。

「まあそうがっかりするな。わかった。じゃあここで模擬戦をやつて5連勝したらすぐにでも教えてやる。」

「本当ですか？約束ですよ。」

「ああ、いいよ。ルールは相手まかせな。」

ここにいる連中を集めて趣旨を説明する。もちろん賭けの話は内緒だ。

「とりあえず誰とやらせるかな。希望者いるか？」

「はい、私にやらせてください。」

「ジョルジョ君か。やる気だね。ライバル視してるのかな？」

「いいよ。ルールは？」

「何でもありでいいです。武具の制限もありません。距離は10m。」

「いい覚悟だ。よしでは俺がこのコインを投げる。落ちたら開始だ。あと賞金をだそう。アレフに勝ったら100Gだ。本気でやれよ。」

俺がそう言うのと周りで日和見していた連中がざわざわした。金出さないとやる気にならないのかよ。そのうちにアレフとジョルジヨが所定の位置につく。双方鉄の剣、盾、鎧、剣を抜き互いに構える。俺はコインを投げる。コインが落ちる音が響いた。

時計周りに摺り足で動く。距離が地道に縮まる、あと8m。ここでアレフがいきなり剣を納める。そして口述詠唱。消費MP2、ギラカ・・・待てよ、なぜ口述詠唱？ジョルジヨが慌てて距離を詰める。居合い一閃！アレフの剣がジョルジヨの剣をはじき飛ばした。そして鐸鳴りの音が響く。

「そこまで！勝者アレフ。」

見物していた連中がざわざわする。中には卑怯だと言う声も聞ける。先日いなかったのだろうな。

「ジョルジユ、何か言いたいことはあるか？」

「いえありません。私の負けです。」

「そうか、じゃあいい。次誰があるか？」

「俺がやる。ルールは木剣、木盾。距離は5m。武器のみの一本勝負。」

若い男が前に出る。真新しい紋章入りの正規の鎧、アレフを見下したような目、自信に満ちた顔、貴族出身の近衛の新人か？話にならないな。まあいい、俺はコインを高く投げ上げた。

互いに構えにじりよる。木剣は居合いに向かない。そう思って選択したのだろう。まあ正解だが……。双方手をださないまま、盾がぶつかりそうな距離になった。アレフが盾を相手の盾に思い切り叩きつける。意表をつかれた男がのけぞった。がら空きの右手にアレフが剣を当てる。

「そこまで。勝者アレフ。」

「なんだ、こんなもの！認められるか！」

「お前は負けた。負けた者の言い訳は見苦しい。」

「いや騎士の鬪いは勝てばいいというものではない。おい！なぜ皆黙っている。こんな下賤な者に言わせておくことは無い。」

木剣を振り回し激高して周りを見渡す。目を合わせる者はいない。重い空気が流れる。その雰囲気能耐えられなかったのか剣と盾を叩きつける。

「いいか！俺は絶対にお前達を認めない。」

その若い近衛騎士は出ていった。明らかに場にほっとしたような空気が流れる。皆、俺の顔を見ている。何？もしかして俺が怒るんでも思った？残念、俺はアレフの成長が見れて機嫌がいい。

そして3戦、4戦とアレフが順調に勝ちを収めた。相手がアレフの奇策を警戒している間に普通の攻撃が的確に入る。こうなるとアレフが負けることはないな。

「よし、俺がやるう。勇者アレフの実力、このサイモンが見定めさせてもらう。」

いつの間にかやってきたサイモンがしゃしゃり出てきた。場の雰囲気が変わった。そうだろう、見習いだけでなく正規の兵が負け続けたのだ。悔しいが自分ではどうしようもない。そんな思いが各々の心にあつた。そこに救世主が現れた。

「サイモン。ルールはどうする。君に決める権利がある。」

「馬鹿め、俺にルールはねえ。お前も知っているだろう。」

「OK!じゃあ一つだけ、距離は10mだ。アレフ!こいつは強いぞ、今までの相手と一っしょだと思つな。」

「望むところです。」

サイモンが剣を抜き構える。アレフは腰を少し落とし、柄に軽く手を当てる。気が高まる。俺が投げたコインが地面に落ちた。

「ギラッ!」

いきなりアレフが魔法を放つ。火球がサイモンの1mほど前の地面に着弾し、砂煙があがる。アレフが一気に距離を詰め居合い、金属と金属がぶつかる激しい音がする。サイモンの盾が剣を受け流している。

「甘い！」

そう言うとサイモンが下段から切り上げた。アレフが仰け反ってかわす。崩れた体勢にそのままサイモンが右足で蹴りを入れた。倒れるアレフ。

「そこまでだ。勝者サイモン。」

サイモンがアレフに手を貸し引き起こす。

「残念だったな。」

「完敗です。読まれてましたか？」

「ああ、前にこいつにやられた。ベギラマだったけどな。」

サイモンが俺を指差す。俺とサイモンがにやつく。

「サイモン。賞金だ。もうどんちゃん騒ぎするなよ！」

「しばらくはやらねえ。隊長が怖いからな。じゃ、ありがたくもらつとくよ。」

それだけ言うとサイモンは去っていった。集まっていた皆が解散していく。思うことがあってジョルジヨを引きとめる。

「ジョルジヨ君。君に頼みがある。」

「私にですか？」

「ああ、明日からアレフに型稽古を教えてやってほしい。」

「でもアレフ殿は私より強いですよ。」

「そうかな？まあそれはともかく、貴族騎士の言う正統な剣を教えてやってほしい。ちょっと邪に傾きすぎた気がしないでもない。そういう訳だアレフ、明日からジョルジョ君にもご教授してもらおうに！」

「はい、ジョルジョ殿。よろしく願います。」

「ジョルジョ殿は止めてください。今まで通りジョルジョでいいです。」

訓練所に三人の笑い声が響いた。

考察：魔物の分布と対策

5 / 16 勇者支援生活16日目

落第勇者達が帰ってきた。買取センターへ行つてその足で俺に会いに来たようだ。

「ほら。借りてた200G返す。」

金の入った袋を投げてよこす。俺はひっくり返して中身を全てテーブルにあける。

「10、20・・・200、210。少し多いぞ？」

「利子だ。つまらんこと言わすな。」

ドウーマンが言い放つ。後ろの二人がそっぽを向く。こいつらなりの礼らしい。

「そうか。じゃあ、ありがたくもらっておく。でいくら返せた？」

「1000G。実際は900ちよつとだったが、手元から出して1000Gにしてきた。」

「結構、結構。なら本当はマイラの村あたりを勧めたい所だが・・・あまり気が進まないな。」

「都合の悪い事でもあるのか？」

「大いにある。俺が担当している勇者一人が乱獲している。それだけならいいが、ちよつと人柄に問題がある。多分村の宿でぶつかるだろうね。」

そう言う俺を見て三人の顔もゆがむ。

「そんな顔するとはなんかあつたのか？」

「顔にでてた？買取素材がぼろぼろでね。指摘したら怒鳴りやがつた。多分素材の数をごまかそうとした。」

「そんなことできるのか？」

「例えばこのがいこつの大腿骨つてあるだろ、これを真ん中あたりで折る。あら不思議2体分に見えないことも無い。」

「へえ〜そんな方法があつたのか？そんなこと教えていいのか？」

「いいさ。やつたら鑑定にやたら時間かけてやる。立体パズルには時間がかかるんだ。」

それを聞いた三人が心底嫌そうな顔をした。

「あんたらしい仕返した。俺達は止めておく。」

「賢明な判断だ。マイラへは行けないとなるとやはりガライしかないな。今度はもう少し長期滞在してくるといいよ。あつちに一週間はいてもいい。」

「ガライから南へはどうだ？」

「止めとけ。ドムドーラに近づくとかなりやばい。ここまでは大丈夫と線引きが難しい。まあ橋は渡るなよ。とんでもない魔物がでるぜ。キメラだろ、影の騎士、鎧の騎士・・・あとは」

「よく判った。みなまで言わなくていい。俺達のできることだけをやる。」

「判ってもらえてうれしいよ。一人でも知り合いが死ぬのは嫌だからな。」

なぜ三人共俺を見てにやにやしている。そんなに変なこと言ったか？

「そうか。俺達はあるたの知り合いなんだな。」

「じゃあな、次戻ってきたら俺達は自由だ。」

「出会いが最悪だったからな、嫌われてなくてよかったよ。」

三人は口々になにか言っていて出て行った。よく聞こえなかったが悪い気はしない。

- - - - -

そうか、そろそろ行動範囲がぶつかり始めるか。一度魔物の勢力について整理しよう。

まずこの城のから北西のガライ、そこから南に行つて橋の手前まで、また北東マイラ村への街道を橋の手前まで・・・このあたりまでならそう危険な魔物はいない。スライム、スライムベス、ドラキ

ー、ゴースト、まあそんなところか。ゴーストのギラが嫌だな。これらの中央にロトの遺跡があるが魔物はでない。除外していい。

次がマイラ周辺、メイジドラキー、魔法使い、おおさそり、がいこつ。どれも癖のある魔物ばかりだ。前者2つはギラばかり唱えてくる。おおさそりは毒、特に鉄で拘束されてからの毒針がやばいな。あとはがいこつか。半年前までは見なかったのだがな、やはり魔王の力のせいなのだろう。不死の魔物は嫌いだ。どこを見ているか判らない。気配が無い。感情がない。人間との戦闘に慣れた者には特にやりづらい。

さつきも話題になったドムドーラ方面、ラダトームから山脈を越えて南西方向。通称岩山の洞窟のあたりまではそれほどではないが、旅程が長くなり補給の関係上危険が高まる。ドムドーラ方面は論外だな。ある意味竜王の支配地域、眷属のドラゴンもいたはず。装備を整えないうちは誰も行かせない。

マイラから南、リムルダール方面へ。一番の問題は敵ではないが一日中続く毒の沼地。海底トンネル・・・まだ誰も知らないがローラ王女はここに監禁されている。ここを守るは竜王の眷属のドラゴン。それも強い個体。もし王女が存在が知れたらどうなる？手柄を求めて幾人も挑戦するだろう。駄目だ、死者の山を築いた拳句、王女がどこか別の場所に移されかねない。把握できる場所においてもらえるなら問題ない。あちらにしても大事な人質、無碍には扱えない。王女には気の毒だがしばらくそこにいてもらおう。

そしてリムルダール。魔道士、リカント、リカントマムル、死霊の騎士、ゴールドマン、キメラ、そんな所か。ガイラ基準で考えよう。魔道士は数種の魔法を駆使する。眠らされたら終わりだな。リカント、リカントマムル、死霊の騎士、人に近い動きをする魔物な

らあいつの敵じゃないな。ゴールドマン、これは逃げると言った。キメラか・・・空中からの火の息にどう対処するのだろうか？まあよほど南に行かなければ出てこないからいいか。よく考えたらまずい魔物ばかりだ。助言が足りてないな、また会いにいかなくてはならない。

よくよく考えると問題が山のようにあるな。うまく事が進んでいくつもりだったが思慮が足りないようだ。そういえばあったことも無い特務隊先任士官もいる。一度相談すべきだな？よしそちらから片付けるとしよう。

王家 光と闇

国務大臣執務室

今日もここに来る。最近2階に上がってくると近衛も文官からもものすごい敵意を感じる。俺に話しかけてくるのは少数派だ。ここにいるほとんどが、自称貴族出身のエリートだから気持ちはわからないでもない。もっともだからといって俺が何か加減したりする必要はない。

「今日はお願いがあってまいりました。」

「なんだ？言ってみるがよい。」

ふう・・・この人の機嫌がよくなることはないようだ。いや、嫌われたものだ。ある意味あの馬鹿息子の高い鼻を叩き折り、この人の顔を潰したのは俺だ。いつそのこと解任してくれないかな？そうなったら一人の人間として勇者の従者でもなんでもやってやれるのに。いかん、余計なことを考えている場合じゃないな。

「前任特務隊士のシュミット殿にお会いしたいのですが？」

「ふむ、なるほど。そろそろ互いの協力が必要になるか。よろしい、これを使いたまえ。」

そう言つと自らの机から一枚の書類が取り出した。引き出しに二重の鍵、やけに嚴重だな、。

「これは誓紙ですか？シュミット殿のもですね。」

「そうだ、それも勇者の血の契約と同じ役割を果たす。調べるがよい。」

そういえば俺も着任したときに提出したな。血判まで押していやに恭しいと思つたらそういうことだったのか。もしかして・・・俺は大臣に背を向けレミィラを唱える。もちろん口述はしない。やはりこの隠し文字は・・・。

一つ、この者は王家と血の契約を結ぶ。

一つ、この者は血の契約により王家の秘術、蘇生を受けることができる。

一つ、この者は王位継承権のある者に武器を向けることはできない。

一つ、この者は王位継承権のある者に敵意のある魔法を使用することはできない。

一つ、この誓紙を破棄することによりこの者は命を失う。

やはりそうか、勇者のものと同じだ。ひどいな。しかし最後の一文、生殺与奪の権利までいっしょとは・・・必要がなくなるか、害があると判断されたらいつでも処分されるか。

俺は動揺を隠しながら魔法の地図を起動させる。シュミット殿はマイラ付近か、近くに4つの光点があるから監視、支援の最中か結構真面目だな。ガルドは近くにはいないな、この光点・・・城に帰ってくるのは二日後だ。

しかし事がうまくいって平和が訪れる、勇者や俺、功績があつた者に十分な報酬や地位を与えた後、邪魔になるなら暗殺です。報われないな。いやだめだ、俺はあの二人は助けてやりたい。

俺は言葉もなく退出した。

.....

よくもまあこの男は毎日毎日私の前に来れるものだ。私とわが息子を貶めたのはお前だ。それは宮中全ての者が知っている。宮中の者に嫉まれていることに気づいていないのか？いやそんなわけが無い、こいつは全てわかった上で飄々としている。切り捨てるか？いやまだ駄目だ。先日息子に説教したばかりだ。

「この！痴れ者がっ！」

私の杖が息子フレージャーに叩きつけられる。

「しかし父上、あの者は私の顔だけでなく父上の顔にも泥をぬったのですよ。」

「そんなことはわかっておる。」

「ではあの者に処分を！」

「できぬ！忌々しいがあの者には罪はない。」

「しかし私を牢に入れました。あの薄汚い牢に！」

「自業自得じゃ。聞いておるぞ、お前はあの場で剣を抜かせた。その前に『私の部下の武器は私の武器である』と言ってな。自分でその意味を理解しておらぬのか！」

「それは……。」

「しかも城内で魔法を行使するとは……。」

「しかし私は魔法を出しておりません。」

「防がれたのだ。お前はあの者に命を助けられたのだぞ。若気の至りです。叱責で済ませてはどうでしょうか？と私に命令した。そう國務大臣であるこの私にだ。この腹ただしさお前にはわかるまい！」

「しかしそれでは王族の面目が。」

「王族の面目、お前がそれを言うか。王族の務め理解できるか？」

「王族の勤めですか？それは貴族、騎士、以下民衆を支配、導くことです。」

「話にならん。そんなことは前提条件に過ぎぬ。一番大事なことは権力基盤を磐石にすることだ。その為にはいかに不快な道具であるうと使いこなせねばならん。」

「あの者は不快な道具ですか？」

「そうだ。不快だが実に有能な道具だ。使い終えた後処分すればよい。しばらくお前は大人しくしておれ、ローラ王女無き今お前は今一番王位に近いのだ。自重せよ。」

「王女無き今ですと、どういう意味ですか？」

「知らぬでよい。今は十分な根回しをせよ。あの者にも礼を言っておけ、そうする事でお前の度量の大きさを示すことができよう。そう思わせることが必要だ。よいな、しかと命じたぞ。」

- - - - -

さて公式にマイラの村に行くことになった。常識的に考えると往復で6日、いや馬を使って4日には戻って来れないことになるな。近衛隊長、マギーには不在を知らせておいた方がいいな。しかしまあ面倒くさい、ルーラは公表するかな・・・あかん、俺の利便性だけでそうするわけにはいかない。

近衛騎士控え室

「今をときめく國務大臣特務隊士殿がなんの用ですか？」

含みを持つ言い方で近衛騎士の一人が声をかけてくる。誰だっけ、お前？どこかで見た様な覚えがある。首を傾げる俺にいらだって大声を上げる。

「エックハルト子爵だ！近衛騎士の名ぐらい覚えておきたまえ。」

「ごめんなさい。名前はまったく記憶にございません。多分この間アレフに負けて捨て台詞を残していったやつだ。そうかお前か、近衛まで俺に冷たいと思ったら。エックハルト・・・意味は強き刃、ププツ！名前負けだな。」

「失礼致しました。しかし際立った方は記憶していたつもりでしたが・・・。」

「私を無能と言っか！」

怒鳴るなよ。そう言ってるんだよ、お前なんぞかまってるらるか。

「騒がしいぞ、大声をだしてどうした？」

近衛隊長が部屋から出てくる。

「はっ！しばらく城を留守にします。少し厄介な用件をお願いすることになります。」

「そうか、では聞こうか。私の部屋に入りたまえ。」

近衛隊長がうんざりした顔をしている。

「あまり挑発しないでくれ、腑抜けばかりなのは自覚しておる。」

「別に私が挑発したわけではありません。あちらが喧嘩を売ってきたのです。」

「まあよい。で、厄介な用件とはなんだ。」

「明日にでも勇者ガルドが戻ってきます。少し素行が悪い為、素材買取の際に近衛の方に立ち会って頂きたいのです。」

「ふむ、では腑抜けでは駄目だな。サイモンをつけさせる、それでいいか？」

「お任せします。では急ぎますので失礼します。」

俺は出て行く。刺さる視線は気にしない。

.....

「はい、マギー！調子はどつ？」

「あつケルテン！聞いて聞いて。このページなんだけど「ちょっと待って。」

おれが言葉を遮る。

「急な用件でマイラに行く。4日は戻らない。」

「なんで？ルーラで行くんでしょう？すぐ戻ってこれるじゃない？」

「公務なんだ。あまり非常識な時間では戻って来れない。」

悪いな、また埋め合わせはする。アレフにもそう伝えておいてくれ。じゃあ急ぐから！」

「もっつ！」

何か聞こえた気がするがまつている時間はない。俺は厩舎に行くとして一番速い馬を借りた。まあ使わないけど連れては行く。とりあえず今日はリムルダールに行こう。

王家 光と闇（後書き）

まだ魔法は発動していない
ということとは俺は魔法は使っていない

ノーカン ノーカン ノーカン！

サバイバルの達人？

リムルダールに跳んだ。ただ俺は先日ここをでたばかりだ。この姿のままでは町には入れない。馬を引きながらモシヤスを唱える。これでなんの特徴もない兵士に見えることだろう。入り口の門番に声をかける。

「すみません。城からやって来ました。大きな馬に乗った勇者殿を探しております。どちらに向かったでしょうか？」

不信な目で見る番人達に一気に言い立てる。顔見知りだ。俺とばれる前に終わらせたい。

「ああ、それなら朝に南に行くって言ってたな。」

「探すのは大変だぞ。町で待ったほうがいいのじゃないか？」

「いえ、至急伝えねばならぬことがあります。ありがとございませす。では急ぎますので！」

俺は馬に乗ってここを離れる。モシヤスは効果時間が短い。維持するのにMPが必要だ。俺の最大MPはB-、つまり160前後しかない。消費MP12の魔法はあまり使いたくない。

さてガイラはどこへ行っただろう？日没まで3時間か、それまで見つかるか？この辺で待ってればリムルダールに帰ってくる・・・いやいや常識で考えてはいけない。あいつはサバイバルの達人、そう名づけたのは俺じゃないか。食べられる植物の見極め、狩猟、調理、水の確保、薬草学、安全な野営場所の確保、あいつの本当の強

さはそこにある。以前かなり世話になった。俺と組んでいたときは、俺が魔法で援護、攪乱を担当し、あいつが各個撃破するのがパターンだった。盗賊だろうが、当時野生化していた少ない魔物も敵じゃなかった。

ん？そうか。夜営を待てばいいじゃないか？火をつかうはずだ、遠くからでも発見できる。少し安心した。冷静になると周りがよく見えるようになった。所々ばかでかい蹄の跡がある。・・・俺馬鹿だな、こんな簡単なことに気づかないとは。よしこれを追いかけてう。

日が落ちる。暗くなる中レミーラの明かりで進む。火の光が遠くに見えた。

「おっ！いたいた。お〜い。」

俺が大きく声をかける。

「誰だ！」

身構えるガイラ。攻撃でもされたらたまらない。慌てて名乗る。

「俺だ、学者だ。攻撃するなよ。」

こちらを確認するガイラ。ほっとしたように構えを解く。近づいても良さそうだ。馬を降りて近づく。

「脅かすなよ。魔物かと思ったぞ。で、なんか様か？アレフが仕上がったか？」

「そんなに早く仕上がるものか。ちょっと心配になってな。この辺の魔物はお前と相性の悪いやつが多い。それを思い出した。それで闘ってみてどうだ。」

「ふん、心配性だな。問題ない・・・と言えないのが癪だな。実はちょっと困ってる。」

「だろうな。虚勢を張るような馬鹿だったら、どうしようかと思っただよ。で具体的には？」

「ああリカントだけ？直立する狼みたいのと、その色違いは問題ない。剣を持った骸骨、あれ昔はいなかったよな？まああれも問題ない。数でかかれると困るがな。」

「リカント、リカントマムル、それと死霊の騎士だ。覚えとけ。不死の魔物は魔王の影響で蘇った。俺の見立てどおり人型の魔物は問題ないな。」

「魔道士？あいつはうざいな。魔法をいろいろ使いやがる。これまで一体ならまだいいがあの骨といっしょに襲ってくるとたちが悪い。一度眠らされて死ぬかと思った。それ以来、真っ先に殺すことにした。」

ガイラが思い出したのか顔をしかめる。

「ゴールドマンは一度やってみた。確かにあれは駄目だ。先に聞いておいてよかった。まああの図体だ、発見が遅れることはないからな。それ以来相手にしていない。」

「それでいい。超重量ゆえに打撃も効かない、関節も投げも無理だ

な。」

「だな。それ以外には鉄の蠍、あれはまあ弱い。あとカメラがいたが、あれもまだ楽だった。」

「本当か？空中から火の息を吹いてくるだろ、どう対処してる？」

「こつする。」

そういつてポケットに手を入れ何か投げる。少し離れた木で弾ける音がする。俺が驚いている。

「飛礫だ。羽根に当てて落ちた所を踏み潰す。」

「ああ、なるほど。俺はベギラマが使えるからそういう考えはなかった。」

拳に入る位の石か、金もかからないし補充の心配もない。ふむ・・
・ならば無茶かもしれないが言ってみるか？

「一つ提案がある。メルキドに跳ばないか？」

「メルキド？なにかあるのか？」

「メルキドには用はない。あの周辺はここより強い魔物だらけだ。」

「それこそ意味がわからんな。どうする。」

「メルキドから西ドムドローラから南、例のミスリルを手に入れよう。」

「

「それはいいが、大丈夫なのか、その辺の魔物はどうなんだ。お前のことだ、知っているのだろうか？」

「ああ知っている。影の騎士、影に潜む骸骨の魔物。鎧の騎士、甲冑だけの魔物。死の蠍。メイジキメラ、魔法も使うキメラだな、メタルスライム・・・まあこんな所か？」

思い出すように順に答える。ガイラが呆れている。

「しかしまあよく知っているな。実は竜王の城の魔物も知ってるのじゃないか？」

「ハハハッ！流石にそれはね・・・」

かわいた笑いしかでねえ。ああ知ってるよ。言わないけどね。

「竜王の城のことはおいといてだ。今言った魔物でお前と相性が悪いのはメイジキメラだと思ったが、その飛礫があれば何とかかなりそつだ。俺の魔法でメルキドまで跳ぶ、そこからは二人で現地まで行く。そこまで行ったら俺は戻る。」

「なんだ置いてくのか？」

「他の用件もある。そうは行かない。できると思ったから言ってる。どうだ？」

「そこまで言われたら、やるしかないな。」

「よし、じゃあメルキドに跳ぶか。ここで休むより宿屋の方がいい

だろう。」

それが迂闊な提案だと気づくのに時間はかからなかった。

サバイバルの達人？

うわー！それ駄目っ！死ぬー！ー！

俺達は逃げている。地面に振り下ろされた拳は地震の様に地をゆらす。

「おい、学者！話が違つぞ！」

「話は後でいくらでも聞いてやる。とりあえず逃げろー！」

そして今メルキドを目の前にして夜営の準備をしている。まさかルーラでゴーレムの足元に飛び込むとは思わなかった。この間マギーがここに跳ぶと言ったときは思い出して止めさせた。さっきは忘れていた。

「なあ、宿屋で休むのは無理かな？」

「そうだな。」

「学者、お前賢いけど馬鹿だろ。」

「そうだな。」

「さっきからそれしか言わないな。」

「そうだな。」

「いいつつつかげんにしろよ！お前のろくでもない提案のせいでもんでもない目にあつたわ！」

「ああ・・・達人。あんまり大きな声だとドラゴンに見つかる・・・。」

慌てて口を押さえるガイラ。こちら辺にはドラゴン、大魔道、スターキメラ、キラリリカントが生息している。しかし最も強いのがさっきのゴーレム、城塞都市メルキドの守護神・・・だったのは半年前まで度重なる侵攻に故障し、今は無差別にその力を振るう。身の丈10m、重量は不明、火、冷氣、真空、呪詛などほとんどの魔法が効かない。雷がそこそこ効き、爆発はまあ有効だろう。なぜか妖精の笛で寝る。ラリホーが効くかな？試す気にはならない、失敗したらまたさっきの追いかけてこをすることになる。

そして翌朝まで俺達はほとんど口を開くことなく、身を隠し眠った。気休めかもしれないがトヘロスは使う。あまり眠れなくても朝はやってくる。

馬に乗り駆け抜ける。魔物はできるだけ相手にしない。俺の馬が泡を噴いている。

「達人止まってくれ、俺の馬が潰れる。」

ガイラが馬を止める。流石にいい馬だ、強行軍に関わらずまだ元気だ。俺は自分の馬にベホマをかける。人間より体の大きい馬を癒すにはベホマを使わないといけない。思わず馬に声をかけた。

「無理をさせてすまないな。もうしばらく我慢してくれ。」

ライにも癒しをそう思い近づく、流石に息が荒い。こいつにもベホマをかける。昨日からろくにMPが回復していない。ルーラMPを2回、トヘロスMP2、ベホマMP8を2回、まだまだ、まだやれる。

「おい！学者、敵だ。金色のリカント、4体だ。」

くそっ！休ませろよ。馬はまだ駄目だ。

「俺がやる。達人残ったやつがいたら頼む！」

思考詠唱、この呪文は聞かれるわけにはいかない。

（俺はMPを7消費する。MPとマナは混じりて万能たる力となれ！

万能たるマナよ、死神の鎌となりて、我が敵の生命を狩れ！
ザラキ！）

3匹のキラリリカントが突然倒れた。1匹は漏れたか、達人なら大丈夫だろう。仲間を失って動揺している魔物にガイラが詰め寄る。正拳突きが腹にめり込む。蹲るキラリリカント、容赦のない膝蹴りが顎を砕く。仰向けに倒れた魔物の頭を踏み抜く。さすがだ。ガイラの息は少しもみだれていない。

「すげえな、学者。今のはなんだ？」

「すまない。さっきから魔法の使いすぎで疲労が溜まっている。しばらく休ませてくれ。」

疲労を理由にごまかす。ガイラもそれ以上も聞かない。実際短時

間で多くのMPを消費すると頭痛がしてくる。消費したMPはトータルで39、約4分の1。20分ほど休憩、ガイラに声をかける。

「もういいぜ、行こうか。」

再び馬で駆ける。明日には目的地につきたい。逸る気を抑える。あせりは禁物だ。いきなりガイラが落馬した。なんだ？木陰に金色のロープ、大魔道だ。ベギラマをくらったか？ならば！

（俺はMPを2消費する。MPとマナは混じりて万能たる力となれ。）

おお万能たる力よ、不可視の力となり、かの者の魔法を封じよ。）

「マホトーン！」

ガイラに聞こえる様わざと大声で魔法をかける。飛び起きたガイラが大魔道に向かって駆ける。大魔道が口をぱくぱくさせる。馬鹿め！もう詰んだ。

「てめえ、やりやがったな！覚悟はできているんだろうな。」

ガイラの拳が大魔道の頭を打ち砕く。改心の一撃！俺はガイラに近づき、ベホマをかける。ベギラマ一発と落馬の衝撃は軽くない。今は時間が惜しい。薬草での治療をしている暇はない。

「すまない、油断した。しかし普通のコンビネーションだったな。楽しいな。」

「言ってる！なにが楽しいものか。」

しばらく休憩してから出発する。途中ドラゴンをやり過ごす。あの巨体を見逃すのは逆に難しい。さらに先に進む。何度か敵に遭遇する。その度に相手をするがMPの消費が激しい。夜には俺は動けなくなった。夜営の準備、食事の用意、全てガイラに任せる。

「すまん。全部やらせて。」

「謝ることなんかないさ。お前の回復呪文には助けられてる。」

薬草や毒消し草もあるが当然即効性はない。それを補い回復魔法を使う。また敵を倒せばすぐ強くなるわけではない。強くなるのは日々の鍛錬のみ、戦闘経験は自らの力を効果的に使うため、人は一朝一夕で強くはなれない。俺が知っているこの世界はフィクション、しかし俺がいるここは現実。眠くなってきた、最低でも6時間は眠りたい・・・でないとMPが十分に回復しない・・・いつの間にか俺は眠りに落ちた。

はっ！いきなり覚醒した。毛布がかけられている。ガイラは・・・
・ 焚き火の横で座ったまま眠っている。まだ朝には時間があるな。
今度は俺が毛布をかける。ガイラがうつすら目を開ける。

「まだ時間はある。横になってくれ。」

ガイラが横になり俺に背中を向け、丸くなって眠る。俺は焚き火に枯れ木を投げ入れる。

サバイバルの達人？（後書き）

日間ランキング1位、お気に入り登録が1000件突破

読んでくれているすべての人に感謝します。

サバイバルの達人？

今日も馬で駆ける。先程よりメイジカメラがちらほら見えるようになった、もうそろそろだ。

「右前方100m、メイジカメラ4匹だ。」

「やっていいか？」

「駄目だ！数が多い、あいつのラリホーは厄介だ。やり過ぎすぞ。」

進路を左に変える。やらなくていい戦闘はやらなくていい。闘いは遊びじゃない、負けたら次はない。

「駄目だ、追ってくる。やるぞっ！」

ガイラが馬から飛び降り突っ込む。俺は馬を棹立ちにし、向きを変える。メイジカメラが空中で止まる。俺とやつらでは距離がある、魔法を撃つには少し遠い。メイジカメラはガイラを標的に決めたようだ。やつらの必勝パターンはラリホー・・・ならば！

（俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、春の息吹をなりてかの者を目覚めさせよ。

）

「ザメハ！」

ガイラの膝が崩れかける、が再び力が漲る。ガイラの左手が下手

から大きく振られ、一匹のメイジキメラが墜落する。さらにガイラが追撃、喉元を踏みつけ仕留めた。あと三匹！どうにか落とさなくてはいけない。馬を走らせるながら声をかける。

「ガイラ！伏せる！」

（俺はMPを9消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、破壊の力となりて爆ぜよ！）

「イオラッ！」

イオラは発動場所を指定する魔法だ。右手を手綱から放し空中に突き出す。爆発させる場所はメイジキメラの上空！

ドツゴオオオンン！爆音が響く。俺も爆風で落馬する。慌てて飛び起きるとガイラがメイジキメラにとどめをさすのが見えた。とりあえず安心だ。

「おいおい俺まで巻き込むかよ。おかげで真っ黒だ。」

煤で黒く染まったガイラが文句を垂れる。

「警沢言つな、命あつただけ儲けものだ。ちょっとまってる・・・
ベホイミ！」

見た目ではわからないがガイラの負傷をいやす。ガイラが水を取り出し頭からかぶり、布で煤を拭き取る。

「そつだ、命あつてのものだな。しかしまあ自分の魔法で落馬する

とは間抜けだな？」

「久しぶりで距離感覚がわからなかった。実のところ実戦で使うのは初めての魔法だ。」

「まあ詳しいことは聞かない。次はうまくやってくれ、毎回ああなるのは簡便してくれ。」

「善処する。急ごうか？」

先を急ぐ。幾つかの戦闘をこなす。消耗が激しい。そんな時に鎧の騎士が現れた。ガイラがいれば大丈夫であろう。そうだ、いいことを思いついた。

「ガイラ、おとり頼む。しばらく倒さないでくれ。」

「了解、1分待ってやる。」

鎧の騎士、マホトーンを使えたな。じゃあMPがある。マホトラで吸ってやる。

（俺はMPを1消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たるマナよ、不可視の力となりて、我が敵の力を奪え！）

「マホトラ！」

放出された力が鎧の騎士に当たり、MPを引き寄せる。よしできた。ぐあっ！なんだこれは？

「があああー！」

俺は頭を抱え地を転げまわる。感情が入り込んでくる。

（死ね！死ね！死ね！）

（もう嫌だ、もう戦いたくない。殺してくれ！）

（命だ。それをよこせ、よこせ、よこせー！）

（俺は誰だ！ここはどこだ！お前は誰だ！）

俺はのたうちまわる。駄目だ自分を保て、取り込まれるな！これは・・・鎧の騎士に封じられた魂か？死して尚魔物として使われる人の魂か？・・・誰かが俺を呼ぶ。学者？そうだ！俺は学者、戦う学者ケルテン、そうあだ名をつけたのは・・・。

「おい！学者、ケルテン、しっかりしろ！」

「はあ、はあはあ・・・」

這いつくばったまま息を整える。もう亡者の声は聞こえない。俺は座り直し水を飲む。ガイラが心配そうに俺の顔を覗き込む。

「すまない、醜態をみせた。もう大丈夫だ。」

「そうか、どうしたんだ？」

言うべきだろうか？いま戦った相手の正体を。

「おい、何か考えている。俺にも言えないことか？」

「そうか？わかった、言う。だが今後やりにくくなるぞ。」

「いいぜ、一人で抱え込むな。俺なら大丈夫だ。」

「そうか、なら教えてやる。これはある程度想像していたが公表しなかったことだ。」

「今戦った敵、骸骨や鎧の魔物は人間だ。いや人間だった。」

「相変わらずお前の言うことは謎だ。中身からっぽの鎧が人間だと？」

「そうだ。正確には死んだ人間の魂が魔王に惹かれ、魔物と化している。」

「馬鹿な……。」

「今そんな魂が俺の中に入り込んできた。生命への渴望、憎悪、恐怖、そんな感情だ。」

しばらく沈黙が続く。耐え切れなくなったかのようにガイラが言う。

「俺には関係ねえ、俺の前に敵として現れたら倒すだけだ。」

「そうだな、流石純粹闘士。だが心しておけ、おそらく元が強かった魂は同じく強い。死んでも生前有していたスキルは健在だ。同じような外見だからってなめてかかると危険だ。」

「わかった。お前の忠告に間違いはない。」

「ああ今の所はな。余計な時間をとったな。先を急ごう。」

.....

遠くに山が見えてきた、目的地は近い。

「よしこの辺だ。この山に囲まれた砂漠が目印だ。」

「ふうん。そういえば昔倒したのもこの辺だったか？なんとなく景色に記憶がある。昔あの金属を鍛冶屋に持ち込んだ事がある。金になるかと思つてな。」

「使えない。そう言われただろ？」

「ああそうだ。温度を上げてても溶けない上に、硬すぎて加工できない。屑鉄以下だと・・・」

ここアレフガルドで加工できる金属は鉄、金、銀、銅、錫、亜鉛、鉛まででミスリル、ブルーメタル、オリハルコンの加工はできない。ミスリル、特に純粋なミスリルの融点はとても高い。

「まあ、それについてはなんとかする。金属の入手だけしてくれ。」

「わかった。前も言ったがお前さんの知識はすごいな？」

「ふん。前にも言ったが秘密だ。じゃあ俺は行くが、お前も用が済んだらすぐ帰ってこいよ、キメラの翼は持っているだろう？」

ガイラが懐を漁り、キメラの翼を取り出す。おれに見せびらかしながら言う。

「当たり前だ。これを持たずに遠征する馬鹿はいない。」

「OK！無理はするなよ。」

「お前こそな！」

互いに軽口を言い合う。ここは任せればいい。そう判断した俺はマイラの村に跳んだ。

マイラの村

マイラの村についた。ここでの用は二つある。特務隊士シュミットとの顔合わせ、ミスリル加工の準備、そんなところか。まあ今日は疲れたし温泉でも入って休むか？

「いらつしゃいませ・・・今日は一名様ですか？」

「ああ頼む。小部屋でいい。あと厩舎に馬を入れておくから世話を頼む。」

ちよつと待て。今日は？一名？余計なこと言うなよ。どうも顔を覚えられたか。俺は不貞腐れながら部屋に手荷物を放り込む。鎧と刀を外して身軽になる。さて風呂に入ろう。久しぶりに戦闘とか夜営とかしたから汗、泥まみれだ。

温泉に行こうかと部屋を出る。よく見るとこの部屋以外2部屋も埋まっている。へえ、このご時世に泊まる物好きもいるんだな。ここは元々温泉が取り得で平和なときには結構湯治客が全国から訪れていた。この村唯一の宿屋も部屋数は多い。残念ながら今はほぼ開店休業に近いだろう。

まあ余計なことを考えながら温泉に行く。おお客がいる、金髪ロンゲのチャライ男だ。互いに軽く会釈をする。俺は軽く体を流すと湯船につかる。ふう、生き返る様だ。なんかチャライ男が俺をじっと見ている。

「なんすか？なんか俺の顔についてます？」

「お前さん、どっかで見たことあるな？・・・そうか一人だから気

づかなかった。」

「お前もか！俺はそうじゃないけどマギーは目立つ。なるほど迂闊だった。」

「俺もヴィッセンブルンの嬢ちゃんは狙ってたんだけどな。」

「ヴィッセンブルン・・・ああマギーの家がそんな苗字だったな。もしかしてこいつ・・・。」

「失礼、もしかしてシュミット隊士？」

「そうだ、俺がシュミットだ。お前さんがケルテンか、噂には聞いている。」

「失礼しました。特務隊士を拝命しましたケルテンです。」

「めんどい挨拶はいい。俺は女たらしの放蕩者でおっている。素行が悪いから仕事を与えて城から追い出されているようなもんだ。」

「そんなものですか？」

「敬語も要らない。放蕩者だと行っただろ、堅苦しいのはきらいだ。」

「はあ。」

「我ながら間抜けな返事しかできない。拍子抜けしたが用件は済ませておきたい。そう思っていると」

「お前さん、真面目だな。もうちょっと気楽に生きた方がいいぞ。」

「はあ、まあそうしたいんですけどね。平和になってから考えます。」

「それじゃ駄目だ。考えちゃいけない。」

禅の教えかよ。もしかしてこの人意外に深いのかも知れない。このチャラいのは演技か？

「違うよ、これが素だ。事実俺には全ての町に女がいる。格式とか儀礼とかまっぴらだ。」

なんで俺の考えていることが判る？

「お前さん、顔にでてるぞ。まあ大体俺に会うやつは同じ質問をする。別に心が読めるわけじゃない。」

怖いな。この洞察力並じゃない。なるほど、性格はともかく使える人らしい。ならば

「OK!では改めて、シュミット。」

「そうだ、それでいい。でマイラになんか用か？一人で来て楽しい場所でもあるまい。」

「まだ言うか・・・用があるのはあんたにだよ。シュミット。」

シュミットは怪訝な顔をする。やっと一本取れた。

「あんたの勇者達に見込みがあるか？聞きに来た。」

「ふむ・・・やっぱり真面目だな。いいだろう、こっちの勇者はまあ駄目だな。俺がある程度押さないと進まない。未だここで足踏み中だ。ただまったく見込みがないわけじゃないから逆に性質が悪い。そっちはどうだ？」

「ああ三人いるが・・・一人はこの辺にいたはず、強さは問題ないが我が強い、いずれ誰かと衝突する。そのうち止めてもらうことになるだろう。あとはあんたも知ってるだろうが、ガイラはリムルダール辺りでも一人でやれる。」

ここで一息いれる。シュミットが真面目な顔をして聞いている。

「実の所、今一人育てている勇者がいる。名前はアレフ。まだ未成年だがそのうちガイラと組ませる予定だ。ガイラにはもう伝えてある。」

「ふ〜ん・・・面白いことしてるな。今どこだ？一度見ておきたい。」

「ラダトームだ。他の場所には行かせていない。」

「はあ、そんなんで大丈夫か？」

「俺に弟子入りしてきたんでな。半月基本だけをやらせている。」

「半月基本だけか？仮にも勇者に対して厳しい鍛錬だな。普通嫌になるぞ。」

「そうなると思った。だけど腐らず続けている。毎朝6時から2時間間の鍛錬、9時からの魔法の学習。それだけだ。もし会いたければ訓練所か図書館に行けばいい。」

「朝は苦手なんだけどな。わかった、近いうちに見に行く。じゃあ女を待たせてるから行く。」

そういい残すとシュミットは出て行った。軽そうに見えて実は深いところがあるがやっぱりチャラ男か。底がしれない男だな。でもそう言ったら違うと言っただろうな。

- - - - -

もう一つの用件、鍛冶屋に顔を出す。ここにはあの王者の剣をオリハルコンから作り直したジパングの鍛冶屋の末裔がいる。そう思っただけにきたのは3年前か。残念ながら技術は伝わっていなかった。しかし読めない秘伝書はあるとのこと。これを解読、全てではないがそれなりの技術は復興させた。俺の愛刀もここで作ってもらった。

「やあ久しぶり。元気にやってる？」

いかつい顔の親父がいる。いかにもな頑固な職人顔だ。ちなみに名を一字と言う。俺ができた刀を見て菊一字か、正宗かという言っていたら、気に入ったのか改名した。なにか響くものがあったらしい。

「おう、ケルテンか。刀の手入れか？」

「いや、曇り一つないよ。今日は頼みがあつて来た。」

「そうか、まず刀を見せる。俺の仕事の成果を見たい。」

相変わらず武器のことになると回りが見えなくなるな。俺は刀を鞘ごと渡す。渡された刀を真剣な顔で抜く。

「ふむ、確かに曇り一つないな。やはりミスリルはすごい……できれば全てミスリルで作りたいものだな。」

「それだ。今日の用向きはそれだよ。」

刀工一文字の顔が輝く。

「なんだ。ミスリルを持つてきたのか。だせ！」

「おいおい、なんだよ。今はねえよ。今度持つてこさせる。俺の知り合いに今取りに行かせている。そいつ専用の武器を作つてほしい。」

「そうか、楽しみだな。どんなやつだ。いつ来る？」

「うん。いつになるかははっきり判らん。一週間はかかるか？もしかしたら知っているかもしれんがこの辺出身のガイラつて男だ。徒手での戦いを得意としている。」

「記憶にないな。しかし徒手なら武器はいらないだろう。」

「そうはいかないことになったから頼みに来た。だから今素材を取りに行かせている。」

「そうか、判った。今から準備しておく。」
そう言うが速いか、石炭をひっくり返し一つ一つ吟味しだす。あ
あもう駄目だ、きつと話しかけても無駄だ。なんで俺のまわりはこ
んなやつばっか何だろっ？

俺はここを後にした。今日はゆっくりしてから明日朝一にでも帰
ろう。

マイラの村（後書き）

今更ながら感想の返信の仕方を理解、

過去に遡って感想に返信を書きました。

帰還

5 / 19 勇者支援生活19日目

朝一でラダトームに跳ぶ。久しぶりに訓練所に来た。目が合ったアレフが駆け寄ってくる。

「ケルテン師匠、4日ぶりですか？」

「それくらいかな？ガイラに話をつけてきた。いずれお前とコンビを組んでもらう。」

「えっ！いいんですか？私で。」

「ああ！いいか悪いかはお前次第だ。」

「私次第ですか？」

「あいつは弱いやつとは組まない。なんらかの力を示さないと！」

「力ですか・・・期待に添えるよう頑張ります。」

それだけ言うといつもの鍛錬を始める。大分板についてきたな。もう剣に関しては俺から教えることは無さそうだ。あとは実戦訓練か・・・いいかげんスライムとドラキーではあかん。そうだ、魔法はどうなった？とりあえず終わるのを待つか。俺も刀を振る、無心で振る。一通り終わる。アレフがジョルジョと型稽古をやっている。互いに剣を振り合う。型稽古だから殺陣みたいに全て決められた順にやっているだけなのだろうが、はたから見ると激しい戦いの

様だ。互いに礼をして終わる。

「アレフ、魔法はどこまで修めた？」

「使うだけならベギラマまで全て、まだ口述詠唱ですが。」

「なるほどね、よし続ける。卒業は近いな。」

「本当ですか？」

「ああ嘘は言わん。俺を卒業したらガイラの試験。それで実戦開始だ。」

「じゃあ、朝食をとって速く図書館へ行きましょう。」

アレフが食堂へ駆ける。急いでも9時になるまでの時間は変わらない。

- - - - -

王立図書館　マギーがつまらなそうに空を見ている。手元の魔術書を見る。付箋でいっぱいだ。行き詰っているな。

「ただいまマギー！いま帰ってきた。宿題は終わったのかい？」

俺を見るとマギーの目が輝いた。

「もう遅い。あなたのせいで2日は無駄にしたかもしれないのに。」

「ひどい挨拶だな。お帰りくらい言ってもよくないか？」

「じゃあ、お帰り。今日こそ話を聞いてもらおうよ。」

「OK、OK。アレフの魔法を見てからな。君の生徒の上達とやらを見せてもらおうか。」

「いいわ、アレフ見せてやりなさい。」

アレフが図書館の隅にある魔法実習室で木偶に向かって魔法を放つ。なるほどギラの扱いは大したものだ。ピンポイントの攻撃までできるか。ラリホーやマホトーンの効果は判らないが発動はしている。よし、ちよつと痛いが的になるか。俺は木偶の隣に立つ。

「アレフ、俺に向かってベギラマを撃て！口述でかまわん。」

「えっ！痛いじゃすみませんよ。」

「判っている。それでもやれ、俺を敵だと思つてな。」

「ちよつと危ないわ、止めなさいよ！」

マギーが止めさせようとす。俺は真剣な目でアレフを見る。アレフがマギーを押しつける。もしアレフにこれができないならもう勇者は続けさせない。先日の鎧の騎士の件もある。やさしいのは美点だが戦場では役に立たない。敵と判断したら俺でも撃て。そう目で語りかける。

「やります。・・・私はMPを5消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能なる力よ、雷となり我が敵を撃て！べ

「ギラマツ！」

ラストワードとともに俺に向かって右手を突き出す。右手から稲妻が俺を襲う。があああ！判っけていても痛いものは痛い。この魔法は本当の名はライダーン、HPに80ポイントのダメージを与える。俺のHPはC+、およそ150。半分以上持つていかれる計算だ。痛みを耐えアレフに言う。

「よし、次だ俺にベホイミを。」

「はい。私はMPを10消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、血肉となりこの者を癒せ！ベホイミ！」

アレフの手が俺に当てられる。痛みが引いていく。

「よしいいぞ。後は思考詠唱ができるようにしろ。」

「はい、でももうこんな無茶止めてください。」

「あんた馬鹿よ！死んだらどうするの？」

二人とも涙目だ。

「すまないな。試さないといけないこともあるんだ。俺の計算では死ぬことはない。はずだ。」

「馬鹿！」

おれにビンタが飛ぶ。避けるのはわけないが避けない。俺が馬鹿なのも悪いのも判っている。

「ゴメン。もうやらない。」

俺がマギーを抱きしめる。アレフが後ろを向いて見てないふりをする。

魔法談義？

俺は今とても困っている。

「ああもう泣き止んで。せつかくの美人が台無しだ！」

どうしたものか？これではこの間の戦闘の話なんかしたらとんでもないことになるな。子供みたいな過保護な扱いされたくない。ならばアレフと同じく鍛えるか。肉体でなく心を・・・仮にも筆頭魔術師、目の前の出来事に心を乱されてはいけない。できないなら、深窓のお嬢様に戻せばいい。

「よし！じゃあこの間の続きだ。俺の魔術書の解説をしよう。なっ！そうしよう。アレフ、黒板用意してくれ。お前にも講義してやる。」

マギーを座らせ、アレフと講義の準備をする。今の魔法と失われた魔法の相違点に関する俺の考察、これを聞けば、好奇心が勝るはず。まず黒板にホイミの呪文を二つ書く。左に現行、右に旧魔法。

「ではこれ！左が君らが使ってるホイミ、右が俺の使うホイミ、マギー違いは判るか？」

少しためらってからマギーが話す。

「うっうん。それ例の魔道書の最初のページにあったホイミ。普通のは消費MPが4、でもそれは3、どういことかしら？この前聞こうかと思ったの。」

狙い通り好奇心が勝ったようだ。

「そのとおり、これは純粹に伝承の間違いかと思う。これ以外にも消費MP10のベホイミは実は5ですむ。」

「でも他のギラ、ラリホー、マホトーンも違うわ。」

「いいところに気づいたね。実はギラとその他の魔法の消費MPの違いは理由が異なる。」

「理由が違う?」

「マギーが少し首を傾げる。隣のアレフはぼかんとしている。ここで黒板を消し、ギラとベギラマを同じ様に新旧並べて書く。」

「さてマギー、多分気づいていると思うけど相違点は?」

「ええ、これは気づいたわ。ラストワードが違う。今までギラとしていた魔法は文字からするとメラ、同じくベギラマはライデインとあるわ、これはどういうこと?」

「そのとおり、なんと別の魔法だ。ギラと呼んでいた魔法はメラ系の初級にして初歩の初歩の魔法。これに対してベギラマはなんと勇者にしか使えないと言われたライデイン。何がどうなったか判らないがこれが真実だ。」

「ふ〜ん、メラ系とか前に言っていたギラ系とかは、更に発展形があるってことよね?」

「あるよ。メラ系はメラ、メラミ、メラゾーマと発展する。消費M

Pは2、6、12と順に多くなり、威力はメラ基準で10倍、20倍といったところか。」

マギーは興味津々で、アレフは真剣に話を聞いている。

「さらにデイン系の魔法、これはライデイン、ギガデインとある。同じ魔法とは思えないが雷を操る類似の魔法だ。消費MPは8、30だ。MP30なんて気軽に使えないね。」

「類似するつてのはどういう意味？」

「いい質問ですね。ベギラマことライデインは手から稲妻を射出する。だけどギガデインは天から雷を落とす。まさに”天を裂き地を割る”の表現が正しい魔法だ。」

「でもそんな魔法使ったら味方にも当たるとのじゃなくて？」

「そうだね。こういった範囲魔法は器用に味方を避けてくれない。使いどころが難しい魔法だ。まあ詠唱文は魔術書とにらめっこしてくれ。それとアレフは無理に覚える必要はない。」

「ええっ！覚えなくていいって？」

「お前なあ、自分の総MP判ってるのか？」

「あっ！そうでした。・・・でもさっきの話だとベホイミの消費MPが半分で済むので助かります。」

「ああそうだね。実はさらに上級の魔法がある。ベホマっていったんな状態からでも無傷に戻る。」

「それ聞いてない。」

「今始めて言ったからね。自分で学習すること。ちゃんと書いてある。」

「うっ、そうだけど・・・でもパワーワードが判っただけでも収穫ね。」

しまった、情報を与えすぎたかな。

「まあそれはいいとして、次にラリホー、マホトーン。これは先と違って現行魔法の方が消費MPが減っている。」

「減ってる？なんで？」

「ん、これは戦闘における使用法の違いによって変わったのか・・・ロトの時代には集団戦が主だったが、平和になってからは騎士同士の個人戦が主流になったことに原因があると思われるかな。」

二人とも全く意味が判らないといった顔をしている。自分でもよくわかってないからね。

「簡単に言うと、旧魔法は範囲魔法、現行魔法は単体魔法。だから現行魔法の方が少なくて済む。どうしてそう変化したかはともかく実質そうなっている。まあMPだけでなく詠唱内容も変化してるから気にしないでいい。両方使えると状況によって使い分けることができるから便利だ。」

「なるほどね、それは気づかなかったわ。細かい文法はまだ理解で

きてないから……でも参考になつたわ。」

「俺はアレフにこういった補助魔法を使いこなして欲しいと思っている。ガイラは純粹闘士だから魔法は使えない。あいつは突っ込むしか能がないからもう一人が全体を見て、有効な魔法を使うべきだ。実際俺が組んでいたときもガイラが前衛、俺が遊撃で有利な状況を作った。」

「有利な状況ですか？」

「そうだ。実のところ一番怖い魔法はラリホーだ。寝てしまつたらいくら強くても終わり。だからラリホーを使う敵がいたら真っ先に倒すか、ラリホーかマホトーンで封じる必要がある。あと敵の前衛を眠らせたり、味方の負傷を癒したり、俺がよくやる囷としての魔法の使用だったりで、戦況のコントロールが勝敗を分けた。」

「難しいですね。私にできますか？」

「できないなら剣を捨てる。最悪ガイラや俺が目の前で倒れていたとしても、なんとかかできる方法をかんがえろ。それが逃げることも一向に構わない。常に冷静でいろ。」

これはマギーにも言っている。今日はこのぐらい言っておけばいい。

「まあ、最悪王家の秘法で蘇生できるからいいか。でもあまり遠くまで迎えに行くのは簡便してもらいたいな。」

「心しておきます。」

二人とも神妙にしている。

「まあ難しい話はこの辺で終わろう。いずれ判る。じゃあ実際に魔法を見せるぞ。他言無用な！」

俺たちは魔法実習室に入った。

遠征

5 / 20 勇者支援生活 20日目

いつもの朝の訓練所である。もう特に教えることもないので自分の鍛錬だけ行なう。んっ？出入口が騒がしいな。人垣が真つ二つに割れ、貴族服と護衛2名、取り巻き3人、計6名が歩いてくる。ああフレーゲルだ。こんな所に何の用だ。自分の屋敷に引っ込んでるよ、謹慎中だろ？そう心の中で罵る。なぜかこっちに向かっているような気がする。やばい目を合わせるな！

「先日は世話になった。礼を言う。」

俺の願いむなく、俺の前にふんぞり返ったフレーゲルがそうのたまう。世話をした覚えもないし、第一礼をするなら、”ありがとう”とか、頭を下げるとか、金をよこすとかいろいろあるのではないかと・・・はあ返事待ちですか？後ろの取り巻きがプルプルしている。そろそろ何か言っておくか。

「いえ、差し出がましいことをしました。お恥ずかしい限りです。」

「そうか、こちらこそ王族の心得勉強になったぞ。これからも父上をよく補佐してくれ。」

「はっ！かしこまりました。」

言いたいことを全て終えたのか、踵を返して立ち去っていく。取り巻きが一睨みしていくのはまあご愛嬌つてもんでしょうか？いまいち納得いかないが嵐が去っていくのは歓迎する。しかしまあ、我

ながら心無い返事をしたものだ。

「あのくあの人、一体何しにきたのでしょう？」

「あゝ、あの人って言わないほうがいいぞ。あれでも王位継承権3位、国務大臣の長子フレーゲル様だ。」

「はあ、その割には1mmも尊敬の念が感じられませんか？」

「わかる？」

「それはもう。顔に書いてありますよ。」

思わず自分の顔を撫で回す。

「この間、城中でこっぴどくやりこめてやった。今謹慎中のはずだ。向こうも俺の顔なんぞみたくもないはずなんだけどな！」

「大丈夫なんですか？」

「うーん・・・どうなんだろうね。反省して謝りにきたと考えていいのかな。」

「判りません。そんな偉い人に知り合いませんから。」

二人して首を傾げる。まあ悩んでもしょうがない。俺も嫌いだし、あっちも俺のことなんか歯牙にもかけていないはずだ。放っておこう。

「そうだ。今日は昼から俺もついて行く。そろそろ大臣にそれなり

の成果を報告したい。」

「いっしょに戦えるのですか？」

「いや、俺は見てるだけだ。とりあえず昼1時にここに来いよ。」

アレフが納得いつていないようなので適当に切りあげる。昼までにしばらく城を開けることを各所に挨拶しておくか。

.....

昼すぎ、俺は兵舎前で馬を二頭用意して待っている。馬には夜営用の道具を載せてある。さっきはわざと言わなかったが3、4日ほどの遠征をするつもりだ。しばらくするとアレフがやってくる。意外な重装備に驚く。

「これからマイラ付近まで行く。馬には乗れるな？」

「えっ？そんな所まで行くんですか？何も用意してませんが？」

「かまわんよ、現地調達すればいい。」

「判りました。馬には乗れます。行きましょう。」

あまり納得していないようだが知らないふりをする。意地悪だが実際にはもつと理不尽なことが多い。

「よし行こう、しばらくは駆けるだけでいい。特に相手にしたい魔物もないし。」

俺が先に駆ける。アレフは黙ってついてくる。馬の扱いは慣れていないらしい。とりあえずは乗れてはいるが、股が痛いらしい。時々馬の休憩も兼ねて降りて歩く。アレフが痛む所にホイミをかける。

「いずれ慣れる。慣れてもらわねばならん。」

「ええ、判ってます。」

「あと馬の息も気にしておけ、馬を潰すなよ。じゃあそろそろ駆けるぞ。先に走ってくれ。」

今度はアレフを先に走らせる。馬の様子を見ながら駆ける訓練でもある。さつきは俺が馬の様子を見てペース配分を決め、疲れる前に休憩させた。わざわざ説明したりしない。馬の息があらいい、少しペースが速いか？すまないな、しばらく我慢してくれ。馬にそっと話しかける。しばらくして速度が落ちてきた。

「アレフ、止める。馬が潰れる。」

「はい、まだ行けますが？」

「どうも俺の馬の方が劣るようだ。お前は自分の馬は見ていたが俺の馬は見ていない。」

「すみません。気づきませんでした。」

馬から降りてベホマをかける。それでも今日はもう無理をさせない方がいい。体力はともかく馬の気力が持たない。それに日没が近い。

「それはいい。次から気をつければいい。今日はここまでだな。よし水場を探してくれ。馬も頼む。俺は食い物を探してくる。」

そう言っつて自分の馬の手綱を渡す。アレフが怪訝な顔をしている。

「早くしないと日が暮れるぞ。水場を見つけたら次は火をおこしておけよ。薪は馬に積んである。」

それだけ言い残すと俺は獲物を探す。魔物が出るようになってから野生の動物は少なくなった。獲物がいなければ食べられる野草などで腹を満たすしかない。今日は俺がやるが明日はアレフにやらせる。こんなことはガイラが得意なのだがなあ。

取ってきたのは蛙と野草、それを火で炙り塩をかけて食べる。そう嫌な顔するなよ。食べるだけでしたが。馬は遠慮なくその辺の草をムシャムシャ食んでいる。アレフガルドの夜は速い。竜王に光の玉を奪われてから特に顕著だ。もう8時ぐらいか。

「俺が先に見張りをしておく。お前は寝ろ。夜中になったら起こすぞ。いいな。」

「トヘロスは使わないのですか？覚えたばかりなので使ってみたいのですか？」

「それもありがただが今回は無しだ。そういう訓練だ。帰ったらサイモンに自慢できるぞ。」

「判りました。それでは先に。」

アレフが毛布をかぶって横になる。少し腹を立てているかもしれない。悪いな、俺の馬が遅いのも、食い物を持ってきていないのも、最低限の食い物しか獲ってこなかったのも全部わざとだ。もっと困ったことはいくらでも起きる可能性がある。俺がいるうちに困っておけばいい。深夜2時くらいになったら起こしてやる。アレフは6時間は眠れるはずだ。俺は火を絶やさぬように薪を足す。

遠征の目的

5 / 21 勇者支援生活 21日目

眠い。俺は4時間ほどしか寝ていない。それでも起きて、いつもの鍛錬を行なう。食事は昨日の夜の残り。

「アレフ、出発前に薪を集めてくれ。」

「判りました。探してきます。」

俺は水筒に水を詰める。馬の分もあるので結構面倒だ。ちなみに本当の意味での水筒だ。なんせこのアレフガルドには竹槍があるくらいだから、水筒は竹の節を抜いたものを使う。しばらくしてアレフが薪を持って戻ってくる。縄でまとめて馬に縛り付ける。

「よし行こうか、今日も先に行ってくれ。」

「はい、今日は馬を潰しません。」

俺は馬に飛び乗り、無言で手を前に振る。アレフが先に駆ける。時々こちらを見る。こちらの馬の息を確認しながら必要に応じて休憩をしたり、降りて歩く。少し慎重すぎるくらいはあるがもう同じ間違いはしないようだ。思わすニヤリとしてしまう。

昨日も今日も魔物は相手にしていない。スライムやドラキーは無視して駆け抜ける。あっちも駆け抜ける馬にはついてこれない。橋が見えてきた、そろそろマイラと海底洞窟の分岐点だ。

「よし、アレフ。橋を渡ったら降りるぞ。目的地だ。」

アレフが無言で手を挙げる。ずっと馬に気を使ってきて精神的に疲れているのだろう。

「ここから北へ行くとマイラだ。馬なら3時間くらいか。で、東に進むと毒の沼地が広がる。それを抜けると海底洞窟がある。リムルダールへ続いている。行くなら徒歩だ。残念ながら馬は毒の沼地に入る事を嫌がる。」

「どうやってリムルダールに物を運んでいるのですか？」

「もつともな質問だ。竜王が現れるまでは普通の泥濘だったんだがね、魔王の瘴気のせいか毒の沼地が変わった。以来リムルダールに訪れるものはほとんどいない。もちろん物も入ってこない。」

「そうですね、やはり早く竜王を倒さねばなりませんね。」

「そうだ。ならもつと強くなれ。この辺から魔物が強くなる。明日の夜までこの辺で狩れ。」

「判りました。では馬は頼みます。」

アレフが馬を預け自分の装備を確認する。歩き出すアレフに声をかける。

「途中食える獲物がいたら狩ってきてくれ。それが今日の夕食だ。俺はここら辺で野営の準備をしておく。」

アレフが張り切って歩いていく。この辺の魔物なら問題ないだろ

う。がいこつには苦戦するだろうか？あとで聞いてみよう。俺は野営の準備をする。もしもの雨を避けられる様濡れぬ場所を確保する。あとは焚き火をする。馬に草を食ませる。眠い、少し眠るか。トヘ口スをかけ安全を確保してから目を瞑った。

誰かが近づいてくる気配で目が覚めた。アレフか。

「どうだった？この辺の魔物は。」

「それなりに相手できるってところでしょっか。」

「それなり、とは？」

「おおさそりは武器がともに効きません、メイジドラキーも空中から魔法を使ってきました。この2つの魔物にはギラを使っていますから消耗が激しいです。魔法使い自体は強くありませんが、やはり魔法は曲者です。ホイミが欠かせません。」

アレフが疲れた顔で語る。まあ予想通りだ。

「がいこつには会ってないか？」

「見てませんね。どんな感じですか？」

「そうだな・・・嫌な相手だ。感情がないから動きが読めない。それでいて技術は持っている。」

「そうですか。気をつけます。」

「焦ったり侮らなければ怖い相手ではない。それはそうと夕飯は？」

アレフは布の袋から兎を取り出した。少し焦げている。

「ギラで仕留めたか、昨日よりはマシなものが食べれるな。捌けるか？」

「できます。やりますので休んでいてください。」

「わかった。お前に任せる。明日はもう少し北へ移動する。しっかりと食っておけ。」

アレフが夕飯の準備をしている。ふん、俺に気を使うとは生意気な、自分も疲れているくせに。だがそれでいい。ガイラに自信をもつて渡せる。さあ食事の準備ができたようだ。

「さっきMPの消耗が激しいって言ったな。ちなみに飛んでる魔物にはこんな方法がある。」

俺は落ちていた石を近くに投げつける。ガイラの見よう見まねだ。

「これで落とす。ガイラがこうしてた。」

「投石ですか、あまり威力は期待できませんが？」

「ああ俺は得意じゃないからな、ガイラのは飛礫とってもっと速さも威力もある。」

食事が終わる。今日はもう寝る時間だ。

「今日も先に寝ておけ。昨日と同じ位におこす。」

「では先に寝ます。おやすみなさい。」

トヘロスを使っていることは秘密だ。緊張感のなか寝ろ。

.....

朝だ、今日も眠い。日課の鍛錬はやる。何があってもアレフの前では泣き言は言わない。

「今日は薪を集めなくていい。今日の夜にはラダトームに帰る。マイラが見える辺りまでで行こう。」

「先行します。ついてきて下さい。」

「生意気だな。OK、ついて行こう。」

2時間は走っただろうか、遠くにマイラの村が見える。この辺でいいか？

「よしいいぞ。この辺から別行動だ。馬は連れて行くぞ。」

「では私はこの辺りから魔物を探します。」

「ああ、しばらくはマイラにいる。日が落ちたらラダトームに戻れ。キメラの翼はあるか？」

「・・・？ルーラが使えますが。」

「疲れて使えない場合もある。護身用に一つ位持っておけ。ほらっ
！」

俺は懐からキメラの翼を取り出すと、アレフに投げつけた。

「すみません。借りておきます。」

今日が終わったらきつとアレフはいろいろな意味で前より強くなっている。そう確信した俺は馬を引いてマイラに向かった。

重体

俺は今ラダトーム城下町の入り口にいる。ルーラの基準石のある場所でアレフが戻ってくるはずだ。果たしてアレフは戻ってきた。顔に疲労がみえる。

「疲れただろう。今日は帰って寝ろ、何か報告があるなら明日にでも聞く。」

「はい、では失礼します。」

重い足を引きずる様にアレフが歩いていく。定宿にでも行くのだろう。戻ってきてほっとした。もしかしてもしかすることがないわけではない。ならずっと見ていればいいとも考えたがそれも駄目だ、過保護になりかねん。俺自身が否定したことをアレフには押し付けたくない。さて俺も宿舎に帰ろう。

ジョルジョが兵舎の番をしている。なんかそわそわしているな。

「戻りました。何かありましたか？」

「お待ちしておりました、昨日の夜から何度もケルテンさんがいなかと問い合わせがありました。」

ジョルジョが慌てたように言う。俺に客？ガイラか？特に急ぐ話はないはずだ。

「誰だった？もしかしていかつい男か・」

「いえ、城下町の宿の方の使いです。1時間おきに何度もです。帰ったらすぐ来て欲しいと伝言を承っています。」

「わかった。馬を頼む。」

馬を預け、宿に向かって走る。あの宿の親父が伝言で急いで来いだと？・・・何が起きた？気が逸る。蹴飛ばさん勢いで宿の扉を開けた。

「学者か？よく戻った。」

「何がおきましたか？急ぎの用みたいですが。」

「ああそつだ、こつちだ。昨日ガイラが担ぎこまれた。重体だ！」

親父が部屋に飛び込む。俺も急いで入る。重体だと・・・そこには全身包帯でぐるぐる巻きのガイラが寝ている。意識はない。

「どういうことだ？説明してくれ。」

「昨日夕方、町の入り口に血みどろで倒れていた。とりあえず応急処置はしてあるが、右足がひどい。」

「右足の具合は？」

「ああ膝から下、中ほどで完全に折れている。お前の言ったた開放性骨折ってやつだ。無理にあわせて添え木がしてある。」

「判った。それでいい。あとは？」

「頭から上半身にかけて火傷がひどい。こいつの持っていた薬を塗って様子を見ている。魔法で治療がまともに行ける知り合いはお前しかない。そう思ってお前を探していた。」

俺は包帯を少しめくり火傷の具合を見る。範囲が広いがホイミを数回かければいいたろう。この場合回復力の強いベホイミやベホマをかけると全身場所を選ばず回復してしまう。折れている足が折れ曲がったままくつつくともう直しようがない。手間だが少しずつ直すしよう。

俺は包帯を切り取り、何箇所かに手をあてホイミを唱える。少しずつ火傷のあとが消える。

「これで火傷は大丈夫だ。まだ熱があるからしばらくは安静にしないではいけない。もしかしたら感染症があるかもしれない。」

「あっああ。よく判らんがここで様子を見る。任せてくれ。でも足はどうなんだ。」

俺はガイラの脚の包帯をとり添え木を外す。痛むのか、ガイラがうめき声をあげた。

「つつ！悪いな。へまをした。」

「気づいたか、しゃべらなくていい。少し痛むが我慢しろ。」

ガイラが左腕を軽く挙げる。俺はガイラの右足に両手を当て探る。ガイラがうめき声をあげる。うん、骨の合わせ目はずれていない。これならベホマで直せるな。

「どうやら応急処置がよかったです。魔法をかけます。」

俺はベホマをかける。これで大丈夫だ。

「もう大丈夫です。しかしまだ熱も引いていません。明日迎えに来ます。それまで絶対動かないようにして下さい。」

「わっ判った。宿の者に面倒見させる。何、ひっぱたいてでも動かさせん。」

「というわけです、ガイラ。屈辱的かもしれませんが言う事はきいてください。」

「く、屈辱的？」

「ああ、便所も自分で行けません。」

ガイラと宿の親父のあつ！と声を上げる。

「異論は認めません。あともう眠りなさい。………ラリホー！」

不意打ち、さらに体力が落ちているガイラは抵抗できずに眠りにつく。俺たちは部屋からでた。

「実は動いても問題ない程度には治ってます。ただ体力が落ちていますから休息が必要です。あとこうでもしないとまた無茶をしますからね。」

宿の親父が呆気に取られている。

「お前、やっぱり悪辣だな。」

「悪辣とはひどいな。治療までしてやって、心にも薬をやったのに」

「子供には苦い薬か？」

「ええそうです。あいつは少し自信過剰なところがあります。バートルジャンキーでね、戦いこそ我が人生。うらやましくもあるが、それで死なすには惜しい友人です。」

「そういうことにしとくか。明日まで責任もって預かる。それからどうする？」

「しばらくマイラでも湯治をさせます。回復には時間がかかりそうですね。」

「マイラの湯か、俺も行きたいな。」

「いずれ平和になったら行きましょう。では俺は帰ります。」

俺は宿舎まで歩く。三日ほどまともに寝ていないもう限界だ。なんとなく足を引きずるように自分の部屋まで帰る。ベッドに倒れこむ。意識が途切れた。

とんぼ返り

5 / 23 勇者支援生活 23日目

朝目覚める、ものすごく腹が減っている。昨日は疲れて飯も食わずに寝てしまった。とりあえず食堂に行き肉を喰えてから訓練所に行く。アレフはもう鍛錬を始めている。

「おはよう。」

肉を喰えたまま、声をかける。

「行儀が悪いですよ。ケルテン師匠。」

「そうだな、昨日あれから大変でね。さっきまで死んだ様に寝てた。」

「大変？もしかして私のことで迷惑をかけましたか？」

「違う違う、ガイラの件だ。怪我で宿に運ばれていた。」

「・・・あの部屋ですか。急病人がいると聞いてました。」

「まあそんなところかな。それでまたマイラに行くことになった。やつを休ませる。またしばらく戻らないから自分で予定をきめて動いていぞ。」

「そうですか、大変ですね。予定ってどうすれば？」

「そうだな・・・今いくら貯まった？」

「1500Gは預かってもらってます。手元に200Gちょっとあって、昨日までの素材を売れば全部で2500ぐらいになるかと。」

「そうか、結構貯めたな。じゃあガライへ行って鉄の盾を買って来るといい。そろそろ装備を整えよう。」

「剣や魔法の修行はもういいのですか？」

「そうだな。もう自主訓練だけでいいだろう。ただその旨はマギーには伝えておけ。」

アレフが首を傾げる。

「伝えてもらえないのですか？」

「今から馬を手配してガイラを迎えに行く。あまり時間がないからもう行く。じゃあな。」

それだけ言うと訓練所から飛び出す。少しして戻る。

「ああそうだ、遠征するときにはマギーかサイモンに予定だけ伝えておけ、俺が戻ってきた時予定がわからないと困る。じゃっ！」

.....

宿屋に来ている。中が騒がしい。扉を開ける。ガイラが暴れている。

「学者とめてくれ！この馬鹿、言うことを聞かん。」

「ガイラ五月蠅い。いいかげんにしろ！子供か！」

怒鳴りつけてやった。昨日死にかけていた癖に。

「学者聞け！、俺はもう自分で歩けるし、誰の世話もいらねえ！」

「救いがたい馬鹿だな。まだお前の体の中には毒が残っている。放っておくとそのうち仰け反って死ぬぞ。聞いたことないのか？大した傷じゃなくても死ぬ病だ。」

正確には違う。破傷風菌の概念なんぞアレフガルドにはないが経験測では知っているだろう。しかし破傷風菌にキアリーは効かないかな？それ自体は毒じゃないし・・・菌が出す毒にだけ効くとかありえるな。ガイラが黙り込んだ。

「・・・そんな感じで死んだ同門がいるらしい。最後は弓なりになつて死んだと聞いている。」

「それだ。しばらくは様子を見る。毒は毎日俺が抜く。その間はマイラで湯治三昧だ。激しい運動は禁止、いいな。」

「マジか、体が鈍るな。」

「つくづく馬鹿だな、武闘家ガイラメイジキメラに死すつて墓に書いてやるつか？」

「嫌なことを言う。わかったよ。でもじっとしているのは性に合わ

ん。」

「ふん！別にそれだけが用事じゃない。例の物は持ってきたんだろ
うな？」

「2匹分ある。欲張ってもう一匹と思って山を散策していたら崖が
崩れて落ちた。そこをメイジカメラに襲われた。カメラの翼がなか
つたら死んでいた。」

「阿呆、馬鹿、強欲、そんなことだと思った。無理はするなといっ
ただろうが！」

「面目ない。」

ガイラが小さくなっている。俺が本当に怒っているのが判ったら
しい。

「もういい。マイラに行くから準備しろ。5分で用意しろ！」

.....

厩舎で馬に荷物を載せている。ガイラはふらついている。さつき
はよく暴れていたな。

「しばらくは馬で進む。辛いだろうがしっかり掴まってる。」

「なあ、お前の魔法で跳ぶわけにはいかんのか？」

「あれは便利すぎて公表したくない。対外的には馬で移動すること

「になつてるから我慢しろ。城が見えないところまで行ってから使つ。」

「そうか。わかった。」

俺たちは馬を並足で進む。ずいぶんゆっくりとしたペースだ。

「しかしまあ、お前の馬もよく戻ってこれたな？」

「ああ、メイジキメラに襲われていた俺を啜えて走つたんだ。それでキメラの翼を使えた。命の恩人だ。」

「ライは主より賢いな。まあそれはいい。マイラに行くのはもう一つ用がある。お前の武器を作ってもらふ。これも時間がかかるから丁度いい。」

「そうかそれは楽しみだ。」

「馬鹿！馬上で素振りをするな！しばらく安静だろうが……。」

「いや、楽しみで思わず。」

「馬鹿につける薬はないな。馬鹿ついでに聞くがこの間の魔物の素材はあるか？」

「あるぜ、メイジキメラの翼だろ、影の剣、魔物の兜、死の毒針。」

ガイラが馬にぶら下げた袋から一つずつとりだしながら言う。

「それ絶対出すなよ。」

「なんでだよ？金になるだろ！」

「やっぱり馬鹿だ。どうやってそこに行ってきたんだよ！」

「あっそうか！」

「勘弁してくれ・・・しかしそうだと死にそうになったのは好都合か。」

絶句。そうだろう、死にそうになって良かったって言ってるんだからな。

それからしばらくどうでもいい話をしながら進む。城が遠くに見える頃になってルーラで跳んだ。

武器発注

マイラの村、宿屋で二人部屋を取る。こいつと二人きりというのはぞつとするが、何か起きたらすぐに治療を行なわなくてはならない。おれは真剣な顔でガイラに語る。

「ガイラ、あらかじめ言っておく。今はまだ発症していない病がある。発症したら生き死には五分の病だ。実感は沸かないかもしれないが認識しろ。ここまでは判るか？」

「今はなっていない病気があって、病気になったら死ぬかもしれない。であつてるか？」

「そうだ。ならないかもしれないが、それがはっきり判るまで最大で三週間かかる。それを踏まえてお前が好きにやりたいなら好きにしている。だがその場合は一人で死ぬ。俺はお前を看取る気はない。」

「判った。お前がそういうなら正しいのだろう。俺の体を預けよう。」

「よし、今現在の発熱、悪寒、眩暈は火傷や骨折によるもので、これから起きることとは関係ない。魔法で皮膚や骨を直したが失われた血は失われたままだ。これからは次の症状になったら即言え。舌がもつれ会話に支障がでる、顔が引きつる、筋肉の強い痛みなどが深夜だろうが構わないから起こせ。」

「よく判った。これは俺の中の闘いなんだな？」

「そうだ。体の中にできた毒は俺が消す。だがその毒を出す目に見えない何かは、お前の体力でしか勝てない。食欲はないかもしれないが食え。体力が尽きたら終わりだ。」

「そうか・・・闘いなら負けるわけにはいかないな。」

ガイラの目に光りが宿る。闘いを前にしたガイラの目だ。

「ならばもう一つの用事に行こう。ミスリルを出してくれ。」

ガイラが袋を漁る。メタルスライムの残がいを取り出す。すごいな、殴ったと思われる箇所がへこみ、反対側が破裂している。

「これだ、この通り二つある。」

「OK！それでどんな武器がいい？」

「やっぱり殴る武器がいい。棍や爪は性に合わない。」

俺は手持ちの紙にDのような形を描く。

「ならばこんなのはどうだ。こっちのまっすぐの方を握りこみ反対側で殴る。」

「ちょっとイメージがわからないな？」

「じゃあこれではどうだ？」

手持ちのタオルを自分の手に巻く。拳を握り巻いた布の部分でガイラを殴るふりをする。

「なるほど、布では意味ないが硬いミスリルなら効果的かもな。」

「更にこっちの打撃面に棘なり刃をつける。これでこちらより硬い敵に効果的にダメージを与えることができるだろう。」

「で、これはなんと言う武器だ？」

「ナツクルダスターとかサツクとか、単純にナツクルとも言つ。ミスリルナツクルとでも名づけるか。」

「なるほどミスリルナツクルか、楽しみになってきた。」

「そうか。なら鍛冶屋を紹介する。ついて来い。」

独特の何かが燃える匂いがある。村はずれの小屋にガイラを案内する。

「ここだ。職人らしい頑固な親父だ。機嫌を損ねるようなことは言
うなよ。」

「そついわれでも判らん。」

会った事ないから判るわけないか。まあいや、ミスリルを見ればやる気になるだろう。

「おいケルテンだ。入るぞ！」

大声を出して小屋の扉を開ける。普段から鎚の音や火のせいで耳が少し遠い。いつもここでは大声だ。

「おう、ケルテンか。今石炭を蒸している。」

「そうか。客を連れてきた。こいつがガイラだ。」

「ガイラだ。よろしく頼む。」

鍛冶屋の親父がガイラの全身を舐めるように眺める。

「いい体つきだ。少し元気がないが大丈夫なのか？こいつ。」

「ああ先日大怪我をしたばかりだ。まだ本調子じゃない。それよりミスリルを持ってきた。ガイラ出してくれ。」

「おう、これだ。」

ガイラがミスリルを差し出す。鍛冶屋が目をむく。

「なんだこれは！スライムみたいな形だな。」

「ああそうだ。実はメタルスライムというスライムの表皮だ。倒すのは結構大変だ。それを二つ用意してきた。もちろん倒してきたのはこいつだ。」

「そうか、世の中には変な魔物があるのだな。一つ試していいか？」

「ああ、なんだ。」

「こいつの一撃を見たい。」

ガイラが俺を見る。

「いいのか？ 安静だろ。」

「いい。どうせ言っても聞かない。この親父は力量の足りない者に武器を売らない。そのメタルスライムを殴れ。それで力量が知れる。」

ガイラが殴りやすいようメタルスライムの残骸を台の上に置く。念の為、親父をガイラの後ろに下がらせた。俺は残骸の横に立つ。

「よし、ここだ。思いつきだぞ。」

ガイラが腰を落とした構えを取る。心気を整える、正拳突き。普通は金槌で叩いてもへこまないミスリルが一撃でへこむ。鍛冶屋の親父がへこんだ残骸を触る。

「なんて一撃だ。」

「親父、合格か？」

「もちろんだ。鍛冶屋冥利に尽きるとはこのことだ。せひやらせてもらう。断ることは許さん。」

「そうか、よかったなガイラ。お前合格だったよ。お前はどつだ。」

「おっおっ！頼む。」

二人が固く握手をしている。暑苦しいな、こいつら似たもの同士だ。親父が俺に向き直り言う。

「それでどんな武器を作る？さっきのだと剣とか槍ではないな。」

「それなんだが、これを見てくれ。」

俺はさっき書いた絵を見せる。親父がまじまじと眺める。

「ふ〜ん、なるほど！拳を保護しつつ殴るか。加工はどうすればいい。」

「そうだな。まずミスリルを棒状にする。それを曲げて円形にしてから叩いて形をこう変える。細かい所は例の方法で少しずつ削ることができるか？」

「もちろんだ。だがそれは大変だな。削るだけでも2、3週間はかかるぞ。」

「ああ、構わん。こいつの病気療養にそれぐらいかかるしな。」

「そうか、判った。ならまず手の型を取ろう。」

鍛冶屋の親父はそこら辺にあった粘土を取り出して、太さ3cmぐらいの棒状にする。真ん中辺りをガイラに差し出す。

「よし、ここを軽く握ってくれ。」

ガイラが素直に握る。親父は粘土をガイラの拳に巻き付け押し付

けた。

「少しずつ手を抜いてくれ、型が崩れないようにな。」

ガイラの拳の型ができる。親父が大きさを確認する。なにか納得したかのようにうんうん首を縦に振っている。

「おい、一人で納得してないで何とか言ってくれ。」

「ああすまない。思わずな……。しかし、これだと材料が余る。どうする?。」

「なら余った分は10cm×30センチ、厚さ1mmぐらいの板状にしてくれ。」

「前といつしよか?。」

「そうだ。2枚作ってくれ。」

「判った。」

隣でガイラが怪訝な顔をしている。

「なあ、二人だけで会話しないでくれるか。なにができるんだ?。」

「秘密だ。楽しみにしてる。お前は病気を治すことに全力を尽くせ。使う人間がいなくなったらこの親父が困る。」

「そうだ。俺が作るまでくたばるな。死んだら許さねえ。」

「なんか理不尽だな。激励だと思うことにしよう。」

三人が笑う。きっとそれぞれが出来上がりを想像しているのだろう。俺もガイラがミスリルナツクルでドラゴンを殴るところを想像してみる。それは空想をはいえ究極の一撃だった。

勇者アレフの冒険

僕は今ガライの町に向かっている。馬は借りられないので荷物をいっぱい入れた背嚢を背負っている。装備と合わせて結構重いが慣れた。ただこのまま戦闘をするにはかさばるので魔物は避けることにしている。

一人で黙々と歩く。慣れているはずなのになぜか一人が辛い。師匠といっしょの3日間はずっと辛かったはずなのに……。あの3日間は必要最低限の会話しかしてない。その会話もほとんど命令だけで暖かい言葉なんてかけられなかった。

だいたいまず城の外について来るといったが、まさかマイラの村に行くなんて聞いてない。馬があるから問題ないと言ったが野営など今までのしたことない。多分そういった準備など万全かと思ったら全然そうじゃなかった。

腹が立つことばかりだった。馬のペース、自分の馬だけならともかく同行者の馬の調子なんて判るわけない。あげく“止まれ、馬が潰れる。”と言われた。そうなる前に言ってくればいいのに……。口には出さなかったけどそう思った。

次に食事、携帯用の食事や保存食くらい持ってきていると思っていた。ないから獲ってくると思う。しかも獲ってきた物は数匹の蛙と少々野草、とても食い物には見えなかった。調理されたそれはまあ口に入れるのに抵抗がなくなっていくにはなっていたが、それでも量が少なすぎた。

さらにまだ日が落ちたばかりなのに寝ると言う。こんな時間に寝

られるかと思つたが腹が満たされないと、慣れない馬の移動で疲れているので寝ることにした。夜中に起こすと言われた。この辺ならトヘロスを使えば見張りを立てなくても大丈夫と言つてみたが却下された。むちゃくちゃだ。

本当に起こされた。まだ真つ暗だ。硬い土の上で寝たので体の節々が痛い、疲れが取れた気がしない。星を見ると二時くらいだろうか、6時間くらいしか寝ていない。文句を言おうと思つたがすでに師匠は僕に背を向けて寝ている。不貞腐れて薪を火に放つた。

朝6時、師匠はいつも通り起きてきた。そしていつもの鍛錬だ。鍛錬のあと薪を集めて来いと言われた。不承不承集めながら考えた。この遠征目的はなんだろう？まるでいじめだ。・・・あれ？なんか聞いた覚えがあるな、そうかサイモンさんの3日連続行軍訓練。

師匠は答えを教えることはしない、ヒントはくれるが結論だけを述べることはしない人だ。昨日からのことを改めて考えてみる。

まずは馬・・・これは馬に限つたことではないな、同行者に気を配るのは大事だ。今まで一人だったから気づかなかつた。次に食料・・・常に安定した食べ物があるわけでないということか。不足の事態はいくらでもあるだろう。サイモンさんもぼやいてたな、何もなければ食べないって・・・笑いながら。多分当たり前だと思つているのだろう。

よく考えると僕は6時間寝ている、あまり眠れてはいないが・・・でも師匠は4時間しか寝ていないじゃないか！僕は馬鹿か！全て大変なことは師匠がやっている、昨日の食事も今日の食事も僕の方が量はあつた。ならば今日は僕が全ての荷を負うことにした。目的地で魔物を狩って帰ってきたとき、師匠は座つたまま寝ていた。

遠くから見てわかった。残念ながら近づくとおきてしまった、隙を見せてはくれない。

そんな3日間だった。もうそろそろラダトームからでる時、今回のガライ行きはその予行練習を兼ねる。もちろん装備を充実させるのも目的だ。1500G貯めると言われていたが何を買うのだろうか？ラダトームの武器屋しかしらないが、そんな高い装備は知らない。楽しみだ。この間の模擬戦5番勝負、最後に負けたのが残念だ。サイモンさんも余計な時に来てくれたものだ。・・・これは駄目だな、負けたのは僕でサイモンさんが悪いわけではない。

ガライに向かって歩く、歩く、歩く。いろいろ考えていたら足取りが軽くなってきた。僕が選んだ師匠は間違いでなかった。あの夜の決闘を見たとき、この人についていけばいいと思った。都合よく勇者支援官だと言う。好都合だ、断られることはない。弟子にして下さいといった時の師匠の顔は今思い出しても笑える。今思うと最初の一本だったんだろう。あとはマギーさんのことを聞いたときだけだ。それ以外では剣でも魔法でも策でも何一つ勝っていない。今は勝てなくてもいい、全て吸収する。

さてもうしばらくしたら日が落ちる。たしかこの辺に口トの遺跡があると聞いた。そこは聖なる地なのか魔物が出ないらしい。今日の夜はそこで過ごそう。そこに行くまでに今日の食事を採ろう。実のところ背囊に携帯食はある。でもこれは獲物がなかったときに食べるためだ。そりゃそうだ、ガライやマイラなら2〜3日だから携行した食事だけでも行ける、でもリムルダールへは？竜王の城へはどうだ？当然無理だ。現地調達が必要だ。これができなかったことは魔物より怖い、今はそう思える。

ロトの遺跡だ。たしかにシーンとして魔物の気配はない。安全は確保できているのでそんなに早くは寝なくてはいいい。そうだ、ロトの石碑を見に行こう。レミーラを革の盾に唱える。明かりは万全、石畳の通路を歩く。安全が確保されるとそれはそれで面白くないな。いつも緊張して歩くのが癖になっている。

ロトの石碑がある。大きな墓標のような石版に文字が彫られている。

「私の名はロト。私の志を継ぎし者よ。ラダトームから見える魔の島に渡るには、3つの物が必要だった。私はそれらを集め、魔の島に渡り魔王を倒した。そして今その3つの神秘なる物のを、3人の友に託す。彼らの子孫がそれらを護ってゆくだろう。再び魔の島に悪が蘇った時、それらを集め戦うがよい。」

なぜか涙が出てきた。ロトの思いが心に響く。これから厳しい冒険になるだろうが、彼の志は僕の心の支えになるだろう。今日はここで寝ることにする。ロトの勇者様、おやすみなさい。

夢を見た。

青い鎧をきたロトの勇者様が3人の人といっしょにいる。重厚な鎧の男、優しい眼差し of 女性、理知的な顔の男、みんな笑いあっている。4人で拳を打ち合わせ背を向け、それぞれ違う方向に歩き出す。空の太陽がまぶしい。

はっと目が覚める。僕はロトの伝説についてそんなに詳しくない。でもまるで見てきたかの様に詳細まではっきりとした夢だ。石碑の前で寝たからなのか、ロトの勇者様が本当に夢に現れたのか？・・・

面白いことを考えた。この夢の内容を師匠に話そう。きっと驚いてくれるだろう。

ロトの遺跡をでてガライに向かって歩く。竜王が現れてからくすんだ太陽しか見れないが、今僕にはまぶしい太陽が見えている気がする。

衝突

5 / 31 勇者支援生活 31日目

ガイラをここに連れてきて8日目、発症して5日。ガイラの状態は良くない。痙攣、引き攣りが起きるたびにキアリーをかける。毒素は消すことができるが、破傷風菌自体が消えたわけではない。最初の懸念通りだ。こんなことが当たっても少しも嬉しくない。衰えた体力を補うために回復呪文を使う。もうまともに食事をとることもできなくなってきた。昨日から流動食を与えている。

昼は鍛冶屋の手伝いをしている間、宿の主人にガイラの様子をみてもらう。何か異常があつたら俺を呼びに来させている。鍛冶屋ではミスリルをうっている。ミスリルは硬い、コークスを使って赤熱化する。赤熱化して少々柔らかくなったミスリルを大槌で叩いて形を変えている。まずメタルスライムの表皮の型でしかなかったミスリルを一つの塊にする。その塊を棒状になるようさらに成形する。

コークスはアレフガルドにはなかった技術だ。ジパングの鍛冶の秘法にあつた質のいい石炭を蒸し焼きにすることで炭素の純度をあげる技術。他には空気を送り込むための特別なふいご、コークスの高温に耐える窯などジパングの秘法から得た技術の粋だ。町外れにある窯小屋で汗だくになりながら大槌を振るう。なんとかDの形まできた。工程の半分と言った所か。

「あとは冷えるのを待つだけだな。温度管理だけはしっかりしてくれ。俺は宿屋に戻る、何かあつたら呼んでくれ。削るのは明日からしよう。」

「大変だな。あいつは大丈夫か？本当に死んだらこの努力も無駄になるな。」

「無駄になんかするものか！ガイラは死なない。あいつもこれ待っている。」

「そうだな。こいつも使う人間がいなくなるのは嬉しくないと言っている。」

「ふん！物がしゃべるものか。では行くぞ。」

俺は小屋を出る。武器の声か、鍛冶屋らしい言葉だ。

.....

宿屋。なぜか怒号がする。もしかしてガイラか！

「なぜ部屋が開いていない。俺は勇者だぞ。」

「そうは言われましても病人を預かっています。部屋は開いていても十分なサービスをすることができませんゆえ、お断りしています。」

「馬鹿か！そんな病人追い出せばいい。この勇者様が泊まってやると言っているのだ。」

「お預かりしているのも勇者様です。」

「それこそ無駄だ。弱い勇者などいらんだろっが！」

この声はガルドか。ある意味正論だろうがあまりにひどい。何より疲れ果てた俺の神経に触る。

「そこまでだ、ガルド！」

「誰だ、俺の名を気安く呼ぶのは？なんだ、城に籠もっている勇者支援官とやらか。この俺様になんの忠言だ。」

馬鹿にした口調でガルドが言う。かちんときた。今俺の機嫌は悪い、ならば言ってみよう。

「お前の言動は聞くに堪えないな。尊大すぎるその態度は目に余る。」

「はん。城の連中が困った、助けてーって言うから助けてやってるんだ。尊大になって何が悪い。」

「ならば城に帰ってからそう言え、こんな村でそれを言ってみよう。」

「そんなことは知らん。支援援助をするといったのはそっちだ。だが今ここではそれがなっていない。怠慢だな。」

「そうか、俺は支援すべき勇者を支援している。大体俺の助言などいらんと言ったのはお前だ。今更そんなこと言われても困る。」

宿屋の主人が右往左往している。それはそうだ。俺とガルドがものすごい声で怒鳴りあっている。村の人々も興味深げに集まっている。

「だが弱い勇者はいらないと言うのはお前の言う通りだ。」

「そうだ、そうだろ！なら俺を優遇しろ。」

「馬鹿か！何を勘違いしている。お前が弱いと言っているんだ。」

「俺が弱い、言うに事欠いて弱いだと！馬鹿な、お前みたいなひよるひよるに言われる筋合いねえ！」

別に俺はひよるひよるじゃない。お前らがガチムチなだけだ。だが売り言葉に買い言葉、

「じゃあ、そのひよるひよるの俺がお前より強いことを照明してやる。お前が負けたら勇者は解任させてもらっ、いいな！」

「そんなこと天地がひっくり返ってもありえねえ。いいぜ、やってやる。怪我しても文句を言うなよ！」

「その言葉そっくりそのまま返してやる。大勢の前だ、恥ずかしくて二度と表を歩けなくしてやる。ここでは狭い、表にでやがれ！村の中央広場でやる。ついて来い！」

「判りきつたことを一々命令するな！こんな所でやれるか！」

散々怒鳴りあつた俺たちは大勢の村人を引き連れ、村の中央広場に戻ってきた。俺とガルドが10mほどの間隔を開けて対峙する。その周りには大勢の野次馬、これから起きる決闘に村が騒がしくなる。

俺は革鎧に細い剣、ガルドは革鎧に両手持ちの大斧。体格は俺が

細身で背の高さも普通、ガルドはがっしりした体格で背の高さは2mを超える。一見大人と子供の喧嘩に見えるようで、口々に村人がやめるよう言っている。もちろん聞く気はない。俺たちの間に一人のお年寄りが出てくる。

「私はこの村の村長をやっておりますグスマンといいます。村長の名に免じてこの騒ぎを収めてもらえませんか？」

「駄目だ、こいつは俺を弱いと言った。身をもって思い知らせてやる。」

「これは国務大臣付き特務隊士としての職務になります。村長どのには申し訳ありませんが、残念ながらこちらから引く気はありません。」

村長がため息をつく。

「判りました。では私がこの決闘の立会人になります。よろしいですか？」

「つべこべうるせえ、早く始めろ！」

「よろしく願います。」

「では、この決闘において故意に命を奪わぬこと、後に遺恨を残さぬこと、双方精霊ルビスの名の下遵守されること。ここにいる全ての者が見届ける。始めてください。」

村長の手が拳げられ振り下ろされた。

結末と再会

「おい、どうした！かかってきな。もしかしてギラやベギラマが怖いのか？ああ単純そうだからラリホーで即効寝るかもな。もしかしてトヘロスで見えなくなるかも？よし、ハンデだ。今の魔法は使わないでやる。感謝しな！」

当然ここにいたるまでにピオリム2回はかけてある。やつは皮鎧だからバイキルトは無用だ。こういった衆人環視の中の決闘では目立つ魔法は使わない。

「てめえ、舐めやがって！ぶっ殺してやる！」

ガルドが大斧を上段から振りかぶり俺に叩きつけてくる。馬鹿め、安い挑発に乗って大振りをするとはそんなもの当たるか！俺は斧が当たる寸前にバックステップ、斧が叩きつけられたら速攻懐に入って終わりだ。そう思っていると予想を裏切って大斧が強引に横に向きを変えた。何かいやな予感がする！俺は更に下がる。居合いの型は崩さない。ガルドは斧の勢いを利用して一回転、そこから袈裟切り。強烈な一撃が地面に叩きつけられた。俺は抜いた刀を納める。

「はんつ！よく避けたな。普通今ので死んでるぜ。武器を抜いても俺様には届かなかったか！」

「なるほど、いいコンボだ。まさかあそこから軌道を変えられるとはな！ちよつと実力を見誤っていたかな？」

ガルドが大斧を引っこ抜き、力を誇示するように振りかぶる。底意地の悪い笑みを浮かべる。

「なら前言を取り消して、土下座でもするんだな。みつともない姿で俺の気が済んだら許してやらんでもない。ゲハハハハッ！」

「馬鹿笑いは止める！そんな武器で勝てると思うな。いつまでも木こりじゃないんだぜ。」

「うるせえっ死ねや！」

ガルドの斧が俺に叩きつけられる。俺は棒立ちの状態から動かない。斧が当たる。観衆にはそう見えただろう。だがしかし斧が当たる音は聞こえない。時間差で俺の後方で大きな音がする。俺は刀を抜き、斧の柄だけを持って啞然としているガルドの眼前に突きつける。

「終わりだな。」

「なっなんだ、これは！こんなもの認められるか。俺の斧が壊れなければお前は死んでいたっ！」

ガルドが吼える。

「負け犬はよく吼える。馬鹿が・・・よくその柄を見る。壊れたんじゃない、斬ったんだ。」

ガルドが柄を見つめる。観衆もその柄を凝視する。その先端は途中まで斜めの切断面があり、さらにその先がささくれだっている。

「なっ！いつの間？」

「最初にたたきつけた斧に切れ込みを入れておいた。あの時は届かなかった訳じゃない。お前の体に攻撃する必要がなかったただけだ。」

「くそっ！まだだっまだ負けていない！」

ガルドが柄と拳を振るう。斧の攻撃にくらべ緩慢なその攻撃はいつも簡単に避けられる。

「くそっ！くそっ！くそっ！くそっ！くそっ！」

ガルドが何度も振るう。避ける、避ける、避ける……。やがて息が切れたガルドが肩で息をしている。

「そこまでです。」

村長のグスマンが静かに声をかける。

「もうあなたの負けです。ここにいる全ての者がそう思っています。決闘にも作法があります。負けを認めなさい。」

ガルドの肩が軽く震えている。

「くそっ！勇者なんかこちらから願ひ下げだ！」

ガルドは斧の柄を叩きつけ村人の輪を断ち割って出て行った。俺はその背中を見送る。だから助言はすると言ったのに……人の言うことが聞けない勇者なんていらぬ。

「がっ学者よ。見させてもらった。やっぱりお前強いな。」

宿屋の主人に支えられたガイラがでてくる。

「お前見てたのか？ 安静にしてると言っただろう。」

「あれだけ騒げば全て聞こえる。俺が馬鹿にされているのは我慢ならん。」

「そうか……。じゃあ早く直せ。今度見かけたら自分でやれ。」

「判った。だがその前にお前と勝負したい。」

「俺は病人とはやらん。それこそ早く直せ。」

「約束だぞ。直ったら勝負だ。」

ガイラが崩れ落ちる。気絶している。やられた、病気を利用して言質をとるとは……。まあいい。気力が蘇っただけでもいい。

「だれか手を貸してください。この馬鹿を宿屋に連れ帰ります。」

ガイラを担架に乗せて運ぶ。世話のやけるやつだ。

.....

ガイラを看ている。まだ治る見込みはない。俺は椅子に座ってうとうとしている。なにか騒ぎが聞こえる。もしかしてガルドが戻ってきたか？ 扉の外で足音が響き、扉が乱暴に開いた。マギーが立っている。後ろにはアレフ。

「マギー、それにアレフまで、なんでここに？」

「ケルテン！あんたっ何やってるの！自分が病気になったら意味ないじゃない！」

何を言っている？別に俺は病気じゃない。

「マギーさんの言う通りですよ。自分の顔を見てください。」

どういう意味だ。手渡された鏡を見る。うわっ！なんだこの顔は。目の下の隈、げっそり痩せた頬、確かに病気に見える。

「大丈夫だ。まだガイラの様子を見なくてはいけない。」

マギーが俺の胸に飛び込んでくる。

「駄目っ！もう止めて！」

「でもこれは俺にしかできない。止めるわけにはいけない。」

「じゃあ私がやる！どうすればいいの！教えて！」

マギーが半狂乱で騒ぐ。そうか、その手もある……。

「判った・・・替わりを頼む。魔道書18ページ、解毒の魔法キアリー。呪文は

俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たるマナよ、癒しの力となりて、この者の毒を打ち消せ！だ。」

「マギーは魔道書を開きページを開く。キアリーのページを開き、指で文字をなぞる。」

「この魔法ね。わかったわ、でもどうすればいいの？」

「この病は体内で毒素が作られる。できた毒素を解毒すればいい。その症状のサインは筋肉の痙攣、表情筋のこわばり、会話がまともにできなくなったり、口に水を含んで飲めなくなるなど。症状がでたらすぐに使ってくれ。」

「判ったわ。もうあなたは寝てっ！」

「でもまだ様「寝なさい！そんな顔した人に何ができるの！久しぶりに会ったら死相なんて！アレフツ！ケルテンを別の部屋に連れてって！寝るまで監視しなさい。」

アレフが俺に近づく。

「ケルテン師匠、無駄ですよ。ああなったらマギーさんは言うことを聞きません。それに私も同感です。寝て下さい。ラリホーをかけてでも寝てもらいますよ。」

「すまない。じゃあ寝させてもらつ。もし急変することがあったら起こしてくれ。」

俺は肩を落とし隣の部屋に行く。アレフが黙ってついて来る。俺がベッドに入る。俺が寝るまで監視つもりだな。監視なんてしないでいい。もう起きていられない……。

いざマイラへ

時は遡って5月28日、ラダトーム城図書館

昨日ガライの町からラダトーム城に戻ったアレフは久しぶりに図書館に向かう。今回の遠征中にやっとベホイミの思考詠唱ができるようになった。それを報告したい、そう思ってここに来た。本当に報告したい相手はここにはいないがその次にで報告すべき人だ。

「マギーさん、戻りました。聞いて下さい、ベホイミは思考詠唱できるようになりました。」

「ふん。あっそう。それで？」

なんか機嫌が悪い。そうか、一週間も師匠にあっていない。

「いついえ、それだけです……。」

やばい。これ以上言葉がない。どうしよう。

「え〜とっ！いま師匠とガイラさん、マイラの村にいますよね。」

そんな顔で僕の顔を睨まないで下さい。僕が悪いわけじゃありません。

「マイラの村と言えば、この間師匠といっしょに馬で行ったんですよ。それが師匠ったらひどいんですよ。マイラまで2日かかるのに何の食料も持ってこなくて大変でした。はははっ！はあ。」

沈黙が続く。誰かこの間を助けてください。

「そうね、それだわ。」

マギーさんの顔が輝く。まずい、なんかたくらんでいる顔だ。

「アレフ、あなたマイラまで護衛しなさい。あなたもケルテンに会いたいでしょ？」

「まあそうですね。でも勝手にマイラに行ったら・・・。」

「馬鹿ね！自由に予定を決めていいって言われてるんでしょ？なら自分でマイラに行く予定を決めればいいじゃない。」

なるほど、名案だ。僕は僕の意味でマイラに行く。でも護衛って・・・。

「じゃあ私は馬を借りてくるわ！後何がいるの？私野営とかしたことはないし、よく判らないわ。」

えっとこの間の荷物を思い出す。

「馬、毛布、マント、2〜3日分の食料、それだけあればなんとかなります。」

「えー。じゃあ雨とか降ってきたらどうするの？それとどこで寝ればいいのか？」

じゃあ、ここで待ってて下さい。僕一人で行ってきます。とは口

が裂けても言えない。そういえばこの人は貴族のお嬢様だった。こ
ういった場合どうすればいいのだろうか？

「ちょっと待ってください。サイモンさんに快適な旅の仕方を聞い
てきます。」

「そう、頼むわ。ここで待ってるから。」

.....

兵舎でサイモンさんを見つけたので聞いてみる。

「すみません、貴族のお嬢様を護衛してマイラに行くことになりま
した。何を持っていけばいいでしょうか？なるべく快適にしたいの
ですが？」

「なんだ？女連れでマイラまで行くって？止めとけ止めとけ。無茶
無謀だ。」

「じゃあ、そうマギーさんに行ってください。図書館にいます。」

「ヴィッセンブルン嬢かあ。ケルテンがらみか？お前さんも大変だ
な。」

「そう思うならなんとか助けてください。」

「うーん、なら馬車を使うといい、御者もいるな。馬で駆けるより
は遅い、さらに乗り心地も良くない。心しておけ。」

「ああそういえば馬車なんてありましたね。使ったことがないので

思いつきませんでした。ありがとございます。じゃあそつマギーさんに伝えてきます。」

「おう、まあ頑張れ。ケルテンによろしくな。」

急いで図書館に走る。今日はどうにも日が悪い。

.....

「馬車を用意して下さい。それと御者も。それでマイラまで行けませぬ。」

「判ったわ。馬車は家の物があるし、使用人が御者をやってくれるはず。」

「それでいいです。じゃあすぐに行きましょう。時間が惜しいです。」

それからマギーさんの屋敷に行く。使用人によって準備がされる。出発のときがきた。ただまだ確認しておかなければいけないことがある。

「マギーさんいいですか。例え馬車でも快適ではありません。急げば揺れますし、いつものような快適な眠りは保障できません。食事もおいしくありません。また魔物が出てきたら数によっては戦ってもらいます。私の指示に従ってもらいます。これは遊びではありません。できないならこの話は無しです。」

じつと見つめる。条件を指定して譲歩をさせる。師匠なら多分こ

うする。

「わかったわ。あなたの指示に従いましょう。外の世界ではあなたの方が先達です。」

「結構です。では行きましょう。」

馬車がゆっくりと出発する。

「ねえ、アレフ。あなたなんかケルテンに似てきたかも？」

「最っ高の褒め言葉です。」

「そう、私もあなたもあの人の弟子みたいなものね。目指しているのはいつしょ、そうね？」

「そうです。これから師匠から一本を取りに行きましょう。僕たちの顔を見た師匠の顔はきつと面白いですよ。」

そして二人である人に対して愚痴を並べる。マイラまで3日はかかるだろう。ずっと放っておかれたんだ。愚痴ぐらい言っても罰は当たらない。

二つの意味で次の工程

6 / 1 勇者支援生活 32日目

目が覚めた。ここ何日は寝ているか起きているのかよく判らない状態だった。久しぶりに意識がはつきりと覚醒したようだ。ベッドで上半身を起こし昨日までを省みる。・・・ああそうだ、苛立つてガルドと決闘をした。よくあんな状態で勝てたな。そうだ、ガイラの容態を見に行かねば……。俺はもぞもぞと立ち上がり着替え始める。コンコン！控えめなノックがされる。

「アレフです。入ってよろしいですか？」

「ああ、いいよ。」

袖に腕を通しながら返事をする。心配そうなアレフが入ってくる。俺の顔をみて安堵の表情を浮かべる。

「すまなかったな、心配をかけたようだ。」

「私のことはいいです。でもマギーさんにはちゃんと謝罪した方がいいですよ。」

思わず右手で頭を押さえる。目の前のことについてはいっぱいで結構な期間連絡していなかった。

「そういえばなんで君達がここにいるんだ？」

「私の遠征です。ガライ周辺は手ごたえがなかったのでこちらに来

ました。」

「ふん……マギーを連れて？」

「えっ！ええっ！そうですよ。魔法修行の成果を見たいとおっしゃられて。」

「へえ……誰の差し金かねえ？……まっそういうことにしておこつか。」

着替え終えた俺は腰に刀を佩く。これだけはないと落ち着かない。

「じゃあガイラの様子を見に行こつか。」

二人で隣の部屋に移る。ベッドに横になっているガイラ、その寝息は規則正しい。椅子に座ったまますうすう寝ているマギー。俺はしゃがみ込んで顔にそつろ手を当てる。

「マギー、マギー。」

「んっ。うん……！あつケルテン起きたの。」

「ああ、おかげでよく眠れた。ゴメンね。」

ぎゅっつと抱きしめる。抱きしめかえされる。泣き声がする。

「また泣いて、美人が台無しだ。これ前にも言ったね。ごめん、俺のせいだね。」

「そうよ、全部あなたのせい。」

マギーが半泣きのまま笑顔を浮かべる。

「うん。もう泣き止んで。君も隣で寝てきなさい。睡眠不足は美容に悪い。」

「そっね、じゃあそうさせてもらっわ。・・・チュッ！」

そう言うとマギーは俺に軽くキスをすると部屋を出て行った。アレフは見ない振りをしている。照れ隠しにアレフに声をかける、

「アレフいつもの鍛錬だ。行くぞ。」

「ここはいいのですか？」

「ああ、宿の人に任せる。いつもなにかあったら呼ぶよう言ってる。」

.....

久しぶりに隣でアレフが剣を振っている。銅の剣、鉄の盾、革の鎧のなんともちぐはぐな装備だ。思わず笑みが漏れる。

「どうしたのですか？なにかおかしいですか？」

「ああ、その装備がおかしい。」

「いや、ケルテン師匠の勧めに従っただけですよ。笑うのはひどい。」

「すまん、すまん。そうだったな。とりあえずこの村の武器屋でも見てくるんだな。まあこの間の1500Gも使ってもかまわない。もし手元に無くて貯金分で買ってもいい。手続きは俺がしてやる。」

「いいのですか？」

「ああ、多分買いたくなる装備があるさ。」

「そうですね。後で見えます。」

「それとその後は外で実戦、魔物の被害もあるそうだからちょっといい。ただ、昼には戻って来い。頼みたいことがある。」

「頼みたいこと？なんですか？」

「あとで言う。そう難しいことじゃない。」

一通り鍛錬が終わるとアレフは武器屋に行った。俺は鍛冶屋一字に行く。次の工程だ。ちなみに鍛冶屋と武器屋は別ものである。

.....

「来たか、昨日は大活躍だったな！」

「そうきたか。いや感情のままに動いたことを反省している。」

「いいんだ。あいつには村人が困っていたと聞いた。胸がすうつっ

としたって感謝していたよ。」

「そうか、もっと早く言ってくればいいのに。」

「言つても何も誰もお前の身分なんぞ知らん。知っているのは宿の主人と俺ぐらいだ。お前は俺のところに来る変わった兄ちゃんかと思われておらんかった。」

「そうだな。そう言われればそうだ。印籠を見せびらかして歩くのは趣味じゃない。」

「いんろう？お前はたまに意味のわからないことを言う。」

「まあそれはいいや。次の工程に移ろう。例の砥石はまだあるか？」

「ああまだあるが、砥石だけでは駄目だ。」

例の砥石。これはダイヤモンドの粉末をまぶした砥石だ。もちろん俺オ리지ナルだ。ダイヤモンドはそう産出しないし、貴重ゆえその粉末は市場にでていない。

「判った。じゃあ粉末は用意してくる。とりあえず武器の加工はできるところまで頼む。」

「はん！武器は俺の領分だ。頼まれるまでも無い。」

「じゃあこれはもらっておくぞ。」

俺は石炭の袋を一つ担いで外にでた。さてどこで加工しようか・
あまり離れるわけにはいかない。村の中を歩いていると豪華な馬

車をみかけた。あいつら馬車できたのかよ！やっぱり鍛えてやることにしよう。改めてそう決意した。

ダイヤモンドの砥石、それは炭素の立方晶であるダイヤモンドをまぶした砥石。ダイヤモンド粉末を作るには炭素に爆発などで高温、高圧をかければよい。あとはこれを接着剤を塗った金属棒や板にまぶす。もちろん俺の刀ミスリルブレードはこれで仕上げた。

宿の主人にしばらく留守にすることを告げると村の外にでる。重たい石炭袋を担ぎ、それなりに離れた山まで走る。岩山のくぼみに石炭を置きイオナズンを唱える。響き渡る轟音、強烈な衝撃。多分村からでも見えるだろう。爆発の跡の黒い粉末をかき集める。よしこれでいい。早く村に戻ろう。ルーラ、マイラへ！宿屋に戻る、特に異常は無いようだ。

- - - - -

鍛冶屋の小屋に戻る。親父が座り込んで粘土の塊を触っている。近くにいろいろな棒が転がっている

「例の粉だ。で、それはなんだ？」

「ああ、この間とつた型を焼いた物だ。これからさらに手の型をとつたのがこれだ。これにピタリ合う様、削っていく。この型に合う様削るには、丸型、半月型、それも大きさの違うものがある。それで用意したのがこの棒だ。」

いろいろなサイズの丸棒、半月状の断面の棒を取り出す。

「なるほどね。いつの間に作ったんだ？」

「そりゃあお前があいつの看病をしている間にだ。お前がやつれていたので粉末待ちだったのさ。」

「それはそれは……。」

俺は苦笑しかできない。どうも周りが全く見えてなかったらしい。

「だが今日はいい顔をしている。例の姉ちゃんか？大事にしるよ。俺一人でやすりを作るから、今日はもうお前の手はいらぬ。邪魔だから帰れ！」

俺は小屋から追い出された。しょうがない、帰ろう。大事にしるか……やはり昼から鍛えることにしよう。放っておいて怒られるなら横にいても困らない様鍛えてやる。

真のつよさ

昼になってマギーが起きてきた。寝ぼけ眼でひどい顔をしている。

「ん、おはよ〜その人だいじょ〜ぶ〜?」

まだ半分寝ているな。

「ああ大丈夫。それより温泉でも浸かって目を覚ましてきなさい。あとで用件があるから。」

「は〜い。じゃそうする。」

足をひきずりながらでていった。流石に看病は辛かったのだろう。

「おい、ケルテン。よかったのか?」

目を覚ましたガイラが俺に声をかける。

「なんだ、起きてたのか?人が悪いな。」

「はははっ!俺は人の恋路を邪魔するつもりはない。だから目をつぶっていただけだ。」

ガイラがサムアップをする。

「で何がよかった?なんだ?」

「普通後を追ったりするんじゃないのか?」

「それはないな。もし俺が義務と責任を放つたらかしたら幻滅される。そんな仲だ。」

「ふくん、そんなものか？しかし夜中に目が覚めたら知らない女がいた。びっくりしたぞ。」

「そういえば互いに紹介してないな。やはり全く頭が回ってないかったのだろう。」

「改めて後で紹介する。それで体はどうなんだ？」

「なんとも判らん。急に痛みや引き攣りが来る。お前の魔法ですつとそれが消えるだけだ。」

「まだ破傷風菌は消えないか。確か抗生物質は効く。だがそんな物はアレフガルドにない。このまま体力に任せて快癒させるしかできない。三国史や戦国時代に戦争の後、大したこと無い戦傷で死んだ武将の死因はこれだ。」

「三国史？戦国時代？実のところ俺の頭には未知の知識が沸いてくる。神の知識か、前世の知識。多分前世、別の世界の知識。残念なのかどうかわからないがはっきりとした記憶がないから、前世とやらに全く未練などない。18年生きてきたこの世界の方には執着はある。最低でも自分が関わった人々には寿命をまっとうしてほしい。それが俺の生きる目的。」

「10年ほど前、記憶とも知識とも判らないものが頭に蘇った時、周りの人にこれから魔王が蘇ると言った。子供の言葉だと一笑された。それでも言い続けたが悪い夢だと言われた。長い平和だったの」

だ、それも仕方ないだろう。なら自分で何とかしよう。そう思って自らを鍛え、過去の知識を蘇らせた。

もしかしたら自分が何もしなくても、勇者が現れ竜王を退治してくれるかもしれない。だけどそれまでに犠牲になる人はどうなる。利己的かもしれないがせめて自分の周りだけでも犠牲はださない。事実俺はドムドーラの陥落は見逃した。正確な侵攻時期が判らないのと、これから新しい勇者の伝説が始まるからだ。

俺自身で事が始まる前に竜王を倒せばいいとも思ったが、実は俺はそこまで強くない。日々の鍛錬とロストマジックのアドバンテージで瞬発的な強さはあるが、敵を倒しながらあの長い竜王の城を降りていく持久力はない。それ以前に俺はロトの血をひく勇者ではないと思いついていたのもある。まさかの勇者システムには驚かされたものだ。もしかして攻略ルートを間違えたのかもしれない。

「おい！どうした？もしかして俺は治らないのか？」

「ああすまない、思考が他所に行った。毒の症状を見逃さず毒を早急に消せば死ぬことはない。やはりお前の体力と見えない敵との勝負だけだ。」

「やはりそれしかないか。一つやってみたいことがある。」

「なんだ言ってみるよ。」

「俺の流派に体の中の気を整え、全身に廻らせる鍛錬がある。まあ外に出せるものではないし目にも見えないから説明しても理解されないと思うが……。」

ここでガイラが一度言葉を止める。

「なんとなくは判る。続けて、」

「俺の氣を全身に廻らせれば、その見えない敵とやらに勝てるかもしれない。」

「お前はつよいな。そんなことを考えていたのか？お前の体だ、やってみればいい。だがそれは昼からにしよう。」

「何かあるのか？」

「ああお前のことじゃない。まあすぐに終わるから見ている。」

.....

しばらくしてアレフとマギーが揃う。ガイラとマギーを互いに紹介する。何を今更と言った感じた。アレフは真新しい鋼の鎧を着ている。

「やはり鋼の鎧を買ったか。まあ俺でもそうする。」

「でもお金が大分なくなりました。残金は500Gぐらいです。」

「問題ない。しばらくここを拠点に稼げばいい。そこで一つ頼みがある。」

「朝教えてくれなかったやつですか？」

「そうだ。昼からマギーを連れて行って欲しい。」

「えっ！私？」

自分は関係ないと他所を見ていたマギーが驚く。

「ああそうだ。アレフ、ここに来るまで何回か魔物に襲われたと思うが、マギーはどうだった？お前のことだ、特等席で見物はさせてはいまい。」

「はい、魔法の発動の早さは流石です。」

「なにか含むところがある言い方だな。続きを言ってみるよ。」

「はあ、マギーさん怒らないで下さいね。なんと言うか、その、なんていうか、結構力押しなんです。よくあんなにベギラマを使えるなど関心していたのですが……。」

「何よ、それ！何も言わなかったじゃない。現に敵は倒していたでしょ？。」

「マギー、そうアレフを責めるな。なんとなくは判っていたんだ。君には実戦経験がないからとりあえず一番効きそうな魔法を使うだろうとね。じつはこの辺りの魔物はギラでも十分だ。アレフもいたのだから敵の行動を牽制するだけでもよかった。」

「今まで誰もそんなこと教えてくれなかった。父上も兄上も！」

マギーがつぶやくように言っ。

「多分君の父上も兄上も知らなかった。だって実戦経験なんてないもの。城の騎士だって魔術士だってそうだ。だから先の大戦で多くが亡くなった。今重職についている者の半分はそれ以前の未熟者にすぎない。君も父上、兄上を失って心ならずも筆頭魔術士になったと聞いている。」

「あなたにそんなこと言われたくない。」

泣きながら叫ぶ。心を抉っているのは判っている。

「そうだね。今が平和な時代ならこんな事言わない。だけど今は城にいても絶対平和ではない。いずれ竜王の軍勢が襲ってきたら君も戦わなくてはならなくなる。ここまでは判るかい？」

「ひつく、ひつく！うん、判る。」

「そうすると君はベギラマを乱発するだろう。これはいろんな意味で危険だ。」

「いろんな意味？」

「ああまず第一にいつ終わるか判らない戦い最中にMPが切れるかもしれない。君は俺よりずっと多い潜在MPを持っているとはいえない程度はある。第二に俺は戦いになったら魔法を使える敵を一番にマークする。はつきり言うつまり先に殺すか、魔法を封じる。なぜか判るかい？」

「魔法が怖いから？」

「半分正解。ギラやベギラマはまだ怖くない。一発では死なない自

信があるから、この間やつて見せたようにね。でもラリホーは怖い。確率は低いかもしれないけど一発で行動不能になるから。まだ理由はあるけどそれらを踏まえると君は敵の第一目標になってしまう。君には死んで欲しくない。」

「じゃあどうすればいいの？」

「そうだね。今言った危険なことを逆にすればいい。後ろで必要な魔法を効率的に使う。これが今の魔術師の戦い方だ。その為には敵の特性を理解しなくてはいけない。実戦にも慣れてもらわなくてはならない。だからアレフに同行して欲しいと言った。」

俺が語ることに興味がいつて、もうマギーは泣いていない。

「わかったわ。私は強くならなければいけないのね。」

「ああそうだ。アレフ、改めて頼む。いいか？」

「判りました。謹んで筆頭魔術士殿の護衛を勤めさせていただきます。」

「よし、じゃあ行ってこい。マギー、足が痛いとか、疲れたとか、泣き言は無しだぞ。」

「もう判ってるわよ!」

マギーが膨れる。皆が笑う。

晴れた心

マギーはこの前やった水の羽衣を着ている。二人の背中を見送る。結構きびしいことを言った。理解しているだろうか？必ず無事に帰ってこい。

「なあ、お前！なんて言うか・・・」

「言わなくていい！判ってる。」

思わず怒鳴る。

「そんな顔するなよ。泣きそうな顔してるぞ。」

「ああ、それも判ってる。」

「前にも言ったよな。優しい鬼だなんて。」

「ああ言われたな。はっとしたよ、俺の行動が矛盾してるってな。」

「獅子は我が子を千尋の谷に落とすってか！本当にやるやつがいるとはな。」

「難しい言葉を知ってるな。それも流派の教えか？」

「そうだ。流派の教えだ。教えついでにさっきのやってみるか。」

そう言つとガイラが立ち上がる。目を瞑り腰を落とし両腕を腰に当てる。独特の呼吸法、ガイラの気配が大きくなった気がする。俺

には何をやっているか判らない、ただ見守ることしかできない。

その時間は永遠に感じられた。いやもしかして一瞬だったのかも
しれない。ガイラが構えを解いた。

「ふう！ずいぶん体が鈍っているな。たったこれだけで疲れた。だ
が嫌な疲れじゃない。しばらく寝させてもらう・・・。」

ガイラはそれだけ言うとベッドに横になった。これで病が癒える、
そんな気がした。

- - - - -

一人で村の中を歩く。すれ違う村人達が俺を見て声をかけてくる。

「やあ兄ちゃん。あんた強かったんだな。」

「ありがとね、これであいつも大人しくなるといいんだけど。」

「城の役人さんだったのかい。そうは見えないね、ちつとも偉そう
に見えない。」

そうだな。少しはこの村の為になることができた。そう思ったら
気が楽になった。とりあえずやるべきことは無くなった。村の入り
口に見たことのある3人が見える。落第勇者たちだ。へ、ここまで
来れるようになったのか。

「あれ？なんであんだここにいるんだ？」

「ああ久しぶり。俺の担当の勇者がこの村に滞在している。」

「そうか、その割にはのんきな顔してるぞ。」

思わず顔をなでまわす。

「そうか、のんきな顔か。それはよかった。」

「まあいいや。あんたに言っておきたいことがあったんだ。」

嬉しそうにドゥーマンが言う。

「なんだ。吉報か？」

「ああ吉報だ。俺達は自由になった。全部払い終えたんだ。」

「それはよかった。おめでとう。ならなんでここへ？」

三人の顔が少し沈む。ゲオルグが真面目な顔になって言う。

「あの一件以来、ラダトームには居づらくなった。流石に三人がかりで一人に負けると人の目が気になる。一応これでもあそこではそれなりに名前が通っていたんだ。」

「それでゲオルグとクロウ、俺で相談して城を出ることにしたってわけだ。」

「で、どうか俺達を雇ってくれる所はないかとここまで来た。」

なるほど、そこまでのケアをしないといけないか。

「そうか、もしよければだがリムルダールに行かないか？」

「リムルダール？なんか伝手でもあるのか？」

「ああ、俺の養父が町長をしている。」

三人があきれた顔をしている。

「あんたには驚かされてばかりだ。結構いいところの出だったんだな。」

「それほどでもない。行けばわかるが町長といっても金持ちではない。まあ俺のことはいいさ。紹介状を書くからそれを持って町長に会えばいい。」

「それでどうなる？」

「ちょっと前に俺が城に勤めるようになったから、町を護る兵士に負担がかかっている。君らが行ってくればその負担が軽減できる。そう紹介状に書く。もちろん腕は俺が保障すると付け加える。」

「いいのかよ？そこまで保障して。」

「まあいいさ。町にはそれなりの装備も設備もある。実戦経験者なら役にたつだろうよ。」

「頼んでいいか。俺達が少しでも役にたつなら、そうしたい。」

「こちらから頼む。俺の大事な町なんだ。・・・だけど」

「だけど何だ？」

「リムルダールまで行けるか？ここからまだ10日はかかるぞ。しかも毒の沼地を越えないといけない。」

「10日か・・・厳しいな。魔物は当然いるよな？」

「そうだな。この辺のがいこつより強いやつらがな。」

「うへっ！そりゃあ無茶だな。」

そうだな、我ながら名案だと思ったんだけど・・・どうしよう。

「しょうがない、送り届けよう。あんまり気が乗らないけど。」

「いや、それはあんたに悪い。いくらなんでも10日もつき合わせられねえ。」

心底困った顔でクロウが言う。

「俺だつて嫌だよ。10日も付き合えるか。」

「じゃあどうするんだよ？」

「ここに特別性のキメラの翼がある。行ける場所はリムルダールだ。」

「・・・いやもう驚くことにも慣れてきた。まあなんでもいい、まかせた。それは多分すごいことなんだろうが俺達には関係ない。」

「物分りが良くてよろしい。じゃあ跳ぶぞ。」

もちろん嘘だ。そんな器用なキメラの翼なんて無い。まあルーラ
を使ったための方便だ。

.....

リムルダールの基準石は砂州の外側にある。今は吊り上げ橋の外
に当たる場所だ。今俺達はここについた。三人がきよろきよろして
いる。

「本当に着いちまった。呆れたやつだ、もう何が来ても驚かねえ。」

「そりゃあ頼もしいな。今紹介状を書くから待ってる。」

懐からとりだした紙にペンを走らす。

『爺様へ、訳あってこいつらを預ける。番人でも兵士でもすきにこ
き使ってくれ。ケルテン』

俺は折りたたむとゲオルグに渡す。

「門番には俺の名前を言えばいい。多分大丈夫だ。」

「多分てなんだ。」

「それはお前ら次第だ。尊大に行けば入れてはくれないだろうし、
うまくやれば入れる。それくらいはできないと紹介する意味がない。
じゃあ俺は戻るぞ。あとは任せた。・・・ルーラ！」

取り残された三人。思わず顔を見合わせる。

「忙しいやつだな。」

「そうだな。」

「まあ任されたわけだ。うまくやるつぜ。」

晴れ晴れとした顔の男達が橋を渡っていった。

鍛冶屋一文字

6 / 4 勇者支援生活 35日目

あれから三日たった。アレフとマギーは毎日村の外にでて実戦訓練を行なっている。マギーは帰って来る度に疲れただの、足が痛いだの俺に文句を言う。アレフに聞くとそんなことは聞いていないらしい。俺の前だけか。まあそれはそれでかわいいとしておくか。

ガイラはあれから軽快した。彼の言う気が破傷風菌を倒したのが、氣とやらによつて抵抗力が上がったのか判らないが悪くなるよりは、ずつといい。ガイラは毎食前に例の構えで氣を廻らせる。今俺達の毎朝の鍛錬につきあっている。

「なあ、俺も型稽古していいか？」

「ああ、激しいのは駄目だぞ。ゆっくり体を慣らしていけ。」

「了解。」

そう言うのとガイラはゆっくりと太極拳みたいな型稽古を始めた。なぜみたいなのかと言うと正解を知らないからだ。まあゆっくりやっている踏み込みや突きを、そのまま早送りすればいつものガイラの動きである。横でアレフがじつと見ている。

「あんな鍛錬の方法があるんですね。」

「そうだね、ゆっくりに見えてあれで結構大変なんだ。なんだったらいつもジョルジョとやっている型稽古を同じ位ゆっくりやってこ

らん。ただし目の前にジヨルジヨがいるとして一つ一つの型を確かめながらやること。適当にやっては駄目、意味が無くなるから。」

「なるほど、やってみます。」

そう言つとアレフがゆっくり稽古を始めた。

「ねえ、何やってるの?」

マギーが起きだしてきた。怪訝な顔をしている。俺はただ微笑む。

「なんかふざけてるみたい。」

「まあそう見えるだろうね。正確な型をゆっくり確かめるながら体を動かす、そう言う鍛錬だ。別にふざけているわけじゃない。やってみると大変だよ。武人にしかわからないけどね。」

「ふん。」

「君なら、呪文の詠唱をゆっくりやる、もちろんMPの放出、マナの融合を意識しながらの詠唱ってところか?」

「それはそれで大変そうね。ちょっとやってみる。」

そう言つとマギーが何か真剣な顔をしている。そして手を動かして何かを俺に向かって打ち出した。

「あの・・・俺を的にするの止めてくれない?」

「いいじゃない、どうせ出さないし。でもこれいいわね、おそろい

「思つてやるわ。」

そう言い放つと身振り手振りを加えて、魔法の型稽古を始めた。

魔法を使うのに身振り手振りは必ずしも必要ない。ただ目標に正確に当てる為に手を突き出したり、人によつてはマナの融合を意識して行なう為に身振りをしたりする。範囲魔法は範囲の指定に手でここからここまでとするし、単体魔法でも一点で目標を指定したりする。ちなみに上級呪文、ベギラゴン、マヒヤド、バギクロス、イオナズンなどの使用にはあまりに大きな力の為、両手を使用しなくてはいけない。

4人それぞれが自分の鍛錬を行なう。マイラの村には珍しい光景がここにあった。

ここ3日鍛冶小屋では地味な作業が続いている。一文字の親父はミスリルナツクルにやすりを当て少しずつ削る。少し削ったらガイラの手の型に合わせる。首を傾げてはまたやすりを持って削る。俺はそれとは別に残りのミスリルを熱し叩き続ける。用意してもらえなかったミスリル板は自分でやれと言われたからだ。叩きすぎで腕が痛い、音で耳が痛い。暑さで汗が止まらない。それでも手を止めない。

「なあ、そつちはどうだ？」

「ああ、まだかかるな。そろそろ当の本人に感触を確かめてほしい。」

「

「そうか、俺も腕の型を取りたい。昼からでも連れてくるよ。」

「そうしてくれ、こいつも待ってる。」

「また武器の声か……。じゃあ昼も近いから一度戻る。」

宿屋に歩いて戻る。ガイラが温泉の辺りでまた型稽古をしている。適度に体を動かすよう注意すべきだろうか？部屋に戻って椅子に座る。目を瞑って思考する……。もう少しでアレフもガイラも仕上がるな。やっと物語が進むな……

部屋の扉が開く音で目が覚める。どうも寝ていたようだ。時はそれほど経っていない。

「すまん。起こしたか？」

「いや、いい。体の調子はどうだ？」

「ああかなりいい。もう外に出たい気分だ。」

「駄目だ！あと三日は様子をみる。鍛錬もいいが程々にしろよ。」

「なんだ見ていたのか？人が悪いな」

「帰ってくるとき目に入ったただけだ。監視してるわけじゃない。」

「そうか、お前に土産がある。これを見てくれ。」

ガイラが懐から古ぼけた笛を取り出した。

「どこで見つけた？」

「ああ、温泉の近くで鍛錬していたら、一箇所踏んだ感触が変でな、掘ったら出てきた。結構古そうだし価値があるかなと思って持ってきた。」

「まあ金銭的な価値はないな。」

「なんだ、残念だな。」

「だがそれは妖精の笛、かつて大魔王に封じられた精霊ルビスを開放した笛だ。」

ガイラが呆れている。

「相変わらずお前は大事なことをさらっと言っな。」

「この笛は聖なる者を癒し、世に在らざるものを鎮める効果がある。まあアレフにでも渡しておくんだな。」

「そうする。こうちまちました物は性に合わん。」

「そうだろう、懐にいれたまま折れでもしたら困るしな。」

「そりゃそつだ。ガハハッ！」

それから二人で昼食をする。ガイラも普通に食事ができるようになった。アレフとマギーは昼は帰ってこない。まずい携帯食でも文句を言わないらしい。

ガイラを連れて鍛冶小屋に戻る。

「暑いな、ここは！」

「そうか、俺はいつもここにいるからな、もう慣れた。で体調はどうだ？」

「大分よくなった。もう大丈夫と思うがこいつが許してくれん。」

ガイラが俺を指差す。一文字の親父は笑う。

「それは言うことを聞いたほうがいい。こいつは怒ると怖いからな。」

「もうその辺にしとけ、用件だけ済ますぞ。ここは病人にはよくない。」

「ああそうだった。ちょっとこれを握ってくれ。」

ナツクルを差し出す。ガイラが握る。

「どうだ、違和感はないか？変にあたる場所があったら言ってくれ。」

「ああ、この辺が・・・
「こっちはいいのか？・・・」

二人で話している。細かい所まで詰めている。俺は粘土を用意す

ることにした。腕の型をとるつもりだ。

「ガイラ、いいか？ここに左手を当ててくれ。」

ガイラが素直に腕を当てる。俺は型が取れるよう粘土をしっかり押し付ける。

「これどうするつもりだ？」

「籠手を作る。盾の替わりになる。右手も出せ。」

「こっちはいらぬ。あの武器を握ると邪魔になる。」

「そうか。なら他はいいか？まだ材料は余っている。」

「いらぬ。あまりつけると動きを阻害する。そっちの方が困る。」

「だ、そうだ。残りのミスリルはやるよ。好きに使おうといい。」

余ったミスリルは一文書の親父にくれてやることにした。これだけの武器を作ってくれるのだ、それなりの報酬はやりたい。多分お金は受け取ってくれない。刀の時もそうだった。秘伝書の解読とミスリルの加工法の確立、それが一番の報酬だといって1Gも受け取ってくれなかった。今回もそうなるくらいなら残りを渡した方がずっといい。

「いいのか？もらっちゃまって。」

「ああいい。もう使い道はない。」

「あの坊主のはどうする？」

「あいつはいい。あいつのは他にある。」

「そつが悪いな。ありがたくもらっておこつ。」

鍛冶屋一文字、最高の笑顔を浮かべた。

約束の試験

6 / 7 勇者支援生活 38日目

この三日間、毒の症状は出ていない。その当の本人は今俺の目の前ですごい勢いで一人乱舞をしている。

「よしっ全快だ。これでベッドともおさらばだ！」

「わかった、わかった。治ったと判断しよう。もう好きにしてい
」

「よっしゃー！アレフ！約束どおり勝負だ！」

「いいですよ。手加減しませんよ。」

アレフが快諾する。

「ちょっと待て、病気は治ったが体は鈍ってるぞ。半端な勝負すると怪我するぞ。」

「構わん、闘いに餓えてるんだ。やらせろよ、別に勝敗が目当てじゃねえ。」

「もういい、好きにしろよ。ただしアレフ魔法無しな！」

「了解です。」

アレフとガイラが5m開けて対峙する。アレフはすでに抜剣して

いる。

「よゝしはじめるぞゝ。できれば寸止めで終わらせてくれ。絶対殺すなよ！俺は大臣に叱られたくない。行くぞゝ。」

気合の入らない声で俺が言う。コインを投げる。高く舞い上がったコインが落ちた。

「せいやっ！」

ガイラが間合いを詰め、正拳を叩きつけた。まだ様子見のアレフの鉄の盾に直撃、アレフが2mほどスサーツと下がる。思わず右手を地についた。ガイラの追撃はない。

「よっしやあ！これだこれだ。この手ごたえ！」

ガイラが吼える。アレフが立ち上がり構えなおす。左腕を軽く振る。次の瞬間袈裟切り、ガイラが完全に見切つてスウェー、アレフの斬り返し、ガイラが仰け反つた勢いを利用してバク転で避ける。アレフが跳び下がり距離を取り納剣する。

「舐めすぎです。行きます！」

アレフが踏み込みながら抜きつつ。さっきと同じ様にガイラがスウェー、すかさずアレフの突き。同じ避け方はできない。ガイラが右に避ける。突きからの横薙ぎが入る。避けられないと悟つたガイラが左上腕で受け止める。鈍い音が響き渡る。二人が再び跳び下がつて距離をとる。アレフが剣を納める。

「これで互いに左腕が使えなくなりましたね。」

そう言いながらアレフが右手で盾の固定具を外す。外した盾は右手。

「そうか、最初の一撃で左手がいったか？」

「おい、もういいだろう。これ以上怪我を増やすな。」

俺は思わず声をかけた。いかげんにしろよ、誰が治すと思ってるんだ。

「そう言うなよ。まだ楽しませろよ。」

ガイラが俺の方を見て文句を垂れる。

「そうですよっ!と!」

アレフが右手の盾をガイラに軽く投げる。ガイラが思わず盾を受け止めてしまう。そこにアレフの居合い、狙いは脚。そこでアレフの剣が止まった。

「はい、それで終わり。ガイラももういいだろ。お前足腰が弱ってるぞ。」

「ああ、判ってる。しかし容赦無いな、避けるので精一杯だ。しかしまあアレフこれはひどいぞ。」

ガイラが鉄の盾をアレフに返しながら言う。文句を言っているわりには笑っている。

「勝負の最中に目を離す方が悪い。僕はそう習いました。」

「そうだな、お前の言う通りだ。これからよろしくな！」

「はい、こちらこそお願いします。」

俺はマギーと顔を見合わせる。マギーは呆れ顔だ。

「馬鹿が移るぞ。部屋に戻ろう。」

「いいの？怪我してるけど……。」

「ああっいいい！あれぐらいなら折れてない。アレフのベホイミで十分だ。」

俺はマギーの手を強引に引っ張って宿屋に戻る。

「あー腹立つ。今の体調では勝てないのを判っているくせに！」

「そんなものなの？剣のことはよく判らないわ。」

「あいつは二週間ずっと寝ていたただけだ。まともなステップも取れないから上半身だけで避けていた。」

「ふん。で、何に腹を立ててるの？」

「……何に腹立ててるのか？俺にもよく判らん。なるほど君は聡いな。」

そうか。アレフの成長、ガイラの体、二人の勝敗、将来の展望、

心配になることでもいいだ。なるほど俺はそれらをまとめた何かに心配して、腹を立てていたのか。マギーが微笑んでる。

「そうだ。聡いと言ったついでにマギー、君を褒めてやろうと思っ
ていたことがあるんだ。」

「何？褒められるようなことした？」

「君達は馬車でここマイラに来た。ルーラで来れるにも関わらず。」

「あのルーラを使ってはいけないと言ったのはケルテン、あなた。
ならあなたに会う為にそれは使っ
てはいけない。」

「そう俺が言ったことだ。だからそこまで考えてここまで来た覚悟
を褒めてる。」

「褒めるってのは頭をなでるとか、抱きしめるとか、褒美をくれる
とか行動で示すものよ。」

「そうだね。」

俺はマギーの頭をなで、抱きしめる。

「続きは城に帰ってからにしよう。扉の外で聞いている馬鹿がいる。」

扉の外から逃げる音が聞こえた。思わず噴出す。

「いつになったら城に帰れるのかしら？」

「そうだね・・・ガイラの武器ができるまであと二日といったこと」

るか。それまであの二人に付き合ってくれ。馬鹿二人を使いこなすのは大変だぞ。」

「いいわ。どんな馬鹿でも使いこなすのが筆頭魔術士。そうよね？」

「そうだ、城にはもっと馬鹿が多いからな。今のうちに慣れとくといいぞ。」

俺は笑う。マギーも強くなった。皆強くなった。もう俺一人強くなくていい。

旅立ち

6 / 10 勇者支援生活 41日目

とうとうミスリルナツクルが完成した。握ったガイラが嬉しそうに素振りしている。さらに左手に籠手を装備させる。これはミスリル板をメイジドラキーの翼膜で包んで、一見革の籠手に見せている物である。実は俺が使っている革の籠手も同じものである。

「おい、ガイラ。一人喜んでないで聞け。その籠手は一応盾の替わりになる。この前のアレフの攻撃を受け止めたように使えばいい。ただ刃物など受け止めると表面が切れるから、必要に応じて修理すること。中身は絶対に見られるな。ミスリルナツクルも同じだ。一般的な品物じゃないんだぞ、気をつける。」

「ああわかった。なんにせよこれは普段は使う必要はないな。拳が効かない相手にだけ使用する。籠手はまあ状況次第だな。」

「本当に判っているのかよ。ではこれからの予定だがアレフと一緒にリムルダールに行ってくれ。まず鋼の剣を買うといい。今もっている素材は俺が替わりに城に持っていく。貯金から購入できるよう連絡はしておく。」

「鋼の剣ですか？楽しみですね。」

「まだまだ、そのうち炎の剣、魔法の鎧、水鏡の盾は購入してもらう。値引き後で9800G、7700G、14800Gだ。」

「うっ！そんなお金どうやって集めるのですか？」

アレフがあまりの高額に肩を落とす。

「大丈夫だ。もうガイラに必要な装備はない。これからの収入は全
てお前の装備に使えばいい。」

「勝手に言ってくれるねえ。まあいいけどな。」

思わずガイラが突っ込む。

「でも悪いですよ。私が強くなればいいだけなのに。」

「駄目。手に入る装備を考慮して、お前は鍛えてある。大体鋼程度
では竜王どころかドラゴンにすら、傷がつくか怪しいな。」

「そっなんですか？」

「さあな、俺もドラゴンに会ったことは無い。でもやってみて駄目
だったじゃすまないだろう？」

「ガハハッ！違いねえ。王家の秘法とやらで生き返るかもしれない
がそれは嫌だな。」

ガイラが気楽に言う。アレフが嫌そうな顔をする。

「あのなあ……だれがそれを回収しに行くと思ってるんだ！」

俺一人でドラゴンと闘えと、魔物の巣窟へ忍び込めと……それ
無理。

「そうならないよう気をつけます。」

「そう心掛けてくれ。それにいずれロトの装備を手に入れることがあるかもな。」

「でたわ、またケルテンの予言ね。よかったねアレフ、ケルテンの予言は当たるわよ。」

マギーが横から口を挟む。マギー違うんだ。これは予言じゃない、予定だ。

「そうなんですか？でも頑張ります。」

「俺の予言とやらない。ガイラ、アレフ。ロトの石碑は読んだか？」

「ああー応読んだ。」

「僕もこの間読みました。」

「じゃあやるべきことは判っているな。」

ガイラとアレフが首を縦に振る。

「ならいい。これからロトの軌跡を辿ることになるだろう。頑張れ。」

「おう、任せろ。」

「はい、でもロトの遺跡で勇者様が男性の戦士、優しそうな女性、理知的な男性と一緒にいる夢をみたんですが単なる夢ですかね？」

「えらい具体的な夢だな。それで正解だ。ロトの勇者に付き従ったのはまず男の戦士、なんと近衛騎士団長どのが末裔にあたる。次に女性の僧侶、最後に男性の賢者だ。あとの二人の末裔は自分で探せ。」

「はあ、よくご存知ですね。驚いてくれると思っただんですが・・・」

「ああ昔調べた。ある意味驚いたな、俺の長年の調査は夢一つと等価か。お前さん、もしかしたら本当にロトの血を引きし者かもな。」

「冗談は止めてくださいよ。僕はそんな大層なものじゃありません。」
アレフが両手を大きく振って否定する。

「まっそんなの関係ないしな。大事なものは血より志、そうだろ？」

「だなっ！俺らはその志とやらの絆で結ばれている。たとえ離れていてもお前もいつしよに戦っている。」

「私は？」

「そうだった。嬢ちゃんもいつしよだったな。」

「ガイラ、嬢ちゃんなんて言ったら駄目ですよ。ケルテン師匠より怖いですよ。」

「そうだ。マギーを嬢ちゃんなんて言えるやつは城にもいないぞ。」

「そっか、気をつける。」

「おい話題が逸れとるぞ。それとアレフ、もう師匠はいい。名前で呼んでくれ。」

「えっ師匠は師匠ですよ。」

「駄目。ガイラにはガイラって呼ぶくせに、俺にだけ師匠とかつけるのもう無し。」

「わかりました。じゃあケルテンさん。」

「まあ、とりあえずそれでいい。じゃあアレフ、お前に俺の馬を貸すからそれでガイラと行け。俺はマギーと城に帰る。」

「判りました。ではガイラ、行きましょう。」

「おう、俺の馬は速いぞ。遅れるなよ。」

「駄目です。僕が先行しますからついてきて下さい。」

二人が駆けていった。しばらく面倒をみる必要はないな。

「さあマギー、城に帰ろう。（俺はMPを・・・）」

マギーが人差し指で俺の口を押さえる。

「駄目、ルーラは私が使う。私の方がMPは多いのよ。」

「そうでした、お嬢様。では城に戻りましょう。」

そして一つの光がラダトーム城に跳んだ。

急転

6 / 1 1 勇者支援生活 4 2 日目

国務大臣執務室に行こうと約2週間ぶりに城の2階に上がる。それはともかく様子がおかしい。文官側でそわそわ、ざわざわしている。さらに大臣の執務室の前に人だかりができているのだ。俺に話しかけてくるやつは少ないはずなのだが何人かに声をかけられた。

される質問は皆同じ「担当の勇者は大丈夫か？」ばかりだ。何か気持ちが悪いのであまいにしか答えは返さない。なんとか人だかりを割って執務室に入る。そこに顔色が青くなつたシュミットがいる。なにやら大臣と深刻に話をしているようだ。

「勇者支援官ケルテン戻りました。長期留守にして申し訳ありませんでした。」

「よい。ご苦労であつた。してそなたの担当の勇者はいかに？」

「はっ！勇者51は素行不良にて解任、勇者25、55共にリムルダールに向かいました。概ね順調です。」

「よろしい。この者の報告を受けていたのだがそなたも聞くがよい。もう一度説明せよ！」

「はっ！小官が担当する勇者12、41、42、43が昨晚から今朝にかけて消息を絶ちました。当人達の申告からリムルダール方面に向かったはず。5日前のことです。光点も消滅しております。」

「と、いうことだ。そなた何か心当たりはないか？」

「そうですね・・・小官は昨日までマイラの村にいました。それまでに見かけたことはありません。」

「なるほど。ではシュミットよ、ケルテンと協力して探すがよい。そなたもよいな。」

それだけ言うと大臣は自分の席に戻るとベルを鳴らす。何人かの文官が入室し次々に書類を渡し始めた。

シュミットの青い顔はそのままだ。

「シュミットもそんな顔をするんですね？真っ青ですよ？」

「そうか？いや自分でも驚いている。他人のことでこんなに動揺するとはな。俺らしくもない。」

「飄々としていても意外に人情家ということですか・・・」

「なるほど、同行している間にねえ・・・よしならば早く探し出してすつきりしよう。」

そう言うと魔法の地図に目を移す。今見える光点は毒の沼地辺りに二つ。契約書を取り出して映像で確認する。

「間違いない、これは俺の担当のアレフとガイラだ。」

「しかしここからリムルダールに向かうと5日の距離はこの辺だな。」

「そういつて地図の海底洞窟を指差す。」

「そうですね。普通ここは南北の通路をまっすぐ使用するだけで、それなら一日もあれば通過できるはず。」

「何だ、通ったことがあるのか。俺もそうだがあまり実入りのよくないというか東側の入り組んだ所には行かないな。」

「ですよ。人為的に整備された本道と、東に広がる複雑な自然窟。」

「迷い込んだか？しかしこの辺りはそれほど強い魔物はいなかったはず。」

「そうですね。魔法使い、ゴースト、メーダ、おおさそりといったところですかね。」

「驚いた、よく知っているな。まあ土着のメーダ、おおさそりくらいしか知らなかった。」

アレフガルドには平和なころにもある程度魔物はいた。スライム類や野生の動物に近い魔物おおさそり、メーダ、キメラなどがそれにあたる。しかし魔王の復活によってそれらの魔物が瘴気により凶暴化、他に様々な魔王の手下が散らばった。さらにあの洞窟の最奥には王女がドラゴンに監禁されている。それに遭遇したか……。

「まあそれはね……いろいろと。しかし魔法の地図から光点が消えるとはどういうことでしょう？」

「そうだな、可能性としては肉体の消滅・・・食われたか、灰にされたか。なにせよ生存は絶望的か。やりきれないな。」

シュミットが頭をかるく横に振る、そして俯いて黙っている。かける言葉が浮かんでこない。しばらくの沈黙の後シュミットが提案する。

「しかし事の顛末を確かめなくてはならないな。ケルテン、一緒に行ってくれるか？」

「了解です。しかし時間がかかりますよ？馬では毒の沼地を渡れないし、手前で馬を乗り捨てるのも気が進まないですね。」

「ならば馬を回収できる者を同行させる。まず沼地の前まで馬で行く。俺達はそこから徒歩、同行者が馬を連れて帰る。俺達は調査の後ルーラで帰ればいい。」

「OK！それで行こう。では急ぎましょう。一時間後に兵舎の厩舎でいいですか？」

「わかった。では一時間後に！」

俺達は退室の挨拶も程ほどに走り出した。

.....

自室で出発の準備をしている。時間が無いので騎士見習いにも手伝わせる。馬の手配、野営用品、食料など用意する物が多い。それも昨日帰ってきたばかりだ。どうもこの部屋に縁が無いようだ。

さて緊急の課題がいくつかある。整理してみよう。

まず第一、王女の監禁場所とドラゴン。これは今から行かねばならないがどこまで調査しようか？仮定の話として王女がここで監禁されていることが公表されるのは事態の好転になるだろうか。いや駄目だな。今のところドラゴンを確実に倒せる手駒はない。軍隊を送るにしても秘密裏に送るのは無理、しかもあの狭い中では力を発揮できない。さらになんらかの方法で奪還に成功したとする・・・これも駄目だ。今は不完全ながらも戦局は膠着、所謂冷戦状態になっている。バランスがくずれたとき竜王はどうするだろうか？同族が殺された怒り、王女奪還の焦りで全面攻勢にでてくるかもしれない。しばらく公表は控えたいな。

第二に血の契約書対策、俺、アレフ、ガイラ、そしてマギー。昨日ピロートークでなんとなく聞いてみたら、やはり文官も誓約書を提出していた。この4人分の対策が必要だな。方法はあるが準備には時間がかかる。先の問題も含め、時間稼ぎをしよう。

第三、時間稼ぎができたと仮定して、ロトの神器の收拾、雨雲の杖、太陽の石、虹の雫・・・まあこれは先の二つが解決してからでいいや。あとロトの装備も集めないといけないな。

そうこう思考していると準備が終わったようだ。どうも途中から見習いに全部やらせていたらしい。かわいそうなので10Gの駄賃をわたす。ついでにマギーに手紙を渡すよう頼む。現金なやつだ、快く引き受けてくれた。

海底洞窟

6 / 13 勇者支援生活44日目

目の前に毒の沼地が広がっている。正直気が進まない、竜王が現れるまで毒の沼地なんぞごく一部しかなかったし、無理に通る必要がなかったから入ったことない。しかしここから海底洞窟までここを通っていくしかないのである。

「薬草と毒消し草を絞った汁を布に染み込ませて、それで口を押さえるんだ。これで瘴気を吸う量がある程度軽減できる。」

「お前いろいろよく知っているな。その若さでその知識量、油断ならないな。」

「無駄口叩くと瘴気を吸い込むぞ。まあ俺も気に入っている他称だが伊達に“戦う考古学者”とは呼ばれていない。」

「なるほどねえ、いいあだ名だな。俺も女たらしとかすけこましよりそんなあだ名がいいな。」

「普段の行いが悪いからだ。そのあだ名をつけてくれた友人が教えてくれた方法だ。そいつは馬ですらここを通すぞ。」

「マジか！すげえな。俺にも紹介しろよ。」

「もう知っている。勇者25ことガイラだ。俺がつけてやったあだ名はサバイバルの達人。」

「それも格好いいな。」

「もう黙れよ。頭がおかしくなってくるわ!」

それから何を話しかけられても俺は返事をしなかった。ずっと沼の南側、山に沿って歩いていく。俺が先行して足場を確保する。返事をする余裕なんかあるもんか。

- - - - -

日没を2時間ほど過ぎてやっと海底洞窟についた。レミールも使用しての強行軍だ、俺もシュミットも肩で息をしている。毒の沼地ではキャンプはできない。そうでなくてはこんな強行軍はしない。

「どうする?ここで寝るか。トヘロスは効果が薄そうだ。どっちかが見張りをしなくてはいけない。」

「よし、ケルテン。お前が先に寝てくれ。お前が先行してくれたおかげでまだ余裕がある。」

「わかった。言葉に甘える。5時間寝たら起こしてくれ。」

俺は毛布に包まり目を瞑った。トヘロスは多少残っている精霊ルビスの加護を得る魔法。ただし洞窟などルビスより魔王の影響の強い場所では効果が薄い。そんなことを考えていると意識が遠くなった。

「ケルテン!ケルテン!」

誰かが俺の体を揺すって名を呼んでいる。ああそつだ。ここは海底洞窟、もう5時間たったか？

「ああつ、もう時間か？」

「そつだ。外で星を見て確かめた。すまん、もう少し寝させてやりたかつたが……。」

「いやいい。見張りは変わる。寝てくれ。」

「了解。日が昇ったら起こしてくれ。」

シュミットが眠つた。周りを見渡す。永遠の闇が広がる、そんな気がする洞窟内だ。ここはまだ洞窟の入り口に近いからほんの少しの光が入ってくる。洞窟内では目立つため、今は明かりをつけていない。

暗闇に目を凝らす。少し離れた所に魔物の死骸、その傷口は焼ききつたようだ。炎の剣・・・雷神の剣のレプリカ、そう結論付けた。素材はミスリルではないが、内包させた魔力により抜剣時は常に灼熱化している。間違つて自傷する可能性が高いため、未熟な者は使用できない。つまりシュミットは強い。なるほど今のこの状況では明かりの確保もできてちょうどいいか。

どうせ目を凝らしても魔物の姿は見えない。なら立つたまま目を瞑り意識を広げる。何も考えていないが意識のある状態を保つ……無理だった。

仕方がないので暗闇の中でいつもの鍛錬をする。シュミットを起こし

すのは悪いので少し離れて刀を振る。これが一番落ち着くな。結局俺の剣気によってかどつかは判らないが、魔物は現れなかった。日が昇るまでの時間が永遠に感じられた。

.....

俺達は暗闇の中進む。ここにいないはずの強敵を恐れて、レミーラの明かりを布で隠して光量を調節している。メーダやおおさそりは闇でもこちらを発見してくる。もっともこちらでもその気配が音だけでもはつきり判るからまだ楽だ。魔法使いが持っている明かりは先に見つけやすいので、こちらが闇に紛れて過ごすか、不意打ちで倒す。問題はゴーストだ、気配がほとんどなく壁をすり抜けて不意打ちをしてくる。不意打ちに対応するのは諦めて、不意打ちを受けてから二人で背を合わせこちらの隙をなくした。ゴースト自体はそれほど強くはない。

半日ほど進んだらどうか？時間の間隔はない。腹が減ってきたので携帯食を口に運ぶ。俺が小声で話題を振る。

「なあ、もしこの先にとんでもない敵がいたらどうする？」

「どの程度の強敵だ？」

「そうだな・・・例えばドラゴン、悪魔の騎士、ストーンマン、大魔道とかかな？」

「ドラゴンならすつ飛んで逃げるね。鎧の化け物や魔道士系は相手の数次第だ。そのストーンマンとやらは聞いていないな。」

「メルキドでゴーレムと激戦を繰り広げた魔物だ。まあゴーレムの

方が強かったから街は守られた。」

「それこそこんな所には入らないだろう。まあいずれにしろ相手にはしないな。」

「その通りだ。しかしやつらはなぜここにいるのだろう？」

言葉を選んで話す。

「それは判らん。考えても無駄だろう。もう行こうか。」

再び暗闇の中を進む。暗闇と静けさの中に違和感が現れた。耳を澄ます。俺は小さな声で囁く。

「おい、何か聞こえないか？」

「ああ聞こえる。獣の呼吸音だ、それもかなりでかい。」

「俺が偵察に行く。あんたの魔法の鎧よりは俺の革の鎧の方が静かだ。」

「いいのか？危険だぞ！」

「どつちにしろ、誰かが行かねばなるまい。もし俺が戻らなかったらリミットで帰って、強い魔物がいたと報告してくれ。できればしばらくここには誰も来させるな。いいな。」

「・・・判った、お前の言う通りにしよう。俺が行くのは適任ではない。」

「戻らない基準だが、俺の悲鳴や断末魔が聞こえたら即逃げる。呼吸で1000回、それだけ数えて戻らなかった場合も同様だ。では行く。」

暗闇の中、頷いたような気配がした。俺は摺り足で少しずつ進む。100歩は歩いただろうか、幾つかの角を曲がった先に明かりが見える。一度戻る、シュミットが俺を迎える。

「どうだった？」

「もう少し先に明かりがあった。そこまで行こう。」

シュミットが左手の鋼の盾のベルトを閉めなおす。腰の炎の剣に右手を添えたまま進む。無言のまま先の場所についた。

「確かに明かりだな。待て！よく見る。あそこの床に焦げ跡がある。」

シュミットが指差す。目を凝らす・・・なにか転がっている。

「何かあるな、よし取ってくるぞ。さっきも言ったが何かあったら逃げる。」

もう明かりを気にしなくてもいい。足音を立てないようにじりじりと摺り足で進む。転がっていたのは半分溶けた鉄の盾。手に取って戻る。シュミットと目があう、真剣な顔で俺が戻るのを見守っている。他人事みたいに可笑しい。

「とりあえずは戻ろう。最低でもこうできる魔物だ。」

「しかしまだ何を見てないぞ。」

「いや駄目だ。鉄の盾が溶けるような攻撃ができる敵だ。それだけ判るだけでも収穫だ。」

シュミットがしばらく黙る。顎に指を当てて何か考えている。

「判った、戻ろう。この情報だけでも報告する。」

「ならリレミトを使う。俺が完全無詠唱で使う。いいな？」

「まかせろ。」

俺達はリレミトで外にでた。思わず深呼吸ををする。ここは毒の沼地、空気がまずい。あわててルーラを使う。城下町だ。やっと落ち着いて深呼吸ができた。座り込んで二人で顔をあわせて笑う。通りがかかる人々がおかしな顔をしている。生きていることを実感した。

異端者

国務大臣は俺達の目の前で難しい顔をしている。

机の上に半分溶けた鉄の盾がある。鉄の盾といっても全部が鉄でできているわけではない。そんな鉄の塊を作っても誰にも持てない。基本木の盾の表面に鉄の板を貼り付けた物だ。だからといって簡単に溶かせるものではない。

「これはどういうことだ。」

「見たままです。そういうことのできる敵がいたようです。」

「いたようだ？では見てはいないのか？」

目に見えて大臣の機嫌が悪くなる。そこにシュミットが口を挟んだ。

「見てはおりません。この事実の報告が大事と小官が判断しました。」

「そうか、ならばよい。大儀であった。」

大儀か、俺は一礼すると踵を返した。隣のシュミットも同じくそうしている。

.....

俺とシュミットはそのまま近衛騎士の控え室にいる。近衛隊長、サイモン、他大勢の騎士に囲まれている。先ほどの溶けた鉄の盾を見せている。

「発見場所は言えないが、このような物があった。」

俺がそう発言する。皆言葉を失っている。空気を読まないサイモンが言う。

「すげえな、どうやったらこんな風になるんだ？」

「わからない。予測はついているが見てはいない。」

「その予測とやらを教えろ。」

「サイモン！少し言葉が過ぎるぞ。」

隊長が苛立つて叱る。だがその言葉に重々しかった空気が緩む。

「構いません。この馬鹿はいつものことです。では説明します。これは火の息によるものでしょう。」

「馬鹿な！先の大戦でドラゴンが噴いた火の息でもこうはならなかった。」

「そつだ。そんな馬鹿げた話はない。」

「ありえないな。なんらかのトリックか欺瞞だ。」

ふむ。結論を知っていなければ信じられないだろうな。あの先には間違いなくドラゴンがいる。俺は知っている。ただこれは想像を超えている。

「ならそう考えてもらってもいい。だがもしあんたらがその火の息を受けたら、盾ごと黒こげだな。」

「ケルテン！それはよい。後で私から叱っておく。これを見せたのは備える、そう言いたいのだな？」

流石、伊達に隊長をやってはいないとみえる。俺は黙って頷く。

「わかった。どう備えるかは検討してみる。だがこれはどこで？」

「先も言いましたが教えることはできません。これはそのシュミット殿と決定したことです。」

「そうです。我々特務隊士の権限で口外も禁止させてもらいましょう。一般兵にまで漏れると士気に関わります。」

その言葉にその場に居合わせたうちの半分が不満そうな顔をする。内容ではなく命令されたことに対してだ。なるほど近衛騎士はエリート意識が強い。サイモンは涼しい顔をしている。

「とりあえず事実は伝えました。あとはお任せします。シュミット行きましょう。」

俺達は近衛控え室をでた。歩きながら話す。

「あんたも貴族の割には近衛に好かれてないな。」

「ああ、俺もあまり好きじゃない。あいつらは格式とか礼儀とかうるさい。さらに俺の剣技にもけちをつけてくる。」

「なるほど、そう言うことか。さっきあんたが命令したときの反感がひどかったので気になった。」

「よく見ているな。よく言われたよ、お前の攻撃は軽い。速さはあるがそれがどうした、そんなもの効かない。ってね。」

「馬鹿は放つとけ。あんたは強い、俺が保障する。」

「おまえに保障されてもなあ、いや感謝する。俺もおまえの強さは保障してやる。」

「褒められたと思っておこうか。」

俺達国務大臣特務隊士、この城では異端者。

一度部屋に戻って荷物を漁る。2つ同じの水晶のペンダントと取り出した。その足で図書館に行く。

「はいマギー。今戻ったよ。」

「おかえりなさい。怪我は無い？」

「ああ大丈夫だ。やばくなる前に逃げ帰ってきた。」

「逃げ帰る？珍しいわね。あなたらしくもない。」

怪訝そうな顔をする。

「俺は自信過剰の騎士とは違う。彼を知り己を知れば百戦危からず。つまり勝てない相手とは戦わない。」

「それいい言葉ね。ちょっとメモするから。もう一回言つて。」

「彼を知り己を知れば百戦危からず。」

「OK!書けたわ。それでどうしたの?私に会いに来ただけ?それでもいいけど。」

知識欲が満たされていい気分のマギーだ。

「この間の御褒美を持ってきた。これだ。」

俺が二つのペンダントを取り出す。一つを渡す。

「一つは俺の、もう一つは君の。これには必要な儀式がある。」

「儀式?何か意味あるの?」

「ああもちろんある。俺がいつまでも俺であるように、君が君でありますようにって意味だ。」

「何か深いわね。いいわ、やりましょう。」

俺がナイフを取り出し自分の指に小さな傷をつける。血を一滴、水晶に垂らす。水晶が真っ赤に染まる。なぜかその色は落ちない。ナイフをマギーに渡す。

「同じ様に。」

マギーが同じことをする。終わったたらホイミをかける。

「これでいい。身から放さないでくれ。俺も身から放さない。」

「ふん。よく判らないけどそうするわ。せつかくの貰い物だもんね。」

マギーが首にペンダントをかける。真っ赤に染まった水晶が怪しく光った。

アレフとガイラ

6 / 15 リムルダール近郊。

「なあアレフ。お前なんで弱いがいこつより、死霊の騎士の方が楽に倒せる？」

「えっ！判りますか。なんと云うか・・・その動きが読めるんですよ。死霊の騎士はジョルジョと同じ動きをするので・・・ああジョルジュってのは一緒に訓練していた騎士見習いなんだけどね。」

「ほう、正規の訓練を受けた者とそうでない者の違いか？」

「そう、がいこつは素人っぽい感じで何をしてくるか予想できない。だけど死霊の騎士は型通りの動きをするので少しずらして避けたり、カウンターを合わせたりしやすい。魔物がなぜなんでしょうね？」

「こいつ気づいたか？学者の仮説どおりじゃねえか。あの魔物が人間だとはとても教えられないな。俺はとぼける。」

「さあな、俺にはわからん。帰ったら学者にでも聞けよ。」

「そうしましょう。では次あそこに見えるリカントにいけますか？。」

「OK、ついてこいよ！」

ガイラは愛馬ライに飛び乗り駆け出す。少し遅れてアレフが馬で駆ける。リカント達が蹴散らされた。

.....

日が落ち、焚き火を囲む。

「トヘロスを使いました。ある程度は安全だと思います。」

「OK、そこら辺に鳴子を仕掛けた。カモフラージュも十分だ。しかしお前さん、野営もなれたものだな。」

「つい2週間前に習いました。いや習ったと言っているのか？」

「なんだそれ？」

「師匠にですね。無理やりやられた・・・ですかね。急に馬にのってマイラへ行くぞって言われて、ついていいたらまあひどい目にあったんですよ。」

ガイラが笑いながら焚き火に薪を放る。

「驚きましたよ、食料がないと言われたときは本気で殺意が沸きました。」

「ふん、あいつらしいな。絶対わざとだ。」

「僕も後で気づきました。他にも互いに速さの違う馬を用意したのも、カエルを食べさせたのもみんなそう。」

「なるほど、俺に渡すまでに完成させた・・・そう言うことか。」

「まだ完成にはほど遠いですけどね。基本的にあの人が教えてくれな
いんです。ただそこにヒントを置いておく。でも気づかないと捨て
られる怖さがあります。」

「そうか、お前は置いていかれるのが怖かったのか。いい師匠を持
つたな。」

「もちろんです。僕が選んだ師匠ですから。」

「あいつなあ、怒ると怖いんだよな。この前の病気の時な・・・俺
の言うことを聞いて病を治す気がないなら一人で死ねって言われた。
あれは効いたな、まじでへこんだ。」

「それ判ります。いろいろ心当たりあります。」

「まあいいさ、今日はあいつの悪口でも言おう。」

それから夜中になるまで語り続けた。

.....

朝になる。日課の鍛錬をする。

「鋼の剣はどうだ？」

「あまり変わらないですね。基本ができていれば得物が変わっても
問題ないようです。」

「そうだな、俺のミスリルナツクルも違和感はない。これなら多分いけるな。次ゴールドマンを見つけたら戦ってみよう。」

「そうですね、この前は銅の剣だったので止めましたが、もういいですよ。」

しばらく鍛錬を続ける。朝食を取る、まずい飯にも慣れた。

「なあお前聞いているか？昔、俺と学者で遺跡を探索していたこと。」

「なんとなくですが聞いてます。」

「あれなあ、地方の小集落を回ったんだがな、力仕事と護衛を頼まれたんだ。高報酬に釣られて依頼を受けた。あの頃は平和だったから若い学者の道楽に付きあつのも悪くはなかった。」

「へえ……それもいいですね。うらやましいな。」

「それがそうでもない。あいつ何か見つけるとこつちの話を聞かん。雨の祠のところ、半日地面に這いつくばっていたときは腹が立ってたまらんかった。ずっとやることもなく待っていただけだったからな。」

「半日ですか、何かありましたか？」

「昔ここには天に届かんばかりの塔があったと嬉しそうに言った。地面の岩や石の基盤を調べていたらしい。まあ本当かどうかは知らない。ただ、いろんな骨董品ができたから金にはなったがな。」

「はあ本当ですかね？」

「さあね？まあそんなわけで俺も受け売りながらロトの伝説には詳しい。しばらく力試しが済んだら南の聖なる祠、別名虹の祠へ行く。その後にでもさっきの雨の祠にも行く予定だ。」

「そこがロトの友の末裔のいる場所ですか？」

「そうだ。昔あいつと回ったことが役にたつとはな。じゃあ今日はの第一目標はゴールドマン、次にキメラだ。キメラは上位種もいるから戦い慣れてくれ。」

しばらく歩いてゴールドマンの足跡を発見した。重いゴールドマンの足跡だ、後をつけるのはむずかしくない。果たして・・・ゴールドマンを発見した。

「よし、俺が後ろに回って脚に一撃を入れる。5分ぐらい経ったら奴の気を逸らしてくれ。」

それだけ言うとガイラは離れた。気配を消して裏に回る。アレフはゆっくり数える。1、2、3・・・297、298、299。アレフがゴールドマンの前に飛び出す。

「ギラッ！」

火球がゴールドマンの顔面で弾けた。対してダメージは入っていない。ゴールドマンがアレフを敵として認めた。振り下ろされる大きな右腕、アレフはすでにそこにはいない。ゴールドマンが敵を探そうと体を起こした。次の瞬間ゴールドマンの右膝の裏にガイラの一撃、バランスを崩してゴールドマンがひっくり返る。

「アレフやれ！弱点は額だ。」

アレフが藪から飛び出す、仰向けになったゴールドマンの顔に飛び乗り、額の刻印に鋼の剣を叩き付けた。ゴールドマンは糸が切れた操り人形のようにいきなり動きを止めた。

「やったな。ナイスだ。」

「いえ、転んでなければできません。」

ガイラが自分の攻撃の跡をみる。そこにはミスリルナックルの跡がはつきり残っている。

「改めて思うがこれはすごいな。武器のおかげだな。」

「武器を使いこなすのも強さのうちだそうですね。」

「違いねえ。しかし学者の言ってた弱点・・・本当にあるとはな。見る！」

ガイラがゴールドマンの額を指さす。そこには読めない文字で何かが書いてあった。そのど真ん中に大きな傷が入っている。

「これが弱点？」

「ああ、金塊を安全に運ぶために作られた金のゴーレム、それを動かすための魔術儀式らしい。文字を消せば動きは止まる、そう聞かされた。学者の知識に感謝や。」

「じゃあこれ本当に金なんですか？持ち帰ればゴールドになります

ね。
」

「あありムルダールに持ち帰って売ろう。それでお前の魔法の鎧が買える。」

二人でなるべく細かく解体する、できるだけ馬に載せる。さありムルダールに戻ろう。金で重いはずのその足取りは軽かった。

暗雲

6 / 15 勇者支援生活46日目

現在活動している勇者が2名しかいなくなったことを憂慮して、
国務大臣から命令が下った。地方で勇者に相応しき者をスカウトせよとの事である。それについて今シュミットと食堂でぼやいている。

「シュミット、無理だ。」

「そうは言っても探すしかないだろう。俺が知っている限り城下街、
ガライ、マイラはすでに余地はない。お前はどうか？」

「リムルダールは俺の故郷だが俺以上の腕利きは少ない。街の守備
隊長は俺より剣技は上だが魔法はからつきし、なにより街の守備隊
長を引っこ抜くわけにはいかない。魔法の使い手の心当たりもない
ことはないが年齢の問題で推薦できない。」

「となるとメルキドか・・・メルキドが攻められた時向こうから脱
出してきた者がいるが、キメラの翼を使って逃げてきた者でなんの
役にも立たん。」

思わず二人してため息をつく。

「いずれにせよ誰かが行かねばならん・・・か。」

「俺が行く。ケルテン、お前は残れ。お前はお前の勇者の面倒を見
るべきだ。」

「だが、それではあんたがっ！」

なぜかシュミットが笑っている。荒げた声が続かない。

「何を言うか、俺はメルキドの女に顔を見せに行くだけだ。ついでにめばしい人材がいるといいな。」

ルーラで送るべきか？失うには惜しい・・・どうする？思考が絡みつく。そんな俺に気づいたのかシュミットがさらに笑う。

「はははっ、聖水と薬草を買い込んで行くさ。玉砕する趣味はないし、やばくなったらルーラでもキメラの翼でも使って逃げてくるさ。」

「そうか、そうすればまだマシだ。だがどうやってメルキドに入る。守護するゴーレムが無差別に攻撃するようになっていてと聞く。」

「噂には聞いている。まあ壁をよじ登るなり裏口から入るなりするぞ。」

わざとらしくぶざけてみせる。それが判るだけに止めることができな

「・・・なら途中までも送らせてもらおう。ドムドローラまでとは行かないがせめてその手前くらいまでなら・・・。」

「そうだな。そこから先は不眠不休に近くなるからな。それまでは楽させてもらおうか。」

「ああ、野営でも寝ずの番でも務めさせてもらおうよ。」

それが欺瞞なのは自分が一番知っている。それでもこの男にできることはしてやりたい。

.....

俺達は各自馬に乗っている。更にもう一頭の馬を連れて駆ける。3頭ともかなりいい馬を無理言って借りてきた。一日目は少し遠回りになるが安全にキャンプできるロトの遺跡で寝る。

「明日は岩山の洞窟の手前位まで行こう。明後日にはドムドーラ付近まで行けると思う。」

「無茶言つねえ。いやこのメルキド行き自体が無茶か。」

「そうだ。この馬は普通の馬より倍は速く走れる。更に持久力もある。明後日からはこっちの替え馬を使えば少しでも早く走れるだろう。」

「そこまで考えていたか。荷馬にしては速いと思っていたところだ。」

「ふん、今日はもう寝る。明日以降まともに寝れる保障はないぞ。」

「そうだな。お前さんがいる間は全部任せる。」

それだけ言つとシュミットが眠る。俺も寝るとしよう。明日明後日は不寝番は俺がやらねばなるまい。

それからさらに二日、予定どおりドムドーラへの橋を越えた。夜は俺が不寝番をし、空が明ける頃から少し仮眠をとった。馬の休憩で停止した時も仮眠をとった。眠さで限界だがシュミットを笑顔で送る。

「では行ってくる。速ければ一週間で戻る。」

「任務なんぞ捨てていいから無事に戻って来い。あんたの死体を向かえに行くのは簡便してくれ。」

「心得た。俺はそんなに任務に真面目じゃない。じゃあな。」

シュミットが駆けていく。その姿が見えなくなるまで見守った。俺は何気に馬を引いて橋を戻る。さあ城に戻ろう。ルーラを詠唱する・・・なぜか発動しない。しまったマホトーンか！周りを見渡す。橋を渡った先に2体、後ろに2体の鎧の騎士が現れた。さらに橋の下に漆黒の鎧の騎士。

挟まれたか。まずいな、いつもの自己強化魔法も使えない。どうする？ここは逃げるべきだ。馬に飛び乗り、もう一匹の馬に鞭を強く当てる。尻をぶたれた馬が暴走する。前方の鎧の騎士が割れた、俺の馬もその間に向けて駆けさせる。馬体を強引にぶち当てて通り抜けた。しばらく駆けさせて距離をとる。懐を漁ってキメラの翼を天に投げた。護身用の一つ持っておけ、これはアレフに俺が言った言葉だ。

橋の上にいた鎧の騎士が姿を消す。漆黒の鎧の騎士がゆっくり上に上がってくる。兜の上には血のように真っ赤な房。

「くっくっくっくっ！やはり思ったとおりだ。あやつめ、慌てふためいておった。俺が知っているあいつはこれぐらいの敵は蹴散らせるはずだが、魔法を封じただけでこれだ。逃がしたのは惜しかったがな、だが次は勝てるぞっ！ああっはっはっは……」

誰もいなくなつた橋に男の笑い声が響き渡つた。

深刻な申告

ラダトームの入り口、馬ごと戻ってきた。落馬と見間違わんばかりに馬から降りる。衛兵が駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？」

「ああ・・・ああ大丈夫だ。すまなが馬は返しておいてくれ。俺も落ち着いたら・・・か・・・え・・・る・・・zzz」

はっ！意識が覚醒した。見慣れた部屋、俺の部屋か。俺の額には冷たいかたく絞った布。ベッドのすぐそばにはマギー、椅子に座ったまま寝ている。額の布をとり上半身を起こした。

「マギー、そんなところで寝ると風邪ひくぞ。」

マギーの顔に手を当てる。

「う、うん。何・・・ああ、ケルテン起きたのね、よかった。」

マギーが目を覚ます。あまり慌てた様子はない。

「ああ、また心配かけた、すまない。」

「そんなに心配はしてないわ。ただの睡眠不足、疲労でちよつと熱があつたくらい。」

「そうか、ずいぶん冷静な判断だ。で、俺はどれくらい寝ていた？」

マギーが立ち上がって窓へ歩き、カーテンを明ける。朝日が眩しい。

「そうね、まる一日にはちょっと足りないくらいね、ずいぶん寝坊なこと。それとあなたの無茶には慣れたわ。」

ベッドから降りる、少し体が硬い。ストレッチをして体を解しながら声をかける。

「それほど無茶するつもりはなかったんだけどな。最後に一つ誤算があった。」

「誤算？」

「ああ、シュミットをドムドーラ近郊まで送った帰りに魔物に襲われた。それも俺を狙っていたような気がする。」

「そんなこと判るの？」

「ああ、不意打ちで魔法を封じられた。橋の上で鎧の騎士2体ずつ両端から挟み撃ち、さらに橋の下でそれを指揮している奴がいた。漆黒の鎧に真っ赤な兜飾りの鎧の騎士・・・話に聞く悪魔の騎士とは違う。」

「よくそんな危機を逃れられたものね。」

「そうだな。連れていた馬を一頭突っ込ませた。暴走した馬で割れ

た隙間を強引に抜けた、後はカメラの翼。置いてきた馬にはかわい
そうなことをした。」

「そう……でもよくそんな瞬間的に判断できたわね。」

「戦う気がなかったからね。すぐに逃げることしか思いつかなか
た……それが幸いしたか、多分下手に抗おうとしたら命はなかつ
た。」

マギーが俺に近づいて抱きつく。

「私を置いて死ぬなんて許さない。どうせ死ぬならあなたの全てを
私に渡してからにして、それまでは死んでも死なせない。」

「なんだ、やつぱり心配してたんだ。なんか理不尽だけど俺も死に
たくないから努力する。それでいいか？」

「……………」

返事は無い。より強い抱擁、俺も強く抱きしめる。

- - - - -

国務大臣に報告するため、国務大臣執務室にいる。

「シュミットをメルキドに向かわせております。現在位置を確認し
たいのでシュミットの誓約書をお貸し下さい。」

「そうか、何時に結果がでるか？」

大臣が抽斗をあけ、シュミットの誓約書を差し出す。相変わらず
嚴重だ。

「そうですね、最速で一週間といったところでしょうか。」

俺は魔法の地図を起動させる。シュミットのマーカーはドムドー
ラ南、動きはない。水晶球の映像で確認する。どこか薄暗い所で寝
ている、休憩中か。

「無事を確認しました。必ず戻ってきます。」

「ふむ、だがそれだけでは困るのだから。」

頭に血が昇る。まるで個々の生命には興味が無いかのようだ。心
を静める。こいつに何かを期待したのが間違いだ。

「そうですね、なんらかの結果を持ち帰ってください。それともう
一つ報告したい事が！」

「なんだね？わざわざ報告せねばならぬことか。」

「昨日襲われた魔物に、見たことの無い魔物がいました。」

「そうか、そのような瑣末なことは現場である近衛と相談するがよ
い。」

「はっ！申し訳ありません。では近衛隊長に報告します。これは返
却致します。では失礼します。」

俺は不機嫌を隠さず、退室の挨拶をする。踵を反して退室、特に反応はない。

.....

「新種の魔物だと言うのか？」

近衛隊長が難しい顔で問いかける。

「そうです。通常鎧の魔物は青い“鎧の騎士”、漆黒の“悪魔の騎士”、そして真紅の“死神の騎士”がいるとされています。先の大戦で報告されたとおりです。」

「そうだな、名前は仮にこちらでつけたものだが、その認識である。」

「私が襲われた魔物は漆黒の鎧に真紅の兜飾り、つまりパーソナルマークを持つ個体です。4体の鎧の騎士を連れていました。」

「それが本当なら由々しきことだな。」

ここは前に俺が考察したことを伝えておくべきだ。俺はより深刻な顔で問いかける。

「これは仮説ですが・・・それもかなり不愉快な仮説になりますがよろしいでしょうか？」

「聞こう。」

「ありがとうございます。がいこつ系、鎧系の魔物についてですが、強さに個体差があるのはご存知ですか？」

「ああ、ある程度は把握している。それが何か？」

「下位のがいこつや鎧の騎士に顕著に現れる現象があります。妙に素人っぽい動きをする固体と一応の戦闘訓練を受けた固体、そう急遽の募集兵のような動きです。これが悪魔の騎士、死霊などになると正統な剣術を使用してきます。」

「なるほどよく観察したものだな。それでそれが何か？」

「ここからが不愉快な仮説です。奴らは元々アレフガルドにいた魔物ではありません。魔王の瘴気によって作られた魔物、その材料が死した人の魂かと。」

「なんとっ!！」

ここにきて近衛隊長の顔が青ざめる。

「使用する魂の弱いものには下位種、それなりの強さを持つものは中位種、十分な強さをもつものには上位の体を与えたと仮定しました。これで大体説明がつかます。極端に言うると先の大戦で無くなった兵士、騎士が新たな魔物になっている可能性は高いかと。」

近衛隊長の顔は青を通り越して、真っ白だ。

「それが事実なら我らは死ねないと言うことだ。しかもこのことは公表できない。まさか僚友と戦わなければならぬとは……。」

「その通りです。この仮定を知っているのは勇者のガイラだけです。もしかしたらアレフも判ったかもしれませんが。とりあえずこれに関して隊長に預けます。」

「判った。俺の心の内に留めよう。」

「では失礼します。」

俺は城の中を歩く。話しかけてくる者は一人もいない。

夢想

6 / 20 勇者支援生活20日目

この二日間で勇者二人のレベルを査定した。ガイラLv15、アレフLv12といったところか。

少し低めに見積もる。魔法の鎧を買うには金が足りないはず。一度戻って換金してから再度リムルダールへ・・・かなり時間がかかるな。双方向のルーラが使えないとアレフガルドは広い。

大臣執務室でアレフ、ガイラの位置を確認する。昨日はリムルダールにいたな。聖なる祠には行つたかな。多分相手にされなかっただろう。俺の魔法の基本はあそこで調査、研究した。門前払いされても懲りずに毎日通つたものだ。シュミットはドムドーラ砂漠の南端・・・無事でいろよ。

さて自らの安全が確保されると実に退屈である、我ながら悪い性だ。図書館でも行つて理知的でウィットにとんだ会話でもしよう。

「はーい、マギー！ やつと手が空いたよ。ここに来るのも久しぶりだ。」

「ここで一人放つて置かれた私について何か言いたいことはなくて？」

「それはすまなかった。別に遊んでいたわけじゃないけど・・・OK！では今日は更なる真実について話そう。」

ちゃかして誤魔化そうと思つたが睨まれたので、興味を引く話に

すりかえる。思惑どおりマギーの目の色が変わる。

「更なる真実とは何？」

「そうだね・・・勇者ロトの冒険について。なんてどう？」

「そうね。400年前招換され、悪の手から光を取り戻した勇者、その栄光を称えロトの称号が送られた。だがその後の消息を知る者はいない。そんな感じかしら。」

「その通り、だけどそれは作られた伝説だとしたら？」

「興味深いわね。いいわ！今日はそれで誤魔化されてあげる。」

「なんだ、そこまでバレバレか。いや誘導されたか・・・まあいいや、じゃあ資料を用意するから待っててね。」

ロトの部屋の開け、ロトの日記を取り出してきた。戻ると黒板に教卓、マギーの準備は抜かりない。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「じゃあ、始まりから話そう。まず精霊ルビスの恩恵の元、平和なアレフガルドがあった。そこに別の世界から大魔王ゾーマを名乗る者が現れた。大魔王ゾーマはルビスを封印し、アレフガルドを絶望の闇に落とした。ここまではいい？」

「詳しいことは伝わってないけど、そうなのね。」

「そうなんです。なぜか事實は闇の中、誰が消したか、時間の壁に消されたか？それで大魔王ゾーマは次にどうしたと思う？」

「そうね。大魔王・・・まだ口にするのは抵抗あるわね。大魔王はアレフガルドを征服して・・・それで終わりじゃないの？」

「答えは新たなる地を征服させた。ここアレフガルドの絶望だけでは満足しなかつたわけだ。それで次の目標になったのが勇者ロトのいた大地、単なる偶然か歴史の必然かは判らない。それで彼の世界を守りその後アレフガルドに現れた。」

「じゃあロトの勇者は召喚されたわけじゃない。自らこちらに来た。」

「その通り！この日記にある。彼の世界に派遣された魔王バラモスなる者を倒し、大駆逐するべく大魔王ゾーマの虎口に飛び込んだ。」

「じゃあなぜそれは伝わってないのかしら？」

「その事実を知られては嬉しくない者たちがいたから。」

「誰よ！そんなこと隠しても意味が無いじゃない。」

「ラダトーム王家。王家の力や軍隊、いかなるものを持ってしても手も足もでなかつた大魔王を倒してしまった。この事實は王家の威光に傷つけること甚だしい。そうだろ、その気になればロトの勇者は王家にとつてかわれた。」

「勇者ロトはそんなことしない。平和のために戦ってきたのに・・・。」

「そうだ。だから名前だけの名誉を受け取って歴史から消えた。」

「自分の世界に帰ったのじゃなくて？」

「だとよかつたんだけどね・・・世界と世界の壁を開けていたのは大魔王ゾーマ、でもその大魔王を倒してしまつたら帰ることはできない。ちなみに勇者ロトの父親もここアレフガルドで亡くなっている。さらに元の世界の彼の実家には母親が残っている。この悲しみはだれにも判らない。」

マギーが涙ぐんでいる。勇者ロトの悲しみか、彼の母親の悲しみか・・・それが理解できない人でないことは俺にとって嬉しい。

「話を戻そう。名誉を与えられた勇者達は最初は大事にされただろう。だがそのうち嫉まれて城から離れた。・・・実は勇者は大魔王の断末魔の叫びを聞いている。」

「断末魔の叫び？」

「だが光ある限り闇もまたある……。わしには見えるのだ。再び何者かが闇から現れよう……。だがその時はお前は年老いて生きてはいまい。わははは……っ。こつ日記に記されている。」

「なんて禍々しい……。」

「だろっ！これがロトの予言の元になった。そして勇者は再び現れる魔王に対抗する為、三人の友に神器を託して歴史に消えた。」

「でも勇者の名の元、アレフガルドをまとめ、備えることもできた

はずよ。」

「その方法も無くも無い。だけど戦って平和を勝ち取った勇者にはそんなことはできなかった。一応アレフガルドはラダトーム王家によつて秩序があつた。一度壊した秩序は新たな秩序を得るには時間がかかる。大魔王の予言は曖昧でいつになるか判らない。だから今ある秩序は壊せない。そういうことだね。」

「それが本当なら勇者ロトは報われないじゃない!」

マギーが激昂して立ち上がる。

「俺も報われなと思う。だけどこの日記にはそれに対する文句や愚痴は書いてない。ただ残してきた故郷の母や友の安否を気遣う記述は多々ある。」

「もしあなたの言ってることが本当なら、その日記は公表すべきよ。それこそ勇者ロトに報いるべき一番の方法よ!」

「それは駄目だね。勇者ロトに報いるならまず竜王を倒すことだ。彼が憂慮していたのはその一点だ。」

「でもそれじゃ納得できない。」

「そうだね。ロトの沈黙を利用して彼の死後、都合よく伝説を作り変えた。つまりこうだ。大魔王ゾーマに対抗する為、ラダトーム王家は異世界より勇者を召喚した。はたして勇者は大魔王を退治し、後の世の脅威に対抗する為この地に血を残した。どうだい、よくできたシナリオだろう。」

「だから公表すべきって言ってるじゃない。」

「でも証拠がない。」

「その日記じゃだめなの？」

俺は日記のページを開き、マギーに見せる。

「読める？読めないだろう。言語が違う。これは彼の故郷の言葉、魔法の詠唱に使われたラテン語が大きな世界に散らばり、さらに細分化された言語。これを解読するだけで膨大な時間がかかる。」

「でもあなたが読めるじゃない。」

「残念ながら俺はまだ公表する気はない。」

「まだ？」

「あいかわらす君は聡いな。そうだ、俺はまだと言った。竜王が倒されラダトーム王家に権威が必要なくなったら公表する。」

「また予言者ケルテンが現れたわ。」

納得したのかマギーが俺をからかう。

「そうだね。もう一つとんでもない秘密が隠されている。光の玉の真の持ち主について。」

「ラダトーム王家がロトから譲られたとされているわ。」

「そうなっているね。もしかしたら勇者から申し送りがあつたかもしれないがそれは闇に葬った。実は違う、大魔王の闇に対抗するため竜の女王から勇者に渡された。だがその後竜の女王は次の世代を生み生を終えた。その次の世代はなんと竜王。つまり彼は自身の持ち物を取り戻したにすぎない。」

「嘘っ！なぜ闇を従える者が・・・そんなことあるわけない。それはあなたの考察が間違っている。」

「かもしれない。でも大魔王の怨念、生まれた時より孤児になつた竜王の渴望、これらの化学反応が今の竜王を作った。そう考察している。」

「大胆な仮説ね。でも誰にも真実は判らない。」

「そうかい。実はその竜王に聞いてみたい。“あなたの主張は正しい。だが光あつた母と違い闇に落ちたあなたは元の光に戻りたいか？真なる姿を取り戻さないか？”てね！」

「やっぱりあなたは怖いわ。魔王たる竜王もあなたの掌の上みたい。」

「じゃあ今日の講義はここまで、絶対公表しちゃ駄目だよ、命に関わるから。」

「言っても信じてもらえないわ。頭がおかしくなつたと思われるかも。」

俺は思わず俺なりの希望を口にしてしまった。勇者が竜王を倒すエンディング。それは人間にとってほたただし。所謂Lawエンデ

イング。それ以外のエンディングは無いのだろうか？それを夢想している。

帰還

6 / 2 1 勇者支援生活52日目

いつも通り大臣執務室で光点を探る。シュミットは無事進行中、ガイラとアレフはラダトームに戻っている。・・・んっ？いつの間に戻った？俺は挨拶もそこそこに退室した。

換金所に走る。まずここに来るはず、そう思い走る。いたっ！冷静な体を装って話しかける。

「なんだ戻っていたのか。結構速かったな。」

「只今戻りました。ケルテンさん。」

「おう！学者、戻ったぞ。頼みがあってきた。」

よく見るとアレフのが魔法の鎧を着ている。よく金があったな？

「アレフ、その鎧どうした？手持ちの金では足りなかっただろう。・・・ああガイラが出したのか？お前甘やかしすぎだぞ。」

「残念、外れだ。俺の懐からは1Gも出していない。」

「じゃあ、どうやって？」

「ゴールドマンを倒しました。それから取れた金塊で購入しました。」

ゴールドマン、かつて金塊を安全に運ぶために作られた儀式魔法

金塊で人型を作り魔法の儀式で仮の命を与える。その一部が野生化したと言われる。大変レアな魔物で、倒した者は一生遊んで暮らせると、平和な時代には一部のトレジャーハンターが探していた。

「なるほどね、よく倒せたな。」

「お前の言った弱点を潰したら一発だった。流石学者だ。」

そういえばそんなこと教えたな。それでも額の魔術文字を消すのは簡単ではないはず。俺が不思議に首を傾げているとアレフが得意げに語る。

「僕が正面から気をひいて、後ろからガイラが転ばしました。そこからこれで一撃です。」

そう言って腰の鋼の剣を軽く抜いた。

「OK！よくやった、降参だ。君達のレベル評価を2ずつ上げておこじ。」

「そんなのはどうでもいい。俺が戻ってきたのは一つ相談があったからだ。」

「相談？俺にできることか？」

「そうだ、お前にしかできないことだ。聖なる祠の爺さんなんだが、学者、お前さん顔見知りだな？」

そういえば昔ガイラを連れて行ったことがあったな。

「顔見知りも何もあそこが俺の先生だ。最もあそこに入入りするの
に二週間毎日日参して許可を得た。」

「その爺さんだが勇者の証明無き物に貸す力はないと追い出された。
お前さんなら口利きしてもらえると戻って来た。」

「なるほどねー。それはちょっと違うんだ。」

「何がですか？勇者の証明と言われましてもこの城での認定しかあ
りませんよ。」

「そうだね。あの爺さん、つまり賢者の末裔の言いたいことは勇者
に託された神器の一つを渡すのにふさわしい力量があるかどうか。
そういうことだ。」

「でもお前さん、出入りしてたじゃないか？」

「それは目的が違う。俺の目的はあそこに残された賢者の書、つま
り知的好奇心を満たすことだ。その当時はロトの神器が必要ではな
かったし、俺ものすごくしつこかったから根負けした爺さんが入れ
てくれた。」

アレフとガイラがものすごく嫌そうな顔をする。

「それはそれはしつこそうだな。まあそれはいい。なら勇者の証明
はどうすればいい？」

「なんだ答えが欲しいのか？それこそが勇者の証明、とても教えら
れないな。」

ロトの印、本当の名は聖なる守り。大魔王討伐後ロトの勇者から精霊に託したお守り。いまはその精霊の祠は残っていない。

「よく判りました。僕達の力の証明とあらば自ら探します。それでいいですよね、ガイラ。」

「お前も真面目だな。OK、それで構わん。スポンサーの仰せだ。」

「スポンサーね、言িয়েて妙だ。でこれからどうする？」

「雨の祠に行く。お前さんが地面を這いつくばっていた場所をこいつに見せに行く。」

「なんだ、覚えていたのか。あそこにあったのはルビスの塔、大魔王に石にされたルビスが封じられた塔があった。あそこにはその基礎が残っていた。」

「なるほど、ガイラがつけた戦う考古学者というのも頷けます。」

アレフ、感心するところが違う。まあこの時代では信じられないのも仕方が無い。

「まあ行けばいいさ。それとは別だが一つ問題ができた。」

「問題？なにかあったのか？」

「ああ、もう一つの勇者のパーティーだが全滅、いや消滅した。場所は海底洞窟東の自然窟。今は絶対に行くな。まずはできる限りの戦力の充実、それを目指すべきだ。」

まさかドラゴンによって王女が監禁されているなんて言えない。そんなこと教えたらアレフなら“姫を助けるべきだ。”ガイラなら“ドラゴンか、今の俺ならやれる！”とか言いかねん。

「何がいるんだ。教えるよ、知っているのだろう？」

これだ。だから教えられない。

「同じ特務隊士のシュミットと現場近くまで行った。その魔物は見なかったが半分溶けた鉄の盾を見つけた。それだけでもどれほどの脅威があるか想像できるだろう。」

「鉄の盾をですか？それはすごい。どうやればそんなことになるのか、想像できません。」

「そうだ、アレフ。判っている危機には備えなくてはいけない。判つてくれるな、ガイラ。」

「判った、判った。具体的には？」

「メルキドで売っている水鏡の盾を手に入れる。伝説にあるロトの盾でも可だ。」

「買う方はメルキドにさえ入れれば買えるが、ゴーレムはどうする？」

「その答えはお前らの手の内にある。それも自分で調べる。勇者なんだから？」

「かあ〜！お前の師匠は意地悪だ。簡単には答えを教えてくださいね！。」

お前の言った通りだ。」

ガイラがお手上げと言わんばかりに手を挙げる。

「俺の知らないところで好き放題言われてるようだな。まあいいさ、ヒントはやる。地方に伝わる伝説には真実がある。」

それだけ伝えると俺はその場を後にする。ふと思いついて振り返る。

「ああそつだ。出かける前にマギーに挨拶しておけ。口には出さないが心配してるはず。じゃあ俺は調べることができたから行く。」

自分で言ったことだがロトの盾の所在について調べよう。このアレフガルドのいずこかに存在しているはず。

神の武具

6 / 2 2 勇者支援生活53日目

今朝アレフとガイラが雨の祠へ旅立った。マイラの村経由で集落を目指そうだ。まああそこでも門前払いをくらうんだけどな。我ながら意地が悪いと思うが今は時間を稼ぎたい。万全を期すためにはまだ調べなくてはいけないことだらけだ。

とりあえずロトの日記から探ることにする。あの日記は外に出したくないから図書館からは持ち出さないことにしている。

「やあマギー、アレフ達は挨拶に来たか？」

「ええ来たわ。すぐに旅立つから顔を出したただけだって、あなたと同じで失礼な話よね。まあ元氣そうだったからいいけどね。」

うへっ！ 藪蛇だった。

「い・いや、その・・なんだ・・しばらくは城に居れると思うんだ。調べたいこともあるしね。」

「ふん・・そうなんだ。何時まで居ることやら？」

「そっそうだ。次に出かけることがあったら一緒に行かないか？ まあ危険じゃなかったらだけど。」

「ケルテン、あなたの旅に危険じゃないことってあったかしら？」

・・・ありません。現状では危険じゃない場所を数える方が早いな。俺の沈黙を読んだのか、マジギーが笑う。

「ほら、何も言えないじゃない。もういいわ、なんでこんな人に惹かれたんだろっ？・・・で今日は何の用？」

なんか言葉の途中がよく聞こえなかったが、まあ怒りの矛先を避けることはできたらしい。

「ああ今日はロトの装備について調べようと思ってね。元々はラダトーム王家に伝わる3種の神器だ。」

「そうね。異世界より召喚した勇者にラダトーム王家から贈られた武器と言われているわ。今は所在不明だけど、それが何か？」

「見つけれれば強力な力になると思ってね。なんとか探してやりたい。」

「ふ〜ん、それで手がかりでもあるの？」

ロトの鎧と剣はいずれ見つかるからいいとして、問題は盾だな。

「実はない。だからロトの日記からでもヒントを探そうと思ってね。」

それだけ言うと俺はロトの部屋の扉の前に行く。ここは以前と同じく荷物が置いてあるが動かしやすい様に台車の上においてある、カモフラージュは完璧だ。もしこれに気づいても鍵は開かないから秘密がばれることはない。ロトの日記を持ち出し図書館の開いた椅子に座る。

「マギー、ロトの装備の本当の名前を知っているか？」

「それは知らないわ。特に伝わってないから。」

「ならその由来も伝わってないな。」

「王家に伝わった3種の神器としか聞いていないわ。」

「じゃあ、今日はその話からだ。そこから何かヒントが出てくるかもしれない。神器、そう言われるのには理由がある。その名の通り神に捧げられた武具だ。」

「でもなんでそんな大層な物が王家にあるの？」

「それはまあ御伽噺や伝説のレベルの話になるがね。まず神々に愛されたある国があった。その国は神の御技によって繁栄した。だがその恩寵に溺れ、その技術で作られた武具で周辺の国を侵略した。この所業におこった神々はその技術を取り上げ、その国を滅ぼした。ここまではいい？」

「ええ、だから神々に恥じぬ行いをしましょうっていうよくある童話ね。それが何の関係あるの？」

「ああ大有りだ、神々の中でも穏健派に当たる神が全ての人を滅ぼすのはどうだろうか？ならば心清き者のみ助けようと提案した。まあ天罰推進派はそんなことをする気がなかったから、不可能な試練を与えることにした。それがオリハルコンの剣、ブルーメタルの鎧、ミスリルの盾の献上だ。どうだい、話は繋がっただろうか？」

「いいから続けて！」

「そう結論を急ぐなよ。この3つの金属の加工には神の技術が必須だがその技術はすでになくまさに不可能な試練だった。それでも力を合わせる事ができる人々によってそれは成された。影で穩健派の神の手助けはあつたけどね。」

「それで神に神器として献上して、それからどうなったの？」

「それでも天罰は行なわれた。しかしその力を合わせる事のできる心清き人々を別の世界に移住させることにした。それがアレフガルド、そしてその中心にいた人物がラダトーム王家の始祖だ。この時に神々から改めて3種の神器が下賜されたわけだ。」

「なんとも見てきたような嘘というか……。」

「嘘か本当かは自分で検証して下さい。それから時がたつてラダトームに王家として権威ができた頃、大魔王ゾーマが現れた。このとき大魔王によって神器が盗みだされた。さらにオリハルコンの剣は粉々に砕かれたんだけど、マイラの村に落ちてきた他の世界の住人により作り直され、鎧と盾は隠された場所から勇者が奪還した。」

「もしかしてそのマイラの住人って一文字さんの？」

「そう、ロトの勇者の世界のジパングにいた鍛冶職人が偶然ここに落ちてきた。まあそのジパングにも大魔王の手下の八岐の大蛇がいたから、世界が繋がっていたと考えていい。これは勇者の日記からも読み取れる。」

「また自分で検証しろと言いたそうね。」

「当然、教えられただけの知識だけじゃこの国一の賢者は名乗れないな。話を戻そう、ロトの勇者の足跡を辿ろう。アレフガルドに来た勇者はまずラダトームを訪れ、盗まれた神器の話聞いた。そしてこれを集めることにした。」

「当然ね。大魔王が恐れてわざわざ盗ませたぐらいだからすごい力があつたはずよ。」

「その通り。それで勇者はドムドーラの砂漠で粉々になったオリハルコンを集め、魔王の爪痕と言われる洞窟で盾を、ルビスの塔で鎧を回収した。剣はさつきも言った通りマイラで修復した。それらをもって大魔王ゾーマを倒した、というわけだ。」

「それで何かヒントはあつて?」

「それはこれから考えよう。現存している都市、町、村は当時とそれほど変わらない。ガライが集落から町になり、ドムドーラは滅ぼされたが一応現存している。」

「さつきの魔王の爪痕とかルビスの塔ってどこ?」

「ああ、魔王の爪痕は今ロトの遺跡、ルビスの塔は雨の集落に基礎だけが残っている。・・・あれ?魔王の爪痕には人口的な遺跡の地下部分に底無しに裂け目があつたはず。」

「今は地下2階の石造りよ。そんな底無しに裂け目なんて聞いたことないわ?」

「なるほど、調査する価値はあるな。」

「他には怪しいところはないの？」

「そうだな・・・海底洞窟はその当時繋がってなかった。必要に応じて工事がされ始めたのが当時だった。・・・あとはメルキドの南に精霊の祠。現存はしていない。岩山の洞窟は現存、ガライの墓は当時にはない。」

「当たり前よ、ガライが勇者ロトの伝説を広めたのよ。そんな人の墓が当時にあるわけない。」

「最もだ。だけど在ったかもしれない構造物を墓として利用もできるから、絶対無いとは言えない。」

「魔王の城にあるという考えはないの？」

「それこそお手上げだ。なんとかロトによって封印されている可能性を追おう。だとするとロトの遺跡か・・・近々行ってみるか。」

呟く様に口にする。マギーの目が輝いている。なにか企んでいる顔・・・。

「じゃあ私もついて行く。ロトの遺跡なら危険も少ないし、まさか学術的調査に王宮図書館司書官を連れて行かないなんてないわよね。」

「止めても無駄だよ・・・はあ、判ったよ。しかしやはり何か考えを整理するのに、誰かと会話するのは役に立つようだ。自分では当たり前で過ごしたことが、ふと質問として返ってくる。そこから新しく見えることもある。まあ相手の知的レベルにもよるが、マ

ギーはよい対話の相手になるな。」

「それ褒めてるの？馬鹿にしてるの？」

「いや、素直に褒めている。サイモンやガイラじゃ駄目だ、途中で面倒だと騒ぎ出す。アレフもいいけどちょっと素直すぎる。他の人は考えられないな。やっぱりマギーが一番いい。」

「じゃあもつと大事になさい。」

マギーが冗談めかして言う。大事にしているつもりなんだけどな。口には出さない、多分藪蛇だから。

しばらく他愛の無い会話をする。とりあえずやるべきことは決まった。新しい発見があるかもしれない、そう思うと心が躍る。

雨の祠

6 / 25

マイラの村から東、橋を渡った先の小集落。アレフが地面を鋼の剣で突付いている。

「本当ですね。ここの下は固いです。どう見てもただの草原ですけど。」

「ああ、学者がそう言っていた。ここ周りにある巨石は崩れた塔の石材だと・・・俺には風化した岩にしか見えんがね。」

「そうですね。でもここから・・・」

アレフが言葉の途中で走り出し、50mほど先で止まる。

「・・・ここまでずっと堅い石畳が埋まっています。やっぱり何かあったんですよ。」

「まあそうだろうが今は何も無い。俺にはそれだけでいい。過去の探求はあいつに任せる。」

ガイラがちよっとうんざりした顔をする。前に来たときはここで3時間待たされた。そんな苦い思いが蘇る。アレフが走って戻ってくる。この程度では息はきれない。

「じゃあ今やるべき探求を続けましょう。その集落ですよ、行きましょう。」

アレフが馬を引く。安堵の表情を浮かべたガイラも続いた。

.....

「ここが長のいる祠か、ずいぶんとボロいな。」

「そんなこと言っちゃ駄目ですよ。聞こえます。」

思わず愚痴ったガイラをアレフがたしなめる。その祠の地下から声が聞こえた。

「外で騒いでいるのはどちら様ですか。どうぞお入り下さい。ここはいかなる者も迎えます。」

「ほら、大丈夫じゃねえか、入ろうぜ。誰でもウエルカムだよ。」

ガイラが遠慮なく階段を下る。この祠の上部分は飾りで地下に人が入れる空間がある。二人が階段を降りると広い空間が現れた。中央の祭壇に年配の女性が立っている。

「ロトの勇者に連なる者ですね。近々ここに来られると神託がありました。」

「いついえっ！そんな大層な者ではありませんが、勇者とは呼ばれています。」

「俺もだ、血だのなんだの関係ない。だがここにはあの島に渡る為に必要なものがあるのだろう。それを受け取りにきた。」

「率直な方ですね。ですがお渡しすることはできません。」

「なんでだよっ！」

「止めてください。失礼です！」

ガイラが激高し一歩踏み出す。アレフが止める。

「そうですね。納得できないでしょうから説明しましょう。ここには雨雲の杖というロトの神器の一つがあります。これは唯一本しかない物で紛失したら替えがきくものではありません。」

「そんなことは判つてい「もうガイラは黙つてて！」

「ですから、あなたの方がこれを持つに相応しい力量があるか、確かめさせて頂きます。」

ガイラがさらに何かを言おうとして、アレフに睨まれる。

「それで何をすればよろしいでしょうか？」

「それも神託で聞いています。銀の豎琴をここにお持ち下さい。それはしかるべく場所に安置されていますが、残念ながらその場所は魔物に侵されています。それを回収してきて欲しいのです。」

「判りました。その銀の豎琴、必ずここにお持ちします。」

すると老婆は優しい笑顔を浮かべる。アレフは自らの記憶にその笑顔がある気がした。

「そうですね、私はロトの友。心優しき僧侶の末裔。ロトの願いを叶える為に代々雨雲の杖を受け継いできました。今私の代でそれが必要になったことは悲しきことなれど、これを渡せる栄誉は他に変えられない最高の栄誉だと思います。」

「おう！アレフ行こうぜ。やるべきことは判った。その銀の豎琴とやらもいつまでも魔物の元に置いてくわけにはいかんからな！」

ガイラがアレフに声をかける。さっきまでの不機嫌はすでにない。

「ガイラさん。あなたのその率直さは好感が持てます。ですが突っ走るだけがあなたの役割ではありません。どうかご自愛なさいますように。」

「わかった、わかったよ、婆さん、ありがとよっ！」

「ガイラっ！大変失礼しました。それでは行つてきます。」

二人が階段を駆け上がる。馬に飛び乗る、行くべき所は・・・？

「おい！アレフ。銀の豎琴ってどこにあるんだ？」

「さあ、ガライの町のガライの墓にでも安置されているのではないのでしょうか？」

「そっそうか。あんまりそっういふ芸術や伝説には興味ないんだ。」

「じゃあ、一度城に戻りましょう。」

「そっうだっ！もしかすると学者の野郎、こっうなることを判ってい

たかもな！」

「ありえそうですね。じゃあ戻ったら詰問しましょう。では呪文を使います。離れないで下さい……ルーラ！」

勇者支援生活56日目

ロトの遺跡に行く前にシュミットの帰還を待たなくてはいけないことに気づいて3日。毎日マギーが何時になつたらロトの遺跡に行くの？と催促する。早く行きたいのは俺だ。……アレフたちも雨の祠に行つたきりまだ戻らない。今頃着いた頃だろうか？

昼食の後のまどろむ時間、まとまらない考えと愚痴を頭の中で反芻する。食堂の外で騒がしい音がする。だれか駆け込んできた。

「学者！お前知ってただろ！」

「何がだよっ！」

「雨の祠、普通には雨雲の杖は渡してくれませんでした。」

ああ……それね。もちろん知っていましたが。俺の沈黙を肯定と受け取ったガイラがさらに言う。

「ならそう言っつけ、二度手間だろうが。」

「そうは言われてもねえ、必要になる要求が前もって判るわけないでしょ。」

俺は澄ました顔で冷静に答える。馬鹿め！俺と論戦で勝てると思うな。

「そうだけだよ。」

「だいたい聖なる祠でも同じ様な対応をされたはずです。予想の範疇ではありませんか？」

「ガイラ、もういいでしょう。確かにそう言われると反す言葉もありません。僕達の負けです。」

「ったく、この師弟は！じゃあこれには答えてくれるな？“銀の豎琴はガライの墓にある”これは間違っていないな。」

「その通り、はいといいえで答えられる質問は楽でいいな。魔法の鍵は持っているな？」

「持っています。リムルダールで買いこんであります。でも使い捨てなんですな、これ？」

「ああ、不完全な代物ですぐに壊れる。ロトの持っていた本物は永久に使えたけどな！もしかしたら鍵屋の営業手段かもしれないな。」

まあそんなことはあるまい・・・単に技術が足りないのか、便利すぎて困るのであえて品質をおとしてあるのか？予断ではあるが他人の家に無断で入ったり鍵を開けるのはもちろん犯罪である。

「じゃあガライの墓は結構大きい遺跡で強力な魔物が巣くっているから気をつけるように。やばいと思ったらすぐに離脱しろ。リレミ

トの脱出点は町の中に登録しておけよ。」

脱出の魔法リレミト。これを使用するには予め脱出地点に魔術儀式でマーキングをしなくてはならない。手間ではあるが安全の確保には便利な魔法である。

「判りました。ではすぐにでます。」

「じゃあな、学者。」

二人が出て行く。小声が聞こえる。

(やっぱり知ってやがった、意地が悪いな。)

(そうみたいです。もしかしたらガライの墓のことも知ってたんじゃない?)

(きっとそうだ。やっぱり底意地が悪いな、お前の師匠。)

全部聞こえていますよ。しばらくは意地悪ってことでいいでしょう。

ロトの遺跡？

6 / 26 勇者支援生活57日目

シュミットがメルキドに到着したようだ。マーカーが動いていない。映像で確認する・・・ベッドで爆睡している、隣には心配そうに看病している女性。これ以上は見ないでおこう。

とりあえず心配材料がなくなったので任務と知的好奇心を満たすのと両立させるべく、ロトの遺跡へ行くことをマギーに告げる。一石二鳥、いや三鳥か、マギーのご機嫌伺いも兼ねているからな。

「マギー、やっと手が空いた。ロトの遺跡に行くぞ！準備はいいか？」

「何を今更、準備なんて3日前に済んでるわよ。今すぐにも発てるわ。」

「それはそれは申し訳ございませんでした。ではわたくしも準備を致しますので1時間後にそちらの屋敷に伺います。それでよろしいでしょうか？」

「何、その気持ち悪い言い方。別に怒ってないから・・・」

.....

一時間後、俺はマギーの屋敷に来た。旅装のマギー、隣に若い執事が立っている。

挨拶をして敷地内に入る。隣の執事が礼儀正しく声をかけてくる。

「ケルテン＝リムルダール殿、お嬢様をよろしく申し上げます。」

「お嬢様をお預かりします。安心してお待ち下さい。執事どの。」

「もう、シャッテンブルグったら余計なこと言わなくていいの！行くわよ、ケルテン！」

マギーが俺の腕も引つ張る。後ろで執事が丁寧な一礼、俺が軽く会釈。多分マギーには判らないだろう男同士の会話があった。

「全く、私はもうヴィッセンブルン家の当主なんですけど、いつまでもお嬢様扱いは止めて欲しいわ！」

「さあね？俺は平民だし、貴族のしきたりやお約束は知らないな。さあ急ごう、馬を使ってもロトの洞窟まで1日はかかる。日が落ちるまでには辿り着きたい。それとも草原で野営したいかい？」

「そんなの嫌！できることならそんなことしたくないわ。」

「俺だつて嫌だよ。この間はそれで大変な目にあつたし、しばらくは遠慮願いたい。」

「じゃあ急ぎましょう。馬が苦手なんて言つてられないわ。」

「苦手ね、じゃあ俺が先行してペースを取る。馬に任せて無理に手綱は使わないように！」

「判ったわ、任せます。」

先日のアレフの時より十分な休憩と低ペースで、なんとか日没前に遺跡につくことができた。馬での移動では正直今までが一番疲れたかもしれない。遺跡に隣接する宿泊施設の厩舎に馬を繋ぐ、平和な時代にはここは巡礼する人相手の観光で賑わっていた。魔物があふれている現在は利用する者がいないため放置されている。

「とりあえず中に入ろう。この建物より中の方が安全だ。」

遺跡の階段を下りる。松明を取り出し先端にレミールをかける。隣でマギーが首を傾げる。

「わざわざ松明にレミールをかけるなんて、無駄じゃない？」

「ああ癖みたいなものでね、昔からこうしてる、レミールを使えなかった時のなごりだ。」

「ふ〜ん。」

「これでも結構実用的なんだ。火が必要なときもあるし、こうやって明かりを抑えることもできる。」

明かりの上に布を被せて光量を抑える。さらに松明を放り出す。

「あと魔物がでてきたらこうやって放り出すこともできる。手に直接かけるところはいかない。」

「ふ〜ん、いろいろと気を配っているのね。城については知ることのできないことね、それだけでも来た甲斐があるわね。」

何気にマギーがニヤリとする。気持ちは判らないでもない。

「今日は食事を取ったらすぐに寝ることにしよう。慣れない馬上で疲れただろう。」

「そうするわ、ケルテンもちゃんと寝るのよ。話に聞くとこういう時無理してばかりだから。」

「心配しなくてもちゃんと寝ます。ここでは魔物はでないから頼まれても不寝番なんてしません。」

そして食事の後、光に布を被せ光量を落とす。毛布に包まって横になる。しばらくするとマギーの寝息が聞こえた。やっと俺も眠ることができる。

- - - - -

朝になる。堅い床に慣れないマギーが体の痛みを訴える。

「体中が痛い。こんなのこの前の馬車以来だわ。」

「安全に寝れるだけまだマシだ。朝食をとったら、とりあえず口トの石碑まで行こう。道順は判っているからついてきてくれればいい。」

「道順覚えているの?」

「全然、ここは聖地として巡礼の人がよく来ていただろ、天井を見

てごらん。松明の煤の跡でいっぱい。壁にもマーキングでいっぱい。

「マギーが天井を仰ぎ見、壁のチョークの後を見る。」

「なるほど確かにそのとおり、複雑な作りのわりには間抜けな話ね。」

「間抜けとは失礼だね。ここの作者の意図と違って、ある意味平和利用された結果だ。」

朝食後、歩きながら話す。しばらくして地下2階の階段を降りる。

「なんかつまらないわね。所々看板があったり緊張感のないところね。薄暗くて気味が悪いけどただそれだけ。」

「贅沢な悩みだな、この前の海底洞窟では闇の中魔物に見つからない様大変だったんだぜ。」

「ごめんなさい。無神経だったわ。」

「まあしなくてもいい苦労もあるさ。今頃アレフたちもガライのお墓で大変な目にあってるかな。」

しばらく無言で歩く。ここは無意味に遠回りさせられる。一番北側の直線路、あとは南へ道なりでロトの石碑に到着した。あまり大きくない墓石に文字が彫ってある。

「ここに来たことはある？」

「ないわね。この文面はお父様に教えてもらった通り。」

マギーが石碑の文字を指でなぞる。俺は石碑の周りを調べる。石碑の背面、土台と石碑の継ぎ目、床の石の隙間にナイフを突っ込んで外れる所はないかと試行錯誤する。

「なんか罰当たりね、墓泥棒みたい。」

「そう言っなよ。別に墓荒らしがしたいわけじゃないから・・・おつと、外れた。なんだ？何があるんだ？」

石版の後ろ側、床の一部が外れた。むき出しの土、ナイフで掘り進む。なにか堅い物に当たった。

「何っ？何があるの？」

俺はさらに掘りおこす、ぼろぼろの革に包まれた古ぼけた兜。長い間土の中にあっただせいか錆びて朽ちている。

「兜か、なぜこんな所に？」

「私に聞いても判らないわ。誰の持ち物なの？ロトの勇者の物かしら。」

「違っただろうね。ロトの鎧と光の鎧は、全てセットの装備で専用の兜もある。だとするとこれはオルテガの兜か。」

「オルテガ？」

「ああロトの勇者の父親だ。ロトの勇者の前に彼の国から魔王討伐

の為、派遣された勇者だ。勇者ロトはオルテガが消息不明になった為、次代の勇者として旅にでた。」

「なんかよく判らないわね。」

「オルテガは不幸な事故で、先にアレフガルドに落ちて戻れなくなっていたんだ。派遣した国では死んだと思われていたけどね。それでロトが次の勇者と手を挙げた。これでどう？」

「納得。それでどうなったの？」

「ああ、大魔王ゾーマの城の奥底、勇者ロトの目の前でゾーマ三将の一人キングヒドラと壮絶な相打ち、最後は息子の胸の中で亡くなった。」

「なんてこと！はでも・・・最後に会えたのは救いになるのかな？」

「だとよかったんだけど残念ながら死にいくオルテガに、自分を抱く者が誰かは認識できなかった。最後に故郷アリアハンに残した妻と息子に遺言を残しただけだ。ロトの日記に記述があった。このページは文字が震え、涙で滲んでいた。」

「誰も救われない話ね。でも一番かわいそうなのは故郷に残されたオルテガの妻、夫と息子を平和に捧げてしまったことになるわね。」

「ああ女性らしいもつともな意見だ。アレフガルドの平和の為に犠牲になったものは過分に大きい。残されたロトの勇者の唯一の故郷への繋がり、遺品ともいえるこの兜と同じ墓で眠っている・・・か、だとしたらこれは返したほうがいいな。」

「そうね、私達には使い物にならない兜かも知れないけど、彼には大事な物。」

俺はその兜を元通りに埋め直す。腰の酒と少しのゴールドを捧げ、黙祷する。二人ともしばらく言葉も出ない。

ロトの遺跡？

「なんかしんみりしちゃったな。戻ろうか、戻りながら気になる所があつたら調べる。」

それから蝋燭を取り出し火をつけた。

「それどうするの、光はここにあるのに？」

「うん、もしなにかおかしな空気の流れがあつたら判るかもしれない。そう思つて持つてきた。」

「いろんな方法があるのね。やっぱり面白いわね。」

「しばらく黙つててね、軽い息でも影響あるから。」

静かに歩く、炎が揺れたらその場所を探る、それを繰り返す。北側の長い回廊の同じ場所を3往復、3回とも揺れた。壁に炎を近づける、消えた！壁の隙間に手を当てるとわずかな風の流れを感じる。

「ここから風が入ってくる！この石を外そう。手元に明かりを！」

マギーが明かりで俺の手元を照らす。ナイフの刃を石と石の隙間に差し込む。隙間を埋める粘土を少しずつ掻き出し隙間を広げる。石が外す、暗闇しか見えない。さらに隣の石を外す。腕が入るぐらになつたら明かりを受け取り奥に突っ込む。照らされた広い空間。

「間違いない、ここが魔王の爪跡だ。もう少し広げて入れるようにするぞ。」

マギーが唾を飲み込む音が聞こえた。新たなる発見に緊張している。俺は嘔き出す汗も拭わず作業を続ける。外した石をマギーが作業の邪魔にならないよう運ぶ。しばらくして這って入れるぐらいの穴ができた。

俺が這って中に入る。マギーも入った。改めて明かりで空洞を照らす。そこには中央に飾られた盾、その奥には大きな亀裂がある。

「あつたわ！本当にあつたわ。あなたの仮定どおり、盾も亀裂も全部。あはははっ！すごいわ、大発見よ。」

大喜びするマギー。俺は盾に近づき埃を払う。白銀の盾、中央に鳥を模った独特の紋章。間違いないロトの盾、又の名を勇気の盾。しばらく見とれる、言葉も出ない。

「ねえ黙ってないで何か言いなさいよ。いつもみたいに蘊蓄を並べないの？」

「ああ、まさか見つかるとは思わなかったから呆然としていた。これは勇気の盾、ミスリルで作られた神の盾で間違いない。」

「そうね。じゃあアレフにでも渡す？」

「それが順当だな。持ち出すにはもうちょっと穴を大きくしないと無理だけど。」

マギーが亀裂を見下ろす。そこには完全な闇しか見えない。マギーが小石を手にとって落とす。

「ねえ、この亀裂すごいわ、石を落としても音が聞こえない。どこまで深いのかしら？」

「さあね？大魔王がいたときは全てを拒絶する亀裂だったらしい。今みたいに物を投げ入れると帰ってきたらしい。」

「なにそれ？なんか怖い。」

「大魔王の城に繋がっていて、ここから魔物が噴き出したとされている。」

「それが本当なら今も魔物がここからでてくる？」

「可能性としてはあるかも・・・でもこの遺跡には魔物がでないのは周知の事実。ということ。」

俺は振り向いてロトの盾に近づく。しばらく盾を撫で回す。さすが神器だ、ものすごい魔力を感じる。同じ様に台からも強い魔力。

「どうかしたの？」

「うん、もしかしたらこの盾がこの遺跡を護っていたかもしれない。この立掛ける台と合わせることでこの盾の神気を増幅し魔物を封印しているのかな？」

「ふん、大胆な仮説ね。でもそうだとしたら持ち出せないね。」

「そうだな、ならばしばらくはここに安置しておくか。竜王の城に渡る準備ができてからアレフに渡そう。」

「じゃあ、帰りましょう。ここは埃っぽいわ。今すぐにもお風呂に入りたい気分。」

マギーがふざけて帰りを促す。

「だけど、まだ穴を塞ぐ大仕事が残っている。」

「そうだったわね。誰か別の人に持っていかれるわけにはいかないわ。」

俺達はさつきと同じ様に穴から這い出した。積んである石を元通り壁に戻す。水筒を取り出し、掻き出した粘土に水を含ませて隙間を埋める。

「こんなもんかな？」

「ちょっと濡れて変ね。それとここだけ埃が取れて違和感があるわ。」

周りの壁と較べる。たしかにここだけ綺麗になっているな。懐から武具の手入れ用の布を取り出し壁全体を拭く。さらに埃だらけのマントを壁に叩きつけ、埃を擦り付ける。

「まあこんなところかな。どう、マギー？」

マギーが壁を見る。少し離れて見る、歩きながら自然に見る、近づいて明かりで照らす。

「こつ明かりで直接照らすとわかるけど、まあ普通に歩いてたら気づかないかもね。私じゃどうしてもそこにあるって知ってるから判

るだけかな。」

「そうだといいな。今できることはここまでだ。道具が足りない。」

「でも色々持っているのね。それと使いこなしているし、改めて尊敬しちゃっわ。」

「そうか？俺の異名を聞いているだろう。戦う考古学者、俺の本業は考古学者。こんな作業をしているときが一番じっくり来る。平和になったら再開するかな。」

「それもいいわね。じゃあ、さっさと平和にしちゃいなさい。私も楽しみだわ。」

「えっ！君もついて来るつも「まさか駄目って言わないわよね！こんな面白いこと一人でやるなんて許せない。」

「いや、その駄目とか言わないけど・・・じゃあ野営とか馬とか粗食に慣れてね。あれもこれもできないなんて聞かないから。」

「あっそう！よく判ったわ。足手まといにならないようにすればいいのね。」

「まあそうですね、お嬢様。何事も鍛錬あるのみです。」

「じゃあ、帰りを見ていなさい。私が馬で先行して帰るから。」

あのルーラで帰れますけど・・・そう言い返すことのできない雰囲気だ。それから拙い手綱さばきながら城まで帰ることはできた。俺の馬にベホマをかけていたのは秘密だ。

到着後ヴィッセンブルン家で丁寧なおもてなしを受けた。翌日はヴィッセンブルン家から出仕しました。

ガイラの墓

6 / 27

「おい！アレフ、ここさつきも通ってないか？」

「違いますよ。同じ様な階段ですけど違います。」

アレフは自作の地図に印を書き込みながら返事をする。ガイラが覗き込む。

「これ合ってるのか？大体今どっちを向いているかも判らん。」

「ガイラは屋外ではいいですけど、迷宮の中は駄目みたいです。いや、安心しました。僕足を引つ張ってばかりかと思ってました。」

「別に足手まといなんかじゃねえ、まだ未熟なだけだ。それにお前さんの強さはバランスのいい強さだ。それは誇っていい。」

「それ言い換えると器用貧乏なんですよね。」

アレフが少し落ち込む。ガイラがその背を思いつきり叩く。

「ちょっと違うな。器用貧乏は平均的な能力だ。お前さんののは平均より高い水準のバランスだ。つまりん事言ってるのと師匠に恥かかすぞ。」

「痛いですよ、ガイラの一撃は鎧の上からでも衝撃がすごいんです。僕は近くにエキスパートばかりいますから、自信が持てないです。」

「そうか・・・なら学者には聞いていた評価を教えてやるよ。いいかアレフ、学者、俺、マギーの4人だ。上から順にちから、すばやさ、かしこさ、体力（HP）魔力（MP）、評価基準はA、F、Aが最高、Fは0だ。」

ガイラはそう言うとアレフから一枚紙を取り上げて書き込む。

アレフ	A -	B	B -	B +	C +
ケルテン	C	A	A	C +	B -
ガイラ	A	B +	C	A -	F
マギー	D	C	A -	C -	A

「つと、まあこんな感じだ。ある程度できると判断できるのがCだ。力とすばやさはC+あれば一般兵と同等の能力と考えていい。かしこさは魔法を覚えるならCあれば問題ないらしい。現にお前さんもベギラマは使えるだろう？その他にも判断力や知識量にも影響あるらしい。体力と魔力に関しては限界を判断する基準でしかない。実際に確かめることができないからだそうだ。」

「まあそうでしょうね、限界超えたら死にますから。しかしこの分析と評価基準はすごいことですよね。」

「ああ、流石は学者、賢さAは伊達じゃないな。俺は覚えるだけで限界だ。俺ができる判断は俺よりちからの強いやつは今までに会ったことがない。すばやさにも自信があったが学者の方が速い。そんなところだ。」

「僕はどちらにもガイラに勝てませんね。しかしまあマギーさんは完全に魔法特化ですね。賢さA-と師匠に次ぐ高さがあります。しか

も魔力はA、すごいな。僕はどれでも一番ではないですが、著しく劣る能力はないのが取り得ですか。」

「そうだな。だがそれだけではない。例えば、俺には重大な欠点がある。」

「そんなのありましたか？」

「ああ、金属に触れているとかぶれるんだ。金属アレルギーとかいっただな。これのせいで剣の修行もできなかつたし、鎧も着れない。」

「そうでした。その戦闘スタイルが板につきすぎて、すっかり忘れていました。」

「残念だとは思っていたが今はそうじゃねえ、俺にはこれがある。」

そう言うとミスリルナツクルをつけた右手を振る。

「これで俺の戦闘スタイルは完成した。学者には感謝してる、本人には言わないがな。だからお前さんも自分のスタイルを見つけれ。武器でもなんでもいい。それができたら一人前だ。」

「そう出来る様、心がけます。さあ休憩は終わりです。今日中に1、2階の地図は埋めますよ。」

そう言うとアレフは地図に書き込みがない方に歩き出した。ガイラがついて行く。

「なあ、別に全部埋めなくてもいいだろう。目的地につけばいいんだ。」

す。」

「そうだな・・・ってここ完全に行き止まりじゃねえか。意味あるのか、この作りは？」

「僕に文句を言わないで下さいよ。じゃあ戻って別の階段で降ります。」

「次はどっちだ。右か左か？」

「迷宮内で右とか左とか止めてください。とりあえず南に向かいましょう。こっちです。」

再びアレフが先に歩く。地図で場所が確認取れている所ではその方が効率がいい。

「そうはいうがな。ぐるぐる回っているとよく判らなくなる。ここには日も星もない。」

そうこ言っていると別の下への階段に辿り着いた。

「次こそ当たりだといいですね。」

「どうせ、全部廻るのだから？ だったら当たりとか関係ないな。さて降りたら北と南に道があるぞ。どうする？」

「そうですね。ガイラに任せると大変な事になりますから、とりあえず右手をこっちの壁につけて下さい。」

言われた通りガイラが壁に手を当てる。

「じゃあそのまま、手は離さないで前に歩いて下さい。これ僕は感覚でやってました。」

「ふうん、適当に歩いてたんじゃないのか？」

「そんな訳ないです。まあ師匠に教えてもらいました。」

「また学者か、アレフ、本当にいい師匠を選んだな・・・おっ行き止まりだぞ。」

「予想通りです。多分この壁の向こうにさっき下りた部屋があります。判つても何の役にも立ちませんが。」

.....

1時間後。3階の長い回廊を歩き、魔物と戦い、ついに辿り着いたのは登り階段。

「アレフ、お前の言う通り歩いていたら、また2階に戻ったぞ。」

「だから僕に文句を言わないで下さい。さっき降りた階段とは違います。だからここから南の階段を降りれば正解です。」

「本当にそうか？大体なんでこんな面倒くさい造りなんだ。」

「そういえばそうですね。なるほど・・・何か意味があるかな？」

「ああ、そういうのは学者に任せとけ。考えても無駄だ。」

また3階への階段を降りる。ガイラが苛立っている。

「そろそろ強い魔物でも出てこいや、闘ってスカツとしたいぞ。」

「まあそうですね、でてきたのはリカントマムル、メーダロード、ドロルメイジ、ヘルゴースト。上位種ですがさほど強くなった感じはしませんね。魔法を使ってくるようにはなりましたけど・・・。」

「そうだな、気分よく闘える相手じゃねえ。卑怯ではないが面白くない。」

しばらく右手を当てて歩く。行き止まりだ。しかも魔物が群れている。リカントマムルを中心にリカントが群れている。八つ当たりするかの様にガイラが飛び込む。アレフが慌てて追いかける。さほど苦勞することなく魔物の群れは駆逐された。

「ガイラ、戦い慣れた敵だからといって無謀すぎですよ。」

「いいじゃねえか。こいつらはリムルダール付近で嫌というほど倒したんだ。魔法も使ってこないから憂さ晴らしにちょうどいい。」

妙にすつきりした顔でガイラが言う。アレフが呆れて来た道に戻る。30分ほど歩くと降りる階段。

「やっと4階だ。ゴールは近いか？」

しかし降りた先にはなぜか登る階段があるだけ。

「どうなっている。馬鹿にしてるのか？」

アレフが地図を確認する。

「ガイラ、見て下さい。3階のこの辺に空間があります。多分ここに繋がっているのでは？」

「そうかいそうかい、どこでもいいさ。行くぞ。」

アレフが地図を片付け、慌てて追いかける。登った先でガイラが立ち呆けてている。追いついたアレフが見たのは小さな池の中央に小さな社。そして社の中には銀色の豎琴が祭られている。二人が近づく。

「これですかね？」

「だろうな。しかしまあ吟遊詩人ガライの墓とはいえ無駄に豪華な墓だな。吟遊詩人さんよ！悪いがこれはもらっていくぜ。」

そう言いながらガイラが垣を越え、豎琴に手を伸ばす。誰も止める者はいない。

「へへっ、銀の豎琴、ゲットだぜ！アレフ、どんな音がでるのだろうな、これ？」

そう言ってガイラが豎琴の弦に手をかけた。響き渡る豎琴の音。

その澄んだ音はアレフには不吉に聞こえた。

戦場での死

6 / 28 勇者支援生活59日目

午後4時、ラダトーム城に城下町の門番衛士が駆け込んできた。城の衛士が引き止める。

「どうした、騒がしい。静かにせぬか！」

「はっ！申し訳ありません。国務大臣付き特務隊士殿はいずこですか？勇者アレフなる者が急ぎ面会を希望しております。」

衛士二人が顔を見合わせる。

「あの人なら、いつもどおり図書館だな。」

「ですね。あの筆頭魔術士殿とよろしくやっています。うらやましいですね。」

「馬鹿っ！お前死にたいのか。怒らすと相当怖いらしいぞ。大臣の息子をとっちめた話を聞いていないのか！」

「あれあの人だったんだ。俺らにはいつも笑顔で“ご苦労さん”ていい人だなんて思っていました。・・・あれ、さっきの人は？」

「ああ、場所を聞いたらすっ飛んで行った。問題はなさそうだから通した。」

「そうですね、きっと特務関係ですから俺ら衛兵では止められませ

んじ。」

.....

バンッ！

図書館の扉が乱暴に開く。兵士が駆け込んできた。俺とマギーが目を丸くしている。

「ちょっと乱暴に開けないで」「はあ、はあ、すみません。特務隊士のケルテンさんってあなたですか？」

マギーの抗議の声をかき消す兵士。

「ああ私だが、何か御用ですか？」

「勇者アレフなる者が、至急お会いしたいと来ています。」

「アレフが至急だと、何があつた？」

「それがお連れの方がいて、すでに亡くなられています。現在我らの控え小屋に……」

俺は駆け出す。後半はすでに聞いていない。

.....

城下街の入り口横の衛士小屋。慌てて飛び込む、寝かされている

ガイラ、血の気は全くない。隣に涙ぐんだアレフがいる。俺の顔を見る。

「ケルテン師匠、ガイラが、ガイラが僕のせいで……。」

俺はガイラの脈を確認する。脈はない、間違いなく死んでいる。門番の一人に声をかける。

「伝令を頼む。國務大臣に王様の謁見許可を、勇者蘇生を至急願いたい。そう伝えてくれ。俺の名は國務大臣付き特務隊士ケルテンだ。止められたら俺の名を使え、いいな！」

「はっ！國務大臣に王様への謁見許可、勇者蘇生の件、至急伝令いたします。」

衛士が復唱し走り出した。こうなれば王家の秘術とやらが頼みだ。いまここで蘇生魔法を使うわけにはいかない。すでに大勢の者がガイラの死を見ている。

「ガイラが僕の身代わりになって……剣で刺されて……。」

アレフが涙ながらに語る。

「アレフ、落ち着け！とりあえずガイラを城に運びます、担架の用意を！」

残る衛士に指示する。用意された担架にガイラを乗せ、衛士に運ばせる。アレフを連れて城に向かう。追いついたマギーがガイラの死体を見て天を仰ぐ。まだアレフが何かを伝えようとしている。

「アレフ、走りながらいい。最初から順に話せ。」

別に聞いたからといってガイラが生き返るわけではないが、話すことでアレフが落ち着くなら聞いてやる。すこしずつアレフが語る。

「銀の豎琴は手に入りました。でもガイラが豎琴の音をだしたら・・・。」

「そうか、迂闊にも音を奏でたか。お前ら知らなかったのか？銀の豎琴の調べは魔物を呼ぶ、故に封印されていたことを。」

「はい知りませんでした。それから魔物が現れました。がいこつ系統の魔物が全部で16体。それも4体一組が4隊、統率を取る強い骸骨もいました。」

なんとがいこつ、死霊、死霊の騎士による一個中隊か、それはきびしいな。」

「アレフ、続ける。冷静になって思い出せ。」

「はい、戦いになったのは地下4階の部屋です。社のあった部屋ではリミットが使えませんでしたので場所をかえて脱出しようと思いました。」

「盗難防止のためのシステムだな。銀の豎琴が祭壇から無くなったら働くトラップだろう。」

俺は冷静に返事を返す。俺が慌てようが泣き喚こつが状況は変わらない。ならばできる限り正答を教えてやる。

「それで地下4階に戻ったら、魔物の群れに遭遇しました。まず2つの部隊が襲ってきました。壁を背に向かえ打ちました。」

「その判断は間違っではない。それで？」

「はい、その2部隊のがいこつはそれほどの強さはありませんでしたが、隊長格の死霊がうまく指揮を執るためなかなか倒すことができませんでした。しかも折った腕や脚が気づくと元に戻っているのです。」

「それは死霊の騎士の仕業だろうな。やつはベホイミを使う。3部隊をうまくローテーションさせてそれすら判らない様にしていたのだろう。」

「それでも頭を破壊したがいこつは動かなくなりましたので、少しずつ敵の数は減らして、残り1部隊になりました。」

俺の仮説が正しかったことが証明できたようなものだ。生前からの部隊編成と指揮が可能とは侮れない。また近衛騎士隊長に報告せねばならぬことが増えた。

「最後の1隊は精鋭ぞろいでした。多分死霊の騎士1体と死霊3体かと思います。この時点ですでに残ったMPは多分リミット一回分、もう回復魔法は使えないと判断しました。それでもなんとか死霊3体を倒したのですがそこで僕に限界がきました。死霊の騎士の突きがものすごくゆっくりと僕に迫るのが見えました。」

そこでアレフがしゃくりあげる。再び涙が流れる。

「最後まで続ける。」

「はい、もう死ぬ。そう思った瞬間横から突き飛ばされました。立ち上がって見たのは胸を貫かれたガイラ・・・それでもガイラは貫かれたまま、死霊の騎士の頭を掴んで壁に叩きつけ倒しました。それからリミットを使って脱出、キメラの翼をつかって戻りました。」

「よく判った。その判断は正しい、お前は間違っていない。それに正しい情報を得ることができた。」

「なんでそんなに冷静でいられるのですか？ガイラが死んだんですよー！」

「俺が慌てればガイラは生き返るのか？ならばいくらでも慌ててやる。戦場では心を動かしてはいけない、たとえ俺が死んでもお前は最善をつくせ。マギー、これは君にも言えることだ。いいな！」

「じゃあケルテン、あなたが死んでも泣いてはいけないの？」

マギーが半泣きで言う。

「そうじゃない。戦場では泣いている暇はない、全て済んだ後に泣け。それができないならそこが君の墓場になる。そう言っている。」

「でもガイラはもう死んでいるのよ！」

「まだ希望がないわけでもない。王家の秘術にかけるため謁見の許可を申請している。」

それでもどうにもならなかったら、多分俺は泣くだろう。こいつとの付き合いは長くはないが友と言っていい仲だ。だから俺はこい

つ
の
確
実
な
死
を
見
届
け
る
ま
で
涙
を
見
せ
な
い
。

ラルス16世

ラダトーム城 謁見室

先の勇者謁見のときと同じ様にラルス16世、国務大臣、近衛隊長、他に文官3名、近衛3名が並び、中央のガイラの遺体、そのすぐ後ろに俺が控える。儀礼の名乗り上げが始まる。こんな時まで儀礼が必要とは怒りがこみ上げる。俺は顔を伏せているので誰からも見えていないだろう。俺とガイラの名が呼ばれた。発言が許可される。

「ご尊顔を拝し奉り恐悦至極、御前に侍りまするは国務大臣付き特務隊士勇者支援官ケルテンに御座います。」

我ながらセリフがおかしい。緊張と怒りで嚙む寸前である。

「よい、緊急時だ。直答を許す、普通に話すがよかるう。」

助かった、ラルス16世により直答の許可がでた。

「はっ！この度は小官の不幸により勇者ガイラを死亡させました。血の契約により勇者ガイラの蘇生を賜りたく存じます。」

「よかるう。それも国王の義務である。勇者ガイラをこちらに。」

その言葉で近衛2名により、ガイラの遺体が国王の段下に運ばれる。ラルス16世が階段を降り、ガイラの体に手を当てる。この際全ての臣下が顔を伏せる、王家の秘術ゆえ見えてはならないようである。俺も顔を伏せる。ラルス16世の詠唱、普通では理解できない

言葉が俺には判る。

（我はMPを10放出する、MPはマナと混じりて神に捧げん、
おお神よ、この者の魂をここに戻したまえ！ザオラル。）

その独特の詠唱により全てを悟った。王家の秘術ってザオラルだったのか。なるほど血の契約の一部でザオラルの対象として登録をしてあるのか。

蘇生魔法ザオラル、ザオリク。この魔法がなぜ無差別に行なわれないのか？それは術者がよく知らないか、登録していない者は対象とはできないからである。かつてその登録は神の名の下に行なわれることになっていた。ゆえに蘇生は教会によってなされるのが常であった。ここアレフガルドでは王家の秘術として、不完全な形で残っていたのか。俺は現状ではアレフ、ガイラ、マギーを蘇生できる自信はある。術者がどの程度その対象を知っているかが成功する確率に大きく影響する。となるとこのザオラルの元々の成功率は50%、面識の薄い相手ゆえ大きく確率がさがる。血の契約の支援効果を考慮しても成功するのは30%か。

ふと国王と目があつた。慌てて目を伏せる。しばらく無音の中時間が過ぎる。駄目か！

「ガハッ！」

ガイラが血を吐く。魂は戻ったが体は治っていない。俺は立ち上がる。

「無礼な！御前である。誰か止めよ！」

近衛騎士が俺を止めようとする。俺はかまわず駆け寄る。

「よい、その者の好きにさせよ。余の命令である。」

(俺はMPを8放出する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ。

おお万能たる力よ、血、肉、骨となりて、この者を癒したまえ、ベホマ!)

ガイラに当てた手が光り輝く。癒しの力が胸に開いた傷を修復する。ガイラの呼吸が安定したものになる。俺はそこで初めてここがどこか思い出した。周りを見渡すと優しげに微笑む国王、怒りを顔に表した国務大臣、我関せずとそっぽを向く近衛騎士隊長がいる。他の文官、武官は概ねしかめっ面である。

「皆、その者を責めるでない。その者は職務に忠実で勇者を救ったに過ぎず、余もそれを咎める気はない。」

「しかし陛下、こゝよい、余は咎めぬことにした。よもや聞けぬとは言つまい。それより早急にそこな勇者ガイラをしかるべく看病すべきではないのか？余やそなたらが不甲斐無いゆえ、勇者に無理をさせた結果である。余、ラルス16世の名において感謝の意を表する。よいな、丁重に扱え。」

「はっ！では勇者ガイラを近衛の病棟にて看護いたします。近衛騎士よ、丁重に運び出せ。」

「はっ！」「はっ！」

近衛騎士隊長の声に並んで立っていた近衛騎士がガイラを運ぶ。俺もついて行くこうとする。

「待て、そなた名をなんといつたかな。」

「臣の配下のケルテンと申します。」

「そうか、ケルテンというか。そなたは残れ、他の者は下がるがよい。」

「しかし陛下、その者は……」

「よい、余に害をなせぬことはそなたも知っておろう。許せ。」

「はっ！では失礼致します。」

大臣以下全ての者が下がる。近衛隊長は好意的な目で、他のすべてはそうでない目で俺を見ていた。

.....

今ここに残っているのは国王ラルス16世と俺だけ。この人は何を考えている。

「よかったのう、そなたの友人が助かって。」

「はっ！陛下のおかげを持ちまして。」

「そうか、そなたにはできたのではないか？」

「おっしゃる意味が判りません。」

「そうか、まあそう答えるしかならう。だが先ほど余が蘇生の詩を唱えた折、そなたと目があつた。あれは何かを知っている者の目だ。もしかして蘇生の呪法を知っておるのではないか？しかも先の回復魔法はどうだ？」

どう答えてよいか判らない。沈黙が続く。

「そうだ、沈黙が正解だ。そなたは聡いな。国王は象徴、権威の象徴で実権など必要ない。余の周りにはそう考える者が多い。平和な時代ならそれでもよかつた。だがそのせいで娘を失うことになるうとはな。国王の座など欲しい者にくれてやったものを……。」

「いえ陛下、まだローラ王女を失つてはいけません。必ず私の勇者が救い出してきます。」

「そうか、ならばいつそのこと娘を助けてきた勇者を婿に迎えるとするか、それを聞いたときの皆の顔が見物だの。そなたはどう思う？」

「御戯れを、私には答えることはできません。」

「よい、申せ。ここには誰もおらぬ。そなたの嫌いな権威も儀礼もない。」

ただのお飾りかと思われた国王が意外によく見ている。まさか俺のことまで見ていたのか。

「もし勇者と王女がそれをお望みなら陛下のご随意に。そうでないなら無理強いは厳禁です。反感しか買いませんから。」

「そうか、ではその時を楽しみにしよう。勇者支援官ケルテンよ、そなたの職務に励むがよい。大儀であった。」

俺はそこから逃げるように立ち去った。俺は勇者二人とともに平和を目指す。たとえその結果この王家がなくなるうとも・・・そこまで読まれていたような気がした。

復帰と復旧

6 / 29 勇者支援生活60日目

ガイラはまだ目を覚まさない。体は治っているし呼吸も正しい。いつ目を覚ましてはおかしくないはずだ。アレフも看病に疲れて隣のベッドで寝ている。

「ねえ、ケルテン。なんでガイラはあんな無茶をしたのかしら？」

「そうだな。俺は言ったよな、最善を尽くせと。ガイラはそれを実行したのではないか。」

「最善？どういうことかしら。個人の強さではアレフよりガイラの方が上、そうじゃなくて？」

「確かにそうだ。だがもしアレフが死んでガイラが生き残ったとする。その時は多分ガイラでは迷宮の最深部からは帰って来れない。そう考えると最善策であったと言える。」

「ち、ちがうさ。おっおれは只、目の前でアレフに死なれなくなつた、だけだ。」

「ガイラ、目を覚ましたのか！」

俺とマギーがガイラに目を向ける。

「ああ、ベッドの横で「ちや」「ちや」言っていれば誰でも目ぐらい覚ますぞ。」

「馬鹿か！お前死んでたんだぞ。」

「そうよ！もつと自分を大事になさい！」

思わず叫ぶ。マギーも彼女らしくなく叫ぶ。俺以外には他人然としてくせに……。

「そうか、アレフを突き飛ばして俺の胸に剣が刺さった。しゃれこうべが笑ったような気がして、妙に腹が立ったところまでは覚えている。」

「その怒りで死霊の騎士を倒したらしい。それでアレフがリレミトで脱出した。あとは城まで戻って陛下の蘇生を受けたってわけだ。でかい借りができたな、もう勇者は止められないぞ。」

「そうか、落とした命を拾ってもらったか。ならせいぜい恩を返すさ。それでアレフはどうした？」

俺が隣のベッドを顎で示す。

「そこで寝てる。限界まで使ったMPの反動でぐっすり寝てる。お前ら二人とも今日、明日と安静にしている。これは支援、査察官の命令だ。拒否権はない。」

「はいはい、わかりました。」

「それとお前の籠手は預からせてもらう。革がぼろぼろで中身が丸見えだ。今回持ち帰った素材は全て没収する、いいな！」

「ああ、いいよ。俺の分は好きにしてくれ。」

「じゃあ、俺らは行く。しっかり静養しろ。」

もうここには居れない。俺はマギーを連れて病室を出た。

「ケルテン・・・あなた泣いてるの？」

「泣いてなどいない。」

俺はマギーに顔を見られないよう先に歩く。

.....

今俺はガイラのミスリルの籠手を分解している。誰にも見られるわけにはいかないので自室で作業中だ。ミスリルを覆っている革は使い物にならないぐらい破れている。相当剣を受け止めたようだ。これはメイジドラキーの翼膜で作ったやつで、ほんの少しだが魔法に耐性がある代物だ。代わりになる物はないだろうか？・・・なかつたらとりあえずドラキーの翼膜でも取ってくるか。ガイラの荷物を漁る。

「おつ！金色の翼膜があるじゃねえか、ドラキーマの翼膜だな。よしこれで作り直そう。」

一人でぶつぶつ言いながら革を取りだす。

「おい、ケルテン。いるか？」

いきなり扉を開けてサイモンが入ってくる。慌ててミスリル板を

隠そうとして落としてしまつ。サイモンの足元に落ちた板が無造作に拾われた。

「なんだこれ？やけに軽いな。何でできてるのだ。」

俺は返事をしない。俺の沈黙になにかやばさを感じたのか、サイモンが俺に金属板をかえす。

「まさか伝説のミスリルじゃあないだろ？隠さなくてもいいだろっ！」

「正解だ、まさか当てられるとはな。誰にも言うなよ。」

もう黙っていることは諦めた。下手に隠すより教えた方がいいこともある。そう判断した。

「そうか。で、それどうするんだ？」

「ああ、ガイラの籠手の中板だ。ガライの墓で酷使したらしく作り直した。」

「聞いたよ、一度死んだってね。陛下の魔法がなかったら終わりだったんだろ。よかったなケルテン！お前の担当の勇者が死ななくて。」

「同情してるのか、からかっているのか判らない口調でサイモンがしゃべる。」

「できれば普通に帰ってきて欲しかったんだがな。まさか拾った道具をいきなり使うとは想像していなかった。」

「拾った道具？なんだそれ。」

俺はガイラの荷物から銀の豎琴を取り出す。

「これだ。吟遊詩人ガライの遺品、銀の豎琴。この豎琴の調べはなぜか魔物を呼ぶ。そういう伝説だ。」

「ふん。それ本当か？」

「馬鹿！手を出すな。このラダームに魔物を呼ぶ気が！」

「わりい、試してみないと信じられなくてな。」

「だから馬鹿だと言っている。もし本当だったらどうするんだ。責任取れるか？」

「全部倒せばいい。城を護る為なら近衛も動ける。最近活動を控えさせられていて退屈だ。」

「馬鹿にも程がある。どれだけ町に犠牲がでると思っている。それと来る魔物がスライムやドラキーとは限らんぞ。それと隊長には何も聞いていないのか？」

隊長はあの話はまだしていないのだろうか、昨日のうちに更なる脅威を伝えたのだが……。

「ああ今朝聞いた。全員ではないが一部の近衛には話がいっている。魔物に等級があるのと統率が取れている話な。それ本当なのか？」

「お前は質問ばかりだな。本当だ、俺が襲われたのはパーソナルマークを着けた悪魔の騎士、ガイラ達が襲われたのは死霊の騎士が指揮する1個中隊だ。油断するなよ。」

「パーソナルマークって隊長章とか一部色違いとかそういうやつか？魔物の癖に生意気だな。」

「そうだ。お前の感想は頭悪いな。それだけ魔物にも個性があるかもしれないということだ。もし魔王の再侵攻があったらお前がこの城を護るんだぞ。油断するな。」

「OK、了解だ。それまでにもっと修行しておくさ。俺も死にたくないからな。」

それだけ言うとサイモンは出て行った。何しにきたんだ。あいつももう少し思慮があれば中隊長ぐらいにはなれるのにな。今では戦時任官の小隊長がいいところだ。腕はいいからな。

ドラキーマの翼膜に型をあわせ切り取る。2枚でミスリル板を挟み、余っている部分に穴を穿つ。後はその穴に革紐を通して形を整えるだけだが、革が結構堅いので時間がかかる。しかしまあ素材がドラキーマになったから金色の籠手になってしまっうな。

結局出来上がるのに5時間かかった。これで前より魔法耐性のある籠手になる。少し余計な細工もしておく、ガイラにはわからないように……。もし次にこれのバージョンアップがあるとしたらドラゴンの革が手に入ってからかな。それはそれで楽しんだ。俺の皮の鎧もドラゴンの革で作りたいな。そんなことを想像していたら気づいたら机に突っ伏して寝ていた。

王家による政治

6 / 30 国務大臣執務室

「大臣、今月の法務関連報告書です。」

「ふむ、後で読むからそこに置いておけ。何かあるか？」

「はい、やはり流民による犯罪が増えています。城下街の犯罪件数は先月比で+20%、前年比で+200%です。」

「兵士による巡回を増やせ。少々手荒でも構わん、牢に放りこめ。」

「しかし、兵士の絶対数が足りておりません。」

「私から近衛に増援を頼む。それでやり過ぎせ。」

横から口を挟む文官が現れる。

「流民対策ですが、強制移民を検討しております。先方の承認は得ておりますが問題があります。」

「問題とは何だ、簡潔に申せ。」

「二つあります。一つは移動時の魔物対策であります。先の話に付随しますが兵士の絶対数が足りませぬ。次に移住先ですがリムルダールへの移動が不可能です。さらにメルキドに至っては連絡すらまともに行なえません。」

「ならばマイラ、ガライへの移動には近衛の力を借りる。近衛に頭を下げるのは気に入らぬが、この際は仕方あるまい。メルキドについては私の特務隊士を派遣しておる。しばし待て！リムルダールはなぜか？」

「こちらに報告書がありますが、海底洞窟の両端に毒の沼地が広がっているとのこと。集団での移動を困難、不可能にしています。」

「勇者や特務隊士が何度か通過しておる。なにか対策があるやもしれん。相談するがよい。しかしまあ、頭を下げたくもない者の手を借りねばならぬとは忌々しい。そうは思わぬか。」

目の前の二人が首を縦に振る。その表情は険しい。

「先の謁見の際も、無礼があつたと聞きます。今の内に釘を刺しておきますか？」

「ふん、国王様の覚えがよろしいからな、迂闊な真似はできぬ。」

「下賤の者が調子にのりおって、我ら貴族ら皆心を痛めております。」

「もうよい！時間が足りぬ。次の報告をせよ。」

二人が後ろに下がる。その間にも書類にサインをし、決済済みの棚に移す。

「財務担当です。今月も軍事関連の予算が逼迫しております。その他にも法務、都市対策などに予算が取られています。」

「耐えよ、移民対策が済めば多少は軽減できるであろう。」

「しかし昨年のリムルダールからの税の分が惜しいですな。只一人に10万ゴールドとは奮発しましたな。」

「それを言うな。近衛騎士隊長の推薦もあつた、断るわけにもいかぬ。それに竜王対策がうまくいかねばいかに権威があるうが何の役にも立たぬ。そうであろう。」

「そうですね、命あつての権威ですか。全て終わった後、元通りとはなりませんかな。」

「元通りにせねばならぬ。竜王亡き後新しい勢力が台等するなど悪夢だ、そうならぬ様事を運ぶのだ。」

「判りました。しばらく財務関連の不足は国庫の予備から捻出します。よろしいですな？」

「仕方あるまい。だがなるべく節制せよ。」

「心得ております。では失礼を。」

財務担当の文官が立ち去る。大臣の秘書官が横から蠟封された手紙を差し出す。中身を取り出し文書を確認する。秘書官に小声で話しかける。

「ここに呼ぶわけにはいかぬな。私の屋敷ではいかん、今晚しかるべき場所を用意せよ。よいな！」

秘書官は無言で立ち去る。しばらく待っていた次の文官が書類を

差し出す。 国務大臣の仕事は忙しい。

ラダトーム王家の政治体系。この国は王家による絶対君主制である。建国時、国王はいたが制限君主制であったこの国も時が経ち、ある一族に権威が集中するようになった。初代ラダトーム王家ラルス一世である。それでもまだ合議制が残っていた間は問題なかった。だがさらに時が経ち権威が絶対になったころ変化が現れた。つまりラダトーム王家による絶対君主制である。能力が高い国王が精力的に全ての決済をしていたのは初期の国王だけで、いつしか一族の者を国務大臣に据えて行政を代理させるようになった。現在のラルス16世の代理執政官が実弟のオットーである。

- - - - -

近衛騎士団長の執務室に三人の男がいる。部屋主の近衛騎士隊長、国務大臣付き特務隊士ケルテン、文官アーベントロートである。

「近衛騎士団長どの、国務大臣からの要望書です。此度は流民の移民、及び城下街の警備の要望です。国王様の許可も得て降ります。」

「しかたありませんな。現状では軍として働くことのできぬ近衛騎士団が、協力できぬなどとは言えないですな。半数の貴族出身の団員の反発もありませんが、まあ国王様の命令だ、ありがたうお受けいたそう。」

「さすが近衛騎士団長殿、話が早い。」

張り詰めた空気の中、内に剣を構えた舌戦が行なわれている。大臣以下の文官と近衛騎士との確執は相当なものだ。俺の居場所がな

い。

「それはそうと、なぜ私がここに呼ばれたのか判りませんが？」

「これは失礼した特務隊士殿。 国务大臣より移民対策問題の件でご助力頂く様言われております。」

「なるほど、しかし小官になにかお助けできますでしょうか？」

「これはこれはご謙遜を！大臣より大層な見識と伺っています。」

いちいち余計なことを言わないと気がすまないのか。 いいかげんにしてもらいたいな。 ささつと話を進めるよう促してみるか。

「はあ、それで何か問題でも？護衛や旅程に関しては近衛の方が詳しいでしょう。」

「ガライ、マイラに関しては問題ない。直轄地故に移住の要請もすぐに済み、移動の計画もすぐに済むでしょう。しかしリムルダールへは毒の沼地があるとのこと、安全な移動法も確立しておらぬ。さらに十分な連絡も取れていない上、誰か使者として行ってもらわねばいけません。」

「はあ、それで小官に行けと。」

「そうです。貴官の実家はリムルダールの長と聞きます。適任ではないですか！」

「たしかに使者の件は適任と言ってよいでしょうね。しかし毒の沼地の通行方法は一般人にはむずかしいですね。」

「それでも構いません。まず移住の要請の使者として行ってもらえますか？」

「判りました。使者の任お受けいたしましょう。しかしその間勇者の支援の任務はいかが致しましょう。」

「それは心配に及ばせん。大臣よりしばらくは無理な行動はせぬよう言われています。先日も国王様のお手を煩わせたそうですね。」

そう来るか、俺としても時間を稼ぎたかったのもあるから渡りに船、悪い話ではないな。

「では勇者にも無理をせぬ様、助言しておきます。國務大臣殿が心配していられたと伝えておきます。」

「では話は済みましたので、私は仕事に戻ります。文官は忙しいのです。では失礼致します。」

それだけ言うと文官アーベントロートは部屋から出て行った。俺と近衛隊長は思わず顔を見合わせる。

「なんともまあ、迂遠なやつだ。もっと簡潔に話を済ませられないものかな。」

「まあそうですね。貴族出身の文官なんてあんなものですよ。個人的には好きじゃないですが。」

ため息がでる。それは近衛隊長も同じ様だ。

「俺も隊長に昇格して半年だが、文官だけでなく貴族出身の騎士の反感をひしひしと感じておる。実のところ俺は貴族ではない。」

「そういえば戦士の家系でしたね。よく近衛騎士、しかも隊長になれましたね。」

「ああ騎士になるのはそれほどでもなかった。俺より剣の立つ者はいなかったし、近衛騎士でも末端なら問題なかった。居心地はあまりよくなかったがな。」

「それでなぜ団長に？」

「先の大戦だ。敵が敵ゆえに前線に出たがる貴族は少なかったので、俺らの様な者が前線ドムドローに送られた。特別に戦時任官で副隊長、ドムドロー方面の司令官だそうだ。死んで来いと言われた気がしたよ。」

「それは大変でしたね。それでなぜ隊長にまで？」

「竜王によるラダトーム城侵攻、城に残された団長以下近衛騎士は皆貴族出身、それで多くの犠牲がでた。戻った俺が国務大臣により団長に推薦された。いろんな思惑はあっただろうがな。」

「なるほど、実力はあるが後ろ盾のない人材ですか。」

「だろうな。だが俺は傀儡にはならぬ。敵にもならぬ。近衛が仕えるは国王のみ、それだけが俺の信念だ。それで十分ではないか、剣を振るう理由は。」

「そうですね、立派です。私が言うのも生意気ですが。」

「構わん、帰ってきたら酒でも振舞おうか。さあリムルダールへの使者の任、しかと務めよ。」

「了解です。では行ってきます。」

俺は最敬礼をもって近衛騎士隊長の部屋を辞した。

騎士の誇り

近衛騎士隊長の部屋からでる。いや、いい人だな。絶対に敵にまわさない様にしよう。そう思って近衛の控え室を出ようとすると、出口が数人の騎士によって塞がれている。

「これはこれは特務隊士殿、こんな所になんの御用でしたかな。」

嫌味つたらしくそう言う男・・・見た記憶はある。誰だっけな？

「特務に関する任務ですので話すわけにはいきません。そこを通していただけませんか？急ぎの用があるのです。」

「ほう、国務大臣付きの特務隊士ともなると、我々の様な者は話もしてもらえませんか。」

「急ぎの用があると申しました。そこを通してください。」

もう一度俺の主張を言ってみる。

「ふん、その任務とやらも怪しいな。また図書館で筆頭魔術士との任務ですかな？」

「王様や大臣の覚えがいいことを盾に調子にのるでないわ、下賤な生まれの癖に！」

「我ら近衛にも禄に任務がないのにこんな奴に任務だと？大臣も隊長も何を考えておるのか。」

先頭にいる男の他にも嫌味を通り越した悪口を言い出した。さてどうしたものか、それ以前にこいつらはどう落とし前をつけたいの

だろうか？とりあえず反論だけはさせてもらおう。俺のことは構わないが幾人かの名誉に関わる発言がある、それは許せない。

「先も申しましたが特務の任務に関しては教えられません。それに私がある特定の女性と一緒にいることが気に入らぬことは今は関係ありません。また私が下賤ゆえに上の方々の覚えがよいわけでもありません。さらに言わせてもらえば近衛の任務が私の様な者に愚痴をこぼすこととは知りませんでした。質問の答えはこんなところでよろしいですか？」

先頭の男の顔が真っ赤になっている。後ろの者たちも同じくらい赤くなっている。もうすぐ爆発するな。

「黙れ、貴様に任務のことを言われたくないわ！」

「図に乗るな！貴様ごとき下賤な者、本来ならここに来られるだけでも栄誉と思え！」

「そうだ、我ら爵位を持つ者に直答できると思うな！無礼者めが。」
「うわっ！すごい勢いで罵り始めたぞ。お前らが聞いてきたんじゃないか、まあ挑発にのってやったのは俺だから仕方ない。俺が黙っているとさらに続ける。」

「腕が立つとは聞いてはいるが怪しいものだな。」

「弟子ともども下品で卑怯な技しか使わぬらしいな？」

あら今の言葉で真ん中の男のこめかみに血管が浮き出してる・・・もしかこいつアレフに負けて逃げ帰ったやつじゃないか。名前はたしか・・・思い出した、名前負けのエックハルト子爵。

「ああ、思い出しました。模擬戦でアレフに負けたエックハルト子

爵、確かお前達を認めないと捨て台詞を残していかれましたね。」

「貴様っ！言うに事欠いて負けただと！あれは貴様らの罠に嵌っただけだ。まともな勝負すれば負けるわけがない。」

激昂したエックハルトが俺に掴みかかる。さすがに周りの者が押しどめるが、子爵の息は荒い。

「なるほど」俺のほうが強い”そう証明したかったですね。判りました、では決闘でも模擬戦でもなんでもお受けいたしましたしょう。よろしいですね、近衛騎士隊長殿。」

俺は後ろに振り返り、困った顔をしている近衛隊長に許可を得る。

「なんだ気づいていたのか、どう治めようかと思っていたところだ。」

「まあ、これだけ騒げば出てこないわけがありません。それにあちらの文官の方々もこちらに興味深深です。」

向かいの部屋から文官何名かがこちらを覗き込んでいる。こちらと目が合うとあわてて引っ込んでしまった。

「よろしい。決闘は許さぬが模擬戦ならば許可しよう。場所はここで行なう。さらにここで見たことは皆口外しない。よいな。」

「了解です。異論ありません。」

「こっちもだ。」

で輪を作る。騎士の戦いは互いに剣を打ち合わせるところから始まる。剣を落とすか、頭、喉、胴、右手に剣を当てた者が勝ちであるが、故意に強打を当てることは無作法とされる。互いに木剣と木盾を構える。いつも通りのピオリムの二重がけはすでに終わっている。正直どんな強力な魔法よりこれが一番使い勝手がいい。

互いに剣を打ち合わせる。相手が一步跳び下がり構える、俺は両手をだらんとたらしめた自然体で待つ。

「構えぬかつ！」

「構えてますよ、どうぞ。」

「ふざけるなっ！」

怒りに力が入りすぎだ、そのまま右袈裟切りが来る。それを見切つて半身で避け、右籠手に下から軽く木剣を当てる。

「そこまでだ。次っ！」

次の者が出て、すぐに剣を合わせてくる。なるほど休憩はさせないか。さっきと同じく跳び下がって構える。敵の構えは右を前に出した突きに特化した構えだ。いきなり突きが来る、結構速い。半身でかわす、すぐに次の突きが来た、さっきの様にはいかない。後ろに下がりながら避ける、突き突き突き、下がる下がる下がる。背中が誰かに当たった。これ以上は下がれない。追い詰めたことが嬉しいのかニヤリと笑う。

「もらったあ！」

突き出される剣、悲鳴があがる。すれすれで避けた剣が後ろにいた騎士に当たっている。躊躇した相手の喉元に剣を当てる。

「それまで！中央に戻れ。」

俺はゆっくり歩いて中央に戻る。次の敵と対峙、剣を合わせる。さっきの戦法が有効と思ったのか突きの構えだ。突きが来る、左手の盾で右に受け流す。予想外の行動に相手の体が崩れた。剣を叩す。これで3勝、こいつら馬鹿ではない。前を参考に戦い方を考えてくる。

「それまでだ。次！」

次の男がすぐに剣を合わせてきた。剣の合わせ方が強い、そのまま突いてくる。突き、横薙ぎ、斬り返して左袈裟切り、俺の回避方向に合わせて次の攻撃をしてくる。さっきまでの相手と違う。手が止まった、次はこちらから攻撃をする。突き、横薙ぎ、斬り返して左袈裟切り、さっきと全く同じ攻撃をする。互いに跳び下がり距離をとる。俺は剣を納める。相手が一旦躊躇、突き出している剣に居合いで剣を当てる。剣は落ちないが右手が上に跳ね上がる。そこに俺が胴に軽く突きを入れた。

「よし、そこまでだ。」

「そこまでだな、俺様にはそんな手は通用しない。息を整えさせてやるつ。」

エックハルト子爵が尊大に告げる。俺は息を整えながら左手の盾を捨てる。もうこんな奴にかかわるのは御免だ。心気を整えバイキルトを使う。

「ふん、盾がないせいで負けたとの言い訳かつ！」

剣を叩き付けてきた。力負けしない様両手で剣を扱う。エックハルトは跳び下がって盾を前に構える。俺は両手持ちで上段、奴の動きはない・・・俺は剣を盾に思いつき叩きつけた。木盾が真っ二つに斬れた。奴の眼前に剣を突きつける。

「まだ続けるか？」

「ふざけるなっ！」

俺の剣を強引に払おうとする。払われた勢いを利用して振り上げ、剣に向かって振り下ろす。木剣が斬れた。

「もういいだろう。あんたじゃ誰にも勝てない。」

「こんなのあるか！盾も剣も不良品だ。そうでなければこんなことあり得ない。それにお前の戦い方には品がない。こんなもの認められん！」

「なるほど、それがあんたの誇りか。じゃあ相手がドラゴンだったら火の息を使うのは卑怯だ。ストーンマンは図体がでかいのは卑怯だ。そういえばいい。次の瞬間には消し炭かぺっちゃんこだ。」

エックハルトが歯を食いしばり、声を出せずにいる。

「まだ公表していないが・・・」

ここで近衛隊長を見る。隊長が首を縦に振る。

「魔物の中には騎士と同じく隊列を組む者がいる。さらにあんたらと同じ剣術を使う。先の大戦のように力任せの攻撃ばかりではない。骨だけの魔物、鎧だけの魔物、あんたらの常識だけでは通用しない。」

「しかし我らの誇りは……。」

「誇りで勝てるならそうするがいいさ、だがあんたと隊列を組む仲間はいかに面白いそうだな。常識や誇りに固執して気づくとすでに死んでいる。隊列が崩れた仲間は順に撃破されるだろう。」

もう何も言えなくなったエックハルトに更に言う。

「これから近衛、それもあんたら貴族には屈辱的な任務が命令されるぞ、もう俺にかまっている暇なんかなくなるさ。次に会えるのは何時になるかな、もしかしたらもう二度と会えないかもしれない。互いに危険な任務だ。じゃあな！」

俺は剣を放りだすと出口へと歩く。乾いた音が響く。止める者はいない。

騎士の誇り（後書き）

感想に質問があったのでここに書きます。

1ゴールド＝100円

城の兵士一月の給料は1000Gです。一般人より高給取りです。

心配の塊

部屋に戻りガイラの荷物を持ち出す。二人を探す、もう病棟にはいない、どこへ行ったのだろう。城の中を探すがいない・・・結局見つけたのは宿屋だった。

「ここに移るのなら先に言っておけよ。」

「すまん、あそこは居心地が悪くてな、昨日の内にこっちに移った。」

「そうですね、ケルテンさん。ここの宿屋の方が気楽でいいです。」

そういわれて嬉しそうな宿屋の親父がいる。なんか気持ちが悪い。

「まあもつともな意見ではあるがな。さっきも近衛の連中と衝突してきたばかりだ。」

「もしかして僕達のせいですか？そうだったら・・・」

アレフがとても申し訳なさそうに言うのと遮る。

「ああ違う、違う。個人的な問題だ。君らのせいじゃないから気にしないでくれ。それとガイラ、預かり物を返す。」

そういってガイラの背囊を投げて返す。それと嚴重に梱包した銀の豎琴をアレフに渡す。

「絶対音を出すなよ。それ以前に梱包から出すな、いいな！」

アレフが恐る恐る手に取る。ガイラはもう触りたくなさそうだ。知らん振りで自分の袋を漁りだした。金色の籠手を見つけて取り出す。

「なんだこれは？派手すぎじゃないか、金色はないだろう。」

「だってしょうがないじゃないか、使える素材がドラキーマのしかなかったんだ。それでも前より性能は上がっている。文句があるなら今度はドラゴンの皮でも持って来い。」

そう説明するとガイラがこねくり回してあちこちを見ている。

「おい、なんでこんな所に宝石みたいのがついているのだ？」

籠手の先端の裏側につけておいた水晶に気づいた様だ。

「ああ、念の為だ。この間みたいになったら困るからな。保険をかけておく。それに一滴血を垂らしておけ。」

「ふ〜ん。こうすればいいのか？」

そう言いながらガイラが指の先端を噛み切る。垂らされた血で水晶が真っ赤に染まった。

「ああいいぞ、まあこんな物役に立たない方がいいがな。アレフ、ホイミだ。」

「はい、・・・ホイミ！あの・・・僕の分はないのですか？」

「はっ、何が？」

「いえ、その宝石みたいのです。ケルテンさんもマギーさんも持っていますよね。」

「なんだ、知ってたのか。もしかして欲しかったのか？」

「いえお二人だけなら迷惑かなと思っていたんですが、ガイラも貰えるなら僕も欲しいかなと。」

「そうか、欲しかったのに遠慮していたのか。」

「ああ宝石はある。お前の装備はまだ買い換える余地があるからどうしようかと思っていたんだ。何かあるか？」

「ああそうだ、それで思い出しました。ガライの墓でこんな気持ち悪いペンダントを見つけたのですが・・・」

アレフが袋から髑髏のついたペンダントをだす。うわっ！死の首飾りだ。

「よくそんな物、持って帰ってきたな。」

「こいつな迷宮の地図を全部埋めるまで、次の階に降りないんだ。それで無駄にいろんな物を見つけたんだ。」

「凝り性が、俺に似ているな。まあいや、それは死の首飾りだ。装備すると徐々に命が奪われる、しかも外すことのできない呪いの装飾品だ。売却するなよ、流通されては困るからな。」

慌ててアレフがテーブルの上に放り出した。

（俺はMPを18放出する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ
おお万能たる力よ、聖なる力となりて、これを浄化せよ、シャナク
！）

俺がシャナクを使用し髑髏の部分に触れる。髑髏が砕け散る、残
ったのは鎖と空のペンダントヘッドだけ。アレフとガイラ、それと
宿屋の親父が目を丸くしている。

「今の何やっただんですか？」

「うん！ああ古い物には結構呪いのアイテムがあるからな、解呪の
法を知っているんだ。ここラダトームで習ったぞ。」

「お前さんには驚かないと決めていたが無理だったな。」

俺は自分の鞆から幾つかの道具を取り出す。ハンマー、ナイフな
どを使ってペンダントヘッドを加工する。別に取り出した水晶をペ
ンダントヘッドに嵌め込む。しばらく作業を続け出来上がったペン
ダントをアレフに渡す。

「こんなんでいいか？よかつたらさつきみたいに一滴血を垂らせ。」

アレフがしばらく眺めてから、ナイフで指先に傷をつけた、垂ら
された血で水晶が真っ赤に染まった。

「これで4人ともお揃いですね。嬉しいです。」

アレフが首にかける。お揃いね・・・なんとも平和な響きなんだ

ろつか。

「さつきも言ったが役に立たない方がいい代物だ。それとガイラ、拾った物をむやみに触るなよ。王様や大臣から自重せよとありがたい言葉だ。俺がリムルダールに行つて帰つてくるまで無理はするな。」

「そうか、それは退屈だな。なんだつたら同行しようか？」

ガイラの何かを期待するかのように提案する。こいつは一度死んだくらいでは懲りないのだろうか？

「駄目だ。任務で行くのだから遠慮してくれ。その間に豎琴を渡してこい。いつまでも持っていては困る。」

「そうか、確かにその通りだ。」

「というわけで10日は戻つて来れない。その間は無理はするな。次の目標はメルキドだからそれに備えて金は貯めておけよ。」

「たしか25000Gぐらい必要だと言つてましたね？」

「ああそうだ。正確には24600G、炎の剣と水鏡の盾を購入予定だ。両方とも今の技術では作れない代物だからな。楽しみにしてろ。」

「だそうですよ、ガイラ。豎琴を渡したらマイラの村付近で稼ぎましょう。」

「そうか？ガイラの墓の方が稼げるぞ。」

「却下だ。もう豎琴はないとはいえ、魔物の巣窟だ。頼む、自重してくれ。」

「判ったよ。お前さんが帰ってくるまでは自重する。」

ガイラはとても不満そうだ。多分こいつに言っても無駄だからアレフに頼んでおこう。

「アレフ、こいつの監視を頼んだ。」

「お任せ下さい。殺してでも止めます。」

「そうだ、その意気だ。」

「おい、なんかおかしくないか。目的と手段が間違ってるぞ。」

「じゃあ自重しろ。じゃあ俺はもう行くから。」

それから馬に飛び乗り城をでる。リムルダールまで10日、この時間を1時間でも短くする。あの二人から目を離すのは心配でたまらない。

心配の塊（後書き）

前回の後書きに続きまして一部設定を

一般人の平均月収は800G程度

物価は現在日本の1/3〜1/2です。

陰謀

出発して二日俺は毒の沼地の手前にいる。今回は俺一人と馬二頭、片方の馬に疲労がみえたら替え馬と荷を積み替えて駆けてきた。ここから一日は徒歩になる、さらに水や食料、飼葉が手に入らないので荷物を念入りに調べ、二頭に均等に積む。トラマナを使う、俺一人なのでこれで問題なく通過できる。ただし馬が歩きやすいよう海岸線に近い平らな場所を選んで通る。2時間おきに馬に水と飼葉を与え、トラマナをかけ直す。いつそのことトラマナを公表しようか。今回の様に俺だけがこき使われることは避けることができる。

日が落ちる前に海底洞窟の北口に辿り着いた。この洞窟を通り抜けるのに急いでも5時間はかかる、無理にこのまま進むか、一晚休むか・・・駄目だな。俺だけなら無理はできるが、馬はそうはいかない。洞窟を抜けた先でも馬には走ってもらわないと困る。今日はここで休もう。魔物の気配に緊張しながら睡眠をとる・・・物音や魔物の気配がする度に飛び起きる。明日洞窟を抜けたら、トヘ口スを使ってゆつくり眠る、それが楽しみだ。

断続的だが8時間は寝ることができただろうか。頭はすっきりしないが洞窟を進む。水も飼葉も残り少ないから早く向こうまで行きたい。気は逸るが洞窟内を走らせるのは馬の脚を痛めるので、手綱を引いて歩く。まれに魔物がでてくるがメーダや魔法使い程度で強くないので即効倒す、馬も軍馬で多少の戦闘では逃げない。

3時間は歩いた頃だろうか、先方にたくさんの人骨らしき骨と金属鎧が散らばっている。地面や壁に火球を叩き付けたような跡もある。なるほど一見ここで魔物に襲われて死んだ者の死体の山・・・そんなわけあるか！俺は腰のポーチに手を入れ、アイテムを確認す

る。それから声をかける。

「無駄ですよ。そんな手に引つかかるほど馬鹿ではありません。」

「くつくつくく！やはりこんな手には乗らんか、だが16対1、貴様と言えどこの戦力差覆せまい！」

闇の奥から漆黒の鎧が現れる。その髪飾りは赤、鮮血の色。

「あの橋の時の悪魔の騎士だな、何者だ？」

聞いても無駄だろうが、思わず口にする。周りの骨が、鎧が立ち上がり、次々に武器を構える。

「お前には何一つくれてはやらん。死以外にはな！やれっ！」

それを合図にがいこつと鎧の騎士が隊列を組みにじり寄ってくる。前列に盾を構えた鎧の騎士8体、後ろに槍を構えたがいこつ8体。攻防一体の布陣、その後ろで嘲笑するかの様に立つ悪魔の騎士。

「数だけで俺に勝てると思うな、とりあえずこれでも喰らえ！」

手にもった聖水をぶちまける、聖水がかかった魔物から蒸気のようなものが上がる。

（俺はMPを2放出する、MPはマナと混じりて神に捧げん、

おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ、ニフラム
「！」

俺のニフラムによって骨と鎧が崩れ落ちる。奥の悪魔の騎士以外

悪魔の騎士が吼える。

「ふむ、それだけでは判らぬな。そなたや奴が言う通り油断ならぬな。しかしその者の力、底が知れぬか・・・なるほど奴め、持て余しておるな。」

「ふん、俺にはそんなこと関係ない。やつに復讐できればそれで構わん。」

「お前はそれでよいだろうが、我らとしても看過できぬ問題になるやも知れん。今からでも情報はあつめさせる。そなたも遺恨など置いて、次の作戦に移れ。」

「次の作戦か、俺はどっちに行けばいい？」

「そうだな、ガライ方面だ。今度は失敗は許さぬぞ。いいな！」

闇に浮かぶ金色の姿が滲む。それが見えなくなってから悪魔の騎士が動き出す。

「どいつもこいつも俺を軽く見おって！お前ら全て俺の踏み台にしてやるっ！」

- - - - -

それから一週間、ようやく湖が見えてきた。リムルダールが浮かぶ湖は広大だ。湖の向こうにうつすらとリムルダールが見える。北側から島に渡る橋に向かって進む。途中で目印のように石が置いてある場所で止まる。俺の両親が亡くなった場所らしい。その辺で摘

んだ花を供える。ここを通るときにはかかさない。

リムルダールの橋を渡る。門番が二人立っている。見たことのある顔だ。

「ラダトーム城から國務大臣の使いできた。通行許可願いたい。」

「なんだ、ケルテンじゃないか。他人行儀な挨拶なんかいらなげ。」「
「そうだぞ、しかし変わらんか?」

門を護っていたゲオルグとドゥーマンが軽く返す。

「駄目だ、きちんとやるべきだ。何が起こるか判らん。これが大臣からの書状だ。」

俺は懐から蠟封のある書状を見せる。蠟封にはラダトーム王家の紋章、二人がそれを見る。

「よおし！通行を許可する！」

ゲオルグが真面目くさって言う。思わず嘖き出す。

「お前がやれって言ったんだらう、笑うなよ！」

「すまん、あまりに似合っていないので思わずな。馬を頼む、しばらく洗ってやっていないので綺麗にしてやってくれ。。。それでこの街はどうだ。粗略に扱われていないだらうな。」

馬を引き渡しながら質問してみる。

「ああ、むしろ大事にされている。あんたの知り合いと言うことで皆優しくしてくれる。」

「住むところも用意してくれたし、仕事も3交代制で無理はない。食うにも困らない。今日はクロウは休みだがあいつもうまくやっている。」

「そうか、ならよかった。じゃあ俺は爺様の所へ行く。急ぎの用なんだ。」

名残惜しそうな二人に別れを告げて、我が家に行く。

「あいつ、いつも忙しそうだな。」

「そうだな。俺達も何か手助けしてやればいいのにな。こんな所で門番じゃ何もしてやれない。」

「そう言うな。これもあいつに頼まれたことだ。ここを護ることでほんの少しでもあいつの負担を減らしている。そう思えばいい。」

「お前賢いな。そう言われればそうだ。しかし最初は恨んだものが、今はあいつに会えたことを感謝している。」

.....

「爺様、帰った。今日は公式の使者だ。私的な話は後にしてくれ。」

「そうか、ではまず書状を受け取ろう。」

俺が書状をリムルダール自治区長に渡す。書状の蠟封を確かめナイフを入れ、書状を取り出す。しばらく目を通して。深く考え込んでいる。

「なるほど、城下町に溢れている流民を引き取れということじゃな。最大で5千人か・・・人数的には問題ない。土地もあるし仕事もある。だがどうやってここに来る？」

「いや今は移住の許可だけくれればいい。方法はいずれ考える。」

「そうか、なら返事を書こう。もちろん受け入れる・・・それでお前はどうか。」

「何がだ？」

「お前さん自身の話だ、もう使者の話はいいだろう。仕事はうまくいっているのか、友人は？女はどうか？」

「ああ五月蠅い。担当している勇者二人とはうまくやってる。近衛にも気持ちのいい奴はいるし、仲良くさせてもらっている女もいる、心配はいらない。それより紹介した3人はどうか。」

「そうか友人も女もおるか、それはよかった。お前は相手によっては壁を作るからの。」

「俺のことはもういい。それでどうなんだ。」

「よくやってもらっている。街の人間ともうまくいっておるし、仕事も真面目だ。この街の兵士にかかっておった負担も軽減できた。いい人材を紹介してくれて皆感謝しておる。」

「そつか、それはよかつた。あいつらもそんなことを言つてた。実はあいつらを勇者から解任したのは俺だ。少々問題があつたのでな・
・懲らしめて解任した。それで返金の手伝いをしてやつた。」

「ふむ、お前のことだ、厳しいがうまくやつてやつたか。それで立ち直つたのならいいじゃないか。過去はともかく今はいい青年達だ。この街ではそれだけで十分じゃ。」

「これを俺が言つたのは秘密にしといてくれ、いずれ本人達が言うまでは知らん顔で頼む。」

「誰に物を言つておる。自治区の長ともなると腹芸の一つできぬわけがなかるつ。」

「そつだな、爺様に全部任せた。俺の出る幕はないな。じゃあすぐに城に戻るぞ、放っておけないやつらが何人かいる。」

「そつか、そのうちそいつらを連れて来い。わしが死ぬ前にな！ワツハツハツハツハ・・・」

「そつ簡単に死ぬものか！じゃあな、元気でいろよ！」

俺はそつ捨て台詞を残すとすぐに出て行つた。馬を受け取り即ルーラで城に帰る。城下街が騒がしい、城に戻ると不穏な雰囲気がある。俺がいないうちに何が起きたのだろうか？

罪と罰

ラダトーム城に戻った。ここをでてから10日、今日は6月10日か。

城下街では道行く人々が噂をしている。

（ここだけの話だ。この街にいた流民を近衛騎士によって処分されたらしい。）

（俺が聞いた話と違うな。流民を他の街に移住させようとして失敗したと聞いている。）

（正確な話をするべきだ。近衛によって追い出された流民が魔物に襲われて死んだ。そういうことだ。）

もしかして移住計画が失敗したのか？正確な情報が欲しい。急いで城に戻るが静まり返っている。皆青白い顔をして何かを口にするのも憚れる、そんな表情をしている。大臣か近衛騎士隊長に話を聞こう、そう考えて2階へ急ぐ。衛兵に止められた。

「国王様の謁見の準備をしております。いかなる者も通すなどの国務大臣の仰せです。」

「そうか、私は国務大臣付きの特務隊士だがそれでも駄目か？」

「あっ！失礼しました。ですが特例については聞いておりません。問い合わせ致しますのでお待ちいただけますか。」

「無理言ってますまない。そうしてもらえるか？」

衛兵の一人が階上に駆け出す。

「ところで何があった？急遽の謁見があるとは聞いていないが？」

「詳しくは聞いておりませんが、どうも近衛騎士の不手際に対する
査問だそうです。」

「もしかして隊長に何かあったのか？」

「いえ、違います。ガライに派遣された部隊の近衛騎士が虚言をし
たとのことです。これ以上のことは言えません。城中ではこの話を
することは禁止されています。」

「ありがとう。あとは大臣が隊長に聞くことにする。すまなかった
な。」

さっき上がっていった衛兵が急いで戻ってきた。

「すぐに執務室に来いとのことですよ。」

「承知した。礼を言う。」

俺は階段を駆け上がった。そこには一人の文官がおり、俺を執務
室に案内した。2階では謁見の準備の為にたくさんの方が忙しく働い
ている。

「特務隊士ケルテン、只今戻りました。こちらがリムルダールから
の書状です。」

国務大臣がおさなりに受け取る。

「ご苦労であった。だが無駄になったかもしれぬ。」

「どういうことですか？」

「ふむ、そなたは知らぬのも仕方あるまい。6月1日よりガライとマイラに各100人ずつの移民団を派遣した。それぞれ近衛騎士一個中隊の護衛をつけた。」

「なるほど近衛騎士の半分を護衛につけましたか。妥当な数ですね。」

「そなたに言われるまでもない。だが5日経ってガライに向かわせた近衛騎士の4名だけが戻ってきた。派遣の途中で魔物に襲われ全滅したとの事だ。」

「それは困ったことですね。しかしガライまでなら近衛一個中隊でかなわぬ魔物などおりませんが。」

「そこを不信に思って近衛騎士隊長と詰問したのだが、鎧の魔物、骨の魔物が主に、キメラなる魔物も現れたらしい。それもこちらの一個中隊を上回る二個中隊ほどの戦力だったらしい。それで戦闘になったが少しずつ戦力を削られ、護衛対象である流民も殺されたか逃亡した為帰還したとのことだ。」

「なるほど竜王側もずいぶんとたくさんの魔物を送ってきたものです。それで何が問題なのですか？」

「それが今日になって全滅したはずの他の騎士が戻ってきた。その者らの言によると魔物との戦闘は劣勢なれど膠着しておっただけらしい。」

さらに流民も逃亡せず戦いに加わっていたそう。だが一部の近衛騎士が馬で駆け出し離脱、そしてルーラで消えたということだ。残された者達でなんとか撃退はしたが近衛騎士8名が戦死、流民も約半数が死亡、それでも残りの流民をガライに届け今日戻った。そう報告を受けておる。」

「それは本当ですか？もしそうなら由々しきこと、王国の尊厳に関わります。」

「そう。それで双方の話を聞くために、これから王様の前で査問を行なうことになった。そなたも出よ。時間が無いゆえそのままだよ。儀礼用のマントを用意させる。」

大臣はそれだけ言うと机に戻った。忙しそうに文官となにやら話している。それにしても大変な事件がおこったものだ。一般人を連れたの行軍となると通常の倍の時間がかかるのは仕方がない。さらに魔物に襲われたのも不可抗力だ。しかし護るべき者を残して敵前逃亡したとは近衛騎士の面目は丸つぶれだ。いやそれだけではすまない。城下街の噂が物語っている。

- - - - -

謁見室である。いつも通り玉座に王様、左に立つのは近衛騎士隊長、以下近衛騎士4名、右には國務大臣、その下にシュミット、次に俺以下文官2名が立つ。そして真ん中に畏まるのが近衛騎士4名。

「この度はそなたらに虚言があったと報告があった。近衛騎士エックハルトよ、何か申すことはあるか！」

大臣が怒気を隠さず告げる。エックハルト、逃げたのはお前か・

「何を根拠にそのようなことをおっしゃられますか、我ら一切虚言など申しておりませぬ。」

「そうか、では証人をここに！」

後ろの扉が開き、ボロボロになった騎士の鎧を着た近衛騎士サイモンが入ってきた。その顔には隠すことのできない怒りがある。その怒りの視線を浴びたエックハルト等が明らかに動揺する。

「では改めて近衛騎士エックハルトよ、申し述べることはあるか！」

「ぐっ！しかしあのような下賤な者どももの護衛に近衛騎士を当てたこと自体が間違いだ。我等近衛騎士は国王様を護るためにあるのだ。下賤な者の為に失う命などない！」

「てめえ、もう一度言ってみろ！」

サイモンがエックハルトに飛び掛る。駄目だ、完全に怒りに我を忘れてる。俺は刀を鞘ごと抜き、一足飛びにサイモンの首に突きつける。

「御前です。お止め下さい。」

「ケルテン止めるな。こいつのせいで俺の友が・・・」

「よい、余が許す。その者に述べさせよ。」

「近衛騎士ローゼンシュタインよ、国王様より直言の許可である。」

俺は刀を納める。サイモンが振り上げた拳を下ろす。握られた拳がぶるぶる震えている。

「あの魔物の襲撃の際、敵は約二個中隊、我等近衛騎士は一個中隊なれど、流民との協力もありなんとか戦えていた。だがこいつらが戦線から離脱したせいで、そこから戦線が崩れた。それでも我等は命に賭けて勅命を護ったのだ。・・・我等が全滅しただと、馬鹿な！なぜこいつらはここにいる！こいつ等は敵前逃亡をしたからここにおれるのだ。しかも言うに事欠いて下賤な者のために失う命などないだと勅命をなんだと思っっているのだ。お前達の為に死んだ同僚に何か言えるか！！言ってみろ！」

サイモンの怒声がこの大広間に響く。サイモンに睨まれたエックハルトは血の気を失った顔で震えている。

「そうか、近衛騎士エックハルトよ、そなたは責任を逃れる為余に虚言を申した。そうなの？しかも余の勅命には従えぬ、そう聞こえたの余の聞き違いか？」

「しっしかし陛下！」

「國務大臣、余はこの者に直言を許してはおらぬ。」

「はっ！近衛騎士エックハルトよ、黙るがよい。そなたが虚言を述べたこと、勅命に背いたことは明白である。」

「恐れながら申し上げます。」

エックハルトの後ろに控える一人の近衛騎士が伏せたまま述べる。大臣が王様と目を合わせる。王様が首を縦に振る。

「申せ、正直に申すがよい。」

「はっ！あの時エックハルト様は我々の小隊長でした。その小隊長の命令で敵を強行突破しました。そしてこの後「黙れ！それ以上は許さん！ぶぎゃっ！！！」」

エックハルトが口を挟んだ。その瞬間近衛騎士隊長の剣がエックハルトを打つ。あまりの屈辱、情けなさに隊長の剣が震えている。

「続けよ」

「はい、反転して再突入するものだと思っておりましたが、突然小隊長がキメラの翼を使用しました。その後は黙っているよう命令されました。我々は元々エックハルト子爵家より選出された者でその命令には逆らえません。私の罪は明白ゆえここに正直に申し上げます。申し訳ございません。」

その騎士は涙ながらにそう話した。見覚えがある、あの模擬戦で4番目に戦った男、あの中で一番腕がたっていた。そうか子爵の家来だったのか。

「そうか、よく正直に申した。余はそなたの罪は問わぬ。さて國務大臣、ここはどう処置を行なうか？」

「ではエックハルト子爵は爵位と騎士の位を剥奪、さらにラダトームより所払いと致しましょう。国王様が罪を問わぬとおっしゃられた者以外の二名は小隊長の命令に従ったのみと言えど、事実を隠蔽

したことは間違いない。よって罰としての降格が相当と臣は考えます。」

「そうか、近衛騎士隊長はどうか？」

「寛大な処置に感謝いたします。我等近衛騎士一同更なる忠誠を誓います。」

「ではその者をここより連れ出せ。顔をみるのも不愉快だ。」

「はっ！」「はっ！」

項垂れているエックハルトが、控えていた近衛騎士に引きずられるように連れ出された。もう何も言えないようだ。

「それではこの謁見は終わりでよいな。余は疲れた。」

「はっ！ではこれにて終了いたします。皆の者、大儀であった。」

その言葉で王様が玉座より去った。俺はサイモンの肩に手を当てる。かける言葉は思いつかない。それでも俺は手を当てたまま立っていた。床にサイモンの涙が零れ落ちた。

ラルス16世の心境

国王の私室、国王と国务大臣が二人だけにいる。

「国王様、先の処分はあれでよろしかったでしょうか？」

「いまはお前しかおらん、そのような畏まった話し方は無用じゃ。全て剥奪の上追放か、死した者からすると生ぬるい処分かもしれんな。」

「そうですね、兄上。しかし爵位ある者に対していきなり死刑との前例はありませぬ。あれで妥当な線では？」

「そうか・・・まああの者にとってはその方が過酷やもしれん。屈辱の中野垂れ死ぬがいい・・・そうだ、さっきの近衛、あの怒鳴っておった者と白状した者だ。あの者等に褒美をだすのを忘れていた。呼んでくれるか？」

「ここにですか？」

「ならば大広場でも構わぬ。そんなに心配ならそなたの配下も呼ぶといい。なんと言ったかの？」

「はい、シュミットとケルテンなる者です。」

「そうだ、その二人だ。勇者の話も聞きたい。呼んでくれ。」

「わかりました。しばしお待ちを。」

俺とシュミットが国王様に呼ばれた。二人で顔を見合わせる。

「もしかして、竜王討伐か王女救出の催促か？」

「ありえるな、俺の方も手駒を失ったばかりでいい材料がない。」

「とりあえず急ごう。怒られる材料は少ないほうがいい。」

俺達はわざわざ謁見の大広間の正面から衛兵の許可を得て入室する。普段の公務では大臣執務室から直通の扉で入っているから、なんとなく緊張する。玉座に国王、隣に国務大臣、二人しかいない。護衛一人すらいない。俺達が片膝を付き頭を垂れる。

「両人ともしばし待て、もう2人呼んである。」

黙って待つ。しばらくすると怪訝な顔をしたサイモンとさっきの騎士が入室する。表情は固い。

「よう来た。余の勅命を護って奮戦した者には褒美をやらねばならん。それが特に困難な場合は十分な褒美が必要だの。そなた、なんといったか？」

「この者はローゼンシュタイン男爵家サイモンでございます。未だ家督は継いでおりません。」

大臣が名前と告げ、意味ありげに一言付け足す。

「そうか、男爵の家の者か。何ゆえ家督を継いでおらぬか？」

「父が存命、さらに私は次男ですのでその権利がありません。先の大戦で兄が戦死した為近衛騎士に抜擢されました。」

「なるほどのう、では今回の褒美に男爵家相続の件許可しよう。大臣、問題ないな。」

「問題はございません。早速典礼のものに申請致します。」

「そういうことだ。余からの褒美受け取ってくれるな？」

「はっ！ありがたき幸せ。されど私だけが褒美を頂くわけにはいきません。それに死した者は何も受け取ることができません。なにとぞその者等の魂が安心して神の元にいける様ご配慮頂けませんでしょうか？」

「近衛騎士サイモンよ、言葉が過ぎるぞ！」

大臣がその無礼を嗜める。

「よい、余は構わぬ。そなたは素直で率直だのう、うらやましくあるな。心配することはない、そなた以外の者にも順次褒美を用意させる。また遺族に苦勞させることは一切させぬ。それでよいか？」

「はっ！ありがたき幸せ。全ての者に代わりて御礼申し上げます。」

サイモンが涙を流して礼をする。

「よい、次にそなたは元エックハルト子爵家の従士と言ったな？」

「はい、近衛騎士ステファンと申します。平民ゆえ家名はございません。」

「そうか、平民か、苦勞したであろう。そなたにも褒美をやるう。なにかあるか？そなたが希望するなら然るべき貴族の家に養子縁組させることも可能じゃ。」

「恐れながら私には褒美を頂く謂れはございません。陛下のご期待に答えることができなかったばかりか、事実の隠蔽を行いました。万死に値します。願わくば死を賜らんことを、それが一番の願いでございます。」

「聞いたか、大臣。平民出の騎士の方がよほど騎士らしいの。」

「御意、格式を重んずるばかりの者よりなんと騎士らしいことか。」

「そうだの、しかし余はそなたの一番の願いを叶えてやることはできぬ。すでに8人の近衛騎士が戦死し、一人が追放、二人が降格。つまり余は11名の近衛騎士を失ったことになる。ここで更にそなたを失うわけにはいかぬ。自死することも職を辞することもならぬ。よいか、これは勅命だ。この勅命をもって褒美としよう。」

「はっ！近衛騎士ステファン、勅命承りました。」

「そうか、それはよかった。では大儀であつた。二人とも下がつてよいぞ。」

二人が退室する。お叱りもなくなるとも温情のある沙汰、ほっとした。

「特務隊士シュミット、ケルテン、両人とも前へ。」

「はっ!」「はっ!」

大臣に促されて前にでる。頭は垂れたまま片膝をつく。

「よい、面をあげよ。他に人はおらぬ。そなた達には特に苦勞をかけておる。此度は勇者の活躍の話聞きたくてそなたらを呼んだ。」

シュミットが少し前にでて沈痛な声で詫びる。

「私の担当する勇者4名とも失いました。遺体も残っていないため蘇生すら叶いません。ご期待に答えることもできずに誠に申し訳ありません。」

「別にそなたを責めているのではない。しかしそれはかわいそうな事をした。もしその者等に身内があるなら厚く遇するがよい。」

「はっ!必ずそのように致します。」

「ふむ、そなたはケルテンと言ったな。そなたの勇者はどうだ?この間蘇生させたばかりだの。」

「はい、現在ロトの残した3種の神器の一つ、雨雲の杖を手に入れた頃だと思えます。何分私も先ほどリムルダールから帰ってきたばかりで確認は取れていませんが、その様に手配していました。」

「そうか、順調にいつておるか、それはよかった。しかしリムルダ

「ルとはいかな用事じゃ？」

「私の命令でリムルダールの長に書状を託しました。移民の件でございませぬ。先方の許可を得ることはできましたが無駄になったと思われませぬ。」

「そうじゃな・・・ガライへの移民の失敗、あの馬鹿者のせいで無に帰するか。腹立だしいことよ。」

「御意。しばらくは移民の話に乗る者もありますまい。」

「言っても仕方のないこと、次の手を考えよ。そなたの手腕、期待しておる。・・・それと我が娘ローラの行方はどうじゃ？・・・生命なくとも・・・せめて身体だけでも・・・ここに帰してやりたい。」

悲痛な言葉、搾り出すように話す。本当は何処にいるのか、俺は知っている。まだ公表はできないが希望だけは伝えよう。

「まだお亡くなりになったとは限りませぬ。希望はお捨てになりませぬよう申し上げます。」

「そうか、そなたは優しいのう。だが姿を消して約半年、最悪は想像しておかねばならぬ。それも王族の勤めよ。栓ない事を言つた、忘れてくれ。そなたらは竜王の討伐にのみその力を注ぐがよい。大儀であつた。そなた等の職務に戻るがよい。」

「はっ！それでは期待に沿えるよう職務に勤めます。」

「はっ！失礼いたします。」

俺とシュミットが大広間から退室する。静まり返つた城中を並ん

で歩く。

「ケルテン、なんだったのだろうな？俺の勇者のことを聞かれた時は心臓が止まるかと思った。」

「そうですね、しかし王様はあのように言っておられたが王女様のごことは捨ておくわけにはいかん、何とか致しましょう。そう決意しました。」

「そうだな。しかしまあ何時の間に雨雲の杖を手に入れたのだ。俺の勇者ではガライの墓には行かせられなかった。」

「シュミットがいない間に行かせました。多少の誤算で一人が死にましたが陛下の温情により蘇生が叶いました。ありがたいことです。」

「そうか、それはよかった。お前なりによい忠言をしてるか、俺にはもうできないことだな。」

「・・・ではメルキドは駄目でしたか？」

「ああ、主だった者は先の大戦で亡くなっただけ。特にゴーレムの狂乱に巻き込まれて死んだ者達が惜しいと長も言っておられた。」

「そうですか。それで大臣は何か言っておられましたか？」

「それが何も。とりあえず情報を集めよと言われた。毒の沼地の通行方法については特に強く言われている。」

「それも無用になりました。移民に応じる者などもういません。城

下の噂を聞きましたか？」

「ああ聞いた。近衛騎士で流民を処分したとな。あながち間違っていないな。」

二人で大きなため息をつく。そのため息で任務を思い出したかの様に二人が異なる方向に歩き出す。その方向は明るい未来だろうか、これから訪れる困難にさらにため息がでる。

ラルス16世の心境(後書き)

設定集

城に勤めている者の給料(月給)

近衛騎士隊長	3	0	0	0	G
近衛騎士	2	0	0	0	G
一般兵	1	0	0	0	G
國務大臣	0	G			
高給文官	1	5	0	0	G
文官	1	0	0	0	G
特務隊士	2	5	0	0	G

魔法談義？

6 / 10 勇者支援生活71日目

今日はほとんど終わっている。激動の一日であったが本来の仕事
をしよう。アレフとガイラは何処にいるだろうか？それを確認する
ため大臣の執務室にいる。魔法の地図を見ると光点二つはともにマ
イラにある。わざわざ確認しなくてもそれが二人と判ってしまうこ
とが悲しい。

アレフの血の契約書を見る。レミールを使用して再度確認するが
やはり呪いのような文字はある。呪いか・・・シヤナクで解除でき
るだろうか？だめだな、これはあいつらの命綱でもあるから解除す
るわけにはいかない。そもそもこれは呪いなのだろうか？装備して
いるわけではないし、今その呪いが発動しているわけでもない。や
はりあれに頼るしかないな、もう種は蒔いてある。

二人の位置だけ確認して執務室を辞する。図書館へと足を向ける。
10日も放っておいたから何か土産が必要だろうか？何も持ってい
ないけどな。

「やあ、マギー。今帰ってきた。」

「おかえり、そろそろ来てくれると思ってたわ。」

「なんでそう思ったの？」

「血の契約よ、この地図で判るの。ほらっ！」

手元にある本の1ページを俺に見せる。

「本当か！何時の間にそんな秘術を！！！」

覗き込むと開かれた一面には地図など書かれていない。

「嘘よ、謁見の話を聞いただけ。王家の秘術なんて判る訳ないでしょ。でもあなたの驚いた顔は面白かったから、それで気が済んだわ。」

「やられたよ、俺の負けだな。よしじゃあこの間使った魔法を教えよう。これは人間には全く効かないけど有効な魔法だ。いつもの用意をしよう。」

そう言いながら黒板を準備する。マギーが嬉しそうに教卓を引きずってくる。

「じゃあ始めよう。さっきも言ったがこれは魔物、それも実体を持たない魔物にしか効かない。」

「そんなの意味あるの？」

「意味あるも何も、つい一週間前にそれで危機を脱したさ。その魔法の名前はニフラム、神に祈り魂を正しく導く魔法だ。」

「魂を導く？魔物の魂をどうして神の元に導けるわけ？」

「そうだね、本来魔物の魂は神には導かれない。ましてや生きている対象の魂を神の元に送れるわけがない。ではマギー、なぜできるのか？その導くことのできる魔物とは何か？」

「なに、ヒントだけなの。そうね〜・・・」

マギーが首を捻って考えている。俺は黙って見続ける。

「そうか、わかったわ！ゴーストね、あれこそ魂そのものだわ。」

「それでは1/3だ。まあこれは公表されていないことだから仕方がないか。あとはがいこつ、鎧の騎士だ。やつらは実体はあるがあれは仮の姿、それを動かしているのは魔に犯された魂だ。」

「そんなこと聞いていないわ、それ本当なの？」

「ああ、俺の経験測を一部の人間にのみ公表している。元々の人間の強さで魔物の強さが変わると思っている。ちなみに生前の技能も使える。君もがいこつとは戦っているだろう。」

「ええ、直接は戦っていないけどアレフやガイラが戦っているのは見ていたわ。」

「この間海底洞窟であれと鎧の騎士合わせて16体と戦闘になった。そこで全部の魔物の魂を開放してやった。」

「はあ、それはすごいわね。いくらあなたでも普通には勝てないわね。」

「そうだね。ここでその二フラムについて・・・」

黒板に詠唱文を書く。(私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん)

・・・と二行目まで書いたが、他の魔法と異なる部分がある。これと同じ魔法が他にも2つあるが気づいたかい？」

マギーが俺の魔道書の付箋のついでと開く。ニフラムのページ、ザオラルとザオリクの見開きのページ。自慢げに俺に見せる。

「そつだ。これらの魔法は万能たる力を神に捧げる魔法。ここが神を意味する単語、こつちが捧げるといふ動詞だ。」

「なるほど、じゃあこの下は“おお***神よ”ね。」

「そつだ、“おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ、ニフラム”が正解だ。これでこの魔法は使えるようになる。これは切り札になるから特別に教えた。もし魔物に知れてもこちらは困らない。」

「そつね、さつそく会得させてもらつね。でももう二つの魔法はなに？神に奇跡に関わる魔法・・・」

マギーがザオラルとザオリクの魔法をなぞる。神を表す単語、そして魂を表す単語。

「・・・もしかして魂を戻す魔法、ということとは蘇生の魔法、王家の秘術ね。でも二つあるのはどういふことかしら？詠唱文も部分的に異なるだけでほとんど同じだわ。」

「ああそれは消費MPの少ないほうは大まかに神に祈りを捧げている。それと違ってMPの多い方は具体的に神の名を告げ、願いを伝

える。効果の違いは成功する確率だけ。」

「そう、ここアレフガルドでは精霊ルビスが信仰されているけど、本当はもっとたくさんの方々が存在しているはず。その一つの名か・
・やっぱりあなたは怖いわ。今度は神の領域に入ったわ。」

「そんな大層なことじゃない。まあ蘇生の魔法は覚えなくていい。使用に制限が多い。まず第一に戻ってくるのは魂だけで、傷ついたら体は治らない。遺体のない場合、魂が戻っても再び死んでしまう場合は意味を成さない。さらに個人情報を知らない相手は対象にできない。」

「判ったわ。とりあえずニフラムを会得する。他に注意することは？」

「実は聖水がニフラムに近い効果を持っている。さっきの魔物に直接振り掛けると魂の拘束力が落ちる。これとニフラムを併用するとより強い効果が期待できる。この前も最初に聖水をばら撒いてから魔法を使った。覚えておくといい。」

「ふ〜ん。でもよく聖水なんて持っていたわね。」

「護身用さ、常にトヘロスやルーラが使えらるとは限らないから、その代理のアイテムを持つのは常識だ。」

「なるほど、アレフが護身用にキメラの翼を持っていたのはそういうことね。納得したわ。」

「ああそうだ。それで思い出した。明日にでもアレフをマイラまで迎えに行く。戻ったら次はメルキドを目指す。今度は危険だから俺

も同行する。だからまたしばらく会えない。」

「私もついて行く。」

「駄目だ。今度の危険はこれまでの比じゃない。君を護衛しながら行くわけにはいかない。」

「でもそんなの嫌よ。私だけ安全な所にいるなんてっ！」

マギーは本気だ。それが判るだけに今回は連れて行かない。

「もう一つ理由がある。君にしかできないことがある。」

「私にできること？」

「ああ、アレフが戻ってきたら雨雲の杖を勇者の部屋に保管する。管理を頼む。」

「でもあそこなら誰も取り出せないわ。」

「うん、そうだね。でも神器だから・・・もしかしたら感のいい人なら何か気づくかもしれない。偶然でも見つかると困る。君ならなんとか誤魔化せるだろう？」

「まあそうね。なら持っていけばいいじゃない。」

「それこそ駄目だ。もし失ったら取り返しがつかない。だから君に頼みたい。」

「もういいわ。陳腐な言い訳だけどそれで納得してあげる。その代

わり今日は私の屋敷で夕食を頂くこと。それが交換条件。」

「喜んでご馳走になるよ、ここ10日ほど碌な物を食っていない。」

なんだ、俺の言い訳は全部お見通しか。でも本当に今回は連れてはいけない、危険すぎるからな。きっとそれもお見通しなんだろう。

新たなる出発

6 / 1 1 勇者支援生活 7 2 日目

朝久しぶりにここで鍛錬をしようと訓練所にきました。普通にアレフとガイラがいました。昨日の夜に帰ってきたそうです。俺が見つからなかったのでここで待っていたと言われた。これからの方針を告げる。

「二つ聞きたいことがある。答えによっては予定が変わる。」

「ああ、いいぜ。」

「まず第一、ゴーレム対策はどうなった？」

「これを使います。この妖精の笛の音はゴーレムを眠らせることができるそうです。」

「よし、次。幾らぐらい貯まった？」

「この間のゴールドマンの金塊と合わせると25000Gはあります。」

「そうか、ならメルキドに行こう。今回は俺も同行する。」

アレフとガイラが嬉しそうにする。

「本当ですか？」

「ああ本当だ。二人だけではまだきびしい。だから3人で行く。」

「それは頼もしいな。あの時もそうだったな。もうゴーレムに追いかけられるのは嫌だぜ。」

「ガイラ！少し危ないことを口走っているぞ。」

「ああそうだった。あれは秘密だったな。」

「本当に頼むぞ、今回はここから馬で行くからすぐに準備をしてくれ。出発は9時だ、ガイラの馬は宿屋だな。」

「そうだ。じゃあ宿屋で待ってるから。」

いつもの鍛錬を終えてから一旦別れる。俺とアレフの分の馬、さらにもう一頭を用意して宿屋に向かう。3頭目の馬にはたくさん荷物が積んである。俺と一緒にマギーとシュミット、そしてサイモンがついてきている。宿屋の前にガイラたちが立っている。すでに出発の準備は整っているようだ。

「かさばる荷物はこっちに載せてくれ。野営用品や水、食料、飼料が積んであるがまだ積載できる。それ用の馬を用意した。」

二人が自分の荷物から毛布を取り出し載せる。雨に濡れない様上から防水加工をした革を被せる。こういったことをやらせるとガイラの右にできるものはいない。

「じゃあ行ってくる。マギー、俺達の居場所はシュミットに聞いてくれ。例の地図で毎日モニターしてくれるはずだ。シュミット、もし俺達になにかあったら後は頼む。サイモン、お前は無茶するなよ。」

よかつたんじゃないですか？」

「きりがない。それに今生の別れでもないさ。もし何かあったとしても俺の遺書はシュミットに渡してある。」

「その事務的なことが気に食わん。」

「そうですね、遺書なんて縁起でもない！」

二人から猛抗議を受ける。

「そう文句を言うな、覚悟の問題だ。それと何かあったとして無責任に消える方がずっとよくない。少なくとも自分が関わった幾人かには責任を取りたい、そんなところだ。」

そう言い放つと二人が黙る。多少は理解してもらえたらしい。人それぞれ思うことはある。それだけ理解してくれればいい。話題を代えよう。

「マイラに移民はついたか？お前らなら知っているだろう。」

「ああ、来たぜ。100人ぐらいだったか、結構な護衛がついてきたぜ。」

「そうか、無事についたのだな。聞いているか？ガライへの移民の件。」

「宿屋の親父に聞いた。酷い話だな、民を護るはずの兵が真っ先に逃げ出すとはな。」

「昨日の夜帰ってきたら、酷い噂でいっぱいでした。今朝になったら公式の発表があったと宿屋で聞きました。まだ情報は町中には広がってませんがしばらくは大変そうですね。」

「公式発表はされたか。どの程度の発表だ？」

「さっきガイラが言ったのが全てです。流石に逃げた兵が誰なのかとか、犠牲がどの程度でたかは知りません。」

「そうか、じゃあ教えよう。マイラと同じ程度の移民団をガライに送った。途中でがいこつ、鎧の騎士、キメラ混合の二個中隊に襲われた。護衛していたのは近衛騎士一個中隊、そのうち一個小隊が敵前逃亡した。その為近衛騎士8名が戦死、移民団も約半数がなくなつた。それでも残つたものがガライまで送つた。」

「酷いな。それでその逃げたのはどうなつた？」

「ああ、城に逃げ帰って全滅を告げた。だが後で帰ってきた騎士によつて糾弾され身分の剥奪、追放処分となつた。」

「それで終わりですか？そんなの納得いきません。」

「平民感情ではそうなるだろうな。だが逃げた騎士は子爵の位にあつて、前例ではいきなり死刑になることはないらしい。だから爵位と財産を取り上げて追放した・・・多分生きてはいけなだろうね。」

「そうだな、俺があつたらぶつ飛ばしてやる。」

「まあそんなところだ。ちなみにアレフ、お前は面識がある。一度

ラダトーム城からそう遠くない場所で、近衛騎士の鎧を着た男がふらふらと歩いている。その鎧の胸には×印が紋章の上に刻まれている。俗に言う不名誉の証。

「おのれ、おのれえ、俺がいったい何をしたというのだ。絶対に間違っている。俺は正しいはずだ。下賤な者の命など我等高貴な血の礎にしかならぬ。」

呪詛にも似たうめき声、それを聞く者はだれもない。はずであつた。

「復讐を望むか、己が正義を証明したいか？」

「誰だ？」

「誰でもよい。もしお前にその力を与えてやる。そう言ったらどうする？」

しばらく無言が続く。元近衛騎士は考え込む。静かにそれでいて力強く答える。

「それが本当なら何でもくれてやる。だからその力をよこせ！」

「その望み叶えてやろう、その代わり代償はもらう。」

「何でもくれてやる、二言は無い。俺は力が欲しいのだ。誰にも負けぬ力が！」

「よし契約はなされた。力を受け取るがいい。」

木陰より現れた金色のローブ姿、その手の杖から湧き出た黒き霧が男を包む。

「ぐわあー！ー！ー！ー！」

黒き霧に包まれた男が倒れた打ち回る。静かになった男がしばらくして立ち上がった。その鎧は漆黒に染まっている。男のどす黒い怨念、執念を現したかのように。

「くっくっく！ようこそ我が闇へ……では行くぞ、ついてまいれ。」

悪魔の鎧となった元近衛騎士はその命令に黙って従った。

アレフの不安

6 / 14 勇者支援生活 75日目

眼前に広がる砂漠の向こうに町が見える。

「向こうに見えるのが砂漠都市ドムドーラだ。近くに見えるだろうが実はかなり遠い。馬はここでは走れないから徒歩で1日以上かかる。」

「何を今更、そんなこと知っている。」

「お前には言っていない。アレフは初めてだろう、今はあそこに行かないが覚えておくといい。」

さつきからアレフが目を丸くしている。

「こんな所来たことないから、驚きました。すぐそこにある様に見えるが？」

「塵気楼という気象現象だ。今回はこの砂漠を回避して南に向かう。さあ行こうか。」

馬を南に向ける。砂漠の西側のまだ草木の生えている場所を進む。

「なあ学者、ドムドーラはどうなってる？」

ガイラが何かを期待しているかの様に俺に聞く。隣のアレフも何か言いたげだ。

「そうだな、魔物が闊歩している。その一言に尽きる。もちろんその魔物の質は最上級だ。」

「そうか、俺達でやれるか？」

「無理だ。俺とお前ならまだしも、今のアレフでは無理だ。」

「僕では足手まといですか？」

アレフが気落ちしている。

「そうじゃない。腕の問題じゃないさ、武具の問題だ。俺もガイラもミスリルの武器を持っている。それほどやばい敵だと思ってくれ。だから早くメルキドへ急ごう。」

「そうですか、でもこの鋼の剣もそれなりに使えますよ。」

「そうだな、短期の勝負なら問題ない。だが連戦となると消耗に耐えられない。お前が持っている装備で俺達に勝るのはその魔法の鎧だな。そこに炎の剣と水鏡の盾が加われば、俺達に勝るとも劣らないアレフの出来上がりだ。」

「そんなものですか？お前は弱いが武具が強い、そう言われているみたいです。」

「馬鹿かアレフ！いいかどんな武器でも使いこなせなければ只の雑魚だ。お前はそれが使いこなせる。そう思うから学者がメルキドくんだりまで同行しているんだ。そう自分を卑下するな。」

ガイラめ、俺の言いたいことが全部言われた。おいしい所を持っていきやがって！

「まあそう言うことだ。この間のシュミットも同じような悩みを持っていた。家宝の炎の剣を使うのだが、それが気に入らない騎士にとにかく言われたらしい。一度は貸してやったやつが灼熱したブレードで自傷したらしいがな。」

「そうなんですが、じゃあシュミットさんも強いのですか？」

「ああ十分に強い。俺と同じで騎士になるには少しちからが弱い。だけど炎の剣はちからで使う武器じゃないから相性がいい。一緒に戦った経験からすると・・・ちからB-、すばやさB+、かしこさB-といったところかな。多分相当苦労したんだろう。貴族の近衛連中には認められなかったかもしれないが、俺は評価している。」

「そうか一度お手合わせ願いたいな。」

「またガイラの悪い癖だ。だれかれ構わず勝負したがる。心配しなくてもお前より強い相手は一人しか知らないよ。」

「聞き捨てならねえな。誰だよ、その一人は？」

しまった、口を滑らせた。仕方ない一応教えておくか。

「近衛騎士隊長アイゼンマウアー殿だ。雷神の剣、魔法の鎧、水鏡の盾、腕も武具も一流だ。当然魔法も使える。本人は武器を構えているときには使えんと言っていたがな。」

「ふん、お前さんがそう評価するとは楽しみだな。」

「いや、まじで簡便してくれ。どっちが勝つにしろ只ではすまない。」

「そうか残念だ。竜王を倒したら褒美に勝負させてもらっかな？」

「OK、それでいい。それなら俺も文句は言わん。だから今は竜王を倒すべく邁進してくれ。」

俺がため息交じりにそう言う。アレフが小声で話に割り込む。

「前方右で不自然な影の動きがあります。距離は50m。」

アレフが言った場所をよく見ると、幾つかの影が影に潜んでいる。

「アレフ、ガイラ！あれは影の騎士だ。おそらく俺達を一旦やりすごして、後ろから奇襲するつもりだろう。どうする？」

「今すぐ突っ込もうか？」

「30点。せつかくあいつ等が隠れたつもりでいるんだ。何も知らない振りをして近づいて襲撃しよう。俺が馬を引き受けるから二人で行け。襲撃する距離は任せる。」

「了解。」「任せろ！」

二人が騎乗のまま並んで歩く。20m、10m・・・5m、二人が飛び降りる、一足飛びで影に襲い掛かる。反応が遅れた影の頭がガイラの拳で割れる。アレフの左切り上げ、影の騎士の肋骨が斬り裂かれる。唐竹割りで追撃。これで2体、あとは・・・不利を

悟ったのか心配が消えた。

「よくやった。もういいぞ、敵は逃げた。」

そのまま敵に備えている二人に声をかける。

「不気味なやつだな。真っ黒ながいこつか。」

「こいつらは奇襲専門だ、夜でなくてよかった。」

「そうですね、夜だと見えないかもしれません。」

引いていた馬の手綱を二人に渡す。二人が飛び乗る。

「そうだな、夜はいつもより安全を確保してから休もう。無理をする必要はない。ガイラのトラップがあればよほどのことがない限り奇襲されることはない。」

「任せてもらおうか、俺の得意分野だからな。ただ仕掛けるのに時間がかかるから、後一時間進んだら野営地を決めよう。」

「ガイラ、お任せします。生存の達人の業、楽しみです。」

「よし進もう。日が落ちるまで後2時間。できるだけ距離を稼ごう。」

4頭の馬が駆け抜ける。それを見つめる黒い影、深夜の急襲は確実だ。

アレフの不安（後書き）

設定資料集

近衛騎士の鎧はカスタムメイドですので他人が装備することはほとんど無理です。

戦死、退役などで不要になった場合も作り直して他の人に支給されることはまずありません。ましてや騎士剥奪になった者の鎧を受け取る者は絶対にいません。

さらに一般的に売却することも不可能です。

騎士を剥奪された者は屈辱を刻まれた鎧だけで魔物が跋扈する街の外に放逐され野垂れ死ぬ、格式や名誉を重んじる騎士にとって最大の罰になります。

裏切り者

6 / 17 勇者支援生活78日目

「今夜も来ると思うか？」

「来るな。どうする、鳴子の範囲を広げるか？」

「いや、結局襲撃するふりが増えるだけだな。あいつらしつこいからな。」

こんな会話がされるのは、毎夜1時間おきに鳴子を鳴らされているからである。その度に寝ていた者も飛び起きている。おかげでこの三日ほどまともに寝ていない。性質が悪く本当に襲撃してくる場合もあるから、無視するわけにはいかない。そのくせ少しでも不利になると逃げてしまう。

「いつそのこと殺傷能力の強い罨にしたらどうですか？あいつら殺つたら気分いいですよ。くふふふ！」

いろんな意味でやばいな、アレフが壊れかけている。

「それもそうだな、なら今日は早めに野営地を探そう。洞穴とか水際とか襲撃方向が限定される場所がいい。」

「判った。俺が罨を仕掛け易い場所を探す。それでできる限り強力な罨を仕掛ける。」

「よし、そうと決まったら・・・見えるか？向こうに小高い丘が見

える。あの辺へ向かおう。アレフ、判ったな。」

「えっ！なんですか？」

「嗚呼、まあいいや。あつちに向かうぞ、ついて来い。」

俺はアレフの前に馬を進める。アレフが反応するより早く馬が向きを変える。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

崖を背に、左側が川、右が深い森、川に沿って砂地、そんな場所を野営地を選んだ。川は深さ1m、幅は50m程度、流れはそこそこある。これなら体重の軽い影の騎士は渡って来れない。背にした崖は角度が70度くらい。ガイラと手分けして罾を仕掛ける。さらに川に面した側に毛布を張り飛び道具に備える。

「アレフ、今日はここで寝る。無理に起きなくていいぞ。」

「はい、すみません……。」

俺とガイラで焚き火を囲む。すでにアレフは夢のなかだ。

「もう少ししたら手筈どおりやるぞ。ガイラ、眠気はないか？必要なら無理にでも覚ますぞ。」

「大丈夫だ。これが終わったらぐっすり寝る。」

「OK、じゃあ念の為にアレフにラリホーをかける。」

3時間後、焚き火の火が小さくなっている。崖を背に一人が毛布に包まっている。焚き火の横の座っている二つの影も動きはない。誰かが鳴子を鳴らす、起きた気配はない。一時間前も起きなかつた。もう一度鳴子を鳴らす、やはり動きはない。

直立した影が闇から浮かび上がる。数は6体、その後ろから赤いロープを着た影が現れた。無言で手を振る。6体の影の騎士が襲い掛かる。一人に2本ずつ、剣が突き刺さった。予想された悲鳴も血も出ない。

うまくいった。囷に剣が突き刺さった瞬間、崖の上から用意しておいた聖水をばら撒く。動きが止まった、さらに思考詠唱、（私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん。おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ。ニフラム）

影の騎士が糸の切れた操り人形のように崩れる。動揺したロープが背を向け逃げようとする。その背中に飛礫、バランスを崩して倒れる。ここまでが言の中、事が進んだ。

「よしっ、逃げられると思うな！」

ガイラが飛び降りた。おいおい、下まで10mはあるぞ。ガイラが完璧な五点着地、すぐに走り出す。起き上がったロープが火球をガイラに放つが、その左手の籠手で弾かれる。ロープは驚愕の表情を浮かべたまま、ガイラの拳を顔に受けた。グシャッ！嫌な音がしてロープが倒れた。

「終わったぞ、ケルテン降りられるか？」

「ああ、アレフを降ろすから受け取ってくれ。」

毛布に包まったアレフの腰にかけたロープを少しずつずらしながら降ろす。下でガイラが受け取った。俺も崖を少しずつ降りる。ガイラみたいな器用な真似はできない。

「雑な作戦のわりにはうまくいったな。しかしお前の魔法は相変わらずすごいな。」

「お前には負ける。よくあそこから飛び降りれるな。しかしまあ、こいつはよく寝てるな。」

アレフの頭をなでる。ガイラも笑いながらつつく。

「お前が魔法で寝かせたんだろう、まあ寝かせてやれ。」

「そうだな・・・ああそうだ。お前が殺ったこいつは何だろう。」

俺はガイラが倒した死体まで歩く。頭がない死体のロープを捲る、これは！

「ガイラ、これを見る！」

「なんだよ、今更魔物の死体なんか見てもしょうがねえよ。」

「いや、こいつ人間だ。妙に人間っぽい作戦をとると思ったらそういうことか。」

「なんだって！そんな馬鹿な、なんで人間がそんな真似を・・・」

ガイラが黙り込む。

「これは川にでも流そう。アレフには見せられない。」

「そうだな、これは俺達の心にしまっておこう。城の連中にも教えられないな。」

「そのほうがいいな。もしこれが知れたら大混乱だ。まあそれはいいとしてガイラ、お前眠れ。しばらくは俺が火の番をする。」

「ああ、そうさせてもらう。」

アレフの横でガイラが毛布に包まって眠る。火を眺めながら思考にふける。さっきの奴は自分の意思で竜王に着いたのだろうか？世界の半分をくれてやる・・・そこまではいかなくても竜王の元で立志させる、いや、できると感じさせることで寝返らせたとしたらこいつだけでは終わらない。

.....

一方その頃、毎夜起こる斬殺事件にラダトームは震え上がっていた。事件を目撃して運良く命があった者の言によってさらなる混乱が起きていた。

「犯人は騎士の鎧をきていた。それも胸に×印があった。」

「黒い甲冑の男だった。気持ちが悪い声で笑いながら、下賤な血は消えろと言っていた。」

「城の連中は流民を邪魔に思い、その存在を消そうとしている。」

「もう王家も信じられない。だが何を信じればいいのか。教えてく

れ、俺達は死ぬしかないのか！」

噂を重くみた王家は先の近衛騎士の敵前逃亡、その者の爵位と近衛騎士の位の剥奪を発表したがそれは余計な混乱を招いただけであった。護るべき民を捨てて逃げた騎士、甘い処分、それによって招かれた斬殺事件、ラダトームに住む平民の怒りを掻きたてた。

王家と近衛騎士の権威は地に落ちた。近衛騎士は汚名を返上するべく夜間、街を巡回している。その中にサイモンを小隊長とした4名が巡回している。

「ローゼンシュタイン小隊長、犯人はエックハルト様で間違いないでしょうか？」

「ステファン、ローゼンシュタインは止めてくれ。俺じゃないみたいだ。それと身分を剥奪された奴に様はいらないな。」

「すみません。つい癖で……。それで犯人はやはりそうなのでしようか？」

「なんとも言えん。もしかしたら捨てられていた鎧を着た者の愉快犯とも考えられる。いやその可能性は薄い、残念ながらお前の希望には副えないな。」

「そうですね、あの時私が止めることができたら、こん「ぎゃあああああああ！」

「聞こえたな。あつちだ、急げ！俺とステファンはこっちだ、お前達はあつちから挟め！」

二手に分かれて悲鳴が上がった方角に走る。黒い人影が走るのが見えた。行き先を遮る。挟まれて立ち止まる漆黒の騎士の甲冑。

「近衛騎士だ。何者だ、兜をとれ！」

サイモンがきつい口調で問いかける。その男は兜を脱ごうともしない。

「くつくつくつくつ！誰だだと、貴様も偉くなつたものだ。それとステファンなぜお前がそこにいる。なぜ生きておれるのだ。」

「やはりエックハルト、貴様こそなぜここにいる！」

「答えることなどない。お前もステファンも俺を売って地位でも得たか。そうまでして得た地位、命は気持ちがいいか！」

「エックハルト様、私は「止める！もうこいつは子爵でも騎士でもない反逆者だ。ステファン、剣を抜け！お前の手で反逆者を討て！」

一瞬の躊躇いの後ステファンが剣を抜く。サイモンと残りの二人の騎士が退路を塞ぐ。

「ステファン、お前ごときが俺に勝てると思うな。お前が俺に勝つた事は一度たりとてない。」

そう言い放つと悪魔の騎士となったエックハルトが剣を叩きつける。ステファンが冷静に盾で受け流す。反撃はしない。

「確かに私はあなた様に勝つたことはありません。」

「そうだろう、これから先も永久に勝つことなどできぬわ！」

エックハルトの猛攻が続く。その全てをステファンが軽くないです。エックハルトの姿勢が崩れた瞬間、ステファンの剣が兜を捉えた。兜が脱げエックハルトの顔がむき出しになる。

「エックハルト様、私は勝てなかったではありません。勝たなかったのです。」

「なんだとっ！貴様、なにを言っつて ザシユッ！！」

ステファンの剣が横に振られている。エックハルトの首が地面に落ちる。首のない甲冑が倒れる。

「近衛騎士ステファン、反逆者・エック・ハ・ル・トを……討ち・まし……た。」

ステファンが涙を流しながら報告する。

「よくやった、ステファン。ここにいる3人が見届けた。」

首無し死体の横で4人の騎士が立ちずさむ。しばらくの黙禱の後、一人が城へと駆け出した。

裏切り者（後書き）

設定資料

国務大臣以外に大臣はいません。そのかわり国務大臣により文官に職務を振り分けられます。その職務により手当てという形で俸給が増えます。

近衛騎士サイモンの回想

6 / 18 ラダトーム城下 中央広場

男の首が晒されている。その横には不名誉印を刻まれた黒い鎧が置いてある。立て板には男の身元、罪状が書かれている。通りがかる者は唾を吐きかけるか、石を投げつける。無念そうな男の首は何も言わない。

昼過ぎの近衛騎士控え室で雑談をしている者たちがいる。

「ステファン、お前褒美を固辞したのは本当か？」

「本当ですよ、サイモンさん。これで全てが決着した、そう言ってお断りしました。元とはいえ自分の主人を討って手柄を得るなんてできません。騎士の手柄は戦場で立てるものです。」

「ふ〜ん、なるほどなあ。お前真面目だな、貰える物はもらっておけばいいのに。」

「そういう貴官も貴族らしくないですね。男爵の家系ですのに。」

「ああ、くそ真面目な兄貴に反発して結構悪いことばかりしてた。最初はわざと悪く振舞ってたが、いつの間にか板についてしまった。まあその頃の経験が今になって生きている、なんとも皮肉な話だ。」

サイモンが頭をかきながらそう言う。ステファンがそれを見て微笑む。

「貴族らしくない貴族に、貴族より騎士らしい騎士ですか。私はこのスタイルを貫きます。せつかく陛下に頂いた生命です。陛下の御為に使用致します。」

「そうだな、お前はそれでいいと思うぜ、俺は俺のままでもいい・・・それはそうとお前結構使えるな？」

「何がですか？」

「いや、剣の腕だ。この間のケルテンとの模擬戦でそれなりに使えろと思っていたが、あれほどは・・・それも長年あいつに強さを隠していたのだろう？」

「ええ、あの方は負けることを極端に嫌っていました。それでお手合わせする時はそうと判らない様に加減をしていました。もうそうする必要もなくなりました・・・ケルテンというのはあの時の特務隊士の方ですね。」

「ああそうだ、俺のダチだ。俺に土をつけた数少ない内の一人だ。普段は優しそうにしてるが怒らすと容赦無い。お前も聞いているだろう？フレーゲル殿下を牢屋に放りこんだ話を。」

「噂でしか聞いていません。あの話は内密になっていきますから・・・そうですか、あの模擬戦、違いますね、一方的で理不尽な五番勝負の時は、確かにかなり怒っていました。まさか木とはいえ盾や剣を斬り裂くとは信じられません。」

サイモンが自虐的にフツと笑う。

「あれな、この城に一番先にやられたのは俺だ。あいつの新人テス

トに乱入した時だ。俺が卑怯な手で一本取ったらお返しと言わんばかりにやられたよ。」

「卑怯な手とは、貴官何をされたのですか？」

「最初の号令の次の瞬間に、こう蹴りを入れてやった。」

そう言いながら、蹴りを見せる。

「それは酷い。実戦ならともかく兵士の試験でやることじゃありませんね。」

「その通りだ。あいつが他の新人を相手に上品に立ち回っているのが癪に触ってな、思わずやってしまった。」

「それでどうなったのですか？」

「ああ、澄ました顔で立ち上がって二本目の勝負を促した。盾を捨てたと思ったらいきなりベギラマ、それで仰け反ったところに同じく蹴りが来た。」

「それはそれは、貴官の自業自得ですよ。」

「まあそうだな。まさか魔法も使えるとは思わなかったからな。三本目は魔法を警戒して飛び込んだら、あの抜き打ちだ、嫌な予感だったのでむりやり踏ん張って止まったところに、追撃で盾ごと左腕をもっていかれた。ひびが入ってたな。」

「あの抜き打ちには驚きました。剣を落とされるまで一瞬でした。初撃だけとはいえよく避けることができましたね。」

「それが只の勘なんだ、ちなみにその後来た近衛騎士隊長は、鼻先で見切って上段からの一撃を寸止め、一合だけの勝負とはいえ、あれよりすごい勝負は見たことがない。」

ステファンがしきりに感心している。自分の手を使ってそれっぽく再現する。

「あいつが戻ってきたら、朝6時に兵舎の訓練所に行くといい。面白いものが見れるさ。」

「楽しみです。さあ今日も職務に励みましょう。城下街の巡回頑張らしましょう。」

そう言ってステファンが立ち上がる、近くで聞いていた騎士も立ち上がる。

「そういうのは小隊長である俺の号令なんだけどなっ！まあいいや、よし行こう。」

日の光を浴びて街を巡回する4人の騎士に後ろめたいことはない。胸を張り堂々としたその姿はまさに近衛騎士だった。

.....

ガイラの飛礫がメイジカメラを落とす。鎧の騎士と対峙していたアレフが一步下がってベギラマでメイジカメラにとどめをさす。そこに詰める鎧の騎士にガイラの拳が叩きつけられる。

うん、見事はコンビネーションだ。二人とも自分のできることを把握して、やるべきことをやっている。俺はというと馬上で肘をつけて見ている。しばらくすると掃討し終わった二人が戻ってくる。

「おい学者っ、お前も戦えよ！」

「馬鹿言え、俺は勇者支援官として後方支援の任に努めているだけだ。お前が戦いの愉悦に勤しんでいる間に馬がやられたらどうするんだ？」

「なに、俺のライはそんな柔じゃねえ。」

「お前一人ならそれでいいだろう。だがアレフや俺の馬もいるし、荷物を運んでいる馬もいるんだ。まだ先は長い、馬を失いたくはないだろう？」

「ガイラ、いいじゃないですか、あの程度の敵なら二人だけで十分ですよ。」

アレフが横から仲裁にでる。ガイラが不満げに言う。

「あゝあ、これだからこの師弟はかわいくねえ。理屈っぽい師匠に優等生の弟子、俺の立場がねえ。」

「言ってる、さあ先を急ぐぞ。」

馬を引き渡して先頭にでる。ガイラが不承不承ついてくるのが判る。

「まだまだ先は長い。それにゴーレムとの戦いもあるんだ、この程

度で文句を言われたくないな。そのゴーレムだが・・・アレフ、笛は吹けるよな？」

振り返ってアレフに聞いてみる。アレフが腰の袋から妖精の笛を取り出す。

「練習しました。ただ吹くだけでなく決められた旋律もあるとのこと、雨の祠のお婆さんに習いました。」

そう言ってアレフが笛に口を当てる。

・・・・・・・・！！

俺の記憶にある旋律、それが流れる。

「OKだ。じゃあゴーレムと戦う時は俺とガイラでゴーレムの気を逸らす。ガイラ、それでいいな。」

「判ったよ、それまでは楽にしていってくれ。どうせお前のこった本当に困ったら助けに入るんだろっ？」

「さてね。ガイラはもう一回ぐらい痛い目にあった方がよさそうだな。」

「ひでえ事を言う。アレフ、やっぱりこいつは鬼だ・・・ちょっと待て、もしかしてお前妖精の笛のことも知っていたらどうっ？」

「何のことやらさっぱり判らないな。じゃあ少し急ぐぞ、雨が降りそうだな。」

強引に話をきって、馬の足を速める。雨が来る前に濡れない場所を探そう。濡れると体力の消耗が激しくなる。

終わらぬ恐怖

6 / 19 ラダトーム城下街

再び城下街が恐怖に震える。昨晚の間に起きた無差別撲殺事件、犠牲者は先と同じく流民十数人。その容疑者は・・・晒されていた黒い鎧に返り血がついている。近衛騎士達が立ちすくむ。

「これはどういうことだ。まさかこいつが動き出して殺してまわったとしても言うのか！」

サイモンが手にした剣で血だらけの鎧を突付く。なんの抵抗もなく鎧が崩れ、ガランと音を立てる。

「まさか、これは犯罪を誤魔化すために、こいつに血をかけたのでしょうか。」

「そうだろうな。その証拠に今はこの通り少しも動かぬ。外で戦った鎧の騎士や悪魔の騎士なら反撃ぐらいしてくるだろう。」

近衛騎士達が重く沈む。戦場での不名誉から始まった連続事件、いつになったら終わるのか見当もつかない。

「言っても詮無いことだが、あの五番勝負の時もっと痛い目にあわせておけば良かったのかもな。そうすればあいつが出撃することもなかったかもしれん。いや、そうじゃない、これは近衛騎士全体の問題だ。」

「そうですね、それを言ったら私があの方に手加減などしなければ、

己を理解してもらえたかもしれません。私は自分の身がかわいばかりに偽ったその結果とも言えます。」

「それこそ言っても詮無いことだ。もう過去のことは忘れよう、とりあえず今晚からの巡回を強めるように総隊長に進言してみる。こんな時にあいつがいてくれたらなあ・・・何か解決策を考えてくれそうなんだが・・・。」

「特務隊士殿ですか？そんなことまでできるのですか？」

「ああ、戦う学者、そんな異名を持っているそうだ。魔法、魔物、歴史、アイテムなどの知識がすごい。どこでそんな知識を得たのか判らんが頼りになる。強さだけで特務隊士になつたわけじゃない。」

「なるほど、強さにはいろんな強さがあるんですね。」

「ああ、戻ってきたあいつに馬鹿にされないように解決しておこう。」

「そうだ、あいつの真似をするか、確か言っていたな・・・必要なら何でも使う。それが権力だろうが、暴力だろうが関係ない、ただ自分より弱い立場の者を虐げることだけはしない・・・か。そうだあいつを見送ったときの3人で相談しよう。みんなあいつに負けたくないはずだ。」

.....

いつも通りマギーは図書館で魔術書を読んでいる。付箋の数はさらに増えた。書き込むわけにはいかないので別のノートに書き写す。

その時図書館の扉が急に開いた。慌てて魔術書を片付ける。

「すまん、嬢ちゃん。困ったことがあって相談にきた。」

「なによ、近衛と特務隊士が揃って困ったこととは？でも珍しいわね、ここに近衛がくるなんて何時ぶりかしら。」

「そりゃあ、馬鹿は嫌いが高らかに公言した筆頭魔術士どのが悪い。」

「筆頭魔術士なんて呼ぶのは止めて！それと嬢ちゃんも止めてよ。私にはマギウスと言う名前があります。マギーでいいから。」

「判った。じゃあ相談ごとだ、ケルテンが戻るまでに片付けたい。多分あいつがこの顛末を知ったら責任を感じるかもしれない。」

「責任、何のこと？ここにいないケルテンに何の責任があつて？」

「例の不名誉騎士の件だ。実はあの事件の前にケルテンとやりあっている。まあいつものようにとつちめたのだが、その後でのあのざまだ。」

サイモンが一通り説明する。マギーがしかめっ面で考えている。

「そうね、責任を感じるかもしれない。」

「そこでサイモンと相談して、3人で解決しようここにきた。研究に励んでいるところを悪いが手伝ってもらおう。」

「いいわ、あの人が帰ってくる前に解決しましょう。もしできなく

て帰ってきたあの人に簡単に解決されたくやしいわ。それで何がどうなったの？」

「近衛騎士の問題だ。俺が説明する。」

「・・・というわけだ。それで真犯人を探し、事件を終わらせる。」

「なるほどね、あの話にさらに続きがあったのね。」

「そうだ、大臣からも早急な解決を頼まれている。それは近衛騎士もそうだろう？」

「ああ、近衛騎士の不名誉から始まった話だ。騎士の名誉の為に解決する、そう張り切っている者も多い。だが俺達にできることは巡回と訓練しかない。だから外の意見が聞きたい。何かあるか？」

聞かれたマギーが首を捻って考え込む。時折手元の紙に何か書き込む。ほっっ！シュミットがそれを見て好色な顔をする。

「じゃあ聞いわ、まずこの黒く染まった鎧は悪魔の騎士と同じ物なの？」

「ああ、そうだ。普通の悪魔の鎧には不名誉印はないがな。実際戦った鎧の騎士やがいこつも、戦場で死んだ騎士の甲冑や身体からできている。戦場の傷や失った四肢の感じからそう判った。」

「それは大体ケルテンから聞いているわ。次にこの斬殺事件の時は人間だったの？それとも魔物だったの？」

「元従士の騎士と普通に会話していた、俺が証人だ。」

「間違いなく死んだのね？」

「ああ、首が飛んで生きていられる人間はいない。」

「よく似た人とか替え玉とかそういうことはない？」

「ない。あの会話は本人達でなくてはありえない。」

「とりあえず、今夜も巡回するのね？」

「もちろんだ。これ以上の被害はだせない。」

マギーがここまでを紙に書き留める。それから一息つく。

「判ったわ。現時点でできることはそれしかないわね。ならその鎧を見張って貰えるかしら。」

「もちろんすぐ横で見張ることになっている。馬鹿馬鹿しいという意見もあるが。」

「その見張りは鎧から隠れて行って下さい。もし動くなら見張られていては動きづらいでしょう。」

サイモンとシュミットが思わず顔を見合せ、同時にため息をつく。

「私だって馬鹿馬鹿しいと思うわ。でも可能性があるなら疑ってみないといけない。」

「わかった、わかった。他の奴には任せられないな。俺がやる。」

「そうか、俺も手伝おう。大臣から厳命を受けている。やらざるを得ない。」

「では結果については教えてください。いつもここにいますから。場合によっては次の手をうちます。」

「わかった。では夜に備えて今から寝ておくとする。また明日にも来る。」

「おれもそうする。その前に大臣にも報告しておく。」

二人が立ち上がって図書館を出て行く。残されたマギーがニフラムのページを開く。もしかしたらこれを使わないといけないかもしれない。私の一存で公表することになるかもしれない。ケルテンならどうするかしら？聞いてみたいと思ったが今ここにケルテンはいない。

- - - - -

城の廊下に二人の足音が響く。

「しかしまあ、あの何か考えている時の顔は綺麗だな。際立って見えた。」

「しばらく黙って聞いていると思ったら、あんたそんなこと考えていたのか？」

「ああ、美しいものを美しいと言う、俺の性だ。」

シュミットがサイモンを相手に茶化す。

「駄目だぞ。手を出すのは俺がゆるさねえ。」

「判ってる。人の女を奪うようなまねはしない。それとあいつを怒らせるのは得策ではない。」

「そうだな、じゃあ俺はこっちだから。十時に鎧の場所に集合だ。」

「了解した。」

二人が二手に別れた。十時まで3時間、今夜の見張りは特に眠くなりそうだ。そうならない様にしっかり眠っておこう。サイモンはそう思った。

マギーの覚悟

「なあ、シュミット！あいつ動いたか？」

「いや、動いていないな。」

暗闇で座り込んだ二人が薄明かりの下の鎧を見ている。その声に力はない。

「何時になったら動くんだ？」

「俺に聞くなよ、あいつに聞いて来い！」

「なあこの会話、さっきもしなかったか？」

「ああ、これで7回目だ。30分毎に聞くな、不毛だ。いいかげんにしてくれ。」

「そうだな、いいかげんに動いてくれ、俺はもう限界だ。」

「違う、俺が言っているのはお前にだ、サイモン。いちいち答える方の身になってくれ。」

二人とも代わり映えしない状況に苛立っている。そんな折、城の方向から複数の足音が聞こえる。

「誰だろう？こんな時間に誰か来るなんて聞いてないぞ。シュミット、お前の指図か？」

シュミットが黙って首を横に振る。二人が暗闇に姿を隠す。歩いてくるのは水色のローブを着た魔術師、鎧姿の騎士が両脇を固めている。

「あら？あの二人がいないわ。どうしたのかしら？もしかして寝ちやった？」

「寝てねーよ！」「誰が寝るかっ！」

思わず二人が暗闇から顔を出す。

「なんでここに来てんだよ、明日にするんじゃないのだったのか？」

「そうね、自信と覚悟ができたってところね。ぶっつけ本番の手を使うから手伝って。」

真面目な顔をしたマギーが護衛の騎士に声をかけ、荷物を受け取る。そこから二本の瓶を取り出すと一本ずつサイモンとシュミットに渡した。

「何だよ、これは？」

「聖水よ。あいつが動き出したらそれをかけて！それで動きが止まるはず。」

「はずって、そんな不確実なのか？」

「しょうがないじゃない、さっきも言ったようにぶっつけ本番なの。ケルテンに聞いた方法だからそれ以上のことは言えないの！」

「でも動かなかつたらどうする。」

「それこそ知らないわ、それに私の予想だとそろそろ動くはず。」

「なんでそんなこと判る？」

「瘴気が最も濃くなる時間帯なの。だからもう黙って待つ、いいわね！」

マギーの強い口調にサイモンとシュミットが身をすくめる。護衛の騎士を帰して三人が闇に姿を隠す。それから30分後、じっと見つめていたマギーが話す。

「ねえ、動いていない？なにかが鎧を装備しているみたい。」

他所を見ていた二人も慌てて鎧を見る。不思議な光景だった、そこに見えない人がいるかの様に鎧の部品を見えない腕、足、胴体に装備していく。最後に兜が頭があるべき所に置かれる。そこには間違いなく悪魔の鎧と言われる魔物が存在する。

「今よ！」

マギーの掛け声にサイモンとシュミットが駆け寄る。あと2mの距離から聖水を振り掛けた。駆け寄る二人に反応した悪魔の鎧の動きが鈍る。

「私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん。おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ。ニフラムツ！」

ラストワードから一瞬の後、悪魔の鎧の身体が白く輝く。その光

が消えた時、鎧は崩れ去った。マギーが安堵の表情を浮かべる。あとの二人は開いた口が閉まらない。しばらくして我に返ったシュミットが問う。

「なんだ今のは？そんな魔法聞いたことないぞ。」

「だから言ったでしょ、使ったことないからさっきまで練習してたの。うまくいってよかったわ。」

「そう簡単に言うなよ。もしかしてロストマジックか、どんな効果だ。教えてくれ！」

その問いにマギーが頷く。

「さっきも言ったけど覚悟がついたのはそのこと、あなた達の前で使ったら公表することになる。その覚悟がつくまで時間が必要だった。それと間違えない様にしっかり覚えて、詠唱の練習に時間が必要だった。だから明日にしようと思ったの。でもそこまで待ってられないかった。実利より好奇心に負けたわ。」

「なるほど、効果を目で見たい、その好奇心は何よりも強い。たとえ俺に見られてもそうせすにはいられなかったか？それで効果を教えてくれ、他言はしない。」

「その通りよ。今の魔法はニフラム。神に祈り、魂を正しく導く魔法。」

「そうか、魂が宿る魔物を強制的に成仏させるか……。」

サイモンが崩れた鎧を手を取っている。長い話に飽きたよう得手

にした鎧を明かりの下で眺める。

「おい見ろよ、漆黒だった鎧が白銀に戻っている。」

マギーとシュミットがそれを確認する。全てのパーツを一つずつ調べる。

「もうこいつは只の鎧だ。さっきの魔法で全てが終わった。そう報告しなくてはいけない。マギーどうする?」

「そうね、覚悟はできているわ。そのまま報告して下さい。」

「すまないな、俺達の力が足りない故にあんたに苦勞をかける。」

「いいわ、必要なら私からも説明する。大臣でも陛下にでも・・・。」

「シュミット、もういいだろう。マギーの判断に任せよう。お前はありのままを大臣に報告しろ。それがマギーの覚悟に答えることになる。」

「わかった。夜が明けてから大臣に報告する。それまでゆっくり眠ってくれ。」

マギーがそこを離れて屋敷に向かって歩く。あわててサイモンが屋敷まで送る。残されたシュミットが鎧を集めて城に持って帰った。その表情はきびしい。

ラダトーム城、謁見の大広間

玉座に国王、右に國務大臣、左に近衛騎士隊長、以下文官4名、近衛騎士4名が立ち並ぶ。中央には特務隊士シユミット、近衛騎士サイモン、そして筆頭魔術士マギーが控える。報告を聞いた國務大臣が早急に召集したのだ。

「陛下、この度の元近衛騎士乱心による事件が、この者らによって解決したことを報告します。」

「そうか、ご苦労であった。事の顛末を聞いてよいか？」

「はっ！特務隊士シユミットでございます。陛下の許可を得まして直言致します。此度の事件は人間による事件ではありませんでした。正確には元々人間による犯罪でしたが、死した後に魔物になったと小官は愚考致しました。ここに控える近衛騎士サイモン殿、筆頭魔術士マギウス殿の協力によってその魔物を消滅いたしました。」

「なるほどのう、しかし大臣より一つ納得のいかぬことがあると聞いた。」

「はい、臣が思うに犯行に及んだ者は漆黒の鎧を着ていたと聞きます。しかしながらここな鎧は白銀。不名誉の証があることから同様なのは明らかです。ならば如何なる方法でこの魔物を退治、浄化したのか不明であります。」

「そうか、誰ぞ説明はしてもらえぬか？」

サイモンとシユミットが顔を見合わせ、マギーを見つめる。マギ

ーが首を縦に振ると説明を始める。

「筆頭魔術士マギウスにございます。此度魔物を消滅させたのはロストマジックの一つ、ニフラムなる魔法です。この魔法は神に祈り、魂を正しく導く効果をもちます。これで納得いただけますでしょうか？」

その場にいた全ての者があつと驚く。ロストマジック、その響きに驚かぬ者などいない。

「なんとロストマジックと申したか。その詠唱、今ここで教えてはくれぬか？」

「構いません。ただし極秘により人払いを。」

「それもそうじゃ、大臣、近衛騎士隊長を除く全ての者は下がるが良い。大儀であった。」

その言により文官、近衛騎士達が下がる。最後にサイモンとシュミットが心配そうにその場を去る。大広間の大扉が閉まった後、大臣が告げる

「そなたの望みどおり人払いは済んだ。」

「はい、では・・・私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん。「あつ！」「あつ！」

ここまで静かに聞いていた大臣と近衛騎士隊長が思わず大きな声をあげた。

「いや、済まぬ。続けてくれ。」

「はい、おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ。ニフラム・
・・と以上になります。」

「驚いたの、大臣。詠唱の半分程は聞いたことがある節だ。マギウスと言ったな。これはそなたが見つけた魔法か？」

「……はい、私が書物から発見し、解読致しました。」

「そうか、余は以前にも同じような質問をした覚えがあるな。」

王様に見つめられたマギーは口を閉じた。

「なるほど、その者も今のそなたと同じ反応をした。まあよい、そういうことにしておこうか。それでこの魔法は秘術としておくか？」

「いえ、この魔法は一部の魔物にしか効果がなく、普通の人間には効果がありません。それゆえ魔法の技術が確かな者には伝授してもよいかと存じます。」

「そうか、近衛騎士隊長よ、そなたがまず伝授されるがよい。その後はそなたの判断で伝授すべき者を吟味するがいい。」

「御意。しかるべく致します。筆頭魔術士殿、よろしく願いします。」

「はい、では後ほどお伺いいたします。」

「いえ、師事するのはこちらです。こちらから伺つのが筋です。」

「判りました。では図書館にてお待ちいたします。」

それを眺めていたラルス16世が微笑む。

「此度の事件解決、及びロストマジックの発見、何か褒美が必要だの。大臣何か見繕ってくれるかな？」

「はい陛下、お任せくださいませ。」

「よろしい、ではご苦労であった。下がってよいぞ。」

「はい。」

マギーがこの場を辞する。背中に冷たい汗が流れる。ケルテンを守る為についた嘘を見抜かれている、そんな気がした。

長い旅路

6 / 20 勇者支援生活 81日目

ドムドーラ砂漠を抜けた。スターカメラ、大魔道、ドラゴン、キラリリカントが出没する土地に近づいたはずだ。できるだけ戦闘は避ける為、発見したら隠れるようにする。今はドラゴンをやり過ぎている。

「アレフ見たか、あれがドラゴンだ。」

「大きいですね。ゴールドマンも大きかったです、それ以上に見えます。」

「ああ、そうだな。全高では負けるが、全長では遥かに長い。威圧感が違うな。」

「あれよりでかい固体も見たことあるな。学者が駄目だと言つから相手にはしてない。」

「まだ駄目だ。アレフの装備強化が済んでから戦ってもらつ。」

俺の言葉にガイラの目が輝いた。

「そうか、やっと相手にできるか。楽しみだ、メルキドに急ぐぞ。」

「なんか申し訳ないです。」

「気にするな。どのみち相手にしてもらつのは決定事項だ。最後に

相手にするのは竜王だぞ。これくらい倒してもらわねば困る。よしもうやり過ぎせたようだ、先を急ごう。」

俺は抑えていた馬に飛び乗り、馬を進めた。アレフが続く、最後尾はガイラ。今のところ、この順番がもっとも効率がいい。

東へと駆ける、ドムドーラ砂漠を抜けて橋を渡ったのは昨日のことだ。この辺も昔は街道があつてそれなりに商人や旅人が通っていた。今はその道にも雑草が茂り、馬での通行がし辛くなっている。

「上だ、前方100mにスターキメラだ。数匹のメイジキメラを連れてきているぞ。どうする?」

突然、ガイラから警告。先頭を走る俺は通れる場所を確保する為、下しか見ていない。だから後ろの二人が敵を発見することが多い。

「駄目です。発見されました。こっちに來ます。」

「判った、まだ距離があるから北側の森に入る。あいつらに自由に空から攻撃させることはない。」

「了解です。」「承知。」

俺達は馬を降りて馬を引く。適当な木を見繕って馬をつなぐ。

「アレフ!あいつ等の傾向と対策は?」

「はい!メイジキメラのラリホー、スターキメラはベホイミを使うと聞いてます。戦ったことはありません。」

「じゃあどうする？」

「まず、スターキメラを倒します。回復されると長引きます。ここは空から集団で攻撃できませんから、発見次第ベギラマで落とします。」

「それでいこう。皆散開して隠れる。スターキメラだけに固執することはないが優先的に倒そう。」

3人とも木々の陰に潜み、互いに大体の位置を確認しながら進む。アレフが中央、ガイラが右前、俺が左前、間隔は5mほど。木の枝を避けながらメイジキメラが飛んでくる。こちらを見失った様だが見逃す気はないらしい。数羽？のメイジキメラがバラバラに動く。

「ギャツ！」

ガイラが一匹のメイジキメラを飛礫で落とした。その悲鳴に散っていたメイジキメラが集まろうとする。

(俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、眠りの霧となりて奴等に纏わりつけ！)

「ラリホー！」

俺のラリホーは範囲魔法、だからラストワードをあえて発声する。集団戦闘では魔法を使用する際、味方への影響や誤射を防ぐ為に発声することになっている。メイジキメラの集団を中心に霧がかかる。5羽の内3羽のメイジキメラが墜落する。眠りの霧はすぐに晴れる、そこにアレフとガイラが突っ込んで落ちたメイジキメラに止めを刺す。残ったメイジキメラが木の枝を折りながら強引に飛び去ろうと

する。

「ベギラマ！」

アレフのベギラマが撃墜した。念のため止めを刺す・・・スターキメラの気配はない。しばらくの静寂。

「劣勢を悟って逃げた様だな。また襲撃してくるかもしれないな、学者どうする？」

「どうにもならんな。急いでここを離れよう。」

「スターキメラは知能が高いのですか？」

「ああ、かなり高い。キメラやメイジキメラは遙か昔に、鳥系の魔物と蛇系の魔物を合成した魔物だ。蛇系の習性で本来群れて戦うことはなかったらしい。」

「でもうまく連携して襲ってきますよ？」

「ああ、それを打開する為、魔族が自らキメラと合成した。それがスターキメラの始祖、そのスターキメラによって連携して狩りを行なうようになったと古い書物にあった。」

「なんとも信じがたい話だな。まあ学者先生の話はそこまでにして、先を急ごう。」

「あつすいません。僕のせいで無駄話が過ぎました。」

ガイラが馬を進める、先頭を務めるつもりらしい。アレフと荷馬

を挟んで俺が続く。アレフ、知識に無駄はない。そう言おうとも思
ったが馬の足音に声は届かない。俺は消えていったであろうスター
キメラに備えて空に気を配いながら馬を進める。

- - - - -

ラダトーム城図書館。真剣な顔のマギーが黒板を指示棒で指して
いる。その前には椅子に座って真面目な顔をしたアイゼンマウアー
近衛騎士隊長。

「この文節が従来の魔法と異なります。まずここから発声を練習し
て下さい。」

「ふむ、先ほども気づいたのだが、それは陛下の使用なさる蘇生の
秘術と同じだな。」

「そうですね、大臣も気づかれたようですが・・・。」

「いや人払いをお願いした理由が判りましたよ。冷や汗が止まりま
せんでしたがね。いや話が逸れました、続けましょう。」

近衛騎士隊長が今搔いてもいない汗を拭く。

「発音が少々難しいですので、私の後に復唱して下さい。」

マギーの発声の後に近衛隊長が復唱する。それを5回繰り返す。
ここアレフガルドでは通常魔法はこのように口頭でしか伝えられな
い。もちろん一つ一つの単語、文節の意味は知らない。

「しかしヴィッツェンブルン殿、この魔法は別の意味でむずかしいですな。」

「わかりますか？」

「ええ、この魔法の一番の難しさは練習ができないことです。この場に対象になる相手がいません。魔法効果の成否の確かめようがありませんね。」

「その通りです。昨晚にもこれを行使する為、2時間ほどずっと口述詠唱の練習をしました。近衛騎士と特務隊士を巻き込んで、できませんでしたでは済みませんからね。」

「いえ、このような重大な秘密を公にする危険を犯してまで、我等近衛騎士の不祥事に貢献して頂けたこと、近衛騎士を代表してお礼申し上げます。」

アイゼンマウアーが丁寧に頭を下げる。マギーが少し困った顔で手を振る。

「では後10回ほど復唱しましょうか。大体の発音は手元の紙に記述してありますが、細かいニュアンスは聞かないと覚えることはできません。」

「ではお願いいたします。」

また発声の練習を続ける。繰り返す度に精度が高まる、それを感じてマギーが納得したような顔をする。

「もう覚えられたようですね。後は御自分で練習なさるとよろしい

でしょう。」

「ありがとうございます。しかし伝承は本当に私の権限で行なうてよろしいのでしょうか？」

「陛下の仰せです。それに近衛騎士隊長殿は信頼に足る人物だと今感じました。ある人物から心、技、体全てにて叶わないと聞いてます。」

「買いかぶりと言うものですよ。ある人物ですか……もしやこの魔法は……。」

はっと言葉に詰まる。その意味を察したマギーが手で遮る。

「そこまでにしましょう。この魔法を発見、解読したのは私、どうかそうしておいて下さい。」

「そうですね、陛下のお墨付きです。そういうことにしておきましょう。では私に高評価をしていただいた方に私が感謝していたとお伝え下さい。」

そう言うときアイゼンマウアーは席を立ち、一礼してから図書館から出て行った。

本当にこれでよかったのかしら？近衛騎士隊長と陛下は多分全て判っている。ケルテン、早く帰ってきて欲しい。私の答えが正解だったか、それを聞きたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1157y/>

勇者って一人じゃないんですか？

2011年11月27日23時47分発行